
ポケットモンスター α

バター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスターα

【Nコード】

N8788Q

【作者名】

バター

【あらすじ】

時は20年前。

別々の地方に暮らすポケモン達がある理由でカントー、ジョウト、ホウエン、シンオウ間で混ざった時代である。

これはそんな時代に住む少年が旅をし、様々な出来事に関わっていく物語である。

第1話 「マサラタウンから始まる冒険！ポケモン初ゲット！」

「ポケットモンスター」……………縮めて『ポケモン』。

この世界に存在する摩訶不思議な生き物の事である。

ポケモンは人々と暮らしたり、別のポケモンと戦ったりして生きている。

この世界にはポケモンが500種類も……………いや、もっといるかもしれない。

この世界にはポケモンを使って戦う人間がいる。

その者たちのことを一般的に「ポケモントレーナー」と言う。

ポケモントレーナーとは、モンスターボールと呼ばれる物で捕まえたポケモンを仲間にして、戦わせたり、育てたり、一緒に暮らしたり……………など個人によって様々である。

さらに中には、ポケモンを指示して相手のポケモンと戦う「ポケモンバトル」なるものも存在する。

ポケモンバトルで得られるものは多く、その中でいろいろな事を覚える。

世界各国のトレーナー達はトレーナーの頂点……………「ポケモンマスタ―」を目指し続けている。

ポケモンは世界中のどこでも知られており、日々愛される存在であ

る。

これは現代のポケモン世界から20年前の物語……小さな町に住む少年のポケモンマスターを目標に冒険を描く物語である。

ここはカントー地方マサラタウン。殆ど何もない田舎町である。
あると言っても、森がただ広がっているだけだ。こんな田舎の町に
一人の少年がいた。

「ポケモン見つけるぜー！ー！ー！ー！ー！」

………と言い、森の中全体に響くような大声を出しているこの少年の名はゼットと言う。

明日10歳の誕生日を迎えるのである。

人は10歳になるとポケモンを持つことを許されるようになる。
中には最初から持っている者もいるが。

つまりはポケモントレーナーとして、旅に出ることを許されると言う事である。

しかしゼットは待ちきれないのか、トレーナーになって捕まえるポケモンを決めておこうと息巻いているのだ。

まだポケモンを持っていない子供ならばそんな危ないことはしないが、ゼットには父親からもらった相棒のポケモンがいた。

「うーん……なかなかいいポケモンがないなあ。そっちはどうだ、ピカチュウ？」

そう、ピカチュウである。誰でも知っているポケモンだ。

ゼットはポケモンバトルを外ではした事がないが、3年程父親にバトルの特訓を受けていたので実戦はやっている。

……一回もバトルに勝った事は無いが。

「ピカピイ……（いや……）」

「やっぱそんなもんかな……。仕方ない！帰るか！！」

「ピツカチュウ（そうだな）」

ゼットは一瞬寂しそうな顔をしたが、仕方無いと思い、潔く諦めて帰ろうとしたが、近くでがさごそと音がした。すぐに反応して何かと思い、後ろを振り向く。

何と、そこには水浸しになっている野生のガーディがいた。ガーディに気づかれないようにゼットとピカチュウは咄嗟に近くの草むらに隠れる。

「見ろよピカチュウ！野生のガーディだぞ！！グレン島にいる筈なのに何でここにいるんだ！？」

「ピカピ。ピカチュウピッカー………ピ？ピカ！ピカツチュウ！（確かに。おそらくグレン島から流されてきたのだろう………。ん？あのガーディ水で弱っているぞ！助けなければ！！）」

ピカチュウの言った通り、野生のガーディは大量の水を被ってから相当歩いていたのか、倒れる寸前までな程に衰弱していた。

ポケモンの言葉は分からずとも、流石にその事には気づき、ゼットはガーディの下に駆け寄る。

しかし、最後の力を振り絞り、ガーディはその場に倒れこんでしまった。

突然のことにも慌てず、そこ等にある木の枝を掻き集めてから自分の上着をガーディに添える。

「ピカチュウ、この木の枝に弱めの『電気ショック』だ！」

ピカチュウは命令通りに枝に電気ショックを放つ。
そしてみるみる内に枝に火が出てきて、やがて炎となりガーディの
身体を温めた。

しかし、それでも顔色が優れないようだ。

ゼットは少し考えた後、何かピンと来てピカチュウにここで待つて
いるよう指示する。

ゼットは木にあるモモンの実を2つほど取って、ガーディの下に帰
って来た。

「ほら、モモンの実だ。食べ」

「……………」

無言でゼットから渡されたモモンの実を口に運ぶ。

ガーディはそれを食べたら、顔色がだんだん良くなって来て、終い
には眠ってしまった。

「はあ……………よかったあ……………」

「ピカ（そうだな）」

「何だか俺も眠たくなって…き……………ぐうぐう……………」

ガ・ディが寝ているのを見たからかゼットも昼寝と言う名の欲望に
駆けられる。

やはり睡魔には勝てず、ゼットは倒れ込んでしまった。

ピカチュウも「やれやれ」と思いながらも草をベットの代わりにし
て、目を閉じる。

そして2人は夢の中に意識を落としていく。

ここはカントー地方のどこかの研究施設。

室内は薄暗く、何か嫌な寒気と、薬品独特の臭いが気を重くさせる。その室内には研究員達が20人程いて、何かを造っているようだった。

その周りには黒服の男女達が研究員達を取り囲んでいた。

黒服達は警戒するように実験を見ている。

「これが人口的に造った『紫の水晶』です……。どうぞ」

一人の研究員が嫌そうに、紫色に輝く水晶を黒服のリーダー格らしい男に渡した。

「……成る程。これが『紫の水晶』か……。正に神秘的……。ん？中心部が無い……。どう言う事だ？」

男はドスを利かせた声を出し、研究員達を睨む。

怖気づいたのか、全員黙ったまま下を向いてしまった。

「そ、それは……。やはり『紫の水晶』の外観はできるとしても、核を人口的に造りだす事は確実に不可能です」

「仕方無い……。よし、レイ様に報告だ」

黒服の男はポケットから小型の無線機を取り出す。

無線機を耳に当て、黒服の男は相手が出るのを待った。

「こちら、幹部のレイだ……………」

「中隊長のモリアです。レイ様の睨んだ通り、核を人工的に造り出すのは無理でした。これからどういたしますか？」

「やはりか、核はこつちでやる。後は俺達の事を知ったそいつ等の口を塞げ。後は型を持ってアジトに戻って来い。次の任務を説明する」

「……了解」

モリアと名乗った男は上司のレイとの交信を終了し、研究員達を見る。

研究員達には先程の会話は全く聞こえなかったが、彼等の頭の中には次の言葉に1つの最悪な可能性を感じていた。

「……と言う訳だ。貴様等には消えてもらう。残念だったな」

「な、何だと!？」

淡々とした口調で研究員達に話すその様は、正に悪魔そのものだ。そして、モリアはモンスターボールを取り出し、サイドンを繰り出した。

「サイドン、『地震』!」

そんな彼等に容赦なく、サイドンは地震を引き起こす。

その影響か、研究所には大きな振動が響いていた。

研究所の壁には輝が入り、やがて大きな轟音となりその音に共鳴するかのように、輝はだんだんと広がっていく。

「うわああああ!!逃げろーっ!!!」

研究員達は必死で逃げ出そうとしたが、輝は研究所全体に入り、研

究所は崩れてしまった。

「ん？しまった！もう夜か！？ってか、ガーディがない！！」

ゼットが起きた時にはもう辺りは暗くなっていた。

横にいたはずのガーディもなく、上着もゼットとピカチュウに掛かっている。

ゼット達が寝ている間に、ガーディの傷は完全に癒えて、どこかへ行ってしまったようだ。

「ピカ〜？（何だ？）」

そして、同時にピカチュウも起きた。

「ピカチュウ、帰るぞ！早く帰らないと親父たちにどやされる！！」

ゼットは半ば急ぎ足でマサラタウンへ戻って行き、ピカチュウも急いで後を付いていった。

勿論、この後ゼット達はこんな時間まで黙ってどこへ行っていたのかを両親達に問い詰められる羽目になってしまったが。

そして、翌日……。

「行つてきまーす！行くぞピカチュウ！」

とうとうこの日がやって来た。この日はゼットの10歳の誕生日だ。つまり、ポケモントレーナーとして旅立てる時が来たのである。

早速ゼットはピカチュウと共にオーキド研究所へ向かった。

「ここがオーキド研究所かあ……。改めて見るとデカイな〜！」

確かに大きいが、特に大きいのはオーキド庭である。中には多くの元気良く駆けずり回っている。ゼットは研究所に入っていた。

「マサラタウンのゼットです！ポケモンもらいに来ましたー！！（まあ、ここもマサラタウンだけど）」

するとそこには少し若々しい中年の男性がいた。初めて見るが、おそらくこの男性こそが……。

「君がゼット君だね？私はオーキド博士という者だよ。ここでポケモンの研究をしているんだ。……ん？ああ、ポケモンの事だね。実は……初心者用のポケモンがまだ届いていないんだよ」

[illegible]

オーキド博士が言うには三匹のポケモンを車で運ぶ途中、土砂に遭い、ポケモンが運べない状況に陥っているらしい。

しかしこれを解決するために、オーキド博士の息子がトレーナーとして旅立つ事も兼ねて自ら進んで様子を見に行つたと言う。そして家にいること数十分……ゼットはその重い口を開いた。

「じゃあオーキドさん、ポケモンはいらないからモンスターボール10個ぐらいくれませんか?」

「モンスターボール？別に構わないけど……一体どうするんだい？」

「もちろん自分で捕まえるんですよ。今の話を聞いてたら軽く2週間近くかかりそうなんです。待っているよりはまだましだし」

「ポ、ポケモン無しで捕まえると言うのかい!？」

「まさか。ちゃんとポケモンならいますよ。ほら」

ゼットの背中から出て来たのは言わずと知れず、ピカチュウである。相棒と同時に友でもあり、仲間でもある、唯一今ゼットが持っている手持ちだ。

「んじゃ、行くかピカチュウ!！」

「ピカ!!!（ここからはピカチュウの声の翻訳は省かせて頂きます）」

ゼット達はすぐ近くの草原に向かって走っていった。

オーキド博士には、その横顔はどこか楽しそうに見えていた。

「……あの少年は、きっといいポケモントレーナーになるだろうな」
そんな事を言いながらオーキド博士は温かい目でゼットとピカチュウを見守っていた……………。

「そうですか? いやあ、そいつは嬉しいな!」

「ピッカ!!!」

どこから先回りして来たのか、オーキド博士の隣に立っていた。

「うわあ! まだいたの!？」

「一つ聞き忘れたことがあったんで戻って来たんですよ」

「聞き忘れたこと？」

ゼットの言う、その聞き忘れた事に疑問を抱き、オーキド博士は耳を傾ける。

「これから多くのポケモン達と戦うことになりそうだから、手持ちの技のバリエーションが増えてきますよね？そうなるといちいち覚える技が変わってくるから、どうしようって思ってた」

要するにゼットは記憶力にあまり自信が無いと言う事である。

オーキド博士はその年に似合うような唸り声を上げると、何かを思い付いたようにゼットを見た。

「成る程。なら君にあれをあげよう。今持ってくるから待ってなさい」

「あれって？」

そう言うと、オーキド博士は何かを机の引出しから取ってきた。

「これは……！？」

ゼットに渡されたそれは赤い色をした機械だった。

開いてみるとダブルスクリーンでタッチパネル式みたいだ。

大きいボタンもあり、かなり軽量であった。

「これはポケモン図鑑だよ。一度出会ったポケモンのデータを記録していくシロモノなんだ。これを使えば、手持ちやボックスメンバ

「の覚えている技を確認できるよ」

「す………すげえ！！こ、これを俺に！？サンキュー博士！行ってきますー！！」

「それと、いろんなポケモンたちをGETしたりして、その図鑑を完成させてくれ。私の夢なんだ。頼んだよ」

「はい！！」

図鑑の完成と言う新たな目的を背負い、草原へと向かって行った。ゼットは今度こそオーキド研究所から出て行った………新たなポケモンを捕まえに。

ここは1番道路。最初ゼットとピカチュウがいた所である。
1番道路は比較的レベルの低いポケモンしかない。
なので駆け出しの初級者トレーナーが多いことで有名である。

「さて、どんなポケモンを捕まえようかな……」

すると近くの草むらが微かに揺れた。それに気づいたゼットはすぐ警戒する。

「何だ!？」

そしてそれは自信の正体を現す。

そこにいたのは昨日、弱っているところゼットが助けた、ガーディであった。

ガーディは警戒心を剥き出しにしながらこちらを睨んでいる。
ガーディはゼット達が、自分を助けた恩人だと言う事に微塵も気づいていないようである。

口に火を溜めている事から、戦う気である事が容易に分かる。
それを察したのか、ゼットはピカチュウを見やる。

既にピカチュウもガーディの意図が分かっているのか、ゼットの前に出た。

そう、ゼットの外に出て初めてのポケモンバトルが始まるのだ。

「おもしれえ!やるつてのか!？」

「グルルルル………！！」

警戒するガーディに、事情を話せば分かり合えるだろう。だがしかし、ゼットは敢えてそれをしなかった。

その後もバトルは出来るが、手加減をしたつまらないバトルになってしまう。

そう考え、ゼットとピカチュウはガーディに対して構える。

ガーディはより一層警戒を強め、戦闘態勢に入った。

それに乗じて、ピカチュウも動き出し、ポケモンバトルが始まった。

「先手必勝！ピカチュウ、『電気ショック』！」

先制したのはピカチュウだった。

電気ショックでガーディに攻撃するが、ガーディはその素早い動きでそれを避ける。

「（速い！だが……。）ピカチュウ！『電磁波』だ！！」

ゼットの狙い通り、電磁波でガーディの素早さを遅くさせることに成功した。

『噛み付く』でガーディは反撃してきたが、ピカチュウは何とかガーディの上を飛んで避ける。

しかし、ガーディは『睨めつける』で追い討ちを掛けた。

だがこの前にゼットはピカチュウが空中にいる時、『尻尾を振る』を指示している。

互いに防御力が下がり、両者共に距離を取ってどちらも退かない。つまり、ほぼ同じ状況だと言う事が分かる。

「『電気ショック』！！」

これにガーディは『火の粉』で対抗した。

噛み付く威力は火の粉より高いが、下手に攻撃して特性「静電気」の餌食になったらこちらの方が不利になる、と考えガーディは特殊系の技で張り合うことを選んだ。

ゼットはガーディが特殊系の技で来た時、いろいろな対抗策が浮かんでいた。

しかし、ゼットは敢えて何の変哲も無い、特殊系の技で真っ向勝負に出た。

ゼットの考えていた対抗策はあまりにも中途半端で失敗した時に何も出来ないものが多かったのだ。

ならば、確実な攻撃が有効と踏んで、特殊系の技を選んだのであった。

そして2つの技はぶつかり合う。

「よし！押してる！そのまま行けええっ！！」

「ピッカアアアアッ！！！」

最初は互角に見えたが、どんどんピカチュウが押してきて最終的にはガーディが押し負ける。

「ウォーン！！」

ガーディは倒れたがHPがまだ半分あるようで、まだ戦えるようであった。

「ウウウ……ガアア！」

「『泣き声』！」

「ピイカアア！！」

泣き声で体を震わせ、ガードイは反射的に攻撃を直前で止めてしま
う。

ガーディは技を出そうとしたが、ピカチュウの泣き声で止められた
と言うのが正しいが。

泣き声により、物理系の技の威力が下がったのだ。

だが気を抜いている内に、ガーディは攻撃態勢に入った。

「ピ……ピカッチュウ!？」

ピカチュウは避けようとするが、ゼットの手で牽制される。

ガーディはチャンスとばかりに火の粉を撃とうとした……が、何故か火の粉が出ない。

何度やっても火の粉は放たれなかった。

「ピカチュウ、電気ショック！」

「ウォー……ン!!!!!!」

そうしている間にガーディに電気ショックが直撃する。

「忘れてたのか？お前、最初に『電磁波』を食らっただろう。あれで麻痺してたんだよ。……ってか、『電磁波』を食らっても今まで全く麻痺しなかったことに驚いたけどな」

そう、ゼットは最初、2回目の技で電磁波を出していたのである。

電磁波には、素早さを落とさせるだけでなく、相手を痺れさせる効果があつたのだ。

「……にしても本当に強いなお前。よし、俺の新たな仲間はお前に決めた！おとなしくしとけよ！行け、モンスターボール！！」

「……？」

ゼットはモンスターボールを出して、ガーディに投げた。
それは見事に入って、地上に落ちる。

「ピカチュウ、ここからが難しい所だぞ」

「ピカ力？」

「これで入らなかったらこっちが不利になるんだ……」

「ピ、ピカ？」

「だって、出てきちゃったらまた戦わなければいけないくなるだろ？
何度も戦って、お前が疲れちゃったら元も子もないし……」

「ピカ……」

ピカチュウもどうやら納得したようだ。

もし出てしまったら本当に困るのはポケモン達である。

「……」

「……」

息を呑む1人と1匹。入るのが、入らないのか……。

「ど……どっちなんだ……？」

しかし、後少しの所でモンスターボールは弾け飛び、中からガーディが出てしまった。

「うおりゃあああああああ……！」

ところが、ゼットは全力で投げて有ろう事か、今のを無かった事にした。

先程と同じ態勢を取り、全く同じ台詞を言う。

「ピカチュウ、ここからが難しい所だぞ」

「ピカ？」

「これで入らなかったらこっちが不利になるんだ……」

「ピ、ピカ？」

「だって、出てきちゃったらまた戦わなければいけなくなるだろ？何度も戦って、お前が疲れちゃったら元も子もないし……」

「ピカ……」

ピカチュウもどうやら納得したようだ。

もし出てしまったら本当に困るのはポケモン達である。

「……………」

「……………」

息を呑む1人と1匹。入るのか、入らないのか……………。

「ど…………どっちなんだ…………？」

3回程、モンスターボールが揺れた後、軽快な音でピタリと止まった。

つまり、ゼットはガーディをGETしたのである。

そして、ポケモンの初GET&ポケモンバトルの初勝利が決まった。

「よっしゃあ!!」

「ピッカー!!」

ゼットとピカチュウはとても喜んでいた。それもそうだろう。

ポケモンバトルは何度もしたが、ポケモンをGETするなど初の事であったのだから。

ゼットはピカチュウのレベルを確認するために、ポケモン図鑑を開いた。

「えーと、今のピカチュウのレベルは…………15か。うん、上出来だ!!」

「ピカチュウ!!」

「あ、そうだ!出て来い、ガーディ!!」

ゼットはモンスターボールを取り出し、ガーディを繰り出した。

「ワン!!」

「覚えてる技は、っと……『噛み付く』に『火の粉』、『睨めつける』に『嗅ぎ分ける』か……。結構すげえな」

確かに野生とは思えないほどに、いい技ばかり覚えている。

「でも、何でグレン島からこんな所に漂流したんだ？」

その言葉で、ガーディはこの2人が命を救った恩人だと言う事に気づいた。

そして、ガーディはその訳を同じポケモンのピカチュウに話す。理由の分かったピカチュウはゼットにジェスチャーをし、それを伝える。

「……つまり、ガーディはグレン島から旅立とうとして木の舟でマサラまで向かおうとしたが、途中で嵐に遭って、舟が転覆し、ここまですたされてきた。……って事だな？」

ガーディは首を縦に振った。

これなら最初に会った時に弱り切っていたのも理解が出来る。

「まあ、グレン海峡では最近、異常気象が多発してるらしいからな。仕方ねえよ。……さあ、もう帰ろうぜ」

「ピカ！」

「ワン！」

そして、翌日……。一日遅れの旅立ちが始まった。

「行ってきましたす！！行くぞ！ピカチュウ！！」

「ピッカー！！」

こうして、少年はマサラタウンから旅立っていくのであった。
そして、これからがこの物語の始まりである。

第2話 「ライバル（の1人）登場！トキワシティでマルチバトル！」

ゼット達はマサラを出てから約2時間が経過していた。にも関わらず、まだ1番道路にいた。

今まで迷っていた……と言っ訳でもなく、疲れて寝ていたと言っ訳でもない。

ゼット達はここでジム戦のためにいろいろと対抗策を練ったり、特訓したりの繰り返しだった。

レベルが10以上のポケモンが2匹もいれば十分だと思うだろうが、過去の世界では1番目のジムの平均レベルは18という現代とは違い、かなりハードルが高いのである。

その為ゼットはこの1番道路で、態々2時間もかけて修行している。今のレベルはピカチュウが18LVで、ガーディが17LV、と言う所だ。

「さ、流石にきついな……そうだ！」

トレーナーもポケモンも大分バテていた。

そしてゼットはリュックから何かを取り出し、それをピカチュウとガーディに見せる。

「ポケモンフ〜ド〜!」

「ピーーーーーカーーーーッ!!!!!!」

「ウォーーーーーン!!!」

そう、泣く子も黙る史上最強のポケモン用食品「ポケモンフード」だ。

……直訳すれば、泣き虫の幼児を黙らせるおしゃぶりのような物である。

「さて、俺はソフトクリームだ!!」

ゼットはリュックの中からソフトクリームを出した。

それをペロリと舐めた時の感触はとても良く、丁度良い冷たさだ。ソフトクリームは子供から大人まで愛される存在である。

「くうーっ! やっぱアイスはいい!!」

そうやってソフトクリームを半分ぐらい食べてる時に人が現れた。

「おいお前、俺とバトルしてくれ!!」

「お? やるか! 行くぜピカチュウ!!」

モンスターボールから繰り出したのはピカチュウだった。

ポケモンフードを食べて、すっかり元気が良くなったピカチュウは素早く前に出る。

「なら、行けえ! スピアー!!」

こっちはスピアーである。

いつから指示したのか、ポケモン達は既に動き始めていた。

「スピアー、『気合溜め』から『乱れ付き』!!」

「ピカチュウ『影分身』から『電光石火』!!」

スピアーは気合溜めをしてから乱れ付きをする。

だが、スピードの速いピカチュウには攻撃が当たらなかった。

スピアーもピカチュウとほぼ同じスピードだが、レベルに大きな差があり、それ以前に気合溜めをしている時点で、避けて攻撃する事は容易い事である。

「ス、スピアー!!」

「隙が大きいぜ!『電気ショック』!!」

さらに態勢を崩している隙に攻撃し、ピカチュウは速攻でスピアーを倒した。

「強い……でも次はどうだ!行けっ!バタフリー!!」

「交代だ!頼むぞ、ガーディ!!」

2回戦はガーディVSバタフリーだ。

虫タイプ対炎タイプ……相性では、ガーディの方が有利だろう。

「バタフリー、『眠り粉』!!」

すると、バタフリーの体から白い粉が降って来た。しかも、それはどんどんこちらに落ちて来る。

「しまった!!」

ガーディはバタフリーの眠り粉によって、眠ってしまった。この草原にはあまり大きな木が無い。おそらく後ろにある1つしか無い木に叩きつけてK.Oさせるつもりだろうとゼットは考えていた。

「これで終わりだ！バタフリー、『念力』でガーディを後ろの木に叩きつける！！」

予想通りの攻撃であった。しかしゼットは笑みを溢していた。

「ガーディ！横に避ける！！」

さっきまで眠り粉で眠っていた筈のガーディは念力を避ける。

「何！？」

そして勝利を確信していたバタフリーはそのまま何も無い所に念力をして、後ろの木に投げ飛ばした。
いや、正確には何も無い所だ。

「！？バタフリーが眠った！？」

そう、今バタフリーが無駄撃ちした念力が動かしただけ……それは最初バタフリーがガーディに向かって放った眠り粉である。
それ故、念力によって引き寄せられた眠り粉がバタフリー自身に付着し、眠ってしまったと言う訳だ。

「『火炎車』だ！！」

直撃で相性の差もあって、バタフリーは敢無くダウンした。
この勝負はゼットの完全勝利である。

「いやあ、圧倒的勝負だった。でも何で『眠り粉』が掛かった時、ガーディはすぐに起きることが出来たんだ？」

「それはあれだよ。あれしてあれやってああやったんだよ」

「??？」

「つまりだな……」

ゼットの説明によると、こう言う仕組みだった。

まず、ゼットは嗅ぎ分けるを使って、横に眠り粉の掛かっていない方へ移動。

そして相手に気づかれないように極薄の火炎車を指示。

そうすると上に降りかかってくる眠り粉を熱によって焼き払う事が出来る。

そして仕上げに指示するまで寝たふりをするように指示する。

これこそがゼットの作戦の全貌だったのだ。

「そ、それだけの指示をあの短時間で！？じゃ、じゃあ俺が『念力』で木に叩きつけるってどうして分かったんだ！？」

「それが分かったのはスピアー戦の時だ。あの時お前はスピアーに『気合溜め』から『乱れ付き』を指示したよな？その時俺は直感し

たんだ。お前がHPを大幅に削るタイプだつて事を。だからただ攻撃を当てるだけじゃ大したダメージにはならない、と言う事で後ろの木に当てようと考えた。俺がバタフリーのレベルをポケモン図鑑で確認したらLv15だったから『吹き飛ばし』はまだ覚えてないことが分かつて、俺はバタフリーが『念力』を使つてくると確信したんだ。だからさっきの作戦を咄嗟に思いついた。まあ、あれは賭けだったけど、失敗してもガーディならやってくれると俺は信じてた。勿論、ピカチュウもな！」

「ピッカ！」

「ウォーン！」

「まあ、つまり体が勝手に動いちゃうつて訳だよ」

これは全てトレーナーであつた、父親から3年も掛けて修行した成果である。

咄嗟の作戦は親譲りと言う所だろう。

「でも、負けたら？」

「そんな時は、猛特訓してまた会つた時にまた挑むだけさ！」

「ピッピカチュウ!!」

「ワンワン!!」

「……そうか。じゃあまた会つた時、バトルしようぜ!!」

「ああ!!」

「おっと、名乗るの忘れてた！俺の名前はカイトだ！！お前は？」

「俺の名はゼット！いずれ歴史上最強のポケモンマスターになる者だ！！」

「へっ！ポケモンマスターになるのはこの俺だ！！じゃな！！」

そう言うときカイトは去っていった。

これがライバルという物だと言う事にゼットは実感が湧いて来る。

「何だかおもしろえことになってきたぜ！なあ、ピカチュウ！！」

「ピカ！！」

「今の戦い、見せてもらったわよ！！」

「？」

木の上から変な女性が飛び降りて来た。

「見事だったわ！さっきのあの戦い！！」

「何なんですか、一体？」

「ああ、そうだった。私はアズサっていうの。あの戦いっぷりを見てこれは記事に載せたいって思ったのよ。だからちよつとインタビューしてもいいかしら？」

「一人で？」

そう、カメラがなければインタビューとはとても言い難い。

「え？あああああああああ！！カメラマン置いて来ちゃった
あああ！！！」

アズサは「メタモンの叫び」のような顔をし、愕然とした。
カメラマンを忘れて置いてくる記者など、まずいない。

「ちょっとそこで待ってて！すぐ戻ってくるから！！」

アズサは全速力で走り抜けていった。

「（ヒーローは風の如く去っていくって言うからな……ここは受けない方が良さそうだな！）今の内に逃げよっと！！」

こっちもこっちでこの場を去っていった。

「……ん？何だあれ？」

そして今この場を見ていた者がいたことをゼットは知らなかった。

ここはトキワシティ。初級者トレーナーの集う町である。
この町の一角に、とても大きなテレビ局がある。その名前はトキワ
TV。

「タキ君！カメラ持ってきなさい！！」

「アズサさん？どうしたんですか急に……」

「すごく取材したい子がいるのよ！局長にも了解取って来たから、
早く準備して！！」

「は、はい！」

この女性……女性記者の、アズサはさっきゼットに取材を申し込んだが、カメラマンのタキを忘れてしまい、マッハでここに帰ってきた女性である。

「あ！それとモンスターボールも持った？」

アズサに言われ、タキはバッグの中に入っているモンスターボールを確認した。

「もちろんですよ」

「それじゃあ出発よ！！」

アズサとタキは外に出た後、車に乗り込み鍵を付け、車を走らせた。

「あれ？ここにいたはずなのに……」

「いないじゃないですか。そのゼット君っていうの」

アズサはまるで、もちもち感の失って、ドロドロに溶けたメタモンのようにその場で頂垂れた。

それと同時にタキは溜息を吐く。そんな彼らの前に1人の青年が通りかかる。

「ねえ、ちよつと君。モンスターボールの絵柄の入った赤帽子をしてて、チャックの開いてる白い半袖のジャージを着た男の子知らないかしら？」

具体的な説明に自分が見た記憶を照らし合わせると、さつき猛スピードで駆けていった少年を思い出した。

「ああ……その人ならさつき猛スピードでトキシシティの方へ向かって行きましたよ」

「しまった！逃げられた！！追うわよタキ君！！」

「はい！！」

そして車に乗って追いかけた。

「……にしてもどうします？もう俺達があつちに着いた頃には、既にトキワシティから出てってますよ？」

「局に応援を要請するのよ！トキワシテイを全て封鎖よ！！」

[illegible]

恐らく、1つのニュースにここまで執念を燃やす記者はアズサ以外いないだろう。

アズサはバッグから携帯を取り出し、トキワTV局に電話を掛けた。

「はい、こちらトキワTVでございます」

「記者のアズサよ！局長に代わってくれる！？」

「アズサさんですね。少々お待ちください」

それから10分が経った……。

「……シズクよ。何？また何かやらかしたの？」

出てきたのは皆が想像する美人そのもの……トキワTVの局長、シズクである。

皆が想像する美人とは……皆が思う美人である。

「別に何にもしてませんよ！そんな事よりトキワシティの封鎖を要請します！！」

「また訳の分からない事を……」

「久しぶりの仕事なんです！これを逃す手がありますか！？」

ここ一ヶ月、アズサに取材をするような仕事は入って来ていない。それを思い出し、最早止められる術は無いと思い、シズクは溜息を吐いた。

「……分かったわ。取り合えずそこは私が何とかするから、捕まえて、取材するのはあなたがやってよ。じゃ」

「よし、頑張るわよーっ！！」

タキは一瞬、アズサが犯人を確保するような警官に見えたのはここだけの話である。

ゼットはトキシシティの北の方角にいた。もちろんここから脱出する為である。

「やっとここから出られるぜ……さて、出る」

しかし、いきなりゼットの目の前にバリケードが現れた。それは左右にどんどん増えていき、やがてトキワシティ全体をバリケードが覆う。

.....

.....

ゼットとピカチュウは呆然としていた。中にいるガーディすらも。

[illegible]

ゼットは思わず大絶叫する。その声でアズサはすぐにここにいると分かった。

「見つけたわよ!!」

「つ、疲れた……………」

「（ふ、普通ここまでやるか!? 余程仕事が出来ないんだな、きつと! だが、これも俺の未来の為だ!!）さ、さらばだ!!」

追っ手が来た事にゼットはすぐに気づき、妙な台詞を吐きながら逃げた。

出口がないので、さらばでも何でもないと思うが……………今のゼットに考える余裕は無い。

「ここからは私だけに行くから、タキ君はそこで待ってて!!」

アズサはバッグを持って追いかけていった。

「はぁ、何て自分勝手な人なんだ……。なあクラブ?」

「ブクブク……………」

「待ちなさあーい！！！！」

「やなこつた！ガーディ、『火の粉』！！」

ゼットは腰からモンスターボールを取り出し、ガーディを繰り出す。ゼットはガーディに火の粉を指示し、それに乗じて逃げ出そうとしたが、何かに攻撃され、倒れてしまった。

「何だ！？」

「デルビルの特性『貫い火』でガードして『火の粉』で攻撃したのよ。さあ、観念しなさい！」

もう駄目かと思われたその時、先程戦ったカイトが現れた。

「おいゼット、まだこんな所にいたのか？」

「カ、カイト!!」

「まっ、俺もだけどな。そんなことよりトキワシティどうなってんだ？何かすごいことになってるけど……」

そしてこっちもカメラマンのタキがやって来た。

「アズサさん！僕を置いていかないでくださいよ!!」

「……カイト、何も言わず俺と一緒に戦え」

「? いいけど……」

「マルチバトルね!! いいわ、受けて立つわよ!!」

「よく分かんないけど、やるぞー!!」

ゼットは事情を一切話さず、強制的にカイトをポケモンバトルに参加させた。

もしものの為の身代わりとして。

事情を話さずとも、取材を変わりにやってもらっただけだから、カイトも納得してくれるだろう。

「行きなさい、デルビル!!」

「行くんだ、クラブ!!」

出てきたのはダークポケモンのデルビルと、沢蟹ポケモンのクラブであつた。

「なら行け、ピカチュウ!!」

「出て来い、スピアー!!」

こっちはピカチュウとスピアーだ。クラブにピカチュウはセオリ―通りである。

「先手必勝!スピアー、『ダブルニードル』!!」

「デルビル、『火の粉』!!」

しかし、デルビルの攻撃はかわされてしまった。

「嘘!?!」

ダブルニードルは20%の確率で毒状態なる。例によって、デルビルは毒状態になった。

「よしっ!!」

「ならスピアーも毒状態にしてあげる!『スモッグ』!!」

スモッグにより、スピアーも毒状態になった。

「これでは互角か……。だがまだ甘い!!『乱れ付き』!!」

スピアーの放った乱れ付きはデルビルに直撃した。しかも、高威力で。

「何でこんなに『乱れ付き』の威力が高いの!？」

「俺はさっき気づかれずに『気合溜め』をしたからさ。それにもうデルビルはダウンしてるぜ?」

既にデルビルはダウンしていた。

しかしそれと同時に、スピアーも毒に耐え切れずにダウンしてしまふ。

「クラブ、『マッドショット』だ!!」

「避ける、ピカチュウ!!」

こつちも今戦い始めた。ゼットの相手はクラブである。

相性ではこちらの方が有利だが、アズサは先程のバトルを見ていたのだ。

つまり、こちらにピカチュウがいる事も既に知っている筈だ。

だとしたらデルビルのように何かしらの対策が立ててある事が想像出来る。

「今だ、『バブル光線』!!」

バブル光線をピカチュウは喰らったが、何とか持ちこたえた。

「『電気ショック』だ!!」

クラブは電気ショックを喰らっても平気な顔をしていた。ゼットは眉間に皺を寄せる。

「……『泥遊び』か」

「よく気が付いたね。『泥遊び』は電気タイプの技の威力を下げる技!これでクラブは電気に強くなったぞ!!」

「ならば『電光石火』!!」

「『堅くなる』!!」

さらに堅くなるを使ったことによって、防御力が上がり、物理攻撃の威力を下げた。

これによって、物理攻撃と電気攻撃に抵抗が出来るようになったと言う訳だ。

「よし、勝てる!!」

「どうかな?ピカチュウ、『影分身』から『叩きつける』!!」

ピカチュウは影分身でクラブを惑わせて、気づかれる前にクラブを地面に叩きつけた。

「だから無駄……」

「ああ。本命は物理攻撃じゃない。『電気ショック』だ。ただし、至近距離から連続でな!!」

「!!」

予告通り、ピカチュウは電気ショックを連続で行う。
抵抗すら出来ずにクラブはダウンした。

「よっしゃー!! 勝ったぜ!!」

しかし、負けたからといって、引き下がるアズサじゃない。

「私達に勝つなんてすごいわ!! ぜひ取材させてもらえないかしら
!?!」

「(まだ言うか!?!...仕方無い。これ以上付いて来られても困る
し、ちよつと早いけど将来のポケモンマスターである俺様のいい宣
伝かもしれないしな! ハッハッハ、人気者は辛いぜ!)... 分かり
ました。取材を引き受けましょう」

心の中で高笑いし、態と嫌々そんな顔をしながら取材を引き受けた。

「え!?! いいの!?! ありがとう!」

「ずるいぞゼット! 俺にも写させる!」

後ろからカイトが文句を付けるが、今のゼットには全く聞こえてい
ない。

「ただし、条件が2つあります。1つ目は俺の顔と名前を出さない
事。2つ目はもうこれ以上ついてこない事。いいですか?」

「交渉成立ね！」

聞いているのか聞いていないのか定かではないが、こうしてバトルの勝利と共に取材されてしまうゼットであった。

ここはニビシティのポケモンセンター。ここで10歳の少年が新聞を読みながら座っている。

少年の特徴は茶髪ではねた髪をして、緑のジャンパーを羽織り、数珠のような物を首にかけた、比較的美少年な顔立ちのとてもクールな印象を受ける少年である。

その少年はテレビに目が止まった。その字幕には「凄腕初級者トレーナー現る！」と書いてあった。

「……名前はモザイクで分からないな。分かるのは俺と同年齢ということだけか」

フツ……と不敵な笑みを溢し、少年は席を立った。

「腕試しに丁度良い。その凄腕初級者トレーナーとやらの顔を拝みに行つてやろっ」

少年はポケモンセンターから出て行く。

その少年が持っていたバッグには「エックス」と書かれていた。

第3話 「史上最強のライバル！エックス登場！！」

ゼット達はトキワシティから歩いて30分経っていた。勿論、2番道路にてジム戦の特訓中である。

ジム戦はレベルだけで決まる物では無く、さらにそこに技術が入って来る。

その為、2番道路で技術を磨き上げる為の特訓をしていた訳だ。そして、今何をやっているかと言うと……。

「ピカチュウ、『電光石火』！ガーディ、『睨めつける』から『火炎車』！今だピカチュウ！やれっ！！」

すると、ピカチュウは電光石火の勢いをそのまま、右に跳ねて流す。そして、ガーディの火炎車をいとも簡単に避けて自滅させた。

「よし、2匹ともできたな。そろそろ休憩するか！！」

そう言うとゼットは2匹を呼び、ポケモンフードを食べさせた。いつもながらに、激しく食べる。

「さてと、俺も……！！！」

その時何かをゼットは感じた。それはポケモンの気配だ。

「（ポケモンフードの匂いに誘われてやってきたのか？……いや、何かが違う！妙に殺気立っている！！）」

ゼットには何か身の危険が迫っている事を本能で感じ取っていた。その瞬間、後ろから『火の粉』が放たれる。しかし、ゼットは素早

く指示を下した。

「ガーディ、あの『火の粉』に『火の粉』！ピカチュウは草むらに『電気ショック』！！」

さっきまでバクバク食べていたピカチュウ達はゼットの指示の反応して、すぐに動いた。

どうやら彼らも殺気に気づいていたようである。

「デルビルは、『スモッグ』で対処。タツツーは『水鉄砲』だ」

どうやら相手はトレーナー付きで、ゼットの反撃を冷静に対処した。

「いきなり攻撃するなんて、随分と手荒な挨拶だな。誰だか知らねえが、その面を見せたらどうだ？」

「手荒で悪かったな。だが、用事は済ませてもらうぞ」

「用事？つてかお前誰だ？」

「今すぐ俺と戦え」

「バトルなら受けるぜ。つて言うか取材を受けてから、たくさんのおトレーナーが俺に勝負を仕掛けてる気がするんだけど……」

確かに前回の時にトキワシティで取材を受けたが、それはゼットの顔と名前を出さないと言う条件付きの下で行われた事である。

ニュースや新聞を見てもゼットの顔と名前は載ってない。

「……そんな分かりやすい服を着ていれば、誰だって分かる」

「あ。確かに」

「……かかって来い」

「なら、行くぜー!」

こいつはやばい気がする……ゼットは冷や汗を流しながら少年を睨み、そう感じた。

2人は間合いを取り、お互い真剣な目つきでモンスターボールを構える。そして……。

「行けっ、ガーディ!」

「出て来い、タッツー!」

素早い動作で、互いにポケモンを出した後、バトルは始まった。

「ガーディ、まず『睨めつける』だ!」

「こっちも『睨めつける』だ!」

最初に睨めつける同士の戦いが始まる。

互いに防御力が下がり、状況は然して変わらなかった。

「『火の粉』!」

「『水鉄砲』!」

どちらもパワーは強いが、タイプの差で火の粉が押し負けてしまっ

た。

「避けて、『噛み付く』だ！」

「ならば『煙幕』！」

タツツーは煙幕を出して相手の視界を遮る。

ガーディは視界が一気に黒一色に包まれ、動揺して冷静な判断力が失いつつあり、ゼットの指示など耳にも入らなかった。

「落ち着け！落ち着くんだガーディ！！」

「タツツー、『バブル光線』！」

タツツーのバブル光線がガーディに襲い掛かる。

しかし、奇跡的にゼットの声がガーディに届き、何とか落ち着きを取り戻し、静かに音のする方を向く。

「よし、避けるガーディ！」

連続する泡の音を捉え、ガーディは飛び上がって攻撃を避けた。
正確にはバブル光線は……。

「何！？『泡』だと！？」

「それはタツツーが『煙幕』を出している時に、仕掛けておいた罠だ」

「（何て奴だ！俺がこうするという事を分かっていたなんて……！！）」

最早ゼットは一瞬先の未来をも間違えることを許されない事を余儀なくされてしまった。

先読みを常に行い、それへの対抗策を瞬発的に練れる者こそバトルの勝利を掴む者である。

ガーディに泡が幾つもあり、避ける事も出来ない程に疲労していた。

このままでは戦闘不能になってしまうだろう。

「ガフツ!!」

「はっ!ガーディ!!」

「もうすぐ戦闘不能みたいだな。ボールの戻した方がいいんじゃないか?」

そうこう考えている間に、エックスの言う通り、ガーディは無数の泡にやられてほぼ瀕死になりかけていた。

しかし、ここでゼットはあることを思い付く。

ゼットはニヤリと不敵な笑みを浮かべ、ガーディに指示する。

「そうだ!ガーディ、この『泡』に『火の粉』だ!!」

「何?」

指示通りガーディは泡に火の粉を放った。

すると、少量の水蒸気が出てきて、それは周りにも泡にも出て、それが合わさって巨大な水蒸気となって辺りを包む。

「くっ……」

「今だ！『噛み付く』！！」

ガーディの噛み付くはタツツに喰らった。しかしこれだけでは終わらない。

「さらに、『起死回生』！！」

「！」

ガーディは次の指示が与えられない間にタツツの間合いに入り、突っ込んだ。

起死回生とは、ダメージが大きければ大きいほど威力が上がる技である。

つまり泡攻撃を4、5回喰らって瀕死寸前のガーディには正にうつつつけの技と言えよう。

それによってタツツはダウンし、力を使い切ったガーディもダウンした。

「戻れ、ガーディ……よく頑張ったな」

「よくやった。戻れ、タツツ」

2匹を戻したゼットと少年は次のポケモンに全てを賭けることになる。

「……正直言って、俺のポケモンが負けたのは初めてだぜ」

「さすが、「凄腕初級者トレーナー」と呼ばれるだけの事はあるな」

「初級者は余計だけだな」

「まあ、そんなことはどうでもいい。強い敵を倒し、俺は強くなる。俺自身で強くなったと思えるまで戦い続ける。そして、最後には奴等を……」

少年は歯を噛み締め、遠い彼方を見つめる。

どこかその目からは、凍てつくような底知れない、何かを感じた。ゼットは少し目を細め、少年を探るようにして見る。

「奴等？」

「……お前には関係の無い事だ。さあ、バトルを再開するぞ」

「?……ああ!」

ゼットは何か少しはぐらかされたような感じがしたが、少年のゼットにとっては些細な事として忘れた。

改めて少年を見やり、腰のモンスターボールに手を掛ける。

「最後だ、行け!ピカチュウ!」

「行け、デルビル!」

最後は炎VS電気だ。特にタイプ相性もないが、ここでどう攻めるか考えるのが、ポケモンバトルの持ち味である。

最初に先攻したのは、素早さの高い速攻型のピカチュウであった。

「一気に行くぞ!ピカチュウ、『電気ショック』!」

「かわして『しっぺ返し』!!」

ピカチュウの素早い攻撃に、少年はデルビルにしっぺ返しを指示した。

しっぺ返しとは、後から攻撃すると威力が2倍になる技である。

そしてそれがピカチュウに当たった……ように見えた。少年にはこれが何か分かっていた。

「『影分身』か」

「ご名答。そして、『電磁波』!!」

しかし、それを読んでいたゼットはしっぺ返しを影分身で避け、電磁波でデルビルの素早さを落とし、麻痺させる。

この状況にも関わらず少年はピカチュウを観察し、次の攻撃を想定していた。

「中々やるな。だが……『スモッグ』!!」

「やばい!逃げろピカチュウ!!」

デルビルが電磁波を受けた後のピカチュウの攻撃は至って単調だ。素早くこちらに詰め寄って、麻痺状態なのを利用して、電気ショックの応酬、と言う簡単な連続攻撃を行おう……とした。

が、時既に遅し。態と詰め寄らせる事により、スモッグの当たる確率を高くしたのだ。

その為、ピカチュウはデルビルのスモッグに引っ掛かり、毒状態になった。

「な……!!?」

「形勢逆転だな。デルビル、『火の粉』!!」

しかし、火の粉が出なかった。

「麻痺か……」

少年は舌打ちして、状況を整理する為、周りを見渡したが、ポケモンバトルの最中に油断は許されない。

特に自分と同じレベルのトレーナーや、それ以上の実力を持っているトレーナーなどには。

その一瞬の隙が仇となり、ゼットは貰ったと言わんばかりに果敢に攻め込んでいく。

「今だ!『叩きつける』から『電気ショック』!!」

「……っ!!」

少年は一瞬驚き、反応が遅れて、指示を出す前にデルビルはピカチュウの攻撃を喰らう。

クラブ戦の如く、連続で電気ショックを叩き込み、デルビルの体力はついに半分を切った。

「『火の粉』で吹き飛ばせ!!」

攻撃が当たって、一瞬浮かれていたゼットはピカチュウがデルビルの口を塞いでいた筈なのに、何故か火の粉が当たってしまった。

思わぬ攻撃に咄嗟の反応が来ず、ピカチュウは吹き飛ばされる。

「くっ!『電光石火』だ!!」

しかし、先読みの早い相手に取って電光石火を避けるのは容易い。
先程の連撃もあり、余力を残しておくために、最小限の動きでデルビルは避けた。

「……ほぼ状況は同じってところか？」

「そのようだな。そろそろ行かせてもらおう！」

「おもしれえ！やってみろ！！」

「『火の粉』！」

デルビルの火の粉が全体に飛び散り、近くの草に発火させた。
その火はだんだん燃え広がり、正に侵略する事火の如しなのか、燃え滾る火は円を描くようにし、ピカチュウは逃れる術を失くす。
ゼットは何か手はないかと思慮するが、今一度周りの火を見てみる事にした。

「（待てよ？燃えてるんなら、燃え尽かせば……）『電気ショック』で発火したのと近くの草むらを焦がせ！！」

ピカチュウは火を避けながら、発火した物を電気で焦がしていく。
次に発火しそうな物も先に消して、燃え尽きさせる。
だが、これも既に少年の計算の内だった。

「『スモッグ』から、『噛み付く』！！」

「何！？」

この時を待っていたかのようにデルビルは勢い良く、スモッグの煙だけを吐き、毒の無いただの紫色の煙が立ち込める。そこから音も無くデルビルが迫り、肩を噛み付かれてダメージを負った。

「ピイツカアッ！！」

「ピカチュウ！目暗ましか……！（ん？あれは水溜り！しめた！！）ピカチュウ、水溜りに飛び込め！！」

ピカチュウは肩を噛み付かれ悲鳴を上げるも、痛みに耐えながらピカチュウが目を開けると、そこに水溜りがあった。ゼットの指示通り、水溜りに入る。デルビルは飛び散った水が被った瞬間、後ろに退いた。

「なる程、水タイプだから水に弱いと言う訳か」

「だがそれだけじゃない！デルビルは足を引きずらせながら後退した、って事は付いてるはずだ！水の跡が！！」

デルビルの足には水で濡れた跡があり、ピカチュウの所にある水溜りから繋がっている。

「まさか……」

「『電気ショック』！！」

電気ショックは水を伝い、デルビルの方へ向かって行った。しかし、間一髪避けて電撃地獄は免れる。

「『火の粉』！」

指示を聞き、ゼットはピカチュウに蹲るように指示をして、ピカチュウは水に濡れたまま丸く蹲った。

そして、火の粉でピカチュウを攻撃するが、見た所、殆ど効いていないようだ。

「水を被ったのか。ならば、『スモッグ』！！」

煙幕代わりにスモッグを吐き、後ろに下がってピカチュウとの距離を広げた。

互いに鋭い眼光でピカチュウとデルビルは睨み合っている。

その静けさが言いようのない緊張感を走らせるのは仕方の無い事だろう。

「中々やるじゃねえか。名前は何て言うんだ？」

「……エックスだ。さて、麻痺状態でHPの半分しかない……いや、麻痺状態だったHPの半分しかない俺のデルビルと毒状態のお前のピカチュウ。果たしてどっちが勝つか……分かるよな？」

「……あの状況で麻痺治しを使ってたのか。だが1つ訂正があるぜ。毒はこっちも治ってたぜ？」

そうやってバッグから取り出したのは、モモンの実だった。持たせてはいなかったが、途中で使う事が出来る。

因みにモモンの実とは、ポケモンの毒状態を治す木の実の事だが、モモンの実に限らずアイテム全般は大きな隙が出来るので、中々使い所が難しいと言われている。

この間で、2人共オボンの実を使い、2匹は体力を回復した。

相手に気づかれず、ポケモン達が派手な事をやっている間に、アイテムをさり気なくポケモンに渡して体力を回復する。

ゼットとエックスは互いにそれを実行したのだ。

しかし、無常にも時間は許してはくれず、バトルは再開した。

「『電気ショック』!!」

「『火の粉』!!」

互いの攻撃がぶつかり合う。そして、攻撃が弾かれた時、デルビルは一瞬怯んだ。

この瞬間をゼットは見逃さなかった。

「今だ!『電光石火』!!」

ピカチュウの素早い突進がデルビルを襲う。

ゼットはそのまま倒そうとしたが、避けられた。

「なっ……!!」

しかし、デルビルのそれはただのフェイントだった。

デルビルは前方から背後に迫り、間合いを取る。

「甘いな。今のは態とだ。さあ、俺の勝利は……」

この位置では絶対に避けられない。そう、エックスは思っていた。もう、誰もが絶望するこの状況。

だが、ゼットは全く諦める様子がなく、寧ろこの状況下で勝利を確信していた。

「まだだ！避ける、ピカチュウ！！」

「この間合いでは不可能だ！喰らえ、『しっぺ返し』！！」

エックスはこの勝負もらったと思ったが、この状況を逆転する事態が起こった。

何と直角90度であろうことが、真横に電光石火の勢いをそのまま持っていたのだ。

そう、これはこの話の冒頭でやっていた、特訓シーンの技である。

「何！？」

「行けええつ！！『叩きつける』！！！！」

電光石火の勢い×叩きつけるの強さ＝2倍以上の威力。

その為、叩きつけるの威力は凄まじく、エックスがデルビルに指示する前に叩きつけられてしまった。

「くっ……『噛み付く』だ！！」

ピカチュウから逃れる為、抵抗をしようとデルビルはピカチュウに噛み付く。

ピカチュウは悲鳴すら出来ない痛みに襲われるが、決して離そうとはしない。

「耐えろ、ピカチュウ！！」

「そのまま倒せ！！」

しかし、中々ピカチュウは倒れない。デルビルも持ち堪える。

「『電気ショック』!!」

「くっ!!」

デルビルとピカチュウは互いに声にならない悲鳴を上げる。

正に「死闘」と呼ぶべき戦いになって来ていた……そして、ここからは「頭」ではなく「根性」の戦いになり、戦いはクライマックスを迎えようとしていた。

「『スモッグ』だ!!」

デルビルはスモッグでピカチュウを毒状態にした。

「まだやんのか!？」

「勝つためだ!!」

「それでも……………それでもこつちも負ける訳には行かねんだよ!!」

「上等だ!!」

ゼットとエックスは些細なミスですら敗北に繋がるこの状況を楽しんでいた。

「行けっ!!『電光石火』っ!!!!」

「やれ!!『しっぺ返し』!!!!」

ゼットとピカチュウ、エックスとデルビルもちろんだが、今モン
スターボールに入っている、第1試合に出ていたガーディとタツ
ーですらもヒートアップしていた。

「ワン!!ワン!!」

「シュー!!シュー!!」

そして、相対する強大な2つの技が互いに炸裂した………
…。

デルビルは音も無く倒れ込み、地面に倒れこんだ。

「デルビルが……負けた……？」

「……いや、待て!!」

倒れたのはデルビルだけでなく、毒で倒れたピカチュウもいた。どうやら2匹同時に倒されたようである。

「ピカチュウ!!!!」

「デルビル……」

ゼットは急いで、とてつもない死闘を繰り広げた相棒のピカチュウに駆け寄った。

エックスは倒れたデルビルを静かに抱きかかえて、モンスターボールに戻す。

「……………この勝負、引き分けた」

「……………そのようだな」

そう言うつとゼットは草むらに倒れこんだ。

「何だか、今は清々しい気分だぜ」

「引き分けだからな」

「俺も引き分けたのは初めてだぜ。ポケモンバトルって、勝ち負けだけじゃねえんだな」

「そんな事も知らなかったのか？」

「うるせえ!!」

「………フン」

エックスはゼットを見定めるような目付きで見た。

「次にあつた時は負けないぜ!俺はゼットって言つんだ。よろしくな、エックス!!」

「……………」

最後に握手でもしようとしたが、エックスは後ろを向いて先に進んでしまった。

「何だ?あいつ、無愛想な奴だな。まあ、いいか。よし行くぞピカチュウ、ガーディ!!」

「ピッカ!!」

「ワン!!」

ゼットも荷物を持って、先に進もうとしたが、トキワの森から悲鳴がした。

「きゃああああああああああ!!!!!!!!」

「悲鳴!!?何かあったのか!!?」

「!?!」

ゼットは夢中で走っていった。

エックスも悲鳴に気がついたのか、トキワの森へ進んでいく。

「一体、トキワの森で何が……!!」

次回は「トキワの森の悲鳴!!」前後編でどうぞ。

第4話 「トキワの森の悲鳴!」〔前編〕

ゼットとエックスは、急いでトキワの森に走っていった。

トキワの森……それは、レベルの低い虫ポケモン達が生息している初心者向けの場所の事である。

何故こうなったか……それは、エックスと戦った直後に悲鳴がトキワの森から聞こえて来たからである。

「ここから女性の人の声が聞こえたぞ!!」

「ああ。考えられる例は2つ。1つは単に、虫ポケモンに怯えている。よくある事例だ。もう1つは、何かに襲われているのか……お前は、どっちだと思う?」

「俺は後の方だと思う。何か尋常じゃない位の悲鳴だったし」

ゼットは先ほどの悲鳴を思い出す。

ただの虫ポケモン嫌いならば、もっと連続的に悲鳴を上げる筈である。

しかし、先程の悲鳴は一度しか上げなかった上に、その悲鳴がまるで今正に死にそうな程の絶叫であった。

「そうだ。俺には、この森から憎しみや苦しみという負の感情が溢れているように感じる。何故かは知らないがな。……この感じ、ここには俺の記憶の手掛かりがある。そんな気がしてならない……」

何かとても苦しい感じがするエックスは胸騒ぎを覚える。

「ん?ごめん、最後何て言ったか聞こえなかったんだけど……」

「気のせいだろう。行くぞ」

「そ、そうか。分かった」

エックスは無言で前を向いて走る。

しかし、ここでエックスは何かに気づいて目を見開く。

「！……誰がいるぞ！」

「！」

ゼットは慌てて口を閉じた。

「一体、何をしているんだ……？」

視線の先には研究服を着た15歳ぐらいでロングヘアの女性と、黒服の男2人がいた。

黒服の男達は、女性を追い詰めているように見えた。

トキワの森……それは、普段は太陽が燦々と降り注ぎ、ポケモン達も元気に走り回る美しい森だ。

だが、夜になるとその美しき森から逆転して、薄暗く森のポケモン達もひっそりと息を潜めて、最初の時の印象はすぐに変わり、その雰囲気から恐怖感が醸し出される、そんな2つの印象を持つ森である。

そんな森にその者達はいた。

黒服の男達は女性をせせら笑いながら見ていた。

「まさか、あの研究員達に生き残りがいたとはな。だが、ここまでだ」

「お前さえ捕まえれば、研究所が爆破された事が世間に漏れることは無い。命が惜しければ大人しく捕まることだな」

「嫌よ！だってあなた達はパパやママたちを……！絶対に許さないんだから！！」

怒りと憎しみに満ちた表情で自分をせせら笑う黒服の男達を見つめる。

その表情を見て男達は少し恐怖を感じ、黒服達は少々怯えながら女性に言い返す。

「だ、だったら、何だって言うんだ？」

「こうするまでよ！！レディバ、『超音波』！！」

すると、女性はポケットからモンスターボールを取り出し、素早くそこから出て来たポケモン……レディバに指示を出す。

黒服の男達は、咄嗟にモンスターボールに手を掛けたが、超音波が響き、頭を抱えた。

それに怒った黒服の男達は、モンスターボールを再度手に取った。

「折角、生け捕りにしてやろうと思ったが、仕方ない。ここで消えてもらおう！！」

「やれるものなら、やってみなさいよ！『連続パンチ』！！」

「コラッタ、『電光石火』！！」

2つの攻撃はほぼ同時に行われた。

ここは、連続パンチの威力の方が高かった。

「ポッポ、『風起こし』!!」

しかし、横から別の攻撃が入ってきた。

女性は攻撃に対応しきれず、レディバはもろに喰らってしまった。

「レディバ!……2匹で攻撃するなんて卑怯よ!!」

「非公式のバトルに卑怯も糞もあるか!死ねえ!!」

男はポッポに風起こしを指示し、女性を狙う。

咄嗟にレディバを庇って、目を閉じる。

しかし、女性の後ろから電撃が出現し、風起こしを相殺した。

何者とばかりに黒服の男達は草むらを見る。

「そこまでだ!!」

「待てゼット!勝手に飛び出すな!!」

そう、ゼットとエックスであった。

ゼットは女性の前方に立ち、エックスは溜息を溢す。

「誰だお前等!?!」

「いきなり人に攻撃するんじゃない!」

「何しにきたのかは知らないが、ここはガキの来る所じゃない!痛い目に遭いたくなかったら帰れ!!」

エックスはそんなゼットに呆れるが、すぐに気を引き締め、黒服の男達を睨む。

「……トキワの森はトレーナーの冒険の場の1つだ。別に子供が来てもおかしくない筈だが？」

「生意気なガキどもめ……どうやら少し痛い目に遭わせなければいけないようだな……！」

「先にお前達を倒してやる……！」

「上等だ！行け、ピカチュウ……！」

「出番だ、デルビル……！」

しかし、ピカチュウとデルビルは、出た瞬間から弱っていた。前回のエックスとのバトルの直後に悲鳴を聞いたので、ポケモン達を回復させる余裕がなかったのだ。

「しまった！さっきのバトルで全員疲れているんだ……！」

「くっ……俺とすることが、走るのに夢中でポケモン達を回復するのを忘れていたぜ……！」

「ははははは……貧弱そうなポケモン達だな……そのままやられる……コラッタ、『電光石火』だ……！」

「ピカチュウ、避ける……！」

「デルビルもだ……！」

2匹とも、何とか電光石火を避けた。しかし、かなり目が空ろである。

「ポッポ、『風起こし』!!」

「くっ……ピカチュウ!!」

ピカチュウは避ける事も出来ずにポッポの風起こしが炸裂した。風起こしはピカチュウの顔面に当たり、そして起き上がるとピカチュウはポッポを睨む。

「……………ピカ!!」

さっきのポッポの攻撃で、ピカチュウはかなり頭に来たようだ。ピカチュウは電気ショックの比にならない程の電撃を両頬に溜め、そしてその電気を放出する。

「ピイツツカアアアチュウウウウ!!!!!!!!」

「ピ、ピカチュウ!!?」

ピカチュウは怒りエネルギーの放出と共に『10万ボルト』を覚え、ポッポを一撃で倒した。

「何いいい!!!!?」

さらに、デルビルは、輝き出した。

「今度は何だ!?!」

「これは……………進化の光!？」

デルビルの形は大きく変化し、そしてデルビルは進化した。

「こいつは……………!」

ゼットとエックスはポケモン図鑑を開いた。

それと同時に、右上に付いているランプが赤く点灯する。

『ヘルガー、ダークポケモン。ヘルガーの不気味な遠吠えは地獄から死神が呼ぶ声と昔の人は想像していたと言われている』

「ヘルガー……………か」

「……………なるほど。ヘルガー、『火の粉』!」

ヘルガーはデルビルの時よりも強い火の粉を発した。
そして、コラッタをまた一撃で倒した。

「ば、馬鹿な!」

「こんなガキ共にやられるなんて……………!」

手持ちを無くしてしまったので、黒服の男達はゼット達に背を向け、逃げていった。

「ん?あの文字は……………!」

すると、何かの記憶がエックスの頭を過ぎる。

「逃げて、
×
×
×
×
!!」

「嫌だ！お母様を置いて逃げたくないよ！！」

狭い個室で、少年とその母親が言い争っている。

「おい！この部屋から声がするぞ！」

すると、今度は別の声がする。

他にも多く声が聞こえたのでこの部屋の扉の前で多くの人間がいる事が分かる。

「！……来たわ！速く逃げて！！」

「で……でも！！」

「！！」

「ククク……こんな所にいたのか。俺から逃げられるとも思ったのか？まさか俺の×××を忘れた訳ではないだろう？」

扉から出てきたのは、黒服の集団でその先頭に銀髪の青年が、冷酷な視線で少年と母親を見ていた。

「お……お前は！？」

「俺は×××××のブラックスターの１人、×××だ」

「ブ……ブラックスター！！？」

「×××××の最高幹部……と言ったところだな」

「××××だと？お前ら××××だったのか！？」

少年は驚いた表情で言った。

「だからこんな真似ができるのね……」

「無駄話をしてしまったな……。そろそろオーキド博士はどこにいるか教えてもらおうか？」

「あの人の居場所は教えないわ！！」

「そうか。ならば貴様等とお喋りはやめて、こっちの『お喋り』に付き合ってくれないか？」

すると、いきなりペラップが現れ、声にならない悲鳴を上げる。

「しまった！！」

「ぐっつ……ペラップの『お喋り』か……！！」

少年はそれでも立ち向かおうとするが、母親に襟を捕まれる。

「え……………？」

「さようなら……エックス」

「え……そ、そんな！お母様……お母様ああっ！！」

覚えのない記憶が頭に入ってくる。

「……これは……一体……!？」

「どうした？」

「……………」

「おい」

「……………」

「おい！聞いてんのか!？」

ゼットはエックスに話し掛けるが、エックスは黙り込んだままだったので、少し強い口調で言う。

「……………ん？どうした？」

「お前、大丈夫か？」

「……………お前に心配なんて掛けられたくないな」

「人が折角心配してやったのに何だよその態度は？」

「あのお、お取り込み中すいませんけど……私、忘れられてませんか？」

中に被害者の女性が割り込んできた。

「……………」

そして、2人同時に黙るのだった。

「今日は本当にありがとうございました。私、科学者のフィシアと申します。危ない所を助けてもらったお礼にこれをあげます」

そう言ってもらった物は、腕に付けれる機械だった。

「これは？」

「これは私達の研究所で開発された機械です。「ポケモン・オールラウンドインフォメーションマシン」通称、「ポケーション」です。これはまだ誰も持っていない非売品です。ポケーションは、ポケモンに関するあらゆる情報が載っています。ジムのことや前大会のリーグの動画なども載っていますよ」

フィシアはすらすら説明する。

ジョウトのポケギア、ホウエンのポケナビ、シンオウのポケッチ、オーレのPDA、イッシュのCギアを大きく越えた機械があると言っているのはとても驚きである。

………ネーミングセンスは別として。

「マジで！？すげえ！これ、もらっていいのか！？」

ゼットは目を輝かせながら、フィシアに言った。

「ええ、構いませんよ。助けてもらったのですから、それ相応のお返しします」

「それじゃあ、ありがたくもらおう」

「やったあ！！」

ゼット達は、ポケーションをもらった。早速、ゼットは電源を入れてみた。

すると、立体的に画像が出て来たので、ゼットは驚いて飛び退いた。

「うわっ！何だこれ！？画像が出てきたぞ！？」

立体映像の機械なんて、テレビ電話すら発売していないこの世の中では目を見張る物だった。

「3Dか。今の科学は随分進歩していたようだな」

「いえ、これは数十年先の技術の結晶とも言える物です。今の技術はここまでは進んでいませんよ。そしてこれを世に発表する筈だったんです。あいつ等が来るまでは……！」

最後の言葉には強く感情を込めて言った。

「あいつ等って？」

「ゼット、あまりそう言った事を詮索するな」

「でもよ……いや、分かった」

冷静に言うエックスにゼットは反論しようとするが、今回ばかりはエックスの方が正論なので押し黙った。

「それじゃあ、私はこれで」

フィシアは、そそくさとゼット達の前から去っていった。

「では、俺はハナダシティに行ってくる。精々頑張るんだな」

そう言うと、エックスはニビのグレーバッジを見せた。その瞬間、一気に血の気が引いた。

「俺……まだ、ジムにすら行ってないのに……」

「ハハハハ！まだグレーバッジも手に入れていないとは、本当に初級者だな！」

「何！？」

ゼットを嘲笑いながら、エックスもトキワの森から去っていった。そして、1人残されたゼットは……。

「次に会った時には絶対あいつを倒してやる！！」

1人、エックスの捨て台詞に怒るゼットであった。

「さてと、俺も行く……」

その時、ゼットはトキワの森から何かを感じた。そして今度はもっと大きな声が聞こえてきた。

「（声？まさかまたフィシアさんが……いや、この声はフィシアさんのじゃない。このトキワの森全体からきたような……）」

また声が聞こえてきた。何かは分からないが。

「これは悲鳴か？……そうだ！こつゆつ時こそ、ポケーションだ！
！」

ゼットはポケーションの電源をつけて、録音機能を使ってみた。

「……………」

録音が完了した。ゼットはこの声について、調べてみた。

『これは人間の声の周波数ではありません。この声の主は、高確率でポケモンだと思われます』

「ポケモン！？よし、この機械をフル活用だ！えつと………どうやって特定するんだろ？」

ゼットは適当なボタンを押すが一向に分からなくなってくる。

「えつと………だああーっ！！全然分からねえ！！」

そう叫ぶが、ポケーションは何の反応もしない。

こんな事ならフィシアに取扱説明書を貰うべきだったと今更になって後悔するゼットだった。

「こつなつたら自棄だああ！！」

ゼットは自棄を起こし、適当にボタンを押して、連打連打を繰り返した。

その、連打の早さは凄まじく、正に機械を全く扱えない機械音痴に相応しい光景である。

「うりやりやりやあああ!!」

ゼットはさらに適当にボタンを連打していった。

「これでどうだあああ!!」

しかし、誤って電源ボタンを押したのか、画面が閉じられて切れてしまった。

「oooooooooooo!!」

ゼットはまだ懲りず、また変なボタンを押すとやっと画面が元に戻った。

『この声の周波数を特定中です。この声の周波数を特定中です。この声の周波数を特定中です。この声の周波数を………』

何とか目的の画面へ行き着いた。

「お、おおっ！連打した甲斐があったぜ！よし、そのまま特定してくれよ……!!」

すると、ポケーションの立体画面から、特定完了と言う画面が出てきた。

どうやら特定が終了したようである。

『特定が完了しました。この周波数はトキワの森、最奥部から反響しているようです。この声帯は、確実にポケモンです』

「最奥部……？」

トキワの森最奥部……そこは地元の人間しか知らない秘密の場所で森の聖域と呼ばれている。

『種族は不明ですが、トキワの森のポケモンではなさそうです』

「そうか。何れにせよ、悲鳴の下に行くことには変わりはないねえぜ。行くぞ、ピカチュウ！」

「ピカ！！」

ゼットはピカチュウと共に、トキワの森の奥の方へ走っていった。

「……奥つて、どっち？」

ピカチュウは盛大にずっこけた。

「チュウウウウウウ！？」

「で？どっちに行けばいいんだ？」

どっちに行けばいいのかわからないゼットに、ピカチュウは、「こ
うゆう時こそ、ポケーションだ」と言った。

言葉はわからなくても、ジェスチャーでゼットにも通じたので、ポ
ケーションを使った。

『最奥部とはトキワの森の最西端の事を指します。初級者トレーナ
ーの98.3%はそこを通る事はありません。最奥部には、ポケモ
ン達の巣があります。さらに最近外からやってきたフシギソウが占

領し、やがて縄張りになり、近づく事が難しくなりました』

「フシギソウ……確か、オーキド博士の初心者用ポケモンの中にフシギダネってのがいるって聞いたことがあるぞ。まさか、その進化系か!？」

勿論、ここ一帯にフシギソウなんている訳がない。

それ以前にフシギソウどころか、フシギダネすらもない。

「……と言う事は、トキワの森にはいないポケモン、ってのはフシギソウの事か!？」

『いいえ。タイプが違うので別のポケモンのようです』

「別の?何かは分からないけど、今度こそ行くぞピカチュウ!」

「ピッカー!」

そのまま、ゼット達は西に走り出した。さて、これから一体どうなるのか……後編に続く。

第5話 「トキワの森の悲鳴!」 「後編」

ゼットはトキワの森の最奥部を目指して走っていた。
途中、バタフリーやスピアーなど珍しいポケモンがいたが、それに
目も呉れず悲鳴に向かっていった。

「……！！」

「声が近いぞ！行ってみよう！！」

最初、悲鳴は森全体に反響していたので、遠くにいたゼットでもよ
く聞こえた。

その時はまだ、はつきりとした声ではなかったため、悲鳴かどうか
は分からなかったが、2回目の声で悲鳴と分かった。

「こ、ここは……！？」

出て来た所はとてつもなく大きな草原だった。
てつきり今よりもっと木の生い茂る、密林か何かと思っていたゼ
ット達は拍子抜けな気分になった。

「ここか？こんな所を探すのかよ……」

「ピーカ……」

「ワンワン……」

ピカチュウもガーディもこの景色に呆れていた。
走っている途中にポケーションから聞いた、広い草原にフシギソウ

及び、悲鳴の元がいるという情報は強ち間違つてはいなかった。
だが、これは広いは広いでも、全く何もなく無駄に広いだけの草原である。

これだけ広いと探しづらいと言うものだ。

しかし、逆を言えば何の障害物もないと言う事だ。
探しやすいと言っても嘘ではない。

「仕方無い。手分けして探すとする……」

「……！……！！！」

「これは、さっきの悲鳴！！」

悲鳴は近くで聞こえた。

ポケモン達にも聞こえ、自然にポケモンの所に走っていった。

「あそこか！！」

しかし、幾手を阻む敵など旅には付き物だ。
そう、易々と進める訳がなかった。

「ピッカ！？」

「ウォーン！！」

「ポケモンか！！」

現れたのは、ピジョン、ラッタ、オニドリルだった。
恰も、「ここから先へは通さん」とでも言うつかの様に警戒心を剥き出しにしていた。

3匹に対して、ゼットは素早くボールを手を取った。

「邪魔だ！！ピカチュウ、『10万ボルト』！！」

「ピカ！！」

今の一撃でピジョンがダウンしたが、ラッタとオニドリルは避けた。

「ガーディ、俺の周りに『火炎車』！！」

「ワン！！」

ゼットの予想通りだった。

ガーディの火炎車はゼット達の周りを走り、円外にいたラッタとオニドリルは横から目の前にきた、ガーディに驚き、2匹は何とか足をギリギリで止めた。

だがこれも、ゼットの予想範囲内だった。

火炎車に翻弄されるオニドリルとラッタは、『燕返し』、『必殺前歯』などの技で動き回るガーディにタイミングを見計らって、目前に来た際に攻撃するのに集中し過ぎて、おずおずとこちらに近づいて来るもう1匹の存在に全く気づかなかった。

「今だ！ピカチュウ、『電光石火』から『10万ボルト』！！」

そう、ピカチュウである。

ピカチュウは電光石火の機動力と素早さを利用し、ほんの少し滑空しながら足音を出さずに高速で一気に相手に接近して2匹の間の真後ろに入り、気づく間すら与えず至近距離からの10万ボルトをかました。

相性のためか、オニドリルはダウンしたが、ラッタはまだ戦闘不能

にはなっていなかった。

「タッタタタタ！……！」

「まだやるか！売られた勝負は買うのが道理！！やってやるっじゃねえーか！！！」

「ピッカア！！！」

「ウォーン！！！」

もう既に買っているが、そんな事はどうでもいい。

野生のラッタに闘志を燃やすガーディは口に僅かだが炎を煮え滾らせていた。

それに気づいたゼットは微笑した。

「取り合えず、ピカチュウ戻れ」

「ピカ？」

「今回、何故かガーディが妙に震え上がってる。その気持ちに応えてやるためにも……いいな？」

「ピッカチュウ！！！」

『何故か』の理由も分かっているゼットの言葉でピカチュウもガーディの気持ちを察して、モンスターボールに戻っていった。

「よし、行くぞガーディ！！！」

「ワン!!」

先攻はラッタからだった。

電光石火をして突っ込んできたが、ガーディは避けて火の粉を連発したが、気合溜めをしながら、電光石火をして、火の粉をかわした。

「（さっきガーディの口に火が出ていた。だとすると妙にガーディが奮い上がっている訳は……。）新技行くぞ! 『炎の牙』!!」

すると、口から出ていた炎がガーディの牙に全て移り、普段よりも大きな牙になった。

「突っ込めえっ!!」

ラッタもそれと同時に電光石火を早くした。

互いの本気がぶつかり合い、両者の立ち位置が逆になった。

しかし、まだ闘志は燃え尽きていなかった。ガーディもゼットの指示を待っている。

「よし、まだまだこれからだ! ガーディ、『睨め付ける』から『火炎車』だ!!」

ガーディはゼットの指示通りに動いた。だが、そう相手は甘くない。ラッタはガーディの睨め付けるで防御力は下がったものの、その素早い動きで火炎車をかわした。

「（やっぱり速いな。あの速さを打開するには……。ん? ラッタのあの態勢、確か前にTVで見たことがあるぞ!! だとすると、次の攻撃は多分……。）避ける!!」

ガーディは一瞬戸惑ったが、指示通り左に避けた。
するとすぐ真横にラッタが襲ってきた。

「やつぱり『不意打ち』か！今だ！『炎の牙』！！」

ラッタの不意打ちを予想し、的中させたゼットは一番の主攻撃である前歯が無い上、防御もできない真横に至近距離からの炎の牙を喰らえば大ダメージを負う事に間違いはないだろう。
しかし、ラッタはまだ体力が残っていた。

「そのまま、『火炎車』！！」

さらに思わぬ追加攻撃を喰らってラッタはダウンした。

炎の牙を出したまま、火炎車をする事によって、（炎の牙＋至近距離からの火炎車）×当たった回数の攻撃力を得る事が出来るのだ。
瀕死寸前のポケモンじゃなくても、戦闘不能になるのは当然である。

「よっしゃあ！3体相手に勝ったぜ！！」

「ワン！！」

「ピッピカチュウ！！」

……と喜んでいる場合ではない。悲鳴の件がまだ終わっていない。

「ゼ……………」

「あつ！やべえ！！バトルに夢中ですっかり悲鳴の事忘れてた！！
悲鳴はすぐそこだ！行くぞピカチュウ、ガーディ！！」

ゼットは悲鳴の大元を追って、漸くそのポケモンの所にまで辿り着いた。

比較的大きな広場で、周りには多くのポケモン達がいた。

その中心に居るのが、3匹のフシギソウと悲鳴の元のポケモン……ゼニガメであった。

見るからにバトルをしていて、1対3という完全にアンフェアな形で戦っている。

今の戦況は圧倒的にゼニガメが不利な状況である。

1対3でしかも、相性が悪いという事もあって、フシギソウの方はまだ1匹も倒れていない。

少々体力は減っているが、ゼニガメ程ではない。

ボスであろう、色違いのフシギソウに一方的に攻撃されているが、ゼニガメはまだ立ち上がる。

傍観者の中には見てられないのか、助けに行こうとする者も居たが、当人であるゼニガメに手で制された。

フシギソウは止めの『蔓の鞭』で攻撃しようとしたが、ゼットが横から入ってゼニガメを庇い、攻撃をそのままゼットが喰らった。

「ぐはっ……！」

「ゼニ!？」

突然の出来事に、この場に居るポケモン達が騒然とした。

「大丈夫かよ!おい!お前、何でこんな不平等な戦いなんてやって……!」

確かに、ゼニガメが何故このようなアンフェアなバトルを受け入れているかが分らない。

その理由は向こうにいるキャタピーの為だった。

ゼニガメはフシギソウたちに捕らえられたキャタピーを助けるために、フシギソウ達に決闘を仕掛けた。
その決闘方法がこれである。ゼニガメはそれを呑み、バトルを始め今に至る。

それがゼットたちにも分かった。

「おい、ゼニガメ。お前フシギソウ達に決闘を申し込んだんだよな」

「ゼ……ゼニ」

「俺にはポケモンの言葉は分からねえが、真中にいる色違いのフシギソウはこう言ったんじゃないか？『ポケモン同士、1vs3のバトルでどうだ？』ってな」

「ゼニガ！？」

ゼットの言っている事は当たっていた。

ゼニガメはバトルの直前、バトル方法をフシギソウに言われた。それがゼットの言った事と全く同じだったからだ。

「お前は傍観者からの助けを拒み続けた。しかし、俺の助けは拒まなかった。それはお前のやってる事と考えてる事が矛盾してるよな。んで俺は思った。自分を指示してくれるトレーナー……つまり人間なら数に入らないと思ったからだ。ルールで言っていた『ポケモン同士』と言う事はポケモンだけで1対3と言う訳だ。ならば人間はその数に入っていないからトレーナーを探していた。……いろいろと推測が多いが、間違ってるねえか？」

「ゼニ！！！」

「よし、なら話は簡単だ。あいつらをぶっ飛ばすぞ!」

「ゼニツ!」

「ソウツ!」

ここでバトルが始まった。だからと言って状況が変わったわけではない。

相性も悪いのが3匹もいる上に、こちらの体力もかなり危ない。

90%以上の確率で負けそうなのこの状況をどう逆転するか、そこがこのバトルの鍵になってくる。

「(さて、どうしたものか。あいつらを倒すにはいろいろな策が必要だ。1番最悪のシュチュエーションだからな。もしかしたら、道具も使わなければならない羽目になっちまうかもしれない……。あいつらの最初の攻撃は……)」

「フシツツ!」

「やっぱり『葉っぱカッター』だ!『バブル光線』で全て威力を消せ!」

ゼニガメは口から泡を吹き、葉っぱカッターの全ての葉っぱを泡に閉じ込める。

普通ならば破裂する所だが、このバブル光線には多くの水が入っていた。

その水によって、切れ味は皆無になり、威力の無いただの葉っぱとなったのだ。

しかし、まだ攻撃は終わらない。

「そこから『水鉄砲』！怯んでいる隙に『殻に籠る』！そして『高速スピン』！！」

ゼニガメの攻撃は凄まじかった。

水鉄砲でフシギソウの1匹に当て、怯んでいる内に殻に籠るで防御力を上げ、高速スピンでさっき水鉄砲が当たったフシギソウに攻撃した。

ただの高速スピンならば大きなダメージは与えられないだろう。

だが、防御力を上げさらに硬化した殻を喰らえばどうだろうか？

恐らく、一溜まりもないだろう。防御力を応用すれば、防御を攻撃の糧にする事が出来る。

技を応用する技術……それがゼットの得意分野である。

「ソウツ！！」

「ゼニーツ！！」

「『蔓の鞭』か！！」

効果は抜群である。ゼニガメは蔓に絡まり、身動きが取れなくなってしまった。

蔓に強く縛られさらにダメージが与えられてしまった。

さらに葉っぱカッターで攻撃しようとするが……。

「ゼニガメ！尻尾だけ出しながら、『高速スピン』！！」

ゼニガメは尻尾を出しながら高速スピンの回転し始めた。

すると、絡まっていた蔓が契られ、葉っぱカッターを弾いた。

近くにいたフシギソウにも当たり、ゼニガメに攻撃を受けていたフシギソウはダメージの差でダウンした。

しかし、もう1匹のフシギソウの『突進』によって、ゼニガメはダメージを負った。

「大丈夫か、ゼニガメ！」

「ゼニゼニー！」

「まずは1体……次はあっちだ！」

すぐ横にいた、普通の方のフシギソウを狙った。
だがそれが甘かった。色違いのフシギソウが動いたのだ。

「しまった！『眠り粉』かー！」

普通のフシギソウに気を取られていたゼットはもう1匹に気づかなかった。

ゼニガメは眠り粉によって眠らされ、倒れてしまった。

「起きろ！起きるんだゼニガメー！」

「フシフシッ！ー！」

「くっ……まずい！あ、そうだー！」

しかし、いくら叫んでも返事が無い。

ゼットは何か思いついたのか一端その場から離れ、近くの木を蹴りまくり始めた。

その奇怪な行動に色違いのフシギソウは怪訝そうな顔をする。
すると木が大きく揺れ始め、いろいろな木の実が落ちてきた。

クラボの実、モモンの実……いろいろな実がある中である、青い実をゼ

ニガメに蹴り飛ばした。

「起きろおおっ!!」

ゼットが蹴り飛ばした青い実はゼニガメの方へ飛んで行った。

奇跡な事にその青い実はゼニガメの口の中に入った。

ゼニガメはそれを飲み込み、目を開けた。

「ゼニ？」

「カゴの実さ。それと、このキーの実も餞別として貰っておくぜ」

カゴの実とは、ポケモンを眠り状態から直す木の実の事である。

ゼットは混乱状態を直す、キーの実をバッグにしまい、態勢を立て直す。

「（体力ももう少ない……。出来れば早めにけりをつけたいな。）
ゼニガメ、『水鉄砲』!!」

「フシッ!!」

「頑張れゼニガメ!!」

「ゼニーツ!!」

あちらは葉っぱカッターである。水鉄砲vs葉っぱカッター……。押し強さだけならば普通に水鉄砲の方に部があるだろう。だがしかし、葉っぱカッターには連射力と鋭さを兼ね備えている。ほぼ互角の勝負と言ったところだったが、僅かに葉っぱカッターが押してきて結果、ゼニガメに当たってしまった。

無論、効果は抜群だ。

「やばい！もう体力も残って無いってのに！！」

「ソウツ！！」

「『突進』！！だったら、『水の波動』！！」

水の波動……それは相手に水の攻撃を与え、稀に混乱させる技である。

突進を仕掛けていった普通のフシギソウはそれを喰らい、混乱してしまった。

混乱のおかげで突進をもろで喰らう事は何とか免れた。

「今だ！『殻に籠る』から『高速スピン』！！」

さらに堅くなった、ゼニガメの高速スピンはフシギソウに直撃した。フシギソウはダウンし、残ったのは色違いのフシギソウだけだった。

「よし、後はあいつだけだ！」

「ゼニ！」

すると、色違いのフシギソウから蔓の鞭が放たれた。

「（早い！）『高速スピン』！！」

高速スピンのフシギソウの蔓の鞭を弾いたが、それが間違っていた。蔓の鞭を弾いた瞬間、2本の蔓の先から何かの粉が出て、ゼニガメの頭上に舞い上がった。

それはどんどん落ちて行き……。

「しまった！『眠り粉』！！避けるゼニガメ！！」

もう遅かった。ゼニガメは眠り粉によって眠らされてしまった。

その絶好のチャンスを逃さず、フシギソウは『宿り木の種』をゼニガメに植え付けた。

見る見る内に、フシギソウの体力は回復していき、ゼニガメは眠ったまま体力を奪われて……否、ゼニガメは起きて宿り木の種を弾き飛ばした。

「フシッ!？」

「……俺がさつきカゴの実をゼニガメに飛ばしたあの時、俺はガーディにこう指示していた。『穴を掘る』で地中を伝ってゼニガメにカゴの実を渡せってな。おかげで誰にも気づかれずにカゴの実をゼニガメに渡す事が出来たぜ」

「ゼニゼニ」

「フシャッ!!」

フシギソウはまた蔓の鞭で攻撃しようとする。

「かわして『水鉄砲』だ!!」

蔓の鞭を紙一重でかわしたゼニガメはフシギソウに向かって水鉄砲を放った。

直撃したが、相性が悪く殆ど効いていない。しかし既にゼットは次の手を考えてあった。

フシギソウが目を開いた瞬間、そこにあつたのは大量の泡であつた。フシギソウの周りに敷き詰められており、泡は動かざる事山の如しのように全く動かない。

だが、一番変なのは敵であるゼニガメが消えた事だ。前後左右を見ても全く見当たらない。

「フシ？フシ？？」

「『高速スピン』」

そう言った瞬間、フシギソウの背後からゼニガメが出てきて高速スピンの直撃した。

高速スピンはまた1段階堅くなっていた。威力はとても強い。

「ソウッ！！」

フシギソウは葉っぱカッターで攻撃したが当たったのは泡だった。フシギソウは探そうと少し動く……。

「フシッ！？」

泡にあたりダメージを受ける。そう、これはトラップだ。

水鉄砲で目を見えなくさせている間、泡を大量に張り巡らせた。

戸惑っている隙に高速スピンの攻撃する。相手が攻撃してきたら泡でガードする。

下手に動こうとすると、泡の餌食になる。

いくら草タイプでもこれは痛い。確実に相手を倒せられるだろう。

「『殻に籠る』から『高速スピン』！」

まだ攻撃は続く。4段階目の高速スピンはかなり危ない。威力が半端じゃないからだ。このまま行けばフシギソウは負けるだろう。

だが、ゼットは攻撃をやめる様にゼニガメに指示した。泡は全て消え、残ったのはボロボロのフシギソウともう体力の持ちそうに無いゼニガメだけだった。

「やっぱ、こんな作戦は俺の道義に合わねえ！」

「ゼニ！ガメガメ！！（そうだな！正々堂々戦ってお前を倒してやる！！）」

「フシ……ソウソウッ！フシャーッ！！（嘗めやがって……なら、やってみろ！弾き返してやる！！）」

ゼットは父親にこの手の作戦だけはやめておけと言われたのを思い出し、やめさせた。

この作戦は、流石に少しえぐ過ぎたようだった。

「行くぞ！『高速スピン』！！」

高速スピンの威力は凄まじく速かった。

それに対してフシギソウは何と蔓の鞭を地面に叩きつけて飛び上がり、空中で回転しながら眠り粉を蕾から出した。

回転して出した眠り粉は広範囲に広がり、近くにいないポケモンでも眠ってしまう。

そのせいか、バトルを見ていたポケモン達は殆ど眠ってしまった。

「その場で動かず『高速スピン』！！」

そこに留まりながら高速スピンをした事で、近づいていた眠り粉は高速スピンの風圧により吹き飛んでしまった。

それも読んでいたのか、フシギソウは大量の葉っぱカッターを出し、まるで渦の様にゼニガメを狙って葉っぱカッターは渦に飲み込まれて中心にいるゼニガメを攻撃しようとした。

「だったらその状態のまま『水鉄砲』!!」

高速スピンをしたまま水鉄砲を放つ事によって全方位に水鉄砲が当たり、周りに出ていた葉っぱカッターをも蹴散らした。

「よし!地面で『高速スピン』!!」

またもやゼットお得意の高速スピンの応用技が炸裂した。

今度は高速スピンの行路を地面に移動させた。

普段、高速スピンは空中で移動する物だが、それを地面でやるとどうなるだろうか?

『高速移動』並の速さで移動する事が出来る。

空中だとその速さは向かい風の抵抗で減速してしまう。

だが、地面ならば風の抵抗を全く受けず、それはほぼ関係無くなる訳だ。

その勢いのまま相手にぶつかれば、確実に大ダメージを負うだろう。

「フシュッ……!!」

「ゼニ……」

「よし、今だ!!『水の波動』!!」

ゼニガメを捉えきれないフシギソウはゼットのゼニガメへの指示が聞こえ、周りを見たがいなかった。

だが、攻撃はやってきた……上から。

あまりにも意外すぎる所にいたので反応が遅れ、水の波動をもろに喰らった。

そして混乱した。

「フシ……」

混乱してよろけてしまっている。正に好機。

「混乱してる今がチャンスだ！『高速スピンの……！』」

高速スピンは地面を削りながらフシギソウに突っ込んでいった。

この時誰もがゼニガメの勝ちと思っていた。だが……。

「なっ……！混乱しながら『蔓の鞭』を……！？」

「ゼ……二……！！」

そして、フシギソウの混乱は解け、ゼニガメを木に投げ飛ばした。

「やばい！ゼニガメ……！」

ゼニガメは投げ飛ばされて木に激突した。

ゼットの指示は遅かった。だが、まだゼニガメは立ち上がる。

「まだ行けるか？」

「ゼニ……ゼニ……！」

「ソウッ!！」

フシギソウの葉っぱカッターである。

切れ味は鋭く、落ちてきた葉っぱすらも半分に切り、ゼニガメに向かっていく。

「『水鉄砲』!！」

ゼニガメは葉っぱカッターに水鉄砲で対抗した。

前述の通り、水鉄砲と葉っぱカッターでは葉っぱカッターの方が威力がある事が証明されている。

しかし、今回あっさりと葉っぱカッターが押し負けてしまった。

そして、フシギソウにダメージを与えた。

「ソウッ!？」

「そうか……特性の「激流」だ!！」

「ゼニ?」

激流とは、HPが3分の1以下になると、水タイプの技の威力が1.5倍になるという特性の事である。

「よし! 激流の力、見せてやるぜ!！」

「ゼニゼニ!！」

「フシャーッ!！」

「『水の波動』!!」

水の波動はものすごい威力を発した。前よりも大きさは広がり、威力も増している。

フシギソウはこれを喰らいダウン寸前である。そして、水の波動はさらに強くなつて行く……。

「シャーッ!!!!」

「行けえええーっ!!!!」

「ゼニイーッ!!!!」

そして、決着はついた。フシギソウはダウンした。力尽きて目が回っている。

「よっしゃあっ!!」

「ゼニー!!」

周りポケモン達からも大きな歓声を送られた。その後は捕まったキャタピーも無事開放され、森の騒動も終わった。そして……。

「よお、ゼニガメ。お前よく頑張ったな!!」

「ゼニ!!」

「気に入ったぜお前!俺の仲間になれ!!」

「ゼニガ！？」

「こいつらは俺の仲間だ。出て来い！」

モンスターボールから出てきたのはもちろん、ゼットの手持ちのピカチュウ、ガーディである。

「ピカ！」

「ワン！」

「俺達と一緒にカントーを冒険するんだ。きっと楽しいぜ！」

「ゼニ……………ゼニ！！！」

「よしまりだ！お前はこれから俺の仲間だ！楽しくやろうぜ！！！」

ゼットはモンスターボールをゼニガメに投げた。ゼニガメはボールの中に入り、落ちた。

そして、軽快な音が聞こえて、ゼニガメをGETした。

「よっしゃー！！ゼニガメGETだ！！！」

「ピッカ！！！」

「ウォーン！！！」

「出て来いゼニガメ！！！」

そして、もう一度ゼニガメをモンスターボールから出した。

「ゼニゼニ!!」

「これからよろしく頼むぜゼニガメ!!」

「ピカチュウ!!」

「ウォーン!!」

「ゼニガ!!」

「よし行くぞ!!」

ゼニガメと言う新しい仲間を加えてゼットはニビシティを目指して
いく……………。

第6話 「ポケモン最大の謎！ディグダの秘密を暴け！！」

トキワの森を抜けたゼットは最初のジムがあるニビシティへ行こうとしていた。

新たな仲間のゼニガメが加わったおかげで、岩タイプ専門のジムであるニビジムに対しては相当の戦力になる。
そして今は……。

「よし、ニビシティまで後もう少しだ！ 気合い入れて行くぞ！！」

「ピッカ！」

「さてと、そろそろニビシティだな……ん？ 何だ、あの洞窟」

ゼットの目の前に出てきたのは何かの洞窟であつた。

それは、何かに掘られたように思われた。

「暇だし、ちょっと寄り道して行くか。いざ、謎の洞窟へ！」

中に入るととても涼しく、全く暗くない。

暗くない理由は、天井にランプが付いているからだろう。

しかし、それよりも気になるのは地面に所々ある不自然な穴だ。
まるで何かが地面から這い出たようにも見える。

「一体何なんだ？ この奇妙な穴は」

「ピカ？」

「どうした、ピカチュウ？」

「グルルルル……」

「ガーデイも何警戒してんだよ？」

「ゼニツー！」

ゼニガメが指を指した先から何かがやってきた。
そのシルエットはすごく小さく、山のようにひょっこり出た形をしている。

小さいのならそこまで警戒する事はないが、それが大群でやって来るとなると……。

「逃げろおお！ディグダだああ！！」

ゼット達は一目散に逃げた。

奥から大群でやって来たのは、地面からひょっこり出ているポケモン、ディグダである。

ディグダは穴を掘るのが得意で、今も穴を掘っていると云う。
恐らくその現場がここなのだろう。

「うおおおお！全速力で逃げろ！！」

全員、踵を返して全速力で走っていった。

そして、ここは洞窟の入り口付近。

ゼット達はかなり息を切らせているが、何とか逃げられたようだ。

「はあ、はあ、はあ…… やっと逃げられたぜ」

洞窟から出られたゼットはもう追っ手が来ない事を確認して、ようやく安心した。

「むむむ？君はあの洞窟に入ったのかい？」

聞き慣れない声が聞こえたので顔を上げたら、眼鏡を掛けた老人がいた。

「……どちら様で？」

「わしはゲンスイと言って、ポケモン研究者じゃ」

「ポケモン研究者？」

「そうじゃ。研究所そこに構えてあるから付いて来るがいい」

「はぁ……」

何となく付いて来たゼットは、その自称研究所に入ってしまった。

「ここ……どう見ても民家だよね？」

「そうじゃよ。ここで研究をやつとる」

「………で？俺に一体何の用？」

もういろいろ突っ込むのも面倒なのでゼットは敢えて無視した。

「君はあの洞窟に入ったのかい？」

「うん。まあ、ディグダの大群が来たせいで追い返されちゃったけど」

「そうか。今わしはあのディグダの研究をやっとる」

「ディグダの？」

「うむ。わしはもうディグダについては100%中、50%が分かった」

「50%？残りは？」

「わしが分かったのはディグダの技のキレ、日常、スピード、体重、その他能力値などなどじゃ」

「もう、全部分かってんじゃん。後50%って一体何なんだよ？」

「……ポケモン界最大の謎と言われている、ディグダの下半身じゃ」

「……下半身？」

ディグダの下半身と言えば、ポケモン史上最大の謎と言われている程だ。

今まで数々の研究者がこれを研究していったが、誰も分からずにディグダの研究は諦めたと言う。

噂ではディグダの下半身を見た者は呪い殺されるとか跡形も無く消え失せるとか、それに関して恐ろしい噂が絶えない。

だがそれに反してディグダの下半身の研究を希望する者も絶えない。人間、やってはいけない事はやってみたくなる物だ。

「わしはディグダの下半身の実体をポケモン学界に轟かすんじゃ！」

「やめた方がいい！夢を持つのはいい事だがそれだけはやめるのをオススメするぞ！落としたパンに買い手無しって言うじゃないか！」

ゼットは全力でゲンスイの野望を否定した。

確かにそれは最もだが、正しくは「触らぬ神に祟り無し」である。

「いいや！わしはやめん！誰も出来なかった研究をわしはやってみたいんじゃ！！」

「本気でやるつもりか？」

「本気ならばこんな事は言わん」

「……だったら俺も付いていく。爺さん1人じゃ危ないからな」

ゼットはゲンスイが本気だと分かって、ゼットはゲンスイがどこまでやれるかを見届ける事にした。

「元からそうさせるつもりじゃったわい。その為に君をここまで連れて来たのじゃからな」

「で、どうするんだ？」

「君に頼む事は一つ。ディグダを1匹捕まえてくれ」

「分かった」

再度、ゼットは洞窟……ディグダの穴に入っていた。

中には、ディグダが先程来た時以上に溜まっていた。

先程、ディグダの雪崩がこっちにやってきて休憩している、と言うところだ。

「おお。たくさんいるな。よし、あいつにしよう」

「グダ？」

「行けっ！モンスターボール！！」

ゼットは戦いもせずに、ディグダをモンスターボールに入れた。

「いきなりか？」

「ディグダグー！！」

「えええ！？小さいから直ぐに捕まると思ったのに！！」

「何を言つとる！小さくても小さくなくてもポケモンはポケモン！ダメージを与えずに捕まえられるわけないじゃろう！小童が！！」

「ぐっ……そ、そんなの知ってらあ！ええい！行けっ、ゼニガメ！！」

怒りと共にゼニガメを出した。ゼニガメは少し心配している。

「あ、安心しろ……お、俺は冷静だ」

「ゼニゼニ……（どう見ても冷静じゃないだろ……）」

ゼニガメはそんなゼットに呆れながらも、戦闘態勢に入った。

「ゼニガメ、『水鉄砲』!!」

ゼットは先制攻撃に出た。ディグダは穴に潜り、身を隠した。

「どこから出てくる……?」

その時、後ろからディグダが現れた。『穴を掘る』である。ゼットは空かさず、ゼニガメに指示を出す。

「しまった!ゼニガメ、『高速スピ……!」

しかし、ゼットが指示する前に攻撃が喰らい、宙に舞った。

「ゼニガメ!!」

「悔れんな……」

ゼニガメとディグダの相性の差のために、深いダメージは喰らわなかった。

しかし、状況は変わらない。

ディグダの攻撃は一体どこから出て来るのか、さっぱり分からない。

「次はどっちだ……?」

すると、不自然に土が盛り上がっていた。

「そこだ!『水の波動』!!」

水の波動により、ディグダは土に潜ったまま叩きつけられた。

「今だ！モンスターボール！！」

ゼットはディグダを素早く捕まえた。案外速く終わったようだ。

「よし、ディグダGET！！」

「ゼニガ！！」

「はい、爺さん」

「うむ、すまなかったな」

そして、ディグダをゲンスイ宅に持ち帰った。

「さて、出て来るんじゃない！ディグダ！！」

「ディグディグ」

「これで、わしの願いが実現する……！！」

ゲンスイは天にまで昇ったような顔をしながら泣いていた。

「ディグダ、ちょっと土から出てくれないかの？」

「ディグダ！！」

「俺も気になるぜ。一体どんな構造してんだか……」

そしてディグダは土から、その体を露にした。

「おお、光が見えるぞー!!」

「眩しいぜー!!」

そしてゼットとゲンスイが見たそれは……。

「……」

「……」

それは……。

「……」

「……」

それは……。

「……」

「……」

それは……!

「……」

「……」

それは………！！

「……………」
「……………」
そう、それは………！！

「……………」
「……………」
すると、何かの雑音が聞こえてくる………。

「……………」
「……………」
それはだんだん大きくなっていき………。

「……………」
「……………」
やがて雑音とは言えない程に大きくなっていくが、それにゼットと
ゲンスイは気づかない。

「……………」
「……………」

雑音の大きさは最高潮にまで達した。一体どこから出てくるのか……。

「……………!?」

「……………!?」

すると、どこからか声が聞こえてくる。

「では、皆さん一緒に！セーの……」

「ぎゃああああああああああああ……!!……!!……!!」

「うぎゃああああああああああああ……!!……!!……!!」

「ピカアアアアアアアアアア……!!……!!……!!」

「キュー……………ン……………!!……!!……!!」

「ゼニイイイイイイイイイイ……………!!……!!……!!」

この時に何があったのかは……ゼット達以外、誰も知らない。

そして、翌日が……。

「はぁぁぁ……もう朝か……」

「ピカ……」

「ワン……」

「ゼニ……」

全員、目に隈が出来て、かなりやつれていた。
昨日の事がとても恐ろしかったのだろう。

「君達……おはよう」

「爺さん……夢であって欲しかった……」

溜息を吐きながら、さらにやつれた。

昨夜の事を思い出すだけで震えが止まらない。主にゼットのポケモン達が。

同じポケモンでありながら、あのような恐ろしい存在を今まで知らなかったのだ。

無理も無い。

「ピ、ピカ……ピカチュウ……？（ま、まさか……お前達もあのような恐ろしい秘密を持つてるのか……？）」

「ワン！キュン、キューン！！ワン！ワン、ウォーン！（ふざけるな！あんな物がこの世に2つも存在して堪るか！！だいたい、ゼニガメ！お前がディグダと戦ったから悪いんだろ！！）」

「ゼニ！？ゼニ、ゼニガメ！ゼニ、ガメガメ！！（んだと！？俺のせいにするなよ！それに、ピカチュウが早くみたいって急かしたんじゃないか！！）」

「ピカ！？ピカチュウ！ピッカ、ピカピー、ピッカチュウ！！チュウ！？（何！？急かした程度で俺が全ての原因にされなければなら

ないのか！第一、急かしてたのはお前達も同じではないか！！元々、最初に言い出したのはゼットの筈だ！つまり原因はゼットにある！違うか！？）

「（そうだけど、それは一番言っちゃいけないよ！！）」

ガーディとゼニガメは、そのまんま言ってしまう、ピカチュウに突っ込んだ。

「ワン！ヴァン、ワンワン！ウォン、ワワンワン！ウォーン、キヤン！（大体、前から思ってたけどよ！ゼニガメ！お前、俺の性格と被ってるんだよ！絶対、態とだろ！？いい加減、言い方変えろよ！！）」

「ゼニガ！？ガメ、ゼニゼニガ！ゼニ！！（はあ！？今は関係ねえだろ！それに被ってるんのお前の方だろ！変えるのはお前だけで十分なんだよ！！）」

「ワンワン……ワン！キュンキュン、ワン、ウォン！？（これだから、新人は……いいか！人間の間に上下関係があるように、俺達の世界でもそれはある！お前は一番後に捕まえられたんだから、俺の後輩だ！つまり、先輩の言う事をちゃんと聞くべきなんだよ！分かったか！？）」

「ゼニイ？ゼニ、ゼニガ！！ガメ、ゼニ、ガメガ！！（先輩い？ハハハハ！お前が先輩だったら、絶対口クな事教えねえな！！）」

「ヴァン！？ワワン、グルルル……！！（何だと！？チビ亀がああ！！）」

「ゼニガ！？ガメエ……！！（やんのか！？犬公！！）」

「ピカ、ピカッチュウ……（全く、血の気の多い奴等だ……）」

ガーディとゼニガメは、互いに技を連発して戦い、それをピカチュウは呆れながら見る。

とうとう、ゼットの手持ち達の固く結ばれた友情の絆が破壊だけを繰り返して、ガラスが割れるかの如く輝を入れ、同時に滅びの道へ誘われる形となった。

「それにしても、朝っぱらから元気だな。お前等」

その原因が少し自分自身のせいでもあると言う事を、本人は知らない。

「昨日は……」

「ああああ！！それ以上言うな！！」

「ピカピ！！（思い出しまう！！）」

「ウォーン！！（やめてくれー！！）」

「ゼニガア！！（もう嫌だー！！！！）」

ゲンスイ以外全員、一致団結して全力で昨日と言う言葉を否定した。そのおかげか、絆が滅ぶ運命から何とか免れた。

「う、うむ。分かった……」

「やべえ、あの事を思い出しただけで身震いするぜ……」

「確かに……」

「……爺さん」

「……何じゃ？」

すると、ゼットはポツリと言い始めた。

「あのディグダ……爺さんにやるよ」

「……そうか」

「懷いてたし……。それに……」

するとゼットはハツとして口を塞いだ。

その時のゼットの顔は、青ざめていた。

余程、昨日の事が恐ろしかったのだろうか、これ以上言ったら死んでしまつても言つような心境だ。

「それじゃ……俺、ここを出るわ。爺さんにも世話になつたし」

「うむ。気をつけてな」

「じゃあな！爺さん！！」

「ピカピ！！」

「ワン！！」

「ゼニー!!」

すっかり元気を取り戻したゼット達は今日も元気な足取りで……。

「さてと、わしは昨日の残りの昼食を……」

『昨日』と言う単語を聞いた瞬間、ゼット達は石のように固まった。

「さ、さあ……ニビシティへ行こう……」

「ピッカ……」

「ワン……」

「ゼニガ……」

……今日は特別重い足取りで、ニビシティへ向かって行った。

第7話 「観光&探検シリーズ!」ニビシティ編」

ゼット達は草むらを掻き分け、時折出てくるポケモンと戦いながらニビシティを目指していた。

今の状況は正に最悪。

ガーディは毒状態になって体力も持ちそうに無い上に、ゼニガメは瀕死、ピカチュウも残り体力も殆ど無い。

ガーディの意向で自身にも出てもらっているが、これはかなりまずい。

モモンの実や毒消しで毒で瀕死は免れたものの、そろそろゼットもポケモンたちも限界に近づいていた。

「まずいな……。これ以上戦ったら、全員瀕死になっちまうー！」

「ピ……ピカア……」

「グ……ルルル……」

相手の野生ポケモンたちの数は総勢10体で、スパアー×3、トランセル×2、バタフリー×5と言う、正に森のポケモンたちのオールスターである。

何故この様なポケモン達がたくさん現れたのか？

それは最初にゼットが周りの木にたくさん引っ掛かっていた、モモンの実を取って食べようとしたら、いきなり森のオールスターたちが襲い掛かって来たのだ。

そう、ゼットがいたそこは偶然にも森のポケモンの縄張りで、偶然にもその時が森のポケモン達の食事会で、偶然にもゼットが恰好の的となるモモンの実を食べてしまったと言う訳だ。

最初30体だったが、20体連続で戦って倒し、残ったのがこのポケモン達である。

「ガーディはトランセルに『火の粉』！ピカチュウはスピアーに『10万ボルト』！！」

今の攻撃で、トランセル2体とスピアー2体がダウンした。残り6体である。

「フリィー！！」

「！！……待つてたぜ！その『風起こし』もらったあ！！ガーディあの『風起こし』に連続で『火の粉』だ！！」

指示通り、ガーディは火の粉を放った。

最初、火の粉は消えてしまいが、どんどん発火し、火は炎になって風起こしを跳ね返した。

バタフリー達が起こした風起こしの中に、粉が入っていたのがどうやら火元であった。

「行けえ！『火炎放射』もどき！！」

その火炎放射もどきはバタフリー3体を倒した。効果抜群である。しかし、その油断が隙となった。

「しまった！スピアーだ！！」

そうスピアーである。高速で移動し、隙の出たピカチュウに『追い討ち』をした。

「ピッカア……！！」

「ピカチュウ！！ガーディ、援護だ！『火の粉』！！」

ガーディはスピアを逃さず、火の粉で倒した。残りはバタフリーだけとなった。

「大丈夫か？ピカチュウ？」

「ピカ……」

「無理すんなよ。ガーディ、行くぞ！！」

「ワン！！」

「フリーー！！！！」

バタフリーは『毒の粉』を2体全員で出してきた。じりじりと毒の粉はガーディに近づいていく。

「焼き払え！『火の粉』！！」

毒の粉は火の粉で焼き払われ、地面に消えた。

「そのまま、『炎の牙』！！」

さらに炎の牙で攻撃し、1体を倒した。その瞬間、もう1体がガーディを攻めてきた。ガーディはもう動けそうに無い。

「『10万ボルト』！！」

バタフリーは、予想外な事に咄嗟な判断が出来なかった。
そして、ピカチュウの電撃を諸に浴びてダウンした。

「ふう……。よくやったなお前ら。もう休んでいいぞ」

そして、2体を戻した。そして目の前を見ると、広大な街があった。

「おおっ！ニビシティだ！！」

そう、悪戦苦闘している内に最初のジムがある、ニビシティに着いてしまったのだ。

「長い道のりだったぜ。ここまで来るのに……」

思い出せば激闘の道だった。

最初はガーディと戦い、初のポケモンバトル＆GETし……。

冒険の開始早々、凄腕のポケモントレーナーとして持て囃されて、記者達に追いかかれ……。

いきなり、エックスと言う激強のポケモントレーナーと戦い、引き分け……。

悲鳴を聞いて、その後を追い、トキワの森で科学者のフィシアと言う女性が黒服の男2人に襲われてるのを見掛け、助けに行き、黒服の男たちを倒し、フィシアとエックスと別れた直後にまた悲鳴……。今度はゼニガメと言うポケモンが出していた悲鳴で、フシギソウ3体に挑んで、死闘の末に勝ち、ゼニガメをGETし……。

デイグダの下半身を世に発表すると言うゲンスイと言う老人と共に、デイグダの下半身を見てトラウマになりながらも先に進み……。

正にバトル、バトル、バトルのオンパレードだった。

そしてようやくポケモントレーナーの最初の関門に着いたのだ。

「まあ、まずはポケモンセンターに直行だな！」

ゼットはポケモンセンターに向かっていった。

ゼットはポケモンセンターに辿り着き、直ぐにジョーイさんの所へ向かっていった。

「お願いしまーす」

「はい。分かりました。……あら！酷い怪我！一体どうしたの！？」

「ここに辿り着く前に森のポケモンたちに30体くらいに襲われて……」

それはもちろん森のオールスターである。

「30！？それで勝ったの！？」

「ええ……それで皆倒れちゃって……」

「そう……大変だったのね。ポケモンたちは1日経てば治るわ。あなたも体を休めなさい」

「いや、俺はいいです。ちょっとぶらついて来ます」

そう言うと、ゼットは小走りでポケモンセンターを出て行った。

「あ！ちょっとー！！」

ゼットはジョーイさんの話を聞かずにどこかに行ってしまった。

「第1回観光&探検シリーズ！ in ニビシティ！！」

……と乗り気で言い始めた。

観光&探検シリーズとは、ゼットが冒険し始めたらやるつもりだった企画である。

内容は……単なるぶらつきながらの観光だったりする。

「まあ、まず最初はニビ博物館だな。レッツゴー！！」

ゼットは意気揚揚と進んで行った。

ここ、ニビ博物館は大昔の化石や古文書などを展示する場所である。

「すげえ！」

今見ているのはシンオウの神話伝説である。

ミオの図書館からコピーした物を移動された。

「『ルビー』？」

『ルビー』……宝石として価値が高く、紅色に輝き美しい。

「こっちは『サファイア』？」

『サファイア』……こちら価値が高く、藍色に輝きこれまた美しい。

「何か2つ共、何か似てるような……？」

この2つは元々ナナシマで見つかった物である。
似ていると言えば形だろう。すると、またゼットは何かを見つけた。

「大昔の化石？つか、化石の説明がねえじゃねーか」

大昔の化石と言うのは、近くのお月見山で掘り出した『甲羅の化石』や『貝の化石』、『秘密の琥珀』などである。

あの中には、大昔のポケモンが眠っており、グレンのポケモン研究所などで復活させる事が出来る。

「お、あれは……！！」

スピーカーから説明が流れてきた。今一番のニビ博物館の目玉がある。それは……。

『その名も『メタルデイベイド』！当博物館の目玉となっております！シロガネ山の奥底から発掘された、未知の成分が大量に入っている謎の貴重な石なのです！』

今はその石の成分が何なのか……全くの謎だが、いつか解明される事だろう。

今の科学はそこまで柔じゃない。

「さあ、次行こう！！」

次は……餌やりである。ここには鳥達が多く飛んでくる絶好のスポットがある。

いろいろな鳥ポケモン達がこれを狙って降り立つ。

「ポッポー」

「クルックル」

「ホー……ホー……」

「スバスバ」

ポツポはもちろん、夜行性のホーホー、オニスズメ、スバメ、ムツクル……。
他にもいる。オオスバメ、ヨルノズク、ペリッパー、たまにピジョット……。

「スッバーー！」

「ピジョットー……！」

「ピジョン、サンダー、ムクバード、オニドリル、フリーザー、スピアー、ファイアー、キャモメ、ムクホーク……とかいろいろ来るぜ！」

……気のせいだろうか。ここには絶対に出てこないはずの言葉が約3つ聞こえたような気がする。

取り合えず、聞き流しておこう。いろいろなポケモン達が来ると言う事である。

「さて、次へ行こう！！」

次は花畑である。

シンオウにあるソノオの花畑よりもずっと見劣りするがこれはこれで美しい。

「まあ、綺麗って言っちゃあ綺麗だな」

「あら、あなたこの花畑を誉めてくださるの？」

この人はこの花全てを育てた女性である。通称「花畑のお姉さん」。

「ええ。いいと思いますよ」

「そうなの？じゃあ花について一緒に語りましょう！」

「え？」

「さあさあー！」

「え、いや別に俺はいい……」

「まずいいのは、この『グラシデアの花』なのよ！シンオウでしか取れない貴重な花だね……」

それから一時間ぐらいたっただろうか……………。

花畑のお姉さんは自分の花畑を誉められると、すぐに花について延々と語るので、誰も近づけない。

「ああ、酷い目にあった……。さ、最後行こう」

最後は何と言ってもポケモンジムである。

ニビシティのニビジムは、岩タイプのエキスパートで、有名なジムである。

最初のジムと言っても侮る事は出来ない。その理由はジムリーダーがかなり強いからだ。

おすすめレベルは20以上。でなければ確実にやられる。

「最初のジムか……よし、行くぞ！みんな……あ、そっか今はポケモンセンターで休んでるんだっけ」

ジョーイさんによれば、最低でも1日休まなければ完全回復する事は出来ないらしい。

「仕方無い。取り合えず、中だけ見とくか」

大きい扉を開けて中に入ってみると少し暗かった。

「お邪魔しまーす！」

すると奥から誰かが歩み寄ってきた。

「君は挑戦者かい？」

「そのつもりだったけど、今はポケモン達がセンターにいるから見学させてもらっていい？」

「構わないよ」

「よっしゃー！」

ゼットはとても喜んだ。

一応、最初にバトルフィールドを見ておいた方が作戦も練りやすいだろう。

「あ、ところで……あんたがここのジムリーダー？」

ゼットは恐る恐る聞いてみた。

「いやいや、僕はここの見習いだよ。テツマさんは向こうにいるから」

「テツマ？」

テツマとはニビシティジムリーダーの事である。

岩タイプ専門だが、最近になってテツマの手持ちの1体が進化してしまつて、専門外のタイプのポケモンになってしまったと言う。

「テツマってどんな奴なんだ？」

「物凄く強くて、挑戦者達を滅多滅多と倒してるんだ!!」

「すっげえ!!」

こう言う事にはすぐに本当だと思つてしまつゼットであつた。

「それで!!?それで何なんだ!!?」

「ポケモン達も良く鍛えられてて、もう凄いんだ!!」

「余計戦いたくなつてきたぜ!そのテツマとやらと!!」

「でしょ!?!」

もはや意気投合してしまつている2人であつた。
ゼットはかなり燃えている。燃え尽きなけばいいが。

「ここがバトルフィールドだよ」

「へえ、広えなあ」

横10m、縦7m、高さ13mとかなり大きい。

「ちょっと見てっついていいか？」

「どうぞ」

ゼットは辺りを見ていった。

このニビジムのバトルフィールドには、岩石がいくつか置いてあり、地形は砂場と言う、正に岩タイプのジムに相応しいフィールドである。

しかし、一つ気になるのが、このフィールドの周りの壁にくっ付いている、大きな長い鉄心である。

「なあ、この棒って、何のためにあるんだ？」

「ふふふ、それは秘密だよ。でも、敢えてヒントを言えば、テツマさんの切り札であるポケモンが進化してからこれが造られたんだ。この棒が殆ど負け無しの強さの秘密と言っても過言でも無いからね」

「負け無し！？このジムリーダーって、殆ど負けた事ないのか！？」

「進化してからね。まあ2人ぐらいには負けただけどそれ以降は全く負けてないんだ。強さの秘密は単に進化したからだけじゃないって事さ」

ゼットは負け無しのジムリーダーと言っ、驚愕の事実を知ってしまった。

そして、その強さの秘密がこの周りの鉄心にあると言っ事だ。

「負け無し……か……」

夜になり、ゼットはジムから出て、ニビシティをぶらついていた。
ジムにあったあの鉄心にどうも引っ掛かるらしい。

「あれが強さの秘密……？どうするってんだよあんなの……」

すると、何か物々言っている人がいた。
その人の目線の先にはイチヤつくカップルがいた。

「ったく、何なんだよあいつら。見せ付けやがって」

単なる妬みであった。独身の男性と言う事が分かる。

「引っ付いたり、離れたり……訳が分からねえな」

「どう言う事？」

ゼットは男性に聞いてみた。

「ん？ああ、あのカップルがすぐに引っ付いたり、離れたりするか
変だと思ってな」

「引っ付いたり……離れたり……」

「最近の若者は何考えてんだか」

男性はどこかへ行ってしまった。

『引っ付いたり、離れたり……訳が分からねえな』

ゼットの頭の中では、この言葉が何度もリピート再生されていた。

「……そうか、そうだったんだ！だから負け無しかったんだ！！」

ゼットは何かに気が付いた。

「全て分かったぜ。あの鉄心の意味も、切り札のポケモンも……！」

すると、ゼットは意気揚揚とポケモンセンターに向かっていった。

「そうと分かったら、こつちのもんだぜ！！！」

そしてポケモンセンターに入ってしまった。

待っていたのは元気になったピカチュウ、ガーディ、ゼニガメだった。

そしてもう1つ待っていたのは……ジョーイさんの説教だった。

「ふぁぁ………良く寝たぜ………」

「ピカ………」

「ワン………」

「ゼ………」

朝早く起きたせいか、目が寝惚けているようだ。

「昨日考えた対抗策は……どれもこれも実戦向きじゃねえし、使えないのばかりだ」

対抗策とはもちろん、ジム戦の際の作戦である。
結局浮かばなかったと言う事だ。

「まあ、その時にパツと浮かぶだろ」

そんな簡単に浮かび上がるものではないが……。

「準備、準備つと……」

ゼットはいつもの白い服を着て、トレードマークの赤帽子を被って、バッグを背負った。

「よし！行くぞ！！」

「ピッカ！！」

「ワン！！」

「ゼニ！！」

ゼット達はポケモンセンターを後にし、ニビジムを目指していった。

第8話 「く番外編く とある一日」

これはゼットのニビジム戦から、一昨日前の話である。

つまり、ゼットがニビシティのいろいろな場所を回って、丁度街を探検している頃であつた。

ここは近くのハナダシティを一望出来て、昼寝には持つて来いの丘。ハナダシティとは、水タイプ専門の2つ目のジムがある場所である。

「……話には聞いてはいたが、まさかこれ程とはな」

少年は落胆した様子で、街の荒れ果てた川の跡を見て、ふと呟く。

「ここがあゝの脱水の街、ハナダシティ……」

ハナダシティ……そこは水の欠片も無い、干ばつの街であつた。

「街」、と表記するのはおかしいだろうがここは嘗て、「水の街」と呼ばれた程に水が盛んであつた。

しかし、ある時を堺にこの街から水が全て消えてしまった。

その理由は何者かにより、一夜にしてダムを建てられ、水を塞き止められてしまったからだ。

ダムの内部は無人で、ダムのスイッチが「閉」になつたまま、修復が不可能な程に破壊されて、誰もいじられなかったと言う。

「街」と呼ばれる理由は、水の都だった時の技術力が残つて、まだ街と言える状態であつたからである。

だが、それも長くは持たない。

いずれは、脱水症で命に関わる事にまでなる。

現在、このジムリーダーがダムの穴を開けようとしているが、びくともしないと云う。

「このジムリーダーのタイプは水か……。今では、街と全く合わないタイプだな」

少年はそう言いながら、ハナダシティへ向かって行った。

ハナダシティを歩いてみると、少女がサイクリングロードの目の前で立ち止まっていた。

因みに20年前では、サイクリングロードはタマムシシティの方ではなく、ハナダシティ南にあったと言う設定になっている。

「……何だ？」

「プリン……」

少女はそう言ったまま、サイクリングロードを見ていた。
いや、その先までも見ていた様な気がした。

まるで何かを待っているかのように、少女は悲しい目で見ていた。

「うわー！ブレーキが聞かない！！止まれーっ！！」

すると、向こうから自転車に乗った人間がやってきた。
ブレーキが壊れたらしい。

「あ、危ない！退いてくれ！！」

自転車に乗った男性が少女に声を掛けるが、少女は足が竦んで動かなかった。

このままでは確実にぶつかるだろう。

「だ、誰か……助けて……！」

「ヘルガー！」

すると、少年はモンスターボールからヘルガーを取り出し、少女を助けた。

「誰か止めてくれー!!」

「シードラ、『竜巻』！」

さらにシードラを出し、竜巻で自転車の動きを止めた。

「はあ、はあ、助かったー！」

「うっ、うっ……プリン……」

すると、少年は少女に近寄った。

少年は少なからず、少女に疑念を抱いていた。

サイクリングロードの出入り口などにいたら、今のように自転車にぶつかるとは思えない。

それなのに何故その少女はそこにいたのか？そこにいなければならぬのか、そんな事すら頭に入っていなかったのか……。

「何故あんなところにいた？」

「そ、それは……プリンが……」

「……プリン？」

プリン……とはノーマルタイプの風船ポケモンで、円らな瞳が揺れる時、誰もが眠ってしまう、子守唄を歌い始めると言われる（ダイヤモンドパールのポケモン図鑑より）

「うん……プリンは私の唯一のパートナーで、いつも私の傍にいてくれたの。でも、1週間前に私とママが喧嘩した時、急にプリンがいなくなっちゃって……。私に愛想尽かしたのかな……？」

「それはないな。パートナーポケモンが自分の主人から勝手に離れる事はない。いつも一緒だったのなら尚更だ。警察には言ったのか？」

「言ったよ。1週間ぐらい探してくれたけど、どこにもいなかったの……」

「……サイクリングロードに行っただんな？」

少年は見透かしたような顔をして少女を見た。

「な、何でそれを知ってるの!？」

「何故かお前がサイクリングロードの方ばかりを見ていたからだ」

「それだけで!？」

「……それだけで十分だろう。じゃあな」

少年は少女から去っていった。いや、去ろうとした。少女に服を捕まれ、離そうとはしなかった。

「お願い！お兄ちゃん、プリンを探して！！」

「……何故、俺がそんな事をしなければならぬ？」

「お兄ちゃんポケモントレーナーでしょ？お回りさんも持つてるけど、全然強くないし……」

この街は脱水になってから、トレーナー技術が育たなくなり、強いトレーナーがいなくなった。

ジムリーダーは、出張で現在この街にはいないので、強いトレーナーは1人もいない。

「自分のポケモンぐらい自分で取って来い。お前のパートナーだろう」

「でも、あそこには強いレアコイルが……」

「……………」

「お願い！水ならあげるから！お金でもいいよ！！」

必死で少女は少年にしがみ付く。

余程、プリンを大事にしていたのだろう。

少年は黙って自分に縋る少女を見つめるが、溜息を吐いた後、仕方無いと言った感じで少女に言った。

「……ならば、ここのジムリーダーが帰ってくる時間を教えろ。それでいいだろう」

「本当！？それだけでいいの！？やったあ！あ、私カレンって言うの。よろしくお兄ちゃん！」

「ちょっと待ったあ！！」

すると、さっきの自転車の男性がやってきた。

「あ、さっきの自転車のお兄ちゃん！」

「さっきは危ない目に合わせてすまなかったねお嬢ちゃん。お詫びに俺も連れてつてくれねーか？」

「……足手まといが増えるだけだ」

少年は無表情で冷たい言葉を発する。

「まあ、そう言うなって！俺だってポケモンぐらい持つてるさ！！」

「よろしくね！自転車のお兄ちゃん！」

「『自転車のお兄ちゃん』じゃなくて、おれはコウヘイだ！」

「待て！まだいいとは……はあ……」

勝手に話が進む事に呆れる少年であった。

「どづしたの？」

「……………」

もう、何を言っても無駄と思い、少年は黙ったままサイクリングロードへ進んで行った。

「ここがサイクリングロードの真裏か」

「ここは裏通路、って呼ばれてるの」

「まっ、基本ここはポケモン達の無法地帯だからさ、この通路を通る殆どは自転車を買えなかったトレーナーなんだよ」

裏通路とは、サイクリングロードの真下に広がる、舗装整備のされていない道路の事である。

そのあまりの凸凹さのためか、番号道路に指定されていない。

そのため、人の手が及ばずに次々とポケモンが増えていき、そのポケモン達の統率者と呼ばれる者が現れた。

「それが裏通路か」

「そうよ。で、その統率者が、さっき言ったレアコイルなの」

「そいつはどこだ？」

「あそこ」

カレンが指を指した先には当のレアコイルがいた。
レアコイルは、物凄い形相でこちらを睨んでくる。

少年達がここに来る事を前以て知っていたのだろうか。

何故かは不明だが、縄張りに入られた事に対してレアコイルは少年達に敵意を向けていた。

「すぐ近くにいたのか……」

「ビビビ！ー！」

すると、レアコイルが少年に向かって電撃を放ってきた。
10万ボルトである。

レアコイル縄張りに入った事に相当怒っているようだ。

少年は軽くそれを避けて、カレンはコウヘイの助けによって無事だった。

少年は腰から1つのモンスターボールを取り出した。

「ヘルガー、『炎の牙』」

そう、ヘルガーである。

一気にボールから飛び出し、炎の牙で先制しようとするが、レアコイルは素早く避け、10万ボルトの充填を始めた。

「ヘルガー、砂をかける」

ヘルガーは、地面の砂をレアコイルにかけた。『砂かけ』が出来なくても、地面の砂をかける事は誰にでも出来る。

レアコイルに当たり、目を晦まして、10万ボルトの充填を中断させた。

「す、すい……」

「よし、行けるぞ！」

「……………」

しかし、レアコイルは、攻撃をやめない。

レアコイルは無差別に、『マグネットボム』を出し続け、しばらくした後、攻撃をすっかりやめてしまった。

一見、その無差別な攻撃にエックスは顔を顰める。

「……………！下がれ、ヘルガー！」

「え？何で？」

「さ、さあ……………」

先程、無差別に攻撃し、散らばったマグネットボムは、そのまま留まっていた。

そして、砂の入った目でそれを何とか確認すると、今度は何かを出し始めた。

「ヘルガー、木の上に隠れろ！！」

『超音波』である。

超音波はレアコイルから発され、マグネットボムに当たった。レアコイルの狙いはそれであった。

「うわゝ！何だよこれゝ！！」

「レアコイルの『超音波』だよ！！」

コウヘイとカレンはクラクラしながら、ヘルガーとレアコイルの攻防を見守っていた。

「全体攻撃か…………」

レアコイルの行動はこうだった。
まず、マグネットボムを無差別に乱射し、そこにマグネットボムを留まらせる。

次に、何とか覚めてきた目で全てのマグネットボムの位置を確認し、超音波を発生させ、留まらせていたマグネットボムに超音波を当てて、その後、全ての超音波を全てのマグネットボムに当て反響させる、それがレアコイルの狙いだった。

すると、超音波は全体に広がり、どのポケモンも混乱してしまい、そのおかげで隙が出来る。

混乱していた、その隙を狙って攻撃する……………筈であった。

「…………残念だったな。ヘルガーは木の上に移動させた」

「ビビ…………」

「お兄ちゃんすごい！」

「まさか、あれが来るのを分かってたなんて！」

「（奴等との戦い以降、割に合わんが俺は修行したからな…………）」

少年は黒服の男達を思い出す。

少年はその時の事を考えると、とても不快な気持ちになる。

「ちっ……………」

出来れば今すぐにも黒服の男達を地の果てまでも追いかけて倒したいが、今の力では到底、力不足だと言う事を別の少年と戦った時に痛感していた。

今はまだ駄目だ……と、少年は歯を噛み締め、自分に言い聞かせた。憎しみに満ちた気持ちを抑えながら。

「（今はバトルに集中しなければ……）」

「ビビビ！！」

またレアコイルが動き出した。レアコイルはヘルガーに電磁波を浴びさせた。

よって、麻痺になり、素早さが遅くなった。

「『炎の牙』！」

しかし、出ない。麻痺のせいで技が出し難くなったのだ。

さらにヘルガーは10万ボルトを喰らい、吹っ飛ばされた。

レアコイルはヘルガーにじりじりと迫る。

しかし、少年は無表情でレアコイルを睨む。

「あ、危ないぞー！！」

「ヘルガー、『影分身』！」

すると、ヘルガーは影分身を作り、どこにいるのか分からなくした。

「ビビビ！？」

レアコイルも混乱し、ヘルガーを探していた。

「ど、どこー！？」

「全然分からねえ!!」

「状態異常の際に、技の威力が2倍になる技を知っているか？」

「技が……2倍に……？」

すると、ヘルガーの影分身は止まり、レアコイルの背後にヘルガーが迫っていた。

「ヘルガー、『空元氣』！」

レアコイルはヘルガーの高威力の打撃を受け、吹っ飛ばされた。状態異常時に、技の威力が2倍になる技、空元氣……鋼タイプでありながら、その威力にレアコイルは意識までも吹っ飛びそうになる。

「『秘密の力』！」

態勢を立て直そうとしたレアコイルは、さらなる追撃を受けた。しかし、今回の場合は全く違う。

「眠った!？」

「な、何で!？」

「『秘密の力』は地形によって威力が変わる技だ。ここは草むら、つまり眠りの効果を与える訳だ」

レアコイルはやはり眠り状態になっており、動かなかった。

「チェックメイトだな。『炎の牙』!!」

炎の牙を喰らって、相性の差もあったのか、レアコイルはダウンした。

「す……すごい！あのレアコイルを倒すなんて！！」

「全くだぜ！これならジムリーダーも楽勝じゃないか？」

「絶対そつだよ！お兄ちゃんならいけるよ！！」

「……ところで、本題に行かないのか？」

本題……とは、プリン探しの事である。その為に態々、ここまで来たのだ。

「それなら大丈夫だよ！ほら、あそこに！！」

「プリプリ」

上空にはそのプリンが飛んでいた。

そして、ゆっくりと降りてきて、カレンに飛び込んでいった。

「大丈夫だった？プリン？」

「プリ」

「でも、何でプリンは私から離れていったのかしら？」

「それは恐らく……」

少年の目線の先にはプリンの持っていた、アジサイの花があった。

「こ、これって、私とお母さんとプリンと一緒に植えた、あのアジサイ!？」

「それは裏通路にしか存在しない花だ。そいつはそれを取りに行くためにサイクリングロードに飛んで行ったのだろう」

「私とお母さんのために……ありがとう!プリン!」

「プリ!」

「それと、ありがとう!お兄ちゃんたち!」

カレンはプリンに抱き付き、少年とコウヘイにお礼を言った。

「……約束だ。ジムリーダーはいつ来る?」

「明日の午後だよ」

「そうか。じゃあな」

少年は立ち去ろうとしたが、サクラに呼び止められた。

「待って!」

「……何だ?」

「お兄ちゃんの名前、まだ聞いてないの!」

「そう言えば、俺も聞いてないぞ？」

「だから何だ？」

「名前を教えて!!」

暫く黙るが、少年はその名を口に出した。

「……エックスだ」

そう言つてエックスはハナダシティへ帰っていった。
エックスの旅はまだまだ続く……………。

第9話 「ニビジム戦ーゼットvsデシマー!」〔前編〕

ここはニビシティ。岩の観光名所として有名である。現在、早朝で霧が濃い。

それは、近くにオツキミ山と呼ばれる、化石などが豊富に取れる大きな山があるからだ。

そんな中、ジムを探しながら一人の少年が走っていた。

「霧が濃くてよく見えねえ!!」

「ピカ……」

「ワン……」

「ゼニ……」

「これじゃあ全然、先に進めねえじゃねえか!!」

ゼット達はポケモンセンターを出てからジムを目指して進んでいたのだが、とても霧が濃く、前がほとんど見えずに迷っていた。

看板にも、「早朝はこの街の住民以外出歩くな」と書いてあったのだが、ゼットはそれを完全に無視し、出てしまったのであった。

「あれから30分くらい経ったが……もうそろそろ着いていい頃だろ？」

「ピカピ」

「ワン」

「ゼゼゼ」

「何でジムが見つからねえんだ!？」

いくら霧が濃いからと言っても、全く見えない訳じゃない。

微かに見えるその場所の目印を頼りに、ジムのルートへ進んで行つたのだが、ジムに着いたと思った途端、見えたのはジムの門前ではなく、丸い形の施設と、看板に光るネオン……つまり、ポケモンセンターに着いてしまったのである。

つまり、ジムに行こうとしたら何故か、ポケモンセンターに着いてしまったと言う事である。

これぞ、ニビシティ七不思議の一つ……「早朝のループ現象」である。

「これじゃあ、いつまで経ってもジムに行けねえよ!!」

すると、見えないところから扉が出てきて、ゼットは一瞬びつくりしたがそこから出てきた人物を見て冷静になる。

「あれ?君は……」

「ん?あんたは確か、ニビジムにいた……」

「審判だよ」

「審判?あんたここの見習いじゃなかったっけ?」

「僕のやりたい仕事は審判だからね。バトルの腕は見習いだけど…

…言ってなかった？」

審判をずっとやっててもバトルに関しては見習いの見習い。初心者である。強ち間違っではない。

「挑戦しに来たんでしょ？ポケモンも連れてるし」

「ああ。ジムに挑戦出来るぜ！」

「さあ、入った入った」

「行くぞ！お前等！！」

「ピカ！」

「ワン！」

「ゼニ！」

ゼットはジムの中に入っていった。これが最初のジム戦会場である。天井に光るライトがゼット達やバトルフィールドを照らし、より一層緊張感を沸かせる。

しかし、当の本人は緊張感なんて微塵も感じてはいない……寧ろ初めてここに来た時よりもワクワク感が強くなっている。

「ジムリーダーはどこだああ！」

「ここだああ！！」

すると、ジムに響く大きな声がした。

その声の主は腕を組み、バトルフィールドの相手の席に立っている。

「あんたがここのジムリーダーか!？」

「そうだ！俺がここのジムリーダーのテツマだ！しかし、戦う前から手の内を見せるとは、良い度胸をしているじゃないか!！」

「……あ」

そう、ジムをする事で頭がいっぱいで、ポケモン達を露にしたまま、ここへ来てしまったのである。

ポケモンバトルの世界では、戦う前から相手に手持ちのポケモンを全て見せる事は相手に対する侮辱、或いは挑発行為とみなされる。なので、この行為は現在ルール違反になっている。

ゼットはその事を全く以って知らなかったのだ。

「ならば、変わりにこっちも教えておこう」

「何を？」

「俺のイシツブテは普通のイシツブテより特別堅いが、地面タイプを持ち合わせていないと言う、珍種なんだ」

「じゃあ、俺のピカチュウでもダメージを与えられるわけだな。これはいい情報をもらったぜ!」

つまり、イシツブテの時はピカチュウでも普通に戦えると言う事である。

話を終えた後、ゼットとテツマはポケモンをモンスターボールに戻し、審判は旗を持って審判席に戻った。

「これより、ニビシティジム戦を始めます。使用ポケモンは3体のシングルバトルです。まずは挑戦者、マサラタウンのゼット!」

「おう!!」

「そしてジムリーダー、テツマ!」

「かかって来い!!」

「それでは、試合開始!!」

旗を上げると共に試合が開始された。

2人は素早くモンスターボールに手を取り、ボールを投げた。

ゼットはピカチュウを、テツマはイシツブテをそれぞれ出した。最初に先制したのはテツマの方だった。

「イシツブテ、『岩落とし』!!」

イシツブテは岩落としでピカチュウの態勢を崩そうとしたが、軽く避けられてしまう。

「『10万ボルト』!!」

激しい電撃が、イシツブテを襲おうとしたが、直前で体を逸らし、避けられてしまった。

「中々やるな!」

「あんたもな!」

「だが、そうも言ってられないぞ！『泥遊び』！！」

すると、イシツブテは泥を盛り上げ、辺りに撒き散らした。途端にピカチュウは嫌な顔をし、後ろにバックステップで下がった。

「これで電気技の威力は下がった！さあ、どうする！？」

「だからどうした！ピカチュウ、『10万ボルト』！！」

10万ボルトは威力が下がったのにも関わらず、速さは変わらなかった。

すっかり油断していたテツマはイシツブテに指示するのが遅れてしまい、10万ボルトをもろに喰らってしまった。

「ちっ……！『マグニチュード』！！」

「うわっ！まずい！！鉄心に掴まれ！！」

ピカチュウは壁に取り付けられている鉄心に掴まり、マグニチュードから逃れた。

マグニチュードは1～10までの10段階の威力があり、それはラ ندムで決まる。
今のは7である。

「あつぶねえ……。大丈夫か？ピカチュウ？」

「ピ、ピカ……」

「電気タイプに地面タイプはかなり不味いからな。気をつけよう」

「『岩落とし』――!」

そう言っている間に次の攻撃がやってきた。

今度は岩の数も多く、速い速度で落ちてきた。

「（上空から落とされてるって事はイシツブテはまだ上にいるはずだ!）岩を伝って、上に行け――!」

ゼットの指示通り、ピカチュウは落とされて来る岩を踏み台にし、
どんどん上へ登っていった。

「よし!そのまま『10万ボルト』……」

しかし、イシツブテはどこにも居らず、岩はどんどん下がっていく。

「いない……!?!」

「どこを見ているんだ?」

「ま、まさか……!?!」

そう、それはすぐそこにいた。ピカチュウの足元に。

今まで岩だと思っていたそれは急に動き出し、その側面から両手が出て、ピカチュウの足を掴んだ。

そして、両手を下ろし、ピカチュウの両手と腹部を自身と完全に密着させた。

「しまった!イシツブテだ!ピカチュウ!すぐそこから離れろ――!」

「ピ……カ……!!」

しかし、ピカチュウは離れようにも、自分より腕力のあるイシツブテから逃れられる訳がない。

「そうだ！電撃で離れる！汗で電気がかなり通るはずだ！」

が、電撃をしてもイシツブテは全く離れず、腕力も弱まってない。何度やっても同じで、全く腕は緩まない。

しかし、それはイシツブテの身体を見る事で分かった。

「泥を身体に塗りたくって電気の威力を完全に抑えたって言うのか！？」

「そうだ！『泥遊び』をした上で、さらに身体に泥を付ける事で、電気技の威力を半分の半分にする事が出来たのだ！」

中々、ピカチュウはイシツブテからの拘束に逃れられず、もう地面の近くまで来てしまっていた。

「や、やばい!!」

「そろそろ終わりだ！『マグニチュード』!!」

『地球投げ』のように地面に叩きつけられ、強い衝撃を受けたピカチュウは、大きなダメージを喰らった。

「ピカチュウーッ!!」

「勝負ありだ……な……？」

テツマは驚愕した。そう、ピカチュウはまだ戦闘不能になってはいなかったのだ。

「あれだけの攻撃を受けながら……まだ立てるとでも言うのか!」

「ピカチュウ……! よーし! 行くぞ!」

「ピッカ!」

「ふっふっふ……気に入ったぞ! その根性! イシツブテ、『マグニチュード』!」

「鉄心に捕まって避ける! そして、鉄心の上を『電光石火』で走り回れ!」

イシツブテはマグニチュードを起こし、バトルフィールドを揺らす。ピカチュウはゼットの指示通り、鉄心に捕まって直撃を避け、そして無意味に電光石火を使って鉄心の上を走り回る。

「一体何を……?」

「『影分身』!」

そして影分身で、影を何体も作った。すると、ピカチュウが電光石火で走り回る姿が影分身で作られていた。

「何!?? どこだ!??」

「『影分身』にはこう言う使い方もあるんだよ!!」

しかし、テツマ達はどれがどれだか分からない。
本物は1体だけで、それ以外が影分身。
動き回るので、見つけるのは困難だろう。

そして、イシツブテは相手がどこから来るか見ようとバトルフィールドの中心に行った。

だが、それがゼットの狙いだった。

「こんな事をして何の意味があるんだ?ん?待てよ……まさか、これは相手の注意を引く為のフェイク!だとすると本当の狙いは……!避ける!イシツブテ!!」

「もう遅いぜ!『10万ボルト』!!」

ゼットの作戦はこうだった。

まずピカチュウを電光石火の速さで鉄心の上を走り回らせ、何週かしたら影分身の応用でたくさんのピカチュウが走っている姿を相手に見せ、その影分身の中に本物がいると言う先入観を持たせ、テツマが影分身の中を探している内に、無防備な状態になっているイシツブテを相手に気づかれずに近づいて、電撃を喰らわせると言う大掛かりな物である。

結果として、既にピカチュウはイシツブテを捉えていた。

そして10万ボルトを直撃で喰らってしまった。

「しまった!」

「よし!このまま、『電光石火』で……!!」

「地面の砂を掛ける!!」

イシツブテは砂でピカチュウの目を眩ませた。

「ピカチュウ！」

「『岩落とし』！」

イシツブテは岩を落とし、それをピカチュウにぶつけた。
ピカチュウは後方に吹き飛び、壁の鉄心にぶつかった。
イシツブテも後ろの鉄心に凭れ掛かった。

「（ん？　そっぴや鉄心って鉄で出来てるんだよね……　１度しかチャ
ンスは無いが、いける！！）」

「どうした？　もう終わりか？」

「いや……　まだ終わってねえよ！　『１０万ボルト』！！」

「今のピカチュウに、５ｍ以上離れたイシツブテに攻撃を当てられ
る訳が……」

しかし、イシツブテは攻撃を喰らった。だが、電撃はこちらには飛
んで来ていない。

「まさか……　鉄心を伝って！？」

「行っけええっ！！」

そして爆発が起き、イシツブテはこちらに飛んできた。
しかし、もう攻撃出来る状態ではない。

「よし！まずは1勝……」

ゼットは、そう喜んでいたのも束の間、その表情は喜びから驚きに変わった。

何とイシツブテはピカチュウの右足を掴み、さらに左足を掴んだのだ。

「いまさら何を……！？」

すると、急にイシツブテの身体が光り出した。

その光はピカチュウを包み、大きくなったと思っただけでどんどん小さくなり、やがて先程の大きさの光に戻った。

「『自爆』……！」

そして、辺りを巻き込む大きな大爆発が起きた。

言わずとも、イシツブテは戦闘不能だろう。ピカチュウは……。

「ピカチュウ……！」

ピカチュウは目を回し、戦闘不能となっていた。

「ピカチュウ、イシツブテ、共に戦闘不能！」

1戦目は引き分けであった。

互いに自分のポケモンに寄り添い、モンスターボールに戻した。

「1戦目から俺とここまで張り合うとは……やるな！」

「さすがジムリーダー。今まで戦って来た奴とは違うぜ……」

エックスを含め、テツマは今まで戦った中ではかなり強い部類に入るだろう。

両者は次のモンスターボールに手を掛ける。

「次、行くぞ!!」

「来い!!」

「行け、ゼニガメ!!」

「出番だ、イワーク!!」

次に出てきたのはゼニガメとイワークであった。相性ならゼットの方が有利だろう。

しかし、相手はジムリーダー……苦手なタイプに何の対策もしていない訳がない。

「セオリー通りってところか？まあ、一匹ぐらいは岩タイプに有利なタイプを持っているだろうけどな」

「（さあ、どう来る？この状況で下手な攻撃は出来ねえ……そうだ！こう言う時、親父は相手の立場になって考えろって言ったな。もし俺がテツマだったら……）」

「イワーク、『ステルスロック』！」

すると、イワークの周りの岩が浮かび上がり、一瞬にして消えた。

「これで準備は整った。行くぞ!!」

「『水鉄砲』!」

「尻尾を地面に叩け!」

イワークが尻尾を強い勢いで地面を叩くと砂が舞い上がり、水鉄砲をガードした。

しかし、砂の中から新たな影……ゼニガメが現れた。

「予想通り!『殻に籠る』から『高速スピン』!!」

「何!？」

テツマは驚愕したが、そうも言ってられない。

今、ゼットが指示した技は殻に籠るから高速スピンと言う、硬化して威力の高くなった高速スピンである。

当たったら恐らく、イワークでも一溜まりもないだろう。

「くっ……『固くなる』!!」

イワークは固くなるで何とか高威力の高速スピンは免れたが、次の攻撃が待っていた。

「『水の波動』!!」

水を溜めた球体を口の先に出現させ、それを地面にぶつけ波紋のように出す。

「どうだ?これならいくら砂を盾にしても無駄だぜ!」

「どうかな？イワーク、尻尾を全力で叩け！！」

しかし、イワークは思わぬ行動を取った。尻尾で地面を叩き、自身を浮き上がらせたのだ。

イワークは波を飛び越え、ゼニガメの前までやって来た。重さ210kgもある巨体が宙を舞ったのだ。ありえない光景だろう。

つまり、自身の重さく尻尾を全力で叩いた時の威力となる。

「形勢逆転だな！」

「くっ……」

「『締め付ける』！」

イワークはその巨体とは裏腹に素早い動きでゼニガメを捕まえ、締め付ける。

ゼニガメは必死に逃げようとするが、逃げようすると逆にもっと締め付けられる。

「ゼ……ゼニ……！！」

「ゼニガメー！！」

「さあ、どうする？」

今の状態はイワークに締め付けられて、顔、両手、両足、尻尾が出せない状態になっている。

顔も出ていないのだから、水鉄砲すら出せない状態である。

「（くっ……。ゼニガメはイワークに密着した状態で顔すら出せないなんて……。密着？ そうだ！ まだ方法はある！！）」

「どうした、もう終わりか？」

「……。ああ。終わりだな」

ゼットは下を向き、そう呟いた。

「もう少し出来ると思っていたんだが、ここまでとはな……」

「ああ……。お前はここまでだ！！」

「何！？」

「ゼニガメ、その状態のまま『水の波動』！！」

ゼニガメはゼットの指示を聞き、顔に当たる部分に水の波動を当てた。

ゼットは水だけを当てても無駄だと分かっていた。

なら、水と共に衝撃を与える水の波動ならどうだろうか？ 完全に抜け出す事は出来なくても一瞬だけ緩ませる事なら出来る。

「しまった！！」

「今だ！ 『殻に籠る』から『高速スピン』！！」

イワークはもう一度締め付けようとしたが、硬化した高速スピンのよって弾かれた。

「フッフ……ハッハッハッハ！」

「どうした？イワークに頭でもぶつけたのか？」

「違うわ！お前がもしろいと言っているんだ」

「え？今のポケおもしろかったか？」

「だから違う！お前の強さが、だ」

悉く違う事を言うゼットにはつきり言った。

「俺の強さ……？」

「レベルでは少し修行が足りないが、それを戦術で補っているところがおもしろいんだ」

「え？俺ってレベル低い方なの？」

「そこまで低くは無いが……平均と比べるとな」

「オススメレベルが18って聞いてたんだけど……出任せだったか」

テツマのポケモン達は18どころか、レベル20を軽く超越している。

ゼットは少し落ち込むが、何とか立ち直る。

「しかし……変わった作戦を思い付くものだ……」

テツマは小さい声でボソツと呟く。

「ん？何か言ったか？」

「いや、何でもない。バトルを続行するぞ！」

「おうー!!」

果たして、ゼットはジムリーダー・テツマに勝てるのか……………？

そして、テツマの切り札の正体と壁に付いている鉄心の意味は……………

……………？

次回に続く。

第10話 「二匹ジム戦！ゼットvsデシマー！」「〔後編〕

ここはニビシティジム。今正にゼットとテツマが戦っているジムの事である。

現在、ゼニガメとイワークが戦闘している最中であつた。

「先にこっちから行かせてもらうぜ！『水鉄砲』！！」

ゼニガメはイワークに水鉄砲で攻撃しようとしたが、前回と同じ手段であつさりと防がれてしまった。

「さあ、次はどう来る？」

「（そう言えば……このフィールド岩が多いな……あ！そうだ！）」

何かいい事を思い付いたのか、ゼットは笑みを浮かべる。

「『殻に籠る』から『高速スピン』で岩にぶつかれ！！」

「！？」

テツマはイワークに当てるのかと思っていたが、予想外な事に当たったのは岩であつた。

「今度は何を企んでいるんだ？」

「見てのお楽しみだ！」

すると、岩に当たったゼニガメは弾かれ、別の岩に向かいまた弾かれ、それがどんどん続いていき、イワークの周りを回るようにして

弾かれていた。

「何だと!?!」

「今だ!?!」

「まずい!?!」

ゼットの合図で今まで弾かれていたゼニガメは次の岩で急に角度を変えイワークに突撃した。

「今までイワークの周りを弾かれながら回っていたのは、スピードを溜める為だったのか……!?!」

「その通り! 堅さと速さをプラスすれば、威力はさらに増大するからな!?!」

イワークはぶつかった衝撃で倒れるが態勢を立て直し、ゼニガメを探すがどこにもいない。

「一体どこだ!?!」

「『水の波動』!?!」

すると、上から攻撃が襲い、イワークを吹き飛ばした。

「イワーク!?!」

「勝負ありだな!」

しかし、イワークは予想に反して起き上がった。

「どうやら、まだみたいだな!!」

「くっ……!!」

「イワーク、『岩石封じ』!!」

すると近くの岩がゼニガメに寄って、他の2つの岩も寄って来て、中にあるゼニガメを押し潰す形になった。

「ゼニ……!!」

「しまった!」

「そのまま尻尾で薙ぎ払え!!」

ところが、イワークは全く動かない。
それどころか、妙な動きをして壁に激突し、そのまま倒れて戦闘不能になった。

「な、何!？」

「そうか!『水の波動』の混乱の効果が出たんだ!!」

「イワーク、戦闘不能!ゼニガメの勝ち!」

「そう言う事か……」

「残りは一匹だな」

「そのようだな」

すると、テツマは最後のモンスターボールを取り出し、投げた。

「お前は確かに強い。俺のポケモン達を次々とあらぬ方法で攻略していった。だが、こいつはそう上手くいかない。さて、お前はこいつをどう攻略する？」

「でやがったな……」

そこから出てきたのは大きい顎で、白い鋼のボディを持つ、大蛇……ハガネールであった。

ハガネールとは、鋼、地面タイプの鉄蛇ポケモンである。

地中の高い圧力と熱で鍛えられた体は金属よりも硬いと言われる。

「やっぱり出たな……」

「さて、そろそろ始めるか！」

スッ……とテツマは指を上にとげると、こう言った。

「いつもの行くぞ！」

「（来る……！！）」

その瞬間、ハガネールは横に消えた。

いや、消えたように見えたが実際には、壁際の鉄心にくっついて移動していた。

「（やっぱり、俺の思った通りだ！！）」

「ハガネール、『堅くなる』！」

「『水の波動』！！」

ゼットは即効で攻撃した。何故ならば、相手が攻撃して来たからだ。さらに堅くなった体で向かい側の鉄心に移動する際にゼニガメに攻撃したのだ……『体当たり』で。

両者の攻撃は相殺されたが、ゼットの素早い指示で何とか相殺に収まったのだ。

もう少し遅れていたらとてつもなく強い体当たりで大ダメージ、或いは一撃で瀕死だっただろう。

その理由はハガネールが通った跡を見れば一目瞭然。

今までそこにあつた岩は最初から無かつたように消えて、ゴツゴツとしたフィールドは一瞬にして荒野に変わった。

ただの体当たりが『破壊光線』並の威力を持つポケモンなんて聞いた事がない。

「は、速すぎる……！」

「俺のハガネールはこのバトルフィールドにいくつも取り付けられた鉄心による磁力を使って夢の『高速移動』を実現している。速さに堅さをプラスすれば威力は増大する、正にお前が言った通りだな」

先程のゼニガメのように堅さに速さをプラスすればさらに強くなる
と言う訳だ。

「だけど、自分の意志で離れたり近づいたりする事が出来る訳が……」

「確かにそうだな。教えてやろう。ハガネールの上から3番目と5番目と7番目の鉄鉱石には、2つの尖った部分があるだろう？この部分は、上がS極、下がN極になっている。つまりこれを利用し、S極からN極へ、またはその逆をする事で、故意にくっ付いたり離れたり出来る訳だ」

つまり、3つの磁石を組み合わせ、磁力の関係で先程の事が出来たのである。

「て、鉄鉱石？S極？N極？……って何だ？」

「ハッハッハ、子供にはまだ早すぎたかな？」

「ば、馬鹿にするなよ！俺だってそれくらい分かるわ！！」

「なら、次の行動は読めるか？」

そう言うと、テツマの顔付きが変わり、ゼットも緊張する。すると、ハガネールは壁際の鉄心から天井の鉄心へ、そして地面の鉄心へ移動し、ゼニガメの前までやってきた。

「速い！」

「『アイアンテール』！！」

「！『高速スピン』で避ける！！」

ハガネールの尻尾は白く光出し、それをゼニガメに当てようとする。ゼットはこれに対抗しようとしたが、アイアンテールの破壊力を察

知し、高速スピンの使つてゼニガメは避けた。

すると、アイアンテールが当たった場所は、そこにあつた岩は無残にも粉々に破壊され、地面には輝が入っていた。

「す、すげえ威力……！！」

「『堅くなる』！」

しかし、その油断が仇となった。

ハガネールはさらに硬化した体で鉄心に移動し、ゼニガメに直撃した。

ゼニガメは物凄い威力の体当たりを受け、後ろの壁まで吹っ飛ばされる。

そして、ダウンする。

「ゼニガメ！？」

「ゼニガメ戦闘不能！ハガネールの勝ち！」

「油断は禁物だぞ。ゼット」

ゼットはゼニガメを抱え、モンスターボールに戻した。

「よく頑張ったな」

「どうする？まだやるか？」

その問い掛けに、ゼットは当然の如く答える。

「当たり前だ！！」

「ならば……来い!!」

「頼むぞ、ガーディ!!」

ゼットの最後のポケモンはゼットが旅に出て最初に捕まえたガーディであつた。

相性ではガーディの方が有利だが、ハガネールにはあの絶対的な磁石コンボがある。

そう易々とはいかないだろう。すると、ガーディは出た瞬間に攻撃を喰らつた。

「何!？」

「『ステルスロック』の効果だな」

イワークと戦つた時に最初に使つた技である。

ポケモンを交替すると、最初に攻撃を喰らう事になっている。

「『火の粉』!!」

まずは火の粉でハガネールを攻撃したが、然程効いていなかった。

「相性では良いみたいだが、技の威力が些か低かつたようだな」

「くっ……なら、『火炎車』!!」

今度はもっと火力のある、火炎車で対抗した。

これには少し焦つたか、テツマもハガネールに回避するように命令した。

「そうだ！『火の粉』であのグルグルを回せ！！」

ゼットはガーディに3番目の鉄鉱石のN極を火の粉で回した。
テツマも火の粉にはあまり警戒していなかったため、ハガネールへの指示が遅れた。

「そう来たか！！」

ハガネールは妙な方向へ傾いたり、浮いたり沈んだりして自分の思うように動かない。

「今だ！『火炎車』から『炎の牙』！！」

すると、火炎車をしたまま炎の牙を出し、そのままハガネールに向かって行った。

「あ、あれは……………まさか！？」

「よし！そのまま行けっ！！」

「ハ、ハガネール、避ける！！」

残り数cm、何とか回転は止まり、天井に避けた。

「後少しだったんだけどな」

「未完成だが、今は正に…………」

今の技を見て、テツマは小さくそう呟いた。

「ん？どうかしたのか？」

「い、いや……バトルを再開しよう！ハガネール、『岩落とし』！」

ハガネールは天井から岩を落とす。しかし、それをガーディは軽々と避ける。

「（一体何のために岩を落としたんだ？避けている間にまたさっきので襲ってくる訳でも無いし……まさか！）ガーディ、そこから離れ……！」

「もう遅い！『岩石封じ』……！」

すると、落とした岩がガーディに近づいて押し潰そうとする。

「岩を落とした理由は岩の数を増やすためだったのか……」

「そしてもう1つ。ガーディを足止めするためだ！『アイアンテール』……！」

ハガネールは天井から急降下して、白く光った尻尾を振り落とす。アイアンテールだけでも凄まじい破壊力だが、それに急降下して勢いを付けた攻撃をすれば、まずやられる。

「（あんなもの喰らったら絶対にやばい！どうする！？）」

「終わりだな」

「まだだ！『火の粉』……！」

ガーディは火の粉をアイアンテールの攻撃部分に何度も当てた。そして、アイアンテールは振り下ろされ、地面に落ちてガーディに直撃した。

「これで確実にダウンしただろう。審判、判定を」

「あ、はいっ！ガーディ戦闘不能！ハガネールの……え！？」

しかし、ありえない光景を目にした。ガーディが起き上がっていたのだ。

普通はこれでダウンするのだが、いくら防御力が強くても岩をも粉砕する攻撃を受けて立っていられるはずがない。

「どう言う事だ……！？」

「体力はもうやばいけど、何とか戦闘不能まではいかなかったな」

「何故だ？ハガネールの技の中でも、最高の威力を持つ『アイアンテール』にさらに急降下で振り落としてさらに威力が高くなったと言うのに、それを受けて何故立っていられるんだ！？」

「簡単な事さ。『火の粉』で衝撃を和らげたんだ。そして、『岩石封じ』から抜け出した後、岩を盾にしてさらに『火炎車』で当たった時に受身が出来るようにしたんだ」

3段層の盾……それならば、アイアンテールを防げるのも納得が行く。

「フフフ……相変わらず奇想天外な作戦をよく思い付くものだな。

だが……もうネタは尽きてきたんじゃないか？」

確かに、2つの事を平行して行う攻撃に一瞬の隙を突いての攻撃、硬度に速度を足しての溜め技に相手を混乱させての攻撃、さらには咄嗟の3段層の盾と来たものだ。

よくここまで思い付くものだと言ったゼットの戦術は賞賛に値するが、物には限度と言うものがある。

その戦術がどこまで続くか……それはゼット本人ですら知らない。しかし、ゼットはこう言い返した。

「ネタなんて最初からねえよ。対抗不可能な攻撃なんてこの世に存在しねえしな。攻撃が来たらその攻撃に対抗するための攻撃を考えるだけだからな。だから、人の思い付きは尽きねえよ」

「ハッハッハッハ！全くだな！人の思い付きは尽きない……か。なら、ハガネールのこの攻撃を攻略する糸口もあるよな？」

「当たり前だ！まだ見つかってないけどよ」

「じゃあ、見つけてみる！『体当たり』……！」

そして、ハガネールは鉄心から鉄心へ移動し、さらにスピードを付けてガーディに襲い掛かってきた。

「避ける……！」

何とかギリギリで避け、さらにハガネールにしがみ付いた。

「振り解け……！」

ハガネールは鉄心に移動し、背中を壁にぶつけるがガーディは上に乗っていた。

「よし！『炎の牙』！！」

「させるか！『堅くなる』！！」

炎の牙でハガネールに噛み付こうとしたが、さらに堅くなって然程効いていなかった。

そして、ハガネールはガーディを振り落とした。

「くっ……やるじゃねえか！」

「お前もな！」

前方の鉄心へ移動し、体当たりしようとするが、また避けられた。

「くそっ！このままじゃ埒が明かねえ！」

「こうなったらタイミングを見計らってもう一度『アイアンテール』で……！！」

今の状況は確実にゼットの方が圧倒的不利である。

最初のステルスロックでダメージを受け、その後も岩石封じ、アイアンテールを受け、ガーディの体力は限界に近い。

それに比べてハガネールは殆どのダメージも受けてない。

ゼットは現在、窮地に立たされていた。

「（やっぱ『火の粉』で攻撃するか？いや、『火の粉』じゃハガネールには効果が薄い！物理系の技って手もあるが、ハガネールが防

御力を上げたせいで『火炎車』と『炎の牙』の効果が薄まっちゃまって全然使い物にならねえ！せめて『火炎放射』ぐらいの威力があればハガネールを倒す切っ掛けを掴む事が出来るんだが……………」

ゼットはあれだこれだといろいろ考えるが、どれもこれもが上手くいかなかった。

「もう打つ手が無いのか…………？」

そんなゼットに戦いながらガーディはワンワン！と吠える。

「ガーディ…………？」

「ヴァーン！ワンワン！ウォーン！！（戦いは俺に任せろ！お前はあいつを倒す作戦をじっくり考えるんだ！将来のポケモンマスターになるんだろ！？）」

ガーディはポケモンだから、ゼットには何を言ってるのかは分からない。

しかし、ゼットはガーディが一体何を訴え、何を伝えたいのかは分かる。

「……………そうだな。まだ諦めちゃだめだ！まだ何か方法がある筈だ！」

ゼットは思考を変えてここまで来るのにここ、ニビシティで何があったのか思い出す…………。

ニビシティに入る前に森のポケモン達と戦った。ポケモンセンターに入った。

ニビ博物館に行った。鳥の豆やりをやった。

花の事を話すと話が止まらないお姉さんと話した。

「（くっそおっ！どれもこれもジムとは関係なさそうだ！……ジム？いや、待てよ！確か花のお姉さんが話の途中でこんな事言ってたような……）」

ふと、一つの事をゼットは思い出す。話は花のお姉さんと話していた時に戻る……………。

『それと、このアジサイ！裏通路でしか取れない貴重な花なのよ！』

『あ、あの……俺、そろそろジムに行きたいんですけど……』

『ジム？そうだわ！聞いてくださる？あそこは花が多く咲いていて綺麗だったのに、そのままジムを置いたのよ！酷いでしょう？』

『は、はあ……』

『それで私はジムに講義したのに、あっちの方は仕事とか言って全く聞き耳を持ってくれなくて、今も花が潰された状態で残っているのよ！全く、花が可哀想だわ！』

ゼットの記憶はここまでである。

「（そうか！花だ！そしてそれはニビジムの真下にある、って事は今もある筈だ！潰された花が……）」

「一気に決めるぞ……！」

すると、ハガネールは尻尾を白く光らせ、アイアンテールの準備をする。

「（来る！さつき『アイアンテール』が当たった時の場所は合ってる！準備は整った！！）」

「『アイアンテール』！！」

「バックステップで避ける！！」

ハガネールのアイアンテールがガーディを狙うがバックステップで避けられてしまう。

そして、フィールドの地面が砕け散り、破片と共に土と多くの花が舞った。

「花……？」

「ああ、そうだ……俺の勝利を飾る、な！！」

「！？」

「ガーディ、『火の粉』だああっ！！！！」

火の粉は花に発火し、巨体を飲み込む程の、灼熱の業火となった。アイアンテール程の強い技には、使った後には一瞬の反動が出来る。それによって、何の指示も出ず事が出来なかった。

テツマは、業火が目の前のハガネールを包み込み、頭から上半身……そして全身まで焼き尽くされる光景を見ているしか無い。

「ハガネール！！」

「最後だ！！」

ガーディはハガネールの前に飛び出し、ゼットはこう言い放った。

「『起死回生』……！！！」

起死回生……それはダメージが大きければ大きい程威力が高くなる技である。

ハガネールは気が飛びそうになる程の強い衝撃を受け、ついにダウンした。

「何だと……！？」

ハガネールが倒れ、その上にガーディが吠えながら立ち尽くしていた。

「ハ、ハガネール戦闘不能！ガーディの勝ち！よって勝者、マサラタウンのゼット……！！」

「よっしゃあああつ……！！」

こうしてゼットは、初のジム戦勝利となった。

「これがグレーバッジだ！」

「やったぜー!!」

バッジをバッジケースの中に入れる。

ゼットは初めてなのか、かなり浮かれてはしゃいでいる。

「しかし、あんなところに花があったなんてな……全く気づかなかつたな」

「なあなあ、次のジムってどこなんだ？」

「ハナダシティのハナダジムだ。前は「水の街」って呼ばれる程、水が豊富にあったそうだ。今は脱水の街と呼ばれているがな」

「ハナダシティか……よし！そこを目指して出発だあっ！！」

「ピカ！」

「ワン！」

「ゼニ！」

こうして、ゼット達は次なる目的地、ハナダシティを目指し歩き続けるのだった。

第11話 「オツキミ山と謎の少女！取引を阻止せよ！！」〔前編〕

ゼットはニビシティでグレーバッジを手に入れた後、ハナダシティを目指す為にオツキミ山道ルートを進んでいる。

「ああゝ……この道長えゝ……」

ゼットはバテながら進み、現在4番道路を通過中。

ハナダシティまでの道のりは、3番道路を通った後、さらに4番道路を通り、オツキミ山に登りに登ってまた同じ4番道路に出て、やっと到着と言うルートである。

これをオツキミ山道ルートと言い、次のジムを目指すポケモントレナーが必ず通る道である。

ここまでの道のりは途中に町が全くないから、初心者にはかなりきつらしい。

他にデイグダの穴ルートがあるが、ここは現在大量のデイグダが封鎖していて全く通れない状態である。

「テツマからきついつて聞いてはいたけど……こんなにきついなんてな。くっそーっ！舗装ぐらいしっかりしろー！」

凸凹は多く、おまけに落石も毎日、スリも物凄く多く、野宿なんてしない方がおかしい程の場所なのに、道路に全く手が付けられてない。

いくら山道ルートとはいえ、一般人がたくさん通るこの場所で、何の舗装もしていないのは放置状態と何ら変わらない。

「おおっ！やっとオツキミ山に着いたぞー！」

そして、ゼットはやっとオツキミ山に着いた。
オツキミ山とは、ズバットやピッピや岩タイプのポケモンが多住み
着いている大きな山の事である。

中はまるで迷路のようで、いくつもの下へ降りる穴などがあり、化
石が多く取れる場所としても有名である。

化石の例として有名なのは、前にも説明したが『甲羅の化石』、『
貝の化石』、『秘密の琥珀』などである。

中には『月の石』と呼ばれる、ポケモンの成長進化に関わる何らか
の力を持つ貴重な石もある。

「でっけー!!」

入り口は大きな洞窟の様になっている。

中也広く、冷え冷えとした空気が洞窟内に漂っており、夏でも冬で
もその冷たさは変わらないとまで言われている。

「よし、中に入るか！」

ゼットは歩き始めて、中に入ろうとしたが、誰かにぶつかってしま
った。

「あ、大丈夫か？」

「ええ、大丈夫よ」

ぶつかったのはゼットと同じ年齢ぐらいの少女だった。

服装は、長髪のミニスカートを履いている、妙に膨らんだ白いコー
トを着ていた。

「あ……ああ、そうか」

「御免なさい。じゃあね、トレーナーさん」

そして、少女はそこから去っていった。ゼットはボーツとしていた。

「（ん？……何で名乗ってもいないのに俺がトレーナーだって分かったんだ？）」

まさか……と思い、腰に付いていたモンスターボールを触ってみるが、1つも付いていなかった。

「無い……無い無い無い！モンスターボールが無い！！」

そして、気づいた。モンスターボールはさっきの少女が擦っていたのだと。

「あいつ……スリだったのか！やっべえ、ピカチュウたちを取り返さないとー！！」

ゼットは最悪の展開を予想する。

ピカチュウたちは少女に捕まり、どこかの運送用トラックに放り込まれ、遠い場所に連れて行かれ、悪い組織が何かに買い取られ、一生コレクションとしてケースの中に保存され、死んでいくピカチュウたちを想像する。

ゼットはドツと汗が出る。ベタだが、最悪の場合はそうなる事を覚悟しなければならない。

「ピカチュウ、ガーディ、ゼニガメ！今すぐ迎えに行くぞー！！」

ゼットは少女を追いかけるためにオツキミ山に入った。中は大きく、声が反響し響いていた。

地面は所々に穴が開いており、そこからは地下に続いている。

「一体あいつはどこに行きやがった……!？」

焦燥に駆けられ辺りを見回すが、地面の穴がたくさんがありすぎてどこへ行ったのか全く分からない。

足跡を辿れば何とか探す範囲は縮まるだろうが、ここは山の洞窟であって湿地帯ではない。

泥などはこの辺りには全く落ちていないので、その案は却下される事になる。

「そうだ！こちら辺には人がいる筈だ！あいつを見たかどうかを聞いて回るんだ!!」

ゼットの必死さが神にも届いたのか、人が歩いていた。

バッグと鶴嘴とシャベルをもっている事から、オツキミ山で取れる化石目当てでここに来ているようであった。

しかし、今のゼットにとってそんな事は目も眩まなかった。一直線で化石マニアに近づき、声をかけた。

「ん？何だい？」

「ここで、モンスターボールを抱えて馬鹿面をした女が走ってくるのを見なかったか？」

ゼットは精一杯、皮肉を込めて言った。化石マニアの男は暫くうん、と唸る。

「馬鹿面はしてないけど、3つぐらいのボールを両手に抱えた女の子が焦りながら走ってくのさっき見たよ」

恐らく、その少女で間違いないだろう。しかし、まだ肝心な事を聞いていない。

「そいつはどここの道に行った!？」

「奥の方にある穴かな。そこに行ってたし。ところで、君はあの娘の彼氏か何かかい？」

「馬鹿野郎! あんな奴が彼女だったら俺は借金塗れになるわ! 取り合えずサンキューな!!」

ゼットは奥の方にあると言う、少女が入った穴を目指し、奥を進んで行く。

だが、今は手持ち全てのポケモンを持っていない、全くの丸腰状態である。

そんな状態でもし別のポケモンに襲われたりしたら、どうしようもなくなってしまう。

だが、そんな事は眼中にない……あるのはピカチュウ達を攫った少女と、ピカチュウ達だけだった。

そんなこんなで、ゼットは奥の穴に辿り付いた。

しかし穴は幾つもあり、どれが少女の入った穴か全く見当も付かない。

「ど、どれなんだ!？ あいつはどっちに行っただんだ!？」

ゼットは穴にいろいろな穴に入ってみるものの、一つはここに出ている別の穴に出たり、一つは行き止まりだったりばかりだった。

「くそっ！これじゃあ切りがねえ！」

何か方法はないか、と考えるが何一つ思い付かない。

「今あるのはトレーナー達が落としてった、『傷薬』しかない……」

そう言つて『傷薬』を取り出す。

ポケモンを直す薬があつても当のポケモンがいなければ全くの無意味である。

「今、ある物と言つても……帽子に、ジャケットに、リュックに、ポケモン図鑑に、ポケーション……？」

すると、何かを思いついたように、ポケーションを手前に出した。一度フィシアから貰つた後、何とか使いこなせる様になったので、いろいろ弄つてみたらこんな機能に辿り付いた。

「『動画機能』に『計算機能』に『ポケモン追跡機能』。時代は進化してるんだな………」

そう感嘆していたが、もう一度見ると正に今、この状況を打開出来る機能があつた事に気づいた。

「『ポケモン追跡機能』って、こんなのがあつたのかよ!？」

改めてポケーションの凄さに驚かされるが、最初からこれさえ使つていればこんな苦労もせずに済んだだろう。

ゼットは今まで迷っていた時間が無駄だった事に項垂れるが、ピカチュウ達を追跡出来るチャンスが到来した事は確かだ。

「よし、追跡しろ!!」

追跡ボタンを押すと、立体的にこの全体マップが出た。
青く光っているのが現在地で、赤く点滅しているのが現在ピカチュウ達がいる所である。

「成る程。この穴だな。あいつが進んでいったのは……」

ゼットは正確な穴を通っていく。

最初はぐにやぐにやとした凸凹な通路だったが、今は細長い通路に出た。

「あれ?『星の砂』が落ちてる。……そうだ!今はアイテムを集めよう!あいつもポケモン持ってるだろうし、何か役に立ちそうなアイテムを拾っておこう!」

こうして、アイテムを集める為に先程の道を逆回りし、戻って行った。

ここは同じ、オツキミ山。

洞窟の奥は、入り口付近以上に真っ暗で、ライトがなければ迷ってしまうような所である。

その上、さらに奥から吹き抜ける寒々とした向かい風が身を震えさせる。

そんな所に髭を蓄えて偉そうな男とその部下らしき者達が数名集まっていた。

すると、さらに向こうから体格の大きい、如何にも金持ちそうな男が部下を数名連れてやってきた。

「遅れてすまなかったな」

「誰にも見つかってないだろうな？」

「勿論。ここには誰も来てないさ」

髭の男は辺りを見回す。何かに警戒しているようだ。

「それで……例の物は持ってきたか？」

「当たり前だ。そっちこそ、金は用意出来てるんだろうな？」

「ああ、きつちり5000万持って来てるぜ」

体格の大きい男は、アタッシュケースの中身を見せる。
中は満遍なく入っている札の束だった。

「不味いわね……」

すると、その様子を影から覗いている少女がいた。

そう、最初の方でゼットからポケモン達の入ったモンスターボールを掏った、ゼットが今追っている少女である。

「おい……数えろ」

「ちゃんと5000万持って来たぜ？」

「嘘、と言う可能性もある」

「ちっ……」

体格の大きい男は舌打ちする。

それに構わず、髭の男は部下に命令し、札束の枚数を数えさせた。

「一応これで時間は稼げそうね。早く来なさいよ……！」

少女は小声でそう呟いた。

「よし、『元気の欠片』を手に入れたぜ！」

ゼットは新たなアイテムを手に入れる為に、また戻って来たのだ。今度はポケモンの瀕死状態から回復してくれる、『元気の欠片』を手に入れた。

他にも『傷薬』を幾つか見つけたが、やはりポケモンがいないので何の役にも立たない。

「幸い、あいつがここから動いていなくて良かったぜ」

ゼットは腕に付けたポケーションを見て言う。

ポケーションの追跡画面にはピカチュウ達が動いた痕跡はない。

もしも、ピカチュウ達を逃がしていたのだとしたら、この追跡画面には反応すらなくなる。

「それじゃ、そろそろ行くか！」

元気良く先に進もうとしたが、何かに足をぶつけてしまった。

「痛っ！っつか堅っ！！」

ゼットは足の先を見る。その先には、ゴツゴツとした岩石が多く並んでいた。

「何だよ……ただの岩かよ。ちえっ」

何を期待していたのか……ゼットは帰り際にもう一度岩を蹴ってから去っていった。

それが、大惨事を引き起こす引き金となったとも知らずに……。

「張り切って行くぞー！」

……と、1人虚しく叫ぶゼットであった。
すると、すぐ後ろから地面が鳴り響く音がした。

「な、何だ!？」

何事かと言わんばかりに後ろを振り向くと、先程蹴った岩の軍勢が動き始めたのだ。

岩からはゴツゴツした両手両足が出現し、真中から口と両目が出て来た。

「え、ポケモン……?」

岩の塊のポケモン達はゼットを見ると大声を出した。
何か怒鳴り散らしているようにも見える。

すると、そのポケモン達は身を丸く固めた。

「つまり、これは……」

「ゴオロオオン!!」

「逃げろぁーっ!!」

ゼットはポケモン達とは反対方向へ走って逃げていった。
ポケモン達は転がりながら、ゼットを追いかける。

「何で俺が追われてんだよ!? 何で!？」

ゼットには身に覚えがなく、先程の行動を必死に思い出す。
元気の欠片をゲットして、ポケーションを見て、足が躓いて……。
そして、ゼットはハツとなって思い出した。

「そうだ……。2回ぐらい岩を蹴ったんだっけ？」

一度目は足に躓いた時、二度目はその後腹いせに岩を蹴った時……。
その時の岩がああポケモン達であった。

「それが原因かあああ!!」

今になって思い出すゼットであった。だがもう遅い事はゼットも分かっていた。

怒ってこちらを追いかけて来るポケモン達はゼットが別の道を行っても追いかけて来る。

しかし、そのポケモン達から逃げられるゼットも凄い。
人間、逃げ足だけは速いのである。

「ゴオロオオオン!!!」

ゴローン達は怒り狂って、ゼットを追いかけていた。

ゼットに至っては既に涙目であった。

「iiiiiii!!?」

「ゴアアアア!!!」

「くっそお！どうする！？このまま逃げててもいつか追いつかれちまう……！何か使えそうな物はないのか!?」

ゼットは今まで集めたアイテムを思い出す。

『傷薬』に『星の砂』、『元気の欠片』である。

「（駄目だ！どれも使えねえ!）」

ゼットは頭を抱え、最早これまでと死を覚悟した。

「（あいつが、リーダーか！あいつさえ倒せば問題ないんだけど……）」

ゼットは振り向き、一番先頭にいるポケモンを見つめる。

あのポケモン達の中で恐らく一番狂っている。

「（……待てよ？どうしてあいつ等正確に俺に付いて来られるんだ?）」

すると、些細な疑問が頭に浮かぶ。

この暗い中、どうしても正確にあのポケモン達は付いて来れるのか……。

何か自分に特徴があるからかと、自分の服装を見る。

「（俺の着てる白い服？いや、この暗さだ。ただでさえ、暗いつてのに、岩で視界が狭くなってる上に、転がりながら付いて来てるんだ。つまり、見えるのは一瞬だけだ。まず、見える筈が無い。この赤帽子か？いや、これも同じだ。じゃあ何なんだ？）」

ゼットの疑問が巡り巡る中、腰に付いているある物に目が止まった。そして、笑みを浮かべる。

「（俺の予想通りなら……いける！）」

ポケモン達の転がる勢いは止まらない。寧ろ、先程よりも加速しているように思える。

「次の分かれ道が勝負だ！来い、ゴローン！！」

そう、このポケモン達の正体はゴローンだったのだ。

ゴローン達はゼットを追いかけて、ゼットの言う次の分かれ道へやって来た。

「行けえーっ！！」

ゼットは腰の付いていたある物を左に投げ、ゼット自身は右へ飛んだ。

すると、ゴローン達は右ではなく、左に転がって行った。

案の定、先頭にいたゴローンが右の壁に突っ込んでぶつかり、その後も次々とゴローンは壁にぶつかって行った。

「やっぱり。あのゴローン達は、先頭にいるリーダーのゴローンに付いて行ってたんだ。そして、リーダーの方が俺に付いて来れたのは、『星の砂』の輝きを頼りにしてたからだ。そして、その『星の

砂』が俺とは別の方向へ飛んで行けば、リーダーのゴローンは、それに付いて行き、後ろのゴローン達はリーダーに付いて行く。リーダーは後ろのゴローン達で後方が見えずに、俺を見失うって訳だ」

ゴローン達は起き上がり、勘弁とでも言いたげな顔をして戻って行くとした。

「ちょっと待った！」

しかし、ゼットはとても解せなさそうな顔をしてゴローン達を引き止めた。

リーダーのゴローンは声がしたので振り向く。

「何でお前等あんな所にいたんだ？あんな人間に見つかり易い所に固まってるんだ？」

それもそうである。ゴローン達は、すぐその地面に蹲っていたのだ。

普通のゴローン達なら、洞窟の壁の横穴などの所に巣を作っている筈なのだが、このゴローン達は人間に見つかり易い、地面に蹲っていたのだ。

その理由を説明する為、ゴローン達は先程の場所へ戻って行った。

「お、おいこれは……！？」

そう、ゼットの目の前には酷い怪我をした、イシツブテが横たわっていた。

今すぐにも巣に戻りたいところだが、下手に動かせばさらに状態が悪化してしまうので、ここに良くなるまで留まっていたのだ。

「……おい、このタオルやつから、誰か水辺に行って濡らして来い」
その指示にゴローン達は躊躇う。ゼットは一度、ゴローン達を怒らせたのだ。
そんな者の言う事を安易に聞いていいものなのだろうか。

「おい、どうした？さっさと濡らして来いよ」

ゴローン達の視線は自然とリーダーのゴローンに向く。
リーダーのゴローンは目を閉じたまま微動だにしない。
ゼットはそんなリーダーのゴローンに声をかける。

「このままじゃ危ないぜ？何もしないよりはマシだと思うが」

「ゴロオオン……………」

「俺を信じろ」

ゼットの目に曇りは無かった。

自信に満ち溢れた、真っ直ぐな目……その目を受け止め、ゴローンは他のゴローンに話し掛け、全員頷いた。
ゼットは微笑み、ゴローン達を見る。

「じゃあ頼むぜ。あ、でもイシツブテは岩タイプだから、水は少なめにな」

その後、ゼットとゴローンはイシツブテの手当てに奮闘した。
『元気の欠片』を食べさせたり、『傷薬』を使ったりと、大忙しであった。

だが、そのおかげでイシツブテはぐっすり眠り、顔色も良くなって

いった。

「あーやべえ！まだ、ピカチュウ達の事が終わってねえ！」

ゼットは今になって大事な事を思い出し、焦った。

「んじゃあな！蹴った事も謝っとく！元気でやれよ！！」

そうしてゼットはゴローン達に別れを告げ、ピカチュウ達をまた取り返しに向かっていった。

「そろそろ急がねえとマジでやべえ！！」

ゼットは急ぎ足で少女を追って行った。ゼット達の旅はまだまだ続く……………。

第12話 「オツキミ山と謎の少女！取引を阻止せよ！！」〔後編〕

ここは言わずと知れず、オツキミ山。

ゼットは少女に攫われたピカチュウ達を取り返す為に、オツキミ山に乗り込んで来たのだ。

しかし、思わぬ騒動などもあって、大きな時間が過ぎてしまっていた。

ゼットはここまで時間が経ったと言うのに、ピカチュウ達が一步も動いていないと言う事に不安を感じていた。

「もしかして、壊れてるのかこれ!？」

ポケーションは大変便利だが、そう言う繊細な機械程壊れ易いのではないかと言う思いがあった。

逆を言えば、そう言う繊細な機能程壊れ易いので、外のカバーを堅くしているのだが……。

「いや、もしかしたら、あいつが気づかずに落としていったって可能性もある。大丈夫!」

……と言いつつも、ゼットは若干目が泳いでいた。

そうやって辿り着いた場所は、以前、態勢を整える為、アイテムを取りに行く為に、引き返していった場所である。

またここに戻って来た訳だが、前回とは違う。

前回は何も持っていなかったが、今回は『傷薬』を一つ持っているのだ。

「……っつか、『傷薬』って何の役にも立たねえだろ!今、ポケモ

ン持っていないし！」

確かに『傷薬』は何の役にも立たないが、何もないよりはマシと
考え、ゼットは足を進める。

「待つてろよ……！すぐ迎えに行つてやつから！！」

そう決心し、洞窟の奥へと走り始めた。

奥の方はさっきの場所がまるで別の場所かのように真つ暗だった。
ポケーションのライト機能で何とか辺りは見えるものの、暗い物は
暗い。

「しかし、暗いな……早く太陽の光が見たいぜ」

だが、その前にピカチュウ達の救出が先決である。
ゼットは辺りを見ながら進んでいく。

「ん？何だあれ？」

すると、壁に光る物があつた。それはライトではなく、自発的に光
つていた。

「もう少し近づいてみるか……」

そうして、その光源に近づいてみると、何か透き通つた石が岩壁に
挟まっているのが分かつた。

しかし、ここまで輝いているとその石が美しく思える。
ゼットは石を掴み、引っこ抜こうとする。

「ふんぬっ！……あれ？抜けねえな？ふんっ！！」

さらに力を入れて抜こうとしても、中々抜けない。
かなり壁にびっしりと挟まっているようだ。
本気の力で抜こうとするが、やはり中々抜けない。

「も、もう少し……おりゃー!!」

すると見事に抜けて、ゼットは地面に尻餅を付いた。洞窟内に、大きな音が響く。

さらに場面は変わってオツキミ山の洞窟の奥。

髭の男の手下は5000万の金の数を確認している最中である。

「そのアイテムの効果はどれ程続くんのだ？」

「約1時間だな。強くポケモンに影響を及ぼすから、精々1時間程度が関の山だ」

「へっへっへ。そんだけありゃあ十分だ。客も騙せられるぜ」

体格の大きい男は気持ちの悪い程の笑みを浮かべる。

「しかし、そんな事すぐにバレるだろう？」

「バレそうになったら、即トンスラよ。日が経った後、また別の場所で売り捌くって一番やりやすい方法さ」

「クツクツク……確かにな」

「客を騙すなんて簡単な事さ……」

そうして、2人は高笑いする。

その様子を岩壁の影から窺うのは、ゼットからポケモンを掏った少女だった。

「そんなのすぐにバレるに決まってるって……」

少女は2人のやり取りを見ながらそう呟く。

そう、彼女はずっとここで彼等を見張っていたのだ。

「それにしても遅いわね。あのトレーナー何してるのかしら……？」

あのトレーナーと言うのはゼットの事である。

「何かあったのかしら？」

すると、少女のショルダーバッグからひょこっと、ポケモンが現れた。

それに気づき、少女は慌ててそのポケモンをバッグの中に押し込める。

「（駄目よ、ピッピ！今は出ちゃ駄目！！）」

何とかポケモン……ピッピを押し込めてホッとする。

少女は取引の成り行きを見つめる。

「不味いわね……。もうすぐ数え終わっちゃいそう」

髭の男の手下は、5000万をもうすぐ数え終わりそうになっていた。

少女に自然と冷や汗が滴る。そんな緊張感の中、何かが倒れるような音が響いた。

「（何？今の？）」

「ん？何だ？」

「誰かいるのか？」

「（やばっ！こっちに来ちゃう！！）」

少女は動揺する。ここで彼等に見つかったら、言い訳のしようがない。

そこでいい考えを思い付いた。

「おいお前、奥へ行つて確かめて来い」

「ハッ！」

体格の大きい男の手下が少女の下に迫る。

しかし、そこから出て来たのは、目の無い蝙蝠のようなポケモン……ズバットであった。

そうしてズバットは男達に姿を見せた後、同じ所を引き返して戻っていった。

そうして、手下は戻ってきた。

「なんだ……。ポケモンか。驚かせやがって」

「このオツキミ山の洞窟奥の辺りにはズバットなどのポケモンが多いからな。いても不思議はないだろう。だが、さっきの音はポケモン

ンが出すには、妙だったな……。念の為、そっちの方も探して来い」

今度は髭の男の手下を向かわせる。

しかし、少女はこれも予想していたようで、あまり焦らなかった。

「（来る……！）」

そうして手下は岩壁の通路を見るが、これと言って何もなく、誰もいなかった。

「誰もいません！」

「そうか。よし、続ける」

手下は5000万の金をもう一度数え始めた。

手下がいなくなった後、岩壁はドロドロになって消えて、そこから少女と本物の岩壁が現れた。

「何とかやり過ごせたようね」

どろどろになった液体は紫色に変色し、人型でも獣型でもないポケモン……メタモンが現れた。

メタモンは何にでも変身出来る能力を持つ希少なポケモンである。

「ありがとうねメタモン」

メタモンをモンスターボールに戻し、再度、男達を確認する。

「思わぬハプニングがあったけど、これで時間が稼げたわ。早くしなさいよ……もう時間稼ぎは出来ないんだから」

ゼットは目を見開く。今手に持っている物、それは……。

「こ、これ……『月の石』じゃねえか！」

『月の石』と言うのは、ポケモンの何らかの成長進化に関わる貴重な石の一つと言われている石である。

他にも、『炎の石』、『水の石』、『雷の石』などがあるが、その種類は現在調査中である。

「すげえ！こんな石があるなんてラッキーだぜ！……ってそんな事をしてる暇はねえ！早くいかねえとー！」

本来の目的を思い出し、ゼットはもう一度歩き始めた。そして、次の曲がり角で、その表情は驚愕に変わった。

何故なら、ずっと探していた少女が目の前にいたのだから。少女もゼットに気づき、すぐにこちらに寄ってくる。

「あ！おま……！！！」

ゼットはそう言い掛けたが、少女に手で口を塞がれた。人差し指を立てて、話し始めた。

「あんたどこ行ってたの？ずっとここで待ってたのに」

「……は？」

「だから、ここであんたが来るのを待ってたのよ。ほら、あんたのポケモン」

そう言つて少女はゼットにモンスターボールを手渡した。躊躇いながらもモンスターボールを受け取る。

確かにゼットのモンスターボールであった。

「ど、どうも……」

「さあ、早くあいつ等を全員捕らえる方法を考えましょう」

「ちょ、ちょっと待て！ここで俺を待ってた？一体どう言う事だよ？」

訳が分からないと言う様子に少女は溜息を吐く。

「……分かったわ。取り合えず一から話しましょう」

少女の話した内容はこうだった。

少女はオツキミ山に入って、洞窟の奥までやってきた時、彼等を見つけた。

その時はまだ髭の男だけだったのだが、彼等を暫く見張っていたら、とんでもない事が分かった。

なんと、彼等は違法ドーピングを密売している組織だったのだ。

今回、その為の取引をこの洞窟でやる事も分かった。

少女は今すぐに警察を呼ぼうとしたが、彼等の取引相手が来る時間も分かってないのに、ここを離れる訳にはいかないと思ったのだ。

その上、警察なんて呼んだらそろそろと大群が押し寄せてきて、足音ですぐに気づかれて逃げられる。

単体で行っても勝てる自信はあるが、手下を相手にしている間に逃げられてしまうと思い、それも断念。

仕方が無いので、ここにトレーナーが来るまで待とうと考えたのだが、いつまで経っても来ない。

なので、手持ちに見張らせておいて、少女はスリなどをして、トレーナーを無理やり連れてくる。

そうして今に至った。

「……成る程な。でも、スリなんてしなくても、俺に直接言えばよかったのに」

「『洞窟の奥で違法取引をしようとしてる奴がいるから早くきて』なんて言われて信じると思う?」

「うっ、それは……」

確かにそんな事をいきなり言っただけで信じられる訳がない。だから、無理やりにも連れてきたと言う訳だ。

「あのアイテムは『マキシム』ね。ジョウト製の違法ドーピングアイテムよ。それをポケモンに飲ませると、一時的に体力が極限まで上がるって言う、かなり強力なアイテム。ただし、そのアイテムは強烈な副作用があつて、1時間もすれば主人の言う事を聞かずに暴走するのよ。この系統のアイテムは皆そうよ」

「そりゃ、益々取引を阻止しなけりゃな……っつか何でそんな事知ってるんだよ?」

「私、結構裏ルートには詳しいのよ? まあ、薬品とか機械とかも使うの好きだから」

聞かなきゃ良かった……と、後になって後悔するゼツだった。

「……それよりどうするんだ? あいつ等を一網打尽にする方法を考えるんだろ? お前?」

「あんたもよ。それからお前じゃなくて、ダブリューよ」

「そうか。よろしくな、ダブリュー！……って、え？俺も考えるのかよ！？」

「当たり前でしょ？そのトレーナーがあんたなんだから」

「はあ……仕方無えな。んで？どうするんだ？」

ゼットは溜息を漏らすが、具体的な作戦と言うのをダブリューに聞く。

「んー、そうね。今、あんたは何持ってるの？」

「俺か？えーと、『傷薬』と『月の石』だな」

ゼットは今までに手に入れたものを下に並べる。

「あら、『月の石』じゃない？丁度良い物を手に入れたわね」

ダブリューはその中の『月の石』に目が止まり、ニヤリと笑った。特に驚く訳でもなく、それを手に取って研究対象のように見ていた。しかし、ゼットはダブリューの言う、丁度良いと言う言葉に引っ掛かっていた。

「丁度良いって？」

「今、私にはピッピがいるのよ」

「それがどうかしたのか？」

呆れたと言わんばかりに、ダブリューは頭を抱えながら、溜息を吐く。

その動作に、ゼットは少し馬鹿にされた気がした。

「鈍いわね……。ピッピの進化条件は何？」

「そうか！『月の石』だ！」

「正解。それじゃ、作戦を話すわよ……」

ダブリューはゼットに作戦を話していた。

そして、あちらの方でも5000万を数える作業も終わった。

「終わりました。きつちり、5000万です」

「随分と時間が掛かったが……まあいい」

髭の男はアタツシケースを開け、マキシムを取り出す。中には、マキシムが5つ入った、袋が入っていた。

「確かに。んじゃ、時間も喰ってる所だし、さっさと済ませるか」

「そうだな」

「『水鉄砲』!!」

そして、2つのアタツシケースを交換しようとした時、横から水鉄砲が入って、2つのアタツシケースを吹き飛ばした。

その場にいた全員が水鉄砲の発射された場所を見ると、ゼットとダブリューが立っていた。

「何だ!?このガキどもは……!?!」

「取引なんてさせるかよ!」

「ちつ……こいつら取引の事を知ってやがったのか!?!」

彼等に5、6人の手下が相對する。

それを最初から待っていたかのように、ゼニガメは既に戦闘態勢に入っていた。

「『水の波動』!!」

ゼニガメは手下達に向かって水の波動を放った。手下の何人かは吹き飛ばされ、倒れていた。

「仕方無い……やれ、コロトック!!」

「こちらもだ! 行け、ヤミカラス!!」

「行くんだ、メノクラゲ!!」

手下達はそれぞれ、色取り取りなポケモンを出していく。
ダブリューはそろそろ、と思い、モンスターボールを投げた。

「ピクシー! お願い!!」

そう、出てきたのはピクシーであつた。

ピッピは、『月の石』によって進化し、ピクシーへと変わったのだ。
男達は手下を残して、金を持って逃げて行こうとした。

「行かせるかよ! ゼニガメ、『水鉄砲』!!」

「そうは行くか! ヤミカラス、『ナイトヘッド』!!」

ヤミカラスの攻撃が、そのまま水鉄砲に当たって相殺されるかと思つた。

しかし、予想外な展開が起こつた。

何と、ナイトヘッドが急に向きを変えて、ピクシーの方へ向かつて行つたのだ。

当然、ピクシーは簡単に避ける。水鉄砲は男達に当たり、手下同様に倒れる

「ボス! ……ば、馬鹿な! 一体何を!？」

「『この指止まれ』って技知ってる？相手の攻撃を全て自分に向ける技なのよ」

そう、これをピクシーに指示していた事でゼニガメには当たらなかったたのである。

「そ、そんな技が……！ええい、こうなったら貴様から倒す！『ナイトヘッド』だ……！」

「『剣の舞』から『シザークロス』……！」

「『バブル光線』……！」

「避けて！」

3つの攻撃が同時にやってくる。ダブリューはピクシーに回避を指示した。

最初のナイトヘッドと次のバブル光線は避けられたが、シザークロスは当たってしまった。

「ピクシー……！攻撃が厄介ね。ここは『丸くなる』……！」

ピクシーは丸くなって防御力を上げる。

「攻撃が嫌ならば続けさせてもらおうか！『シザークロス』……！」

「『丸くなる』……！」

ピクシーの防戦一方で、コロトックは次々に攻撃していく。ダブリューはとても反撃出来るようには見えなかった。

「（あいつ、さっきはあれだけ作戦を自信満々に説明してたのに……大丈夫なのか？）ダブリュー、変わるうか？」

「大丈夫よ……！」

「（本当かよ？それにしても、さっきから反撃出来るチャンスは幾らでもあるのに、何でダブリューの奴反撃しないんだ？）」

ゼットはダブリューの戦い振りを不思議そうに見ていた。

「どうした！反撃出来ないのか！？」

「くっ……『丸くなる』！！」

しかし、何度も防御力を上げたせいでシザークロスも威力が落ちてきた。

その様子を見て、手下は別の手下達に話し掛ける。

「最早、お前もここまでだ！」

「何を！『指を振る』！！」

「『バリアー』だ！！」

すると、ピクシーの指が怪しく光って、突進を放つ。指を振るとは全ての技から一つ、ランダムで選ぶ技である。しかし、これをメノクラゲがバリアーで攻撃から防ぐ。

「『黒い霧』！！」

「そんな……！」

黒い霧とは、自分と相手のステータスを元に戻す技である。

これはつまり、今までの防御力が全て無に帰ると言う事である。

そして、コロトックが止めの一撃を放とうとする。

「ハハハハ！これで終わりだ！『気合溜め』から『シザー……！！』」

「掛かったわね。『アンコール』」

しかし、そこでダブリューの指示が出た。

アンコール……それは相手が最後に繰り出した技を何度もさせる技である。

「な……！？」

「ほほほ……あなた達、私の罠にもしろい程引っ掛かってくれたわね」

先程までの焦っていたダブリューはどこに行ってしまったのか、恐ろしく冷静である。

ピクシーも先程と豹変したように笑いながらこちらを見ていた。

「あんた達は私が、物理攻撃が不味いと言って、『丸くなる』を指示すれば、恰も私が物理攻撃だけは絶対に当たりたくないように思えたんでしょね。そして、あなた達は私のピクシーの防御力が特殊防御力よりも高い事すら知らずに、物理攻撃を当てる為に次々と手を打って来た。そして私の思った通り、あんた達はピクシーを徹底的に倒す為に、変化技を使った。私はそれに付け入ったのよ」

「嫌味な奴だな……」

何もかもダブリューの言った通りであった。

手下達はバトル開始直後からダブリューの策略に嵌っていたのだった。

「だったら何故、俺達の攻撃が同時に来ると分かったんだ!？」

「まず、ヤミカラスは成長度からすると、レベルは21ぐらいだから、『黒い霧』を覚えている筈。『丸くなる』の効果を無くすのなら、それが効果的。コロトツクは『気合溜め』か『剣の舞』のどちらかをして攻撃するつもりだと思っていたから。メノクラゲは『毒びし』だと思ってたんだけど、結果は同じね。どれもサポート技だったからそれに有効な『アンコール』をした訳」

「見ただけでレベルが……!？」

手下達は驚愕を隠せずに、膝が地面に突き、倒れていった。

そして、ダブリューはモンスターボールを手にとって、ポケモンを出した。

「さて、デリバード……『冷凍ビーム』!！」

そして、男達と共に手下達を完全に凍らせた。

時が止まったかの如く、彼等は凍ったまま微動だにしない。

「ふう、終わったわね……さてと」

すると、ピクシーをモンスターボールから出し、逃がした。

「おい、何やってんだよ？」

「あの子、オツキミ山に帰りたがってたし、いいのよ。ポケモンレ
ンジャーみたいな物と思ってくれて結構だわ」

ダブリューは笑ってそう言った。

しかし、一瞬どこか寂しげな表情をしたのは気のせいだろうか。

「……っつか、お前こいつ等大丈夫なのか？」

「大丈夫。8時間ぐらいしたら解けるから」

「ああ……そう」

それまでに見つかってもらえなければ、ずっとこのままである。
そう思うと少し可哀想に思えたが、悪人にはこれ位の仕打ちで十分
である。

「そうそう、まだ肝心な事聞いてなかったわ」

そう言つて、体格の大きい男に近寄る。

どうやら、彼だけは肩から上までは凍らなかったようであった。

「離せ！今すぐこの氷を解かせ！！」

「質問に答えて。あなた……『紫の水晶』って知ってる？」

ダブリューは鋭い視線で体格の大きい男に尋ねる。

「知らん！そんな物！とにかく離せ！！」

「あつそ。じゃあいいわ。またね」

そう言つてダブリューは洞窟の奥へ進んで行つた。

「ま、待て！帰るならこの氷も解かしていつてくれ！頼む！頼むから勘弁してくれええ！」

男の悲痛は乏しく洞窟内に響いた。

2時間後、警察がやって来て、違法アイテムの密売グループを逮捕した。

そしてゼットは、ダブリューと別れ、何とかオツキミ山を出た。

「やっと出られたぜー！もうすぐ、ハナダシティだ！よし、皆！張り切つて行くぞーっ！！」

モンスターボールの中で、ポケモン達は頷き、一行はハナダシティを目指す。

第13話 「ゼットの過去！マサラタウン豪雨の事件！」

現在、ゼット達はオツキミ山を抜けていた。

オツキミ山は少々、大きな山なので全員、オツキミ山の通路の洞窟から出られて、内心ホツとしていた。

もう、太陽の光を一生浴びられない事かとゼット達は何度も思っていた。

そして、遂に念願の太陽の光がこうして浴びられている事にゼット達は改めて感じていた。

「太陽が出ている！俺はこうして光を浴びているんだ！！」

当たり前の事をゼットは叫ぶ。

確かにずっと暗い所にいたら、太陽の光を浴びたくもなるだろう。太陽の暖かさを、ゼットは改めて思い知らせられた。

「こうしていると気持ちがいいな！！」

「ピッカチュウ！！」

「ウォーン！！」

「ゼニゼニ！！」

ポケモン達も太陽を目一杯浴びていた。

ゼットも太陽を見た後、50m先に広がるハナダシティを見やる。

「もうすぐハナダシティだ！急ぐぞ皆！！」

ポケモン達もはしやぎながら、ハナダシティへと走っていく。
ゼットもポケモン達と走ろうとしたが、道端に白いブレスレットが
落ちているのに気が付いた。
それを見たゼットは自然と走る速度を落とし足を止めた。

「ブレスレット……か」

ゼットはブレスレットを拾って、どこか懐かしげにブレスレットを
見つめる。

「そついや……あんな事もあったな」

ここはマサラタウンの一角にある小さな廃ビル。
看板には錆びれてはいるが、「立ち入り禁止」と書いてあった。
そんな場所にまだ幼い、複数の子供がいた。

「行けえ！ニドラン、『突付く』だ！！」

廃ビルの3Fでポケモンバトルをする2人の7歳ぐらいの少年がいた。

周りにはそれを見物する子供達もいた。

「避けて、『泣き声』！！」

ニドランの♂の攻撃を避けながら、黄色の鼠の様なポケモンは泣き声を放つ。

ニドランはその声に頭を抱え、そこに隙が出てしまった。

「今だ、『尻尾を振る』で叩け！！」

尻尾を振るは本来サポート用の為に使用する技なのだが、一応こう言う使い方もある。

ニドランは隙が出たせいでそのトレーナーの少年の指示を聞きそびれてしまい、黄色の鼠のポケモンの尻尾に叩きつけられた。

横に吹っ飛ばされ、ニドランは目を回して倒れる。

「ああ！ニドラン！！」

「戻れ、ピカチュウ！へへーん！これで10連勝だな！！いい加減諦めたらどうなんだ？」

白い服を来た少年は黄色の鼠のポケモン……ピカチュウを戻し、少年に向かって強気に言う。

しかし、もう一方の少年もニドランを戻し、白い服の少年に宣言する。

「フン！まぐれに決まってるさ！次こそは勝つ！！」

「まぐれ、まぐれって……何度言わせりや分かるんだよ！俺はお前に10回勝ってたぞ！なのに、お前は1回も俺に勝った事がねえじゃねえか！！そろそろ、俺よりポケモンバトルが弱い事を認めたらどうなんだよ、サヤト！？」

白い服の少年はもう一方の少年……サヤトに言いたい事を言った。これに怒ったサキは白い服の少年に言い返す。

「うるせえ！この俺がポケモンバトルでお前に負ける訳にはいかねえんだよ、ゼット！お前はマサラでは強くても他の町では負けたじゃねえか！！」

サヤトは白い服の少年……ゼットに数日前、トキワシティにこっそり行った時、そこにいたトレーナーに負けてしまった時の事を言う。それには一番触れて欲しくなかったのか、ゼットはさらに怒って、さらに激しい口論になった。

「あゝあ、またこれだよ」

「戦ってゼットが勝つ度に2人共、口論するんだから……」

「喧嘩する程仲がいいって事でしょ？」

「「よくない!!」」

さつきまで揉めていた2人だが、その言葉を聞いて同時に否定した。

「仕方ねえ、明日の昼3時にまたここに集合だ！最後の決着を着けてやる！この勝負で俺が勝ったら、俺の勝ちだ!!」

「おもしれえ！望むところだ!!」

両者、睨み合って廃ビルを降りていった。

「最後かぁ……。また来よう！」

「私も!!」

ギャラリーの子供達も廃ビルを降りていった。

そして、帰り道……ゼットは明日の勝負の事を考えていた。

「（最後になるからな。サヤトの奴も、何か考え込んでもに違いねえな）」

10回も負けて、最後と言ったのだ。
今までのゼットの行動パターンを予測して攻撃してくる筈だろう。

「（ま、俺が勝つに決まってるし、そう深く考えなくてもいいだろ！）」

ゼットはそんな事も忘れ、自宅へ帰っていった。
そしてそれから翌日……。

「ん……ふわああ、よく寝たあ……」

気力の無い声でそう言うゼットだった。
傍で寝ていたピカチュウも目を覚まし、気力の無い声を出す。

「そう言えば、今何時だ？」

そう言うてゼットは目覚まし時計を見る。

時計の短い針は東を指して、長い針は北を指す。

ゼットのその臃げな目が完全に覚醒するまでそう時間は掛からなかった。

「3時だとおおお！？」

ゼットは大声を張り上げ、愕然とする。

「やべえ！時間がねえじゃねえか！！」

「ピカ……？」

「お前も急ぐぞピカチュウ！！」

あたふたしながら、ゼットは着替える。

服の前後が逆だったり、持っているのがモンスターボールじゃなく野球ボールだったり、いろいろ慌ててはいたが、何とかピカチュウのおかげで早く着替えられた。
そして、階段を高速で下り、リビングに出る。

「あら、ゼット？もう出かけるの？」

「今、急いでるからご飯はいらない！行ってきましたー！！」

「行つてらっしゃい」

と、言いつつもしっかりパンを口に入れてから玄関のドアを開けて外に出た。

玄関から出た後、例の廃ビルを探す。

「あ、あれ？あのビル、どこだっけ！？あゝ、時間がないつてのに！！」

ゼットは頭を抱えるが、迷っている暇はないので、右の道へ進んで行った。

すると、左から子供達がやって来る。

「あ！あれゼットじゃない？」

「本当だ。どこ行くんだろ？」

「ビルはこっちなのにな」

子供達はそう言った後、また歩き出していった。
その頃、ゼットは見当違いな所に行っている事すら知らずに、走っ

ていった。

「くっそお！ビルが見つからねえ！！」

「あれ？ゼット？」

すると、前の廃ビルでバトルを観戦していた、子供がゼットに話しかけてきた。

ゼットは今までの経緯を子供に話しながら歩いていた。

「そうだったんだ。実はこっちも大変だったんだよ」

「大変？」

「サヤトがビルでゼットを待っていた時に、観戦していた子がやって来て、その子のお母さんから貰った大事なブレスレットをどこかに落としちゃって、今捜してる最中なんだ」

サヤトはその子供の知り合いだったので、頼みを断る事が出来なかったとか。

なので、ゼットとのバトルの約束は忘れて、現在探している最中だが、中々見つからないらしい。

「そうか。俺も探すの手伝うぜ」

「助かるよ」

「さて、まずはどこを探そうかな……」

ゼットと子供はいろいろな所を捜してみたが全然見つからなかった。

いろいろな人達にも、ブレスレットの事は全く知らないらしい。
無くした本人に、どこで無くしたのかを聞いてみるが、知らない内に無くなっていたと言う。

せめて、どこを通ったのかも聞いてはみたが、あまり覚えていないとの事。

最終手段として、同じ物を買おうと言う考えが浮かんだが、形状も分からないブレスレットなど、買える訳も無い。

最早、お手上げ状態なので、どうしようも無かった。

「はあ……結局、見つからなかったなあ」

「白いブレスレットって言うのが唯一の手掛かりなんだけど……それだけじゃ手掛かりが少なすぎるよ」

「そうだよな……」

2人は溜息を漏らしてトボトボと歩く。

そんな事をしている内に、廃ビルに着いてしまった。

ゼットは中に入って、3Fに辿り着いたが、サヤトがいなかった。

「あれ？サヤトはどこだ？」

「あ、ゼット！-」

その場にいた子供達は全員ゼットを見る。

「実は……」

その子供達が話した内容によると、こうだった。

その頃、子供達が辺りを捜していたが、一向に見つからずにいた。

白いブレスレットと言っても、大きい小さいがあつて、どれがどれなのか分らない。

もう、諦めるしかない。手掛かりがあまりにも少なすぎたのだ。これ以上探しても恐らく見つからないだろう。

そう思っていた中、サヤトは何かを思い出したのだ。

それは、川辺でブレスレットらしき物を見たと言つ事だった。

少しでも可能性があるのなら、と思つてサヤトはその川へ行つてしまった。

「そう言つ事か。それじゃあ俺も……」

すると、ゼットの鼻に水滴が落ちてきた。

水滴は肩にも落ちて、それはどんどん落ちていった。

「やべえ！降つて来やがつた！！」

「おい、確かその川つてここから西にあるあの川だよな？」

ゼットは子供達に尋ねる。

「ああ、そうだけど……つて行くの！？」

「当たり前だ。あいつ1人だけに行かせる訳にも行かねえだろ」

「でも、雨が降ってるから川は荒れてるだろうし、危険だよ！」

「んな事言つてられるか！！」

「あ、待て！」

ゼットは子供達の忠告を無視し、雨の中を走り去っていった。出口から出た後、真っ先に西へ向かって行った。

ビルにも天井の穴から雨が入ってきたが、それと外の雨は全く違った。

全身が濡れ、一つ一つが冷たく、身に沁みて来る。

雨は最初よりも、だんだん激しくなり、だんだん身体がそれに適応する様に、冷たくなってくる。

服が雨に濡れるが、今はそんな事気にしていなかった。

「待つてろ……今行くからなあっ！」

雨の音でそれは掻き消されるが、必死に叫んだ。

本人には伝わらなくても叫び、叫んで、叫び続ける。

雨はさらに激しくなり、走る気力を削がせる。

しかし、その度に歯を食い縛り、無理やりにでも体を動かす。

服は全身に濡れて身体に張り付き、雨の重さが一気に押し掛かる。

「ぐっ……！！」

最早、雨は止む気配を全く見せない。

睨に水が入り込んで、目が染み、反射的に目を瞑ってしまう。

しかし、ゼットはそれでも走り続ける。

あれから、何km走ったのか……ゼットは全く頭に入っていないかった。

親友が危険だと言うのに、それを黙って見過ごせる程、ゼットは冷静じゃない。

「もっと……もっと速く……」

雨に打たれる度に、走る速度が遅くなっていくのを感じた。

ゼットはもつと速く走ろうとするが、そう思う強さに比例して、どこまでも雨は激しくなる。
走る度、疲労は溜まっていく。

「うわっ！」

遂に疲労が限界を達したのか、ゼットは倒れてしまった。
こうしていると、全く疲れを感じない。
走っている時はあれだけの疲れを感じていたのに、今は全く感じなかった。

このまま雨が止むまでここにいれば楽だろう。
だが、それは親友を見捨てる事になる。
では自分は何の為にここに來たのだろうか……そう思うと、ゼットは拳を握り締め、立ち上がった。

「早く行かねえと……！！！」

そして、今まで霞んで見えなかった前を見る。
すると、そこは川だった。既に、ゼットは川に着いていたのだ。

「サヤトの奴はどこだ……？」

先程までの疲労はどこへ行ったのか、目的が目の前にあると分かった今、不思議と息が整う。

しかし、サヤトの姿は全く見えない。
少し、川に近づいて様子を見ると、川の中で岩に捕まったまま、そこから動けないでいるサヤトの姿があった。

「サヤト！」

「ゼットか……」

「大丈夫か!？」

「この状態で大丈夫だと思うか……?」

現在の状態は、濁流の川の真中辺りにある岩にしがみ付いている状態である。

この川は大きいので、ゼットからサヤトまでは約5m離れている。無論、そこまで離れていては手を伸ばしても届かないだろう。

「ど、どうする……?」

「貴様、ポケモントレーナーだろう?」

すると、後ろから声がしたので、びっくりして振り返る。

そこには黒いスーツを着た、男が立っていた。

「そ、そうだ!あいつを助けてくれ!このままだと不味いんだ!」

「ポケモントレーナーならば、ポケモンの力を使って助ければいいだろう?」

「そんなのポケモンレンジャーのやる事だろ!?いいからあいつを助けてくれ!!」

必死にゼットは男に助けを頼むが、男は冷酷な目でゼットを見たまま助けようとはしない。

その目から時折出る、底の知れない威圧感と深い闇に押し潰されそうになるが、負けじとゼットも言い返す。

「ひ、1人じゃ助けられねえよ！だからこうして頼んでるんじゃないか……！」

「もう1人いるだろう」

「もう1人……？」

すると、モンスターボールが勝手に動き出し、そこからピカチュウが出て来た。

ピカチュウはゼットを真剣な目で見る。

「ピカチュウ……」

「ピッカ」

「……分かった！よし、やるぞ！ピカチュウ……！」

「ピカ……！」

ゼットの問いに、ピカチュウは頷く。

「これを使え。少年」

黒スーツの男はゼットに『穴抜けの紐』を手渡す。

『穴抜けの紐』はダンジョンなどで脱出する時に使うアイテムである。

ゼットは驚きながらも受け取り、ジッと『穴抜けの紐』を見つめる。

「一体、これを何に使えって……あれ？いない……」

この紐の使い道を聞こうと男に目を向けようとするが、そこには既に誰もいなかった。

しかし、今は男を捜している暇は無い。

「何とかこれを利用する方法を考えないと……」

「ピカア」

「どうしたんだ、ピカチュウ？」

すると、ゼットの近くに、大理石で出来た頑強な橋があった。橋はサキのすぐ近くにあった。

「（大理石なら堅いよな……ならこの紐を使えば……！！）ピカチュウ、今から俺の言う事を聞け！！」

「ピカツチュウ！！」

ゼットはピカチュウに作戦を説明した。そして、行動に移った。

ゼットは『穴抜けの紐』を持って、大理石の橋へ移動した。

橋の両端の中間部分にある丸いオブジェのような物に『穴抜けの紐』を巻き付ける。

そして、ピカチュウは『穴抜けの紐』の先端近くの部分を歯で噛む。

「行くぞ、『電光石火』！！」

ピカチュウは凄い勢いでサヤトのいる所へ突っ込み、何とか岩に飛び乗った。

「よし！サキ、まだ動けるか！？」

「ああ、何とかな……」

息絶え絶えのサヤトはその質問に答える。

「ピカチュウ、頼むぞ！！」

「ピッカ！！」

すると、ピカチュウは持ってきた紐をサヤトの腹から背中へと巻いていく。

二重に巻いた後、ピカチュウは器用に紐を固く結ぶ。

「（いつも、母さんの手伝いをさせてた甲斐があつたな。）それじゃあ、引っ張るぞ！！」

サヤトとピカチュウは紐に捕まる。そして、ゼットは紐を力いっぱい引っ張った。

流石は『穴抜けの紐』と呼ばれるだけの事はあつて、一人一人乗せても契れない固さを持つ。

「もう少しだぞ！頑張れ！！」

サヤトは手を伸ばす。ゼットも手を伸ばし、残り数cmになった。するとゼットは、紐が少し細くなっているのを感じた。

「もうちょっとだ……！！」

しかし、あと3cmの所で紐が契れてしまった。

その瞬間、紐に掛かっていた重さが嘘のように一瞬で消えてしまった。
人一人は持ち上げられても、+ポケモン一匹は持ち上げられなかったのだ。

「ああっ!!」

空中に浮き上がり、サヤトの頭の中ではスローペースで落ちていく最早、ここまでと思われた……だが、ゼットは全く諦めてはいなかった。

ピカチュウは待つてましたとばかりに、上を向く。

「『電光石火』 あああっ!!」

ゼットの指示と共にピカチュウは空中での電光石火を発動した。空中では高速で移動出来なくても、その勢いだけは受け継がれる。電光石火をサヤトに放ち、自分も浮き上がる。そして、サヤトはゼットの手を掴んだ。ゼットとピカチュウとサキは橋に倒れ込む。

「はあ、はあ…… やったぜ!大成功だ!!」

「そうだな。……ほらよ」

「これは、例のブレスレットか!へへへ、やっと見つかったな」

そうやってゼットは喜んでいると、サヤトから白いブレスレットを渡された。

捜し物が見つかった事も含めて、ゼットは大喜びした。

「この勝負……お前の勝ちだな」

「何の事だ？」

サヤトは手をゼットに伸ばし、よく分からないままゼットはそれを握り返して、立ち上がる。

そんな2人を祝福するかのように、さっきまで雨が降っていた雲の隙間から光がいくつも差し込む。

「雨、止んだな」

「そうだな」

空を見た2人はそう呟いた……………。

「結局、あの事件を切っ掛けに、親父の厳しい修行を受け始めたんだっただっただっ……」

ゼットは丘で遊ぶピカチュウ達を見ながらそう言った。

「……にしても、あの紐をくれたおっさんは何者だったんだろう？」

ゼットは『穴抜けの紐』をくれた、黒スーツの男を思い出す。

「まあ、いいか。カントーを回ってればいつか会うと思うし、その時にお礼を言えればいいか！」

持っていた白いブレスレットを置いて、先に行ったピカチュウ達を追いかける。

「おーい、お前等！次のバッジ目指して行くぞー！」

「ピカー！！」

「ワン!!」

「ゼニ!!」

ゼット達はジムバッジを手に入れられるのか？次回、観光＆探検シリーズに続く。

ここは脱水の街、ハナダシティ。

嘗て、「水の街」と呼ばれて、水には全く困らない程に富んでいた。しかし、ある時を堺にハナダシティの水が急に止まってしまった。原因は、2週間前にハナダシティに入ってくる水の出入り口に造られた、謎の黒いダムであった。

しかし、ダムはダムだが、問を開く為の開閉スイッチが、修復不能までに破壊されていたのだ。

結局、唯一の水の出入り口であった、場所が閉ざされてしまった為、やがて水も無くなり、地面は乾き、街は衰退していった。

他の街は最大の水の供給源であった、ハナダシティの水が無くなってしまった為に、水不足に陥っていた。

しかし、ジムリーダーを始めとする、街のポケモントレーナー達が立ち上がった。

ポケモンを使って、壁を壊そうとするが、これが全くびくともせず、諦めずに2週間が経ってしまった。

そして、現在……ゼット達はこの街に来ていた。

「この街がハナダシティかあ。噂通り、地面が乾涸びてんな……」

ゼットは辺りを見ながら、そう呟く。

地面は乾き切っていて、水の都を見た事が無くても、水が盛んだった頃の面影など皆無に等しい事など一目瞭然であった。

と、ここでゼットは一言。

「さて、いつものあれをやろう！」

「ピカ？」

ピカチュウ達は首を傾げる。それもそうだろう。

ピカチュウ達は、ポケモンセンターで寝ていたので知らないからだ。

「第2回観光&探検シリーズ！ in ハナダシティ！！」

そう、ニビシティの際にもやっていた、ぶらつきながらの観光巡りである。

ゼットはそれをまた飽きもせず始めていた。

そして、ピカチュウ達はただその叫びを呆然と聞いているだけであった。

「まあ、要するに街の観光名所を辿って、それを見ていくって事だ」

ゼットは何も知らないピカチュウ達に教える。

納得したピカチュウ達は、満面の笑みを浮かべて大喜びした。

自分達の住んでいた所とは違う、人間達の住む場所の紹介をしてくれるのだ。

好奇心旺盛な彼等にとっては、とても楽しい企画だろう。

「よし、まずは最初の場所だ！！」

……と言って、ゼットは意気揚揚と歩いていく。

まず最初のスポットは……と言うより、この街全体の事だ。

「まず最初は、乾いた大地。「水の街」の片鱗すらも無くなってるな」

「キューン……」

ハナダシティで見るべき場所はまず、この乾いてしまった大地だ。草木よりも、大地が前に出ている所から見て、まず間違いないだろう。

最近はずらも降らなくなり、僅かに出ている植物も水が足りなくて枯れていた。

雨が降らないのは、最近ニュースでやる異常気象が原因だろう。

1ヶ月前まで、雨が何日も何日も続き、最近日照り日照りの連続。カントーでは、そんな天気予報を完全に無視した、異常気象が続いていたのだ。

ハウエンのお天気研究所によると、何か別の大きな力が原因とされているが、詳しい事は分からない。

「何かこう見ると……虚しいな」

「ピイカ……」

「ワン……」

「ゼニ……」

ゼット達は、この光景を見て溜息を吐いた。

ここまで広く荒れていると、どこか虚しく感じてしまうのは気のせいだろうか……。

ゼット達はあまりにも虚しかったので、何か無いかと辺りをぶらついてみる。

「そ、そうだな……ここまで広いと、遊びやすいよな？な？」

「ぜ、ゼニィ！ー！」

「いろいろと出来そうだよな……?」

すると、ゼットは目の前の民家に子供2人と母親がいるのに気づいた。

少し会話を聞き入る事にした。

「ねえねえ、母ちゃん。喉渴いたよ」

「俺も俺も!」

「はいはい、すぐ汲んで来るから、外で遊んで待ってなさい」

母親は子供達にここで待っているように言った。
すると、子供達はその言葉に反論した。

「嫌だよ!前も30分くらいここで遊んで熱中症になった友達がたくさんいたもん!」

「中には脱水症を起こしたって子もいたらしいよ!」

「そうね……。じゃあ、部屋で遊んでなさい」

「はい!」

そうして、子供達は元気返事をして、部屋の中に入ってしまった。
母親も忙しそうに、上流まで足を運んでいった。
そして、その様子を見たゼット達は……。

「……………」

「「「……………」」」

「……次、行くか」

ゼットの問いに、ピカチュウ達は同時に頷く。

ゼット達を見た民間人は、この大地以上に虚しいオーラを感じたとか。

そして、次に向かったスポット、それは……。

「自転車屋！」

それしか無かったのだろうか、ゼットが苦し紛れに言っているように見える。

前の時も、街を探検してたら、観光名所っぽい所を見つけたから行こう、と言う計画性の無い観光だったのだ。

今回もその方法で探していたが、中々見つからずに、仕方無くここを選んだと言う訳である。

ゼットは店内に入り、自転車をポケモン達に紹介していく。

「ここはいろんな自転車が取り揃えられてるな……」

普通の自転車から、電気自転車まで選り取り見取りだ。

ピカチュウ達は興味深そうに自転車を見ていく。

すると、ピカチュウがゼットのズボンを引っ張る。

「どうした？」

ゼットが気が付くと、ピカチュウは電動自転車を指差す。

電動自転車は最新式の全く新しい自転車で、ペダルを漕がなくても

勝手に動くと言う物である。

電気ポケモンのピカチュウにとって、何か共感出来る部分があったのだろう。

「……で？ピカチュウ、これをどうしろって言うんだ？」

ピカチュウはキラキラとした瞳をゼットに向ける。

これは、子が親に何か物を遠まわしに強請る時の目であった。

ゼットも親に強請る時はいつもこの方法をしていたからよく分かる。ゼットは諦めて、溜息を吐く。

「はあ、仕方ねえな………すいません、これいくらですか？」

「1000万円になります」

「高っ！もうちょっと安く出来ないんですか？」

流石最新式なのか、とても高いようだ。

今、ゼットが持ち合わせている金とは比べ物にならなかった。

「そうですね……999万9999円で手を打ちましょうか？」

「殆ど変わりませんよ！1円引いただけじゃないですか！！」

「ですが、これ以上は引きようがありませんし………」

「そうですか………だとよピカチュウ？」

「ピィカ………」

そう言うと、ピカチュウはしょんぼりして、他の自転車を見ていった。

……見ているコーナーは全て電動自転車だが、根は全く諦める気は無いらしい。

「あいつ……安いの探そうとしてるな……ん？」

すると、今度はガーディとゼニガメがゼットのズボンを引っ張る。この2匹も何か欲しい物があるらしい。

元々、自転車は必要だったし、値段によっては買ってやらない事も無い。

勿論、自転車に乗るのはゼットだが。

「こいつは……マウンテンバイクか」

ガーディとゼニガメが選んだのはマウンテンバイクだった。

説明文には、『速度も快適で早く、どんなに凹凸した道でも軽々と越えて行ける。山道、舗装整備のされていない道路、そして……あなたの複雑な悩み、思いも！』と、最後を強調して書いてあった。

ゼット達には、我ながら上手い事を言った、とほくそ笑む店長の姿が容易に想像出来た。

「まあ、確かにこう言うのはこの先、必要になりそうだな」

「ピカピッカ！」

「ハフハフ！」

「ゼニガ！」

ピカチュウ達はうんうん、と今すぐ買ってくれと言わんばかりに頷く。

ピカチュウも、先程の悲しみはどこへ消えたのか、マウンテンバイクの所まで来ていた。

ゼットはピカチュウ達に煽られ、決心した。

「よし、これを買おう！」

ゼットの決意に敬意を表すかのように喜んだ。

ゼットはこのマウンテンバイクの値段を店員に聞く。

「あゝ、これはいくらしますか？」

「50万円です」

「あゝ、ちょっと足りないな……」

しかし、その言葉によって、ピカチュウ達のテンションは天から地に落ちたように一瞬にして変わった。
ゼットも少し落ち込んでしまう。

「ですが、自転車の『引換券』があれば無料でお買い上げが出来ますよ」

「『引換券』？」

「はい。このハナダシティの誰かが持っていますので、その人にお譲りして貰うしかありませんね」

「ああ、別にいいです。俺達帰りますんで……」

ゼットは気力の無い声で店員に言う。

そうして、ゼット達はトボトボと歩きながら、自転車屋から出て行った。

そして、ゼットは溜息を漏らす。

「マウンテンバイク……欲しかったな」

「ピカ……」

「ワン……」

「ゼ二……」

ゼット達はテンションの下がったまま、次の観光スポットへ向かって行った。

最早、観光スポットの欠片も無いが。そうして、着いた次の場所は……。

「橋だな……」

そう、次のスポットとは、直線上に伸びている長い橋の事であった。少し黄色掛かっている程度で、長さ以外はこれと言って何の変哲も無いただの橋だった。

「……………次行こう」

ゼットは呆れながら、他の場所を探そうとした。すると、先程の橋に青い服を着た男が橋を睨むように見つめ、立っていた。

「何だ……?」

「……………」

男からは凄まじい気迫を感じ、ゼット達には静かな緊張感が走る。すると、男の足元に『金の玉』が転がって来た。

男はそれを取り、今以上にそれを睨んだ後、橋に『金の玉』を投げる。

「一体何を……!?」

ゼットにはあの気迫から、何か物凄い事をやるのではないかと思っていた。

『金の玉』が橋に落ちて、少々転がると止まった。

そして、男はカツと目を開き、転がった『金の玉』を見る。

ゼットの緊張感は最高潮にまで達する。

「……………ん?」

「……………」

しかし、何をするでも無く、『金の玉』に近づいてそれを拾う。

「この橋の名は、ゴールデンボールブリッジだ!」

「……………へ?」

男の叫びにゼットは素っ頓狂な声を上げる。

それに気づいた男は、影から見ていたゼットを見る。

「えっと、君は……？」

「ゼットだけど……ここで何をしてたんだ？」

「ああ、実はこの橋の名前がまだ決まっていなかった事に気づいてね。ここで名前を考えてただけど、すぐ近くに『金の玉』があったものだからさ、こんな珍しい物がこんな所に落ちている訳が無いでしょ？だからこれは偶然じゃなく、必然だったのかも知れない。そう思っただけで名前が、ゴールデンボールブリッジさ！どうだい？いい名前だろう？」

「……そうですね」

先程の緊張感は一切何だったのか……ゼットは皮肉を込めて、棒読みでそう答えた。

しかし、その目は明らかに俺の冷や汗と緊張感を返してくれと訴えかけている。

「そうだろう？それなのに、周りからはネーミングセンスが無いって馬鹿にされるんだ？全く、酷いもんだよ」

「そうですね」

「それにさ、僕が付けた名前は全部仲間達が付けちゃった。まず、人の意見を聞いてから判断して欲しいものだよ」

「そうですね」

「最近の僕考えた名前すら言わせて貰えない始末さ。一度皆に名

前が何たるかをみっちり教えないとね。君もそう思うだろう?。」

「そーですね」

「うんうん。ゼット君はよく分かってるね。ちょっとあいつ等を甘やかし過ぎたのが悪かったかな?そろそろジムリーダーとしての威厳を見せつけた方がいいかもしれないな」

「そーですね……………ん?ジムリーダー?」

ゼットは今の男の言葉から出て来た、ジムリーダーと言う言葉に反応した。

ゼットの反応が変わったのに気づいた男は快く答える。

「そうだよ。僕がこのハナダシティのジムリーダーのアサトだよ」

「ええええええええええ!!?こんな昼間っから仕事ほっぽって橋に名前なんか付けてる暇人が!?!」

「失礼だな。ちゃんと仕事はしてるよ。ただ、ジムへの挑戦者が来ないからここにいてるだけだよ」

どっちにしてもジムを別の者に任せている時点で、仕事を投げ出している暇人である事は間違いない。

ほら、と言ってポケモン協会公認のジムバッジ、ブルーバッジをゼットに見せる。

本当ならば、そんな大事な物をやたらに人に見せるような事はしてはいけないのだが、これを見てはアサトがジムリーダーだと信じるしか無かった。

「マジかよ……。ジムリーダーって、もつと厳つい感じの奴等かと思ってたのに……」

「実際は全然違うんだよ。特にカントーには個性的な面子が多くて、お嬢様や科学者の人、凄く綺麗な人、熱血な人、ロック好きな女の子、格闘家の人、さらには幽……。あ、いや……。と、とにかくいろんな人達がジムリーダーになってるんだ」

アサトは最後の辺りを口籠もったが、思い出したくも無さそうな顔をしていたので、言及はしなかった。

アサトの言う、熱血な人……とは恐らくテツマの事だろう。

ゼットはどんな性格の人物でもジムリーダーにしてしまっ、ポケモン協会の寛大さを改めて知った。

そして、目の前にジムリーダーがいると分かれれば、頼む事はたった一つ。

ゼットはアサトに話し掛ける。

「へえ……。じゃあ、今ってジム開いてるよな？」

「勿論、前は出張で出てたけど、今は問題無いよ」

「それじゃあさ、俺とジム戦してくれねえか？」

「ええええ！！？いいの！？夢じゃないよね、これ！？」

アサトはゼットの発言に驚きを隠せず、頬を抓って夢じゃない事を確認する。

一体、どれ程ジム戦が来ていなかったのだろうか。

「ああ、何て良い日なんだ！挑戦者が2日連続でやって来るなんて

「!!」

「2日連続って……誰が来たんだ？」

「エックス君って言う、君と同じくらいの年齢の子だよ。まあ、僕は負けちゃったんだけどね」

エックス……ゼットは2番道路で戦った凄まじい実力の少年を思い出す。

最後はピカチュウVSデルビルの一騎打ちだったが、引き分けてしまふ。

その後も黒服の男達を倒す為に協力したりした、ゼットのライバルである。

「あいつもここに……!!」

「あれ？知り合いだったのかい？」

「ああ、ちよつとな……」

エックスの事を思い出すと、ゼットの手は震える。

ゼットのこの震えは「恐怖」では無く、「武者震い」だった。

エックスがこのジムリーダーを倒し、先に進んだ。

エックスはアサトを倒した……ならば、次はゼットが戦う番だ。

ジムリーダーを倒し、遅くてもいつか追い付く……。

ゼットはそんな事を心の中で決意した。

そうこう思いを巡らせている内に、ゼット達はジムに着いた。

「ここがハナダジム。さあ、入ろう」

「……ああ！」

ゼットはジムの扉を開き、その中へ入っていく。
これから始まる戦いに気を引き締め、バトルフィールドへ足を踏み入れる。

「ここは……水のフィールド？」

ゼットの出たそこは、一面水で覆われた足場の少ないフィールドであつた。

同時に、それは水タイプに有利な水中戦の出来るフィールドでもある。

辺り一面を見回して、ゼットはすぐに気づいた。

このハナダジムの専門のタイプが何のタイプかが。

「まあ、予想はしていたけどな……」

「へえ、驚かないんだね」

「元々ここは「水の街」って呼ばれてたんだろ？ だったら普通気づくだろ」

「そうだね。一応、改めて言わせて貰うけど、このジムのタイプは水タイプ。僕はそのジムリーダーを勤めてるんだ」

そう、このジムの専門は水タイプだ。

アサトの表情は最初に会った時のだらけ切った顔では無く、ジムリーダーとしての顔になっていた。

この男が何故、ジムリーダーと言う事が漸く頷けた。

今のアサトの眼には、計り知れない威圧感が宿っているからだ。

バトルフィールドは緊張感に満ちていく。

「えー、これより、ハナダシティジム戦を始めたいと思います。使用ポケモンは3体のシングル形式です。挑戦者、マサラタウンのゼット！」

「いつでもいいぜ！」

「ジムリーダー、アサト！」

「本気で行くよ？」

「それでは……試合開始！！！」

審判は、戦闘開始の合図である旗を振り下ろした。
そして、激闘のジムリーダー戦は今、始まった……………。

第15話 「ハナダジムの激闘！超音波とスピードスター！！」

ここは言わずと知れず、ハナダシティである。

現在、この街のジムである、ハナダジムでポケモンバトルが行われていた。

勿論、戦っているのはゼットとアサトである。

ゼットはガーディを、アサトはタマンタをボールから繰り出していた。

「へえ、水タイプと知りながら炎タイプで応戦するなんてね。何か作戦があるのか、それともただの無鉄砲なのか……」

「バトルに相性もへつたくれもあるか！最後に勝つのは、最後までポケモンを信じぬく者なんだよ！！」

「フフフ……それもそうだね。でも……それだけじゃ、僕は倒せないよ！『バブル光線』！！」

タマンタは口から無数の泡をガーディに放つ。

ゼットは横に回避を指示しようとするが、バブル光線の泡は全て同じ方向に行かず、その中の幾つかが次第に分裂していき、バブル光線は満遍無く広がった。

そのせいで足場全域に泡が広がり、左右に避けられなくなる。

そして、バブル光線はガーディにさらに近づいて、攻撃が当たりそうになる。

「泡をよく見ながら避ける！」

ガーディはゼットの指示で泡を凝視し、素早い動作で無数の泡を避

けていく。

そして、避けながら発生源であるタマンタに近づいていった。

「速い!!」

「よし、近づいてきた!」

ガーディとタマンタの距離は凡そ1mだ。

ここぞとばかりに、空かさずゼットはガーディに指示を送る。

「今だ!『炎の牙』!!」

「地面に『翼で打つ』!!」

炎タイプには然程警戒しなくても問題は無いだろう。

だが、牙を喰らうのはタマンタにとって、手痛いダメージになるだろう。

咄嗟にアサトは指示を出し、翼で撃つの勢いを地面に叩きつけ、自身を後方に吹っ飛ばした。

タマンタは後ろの水中に背中から飛び込む。

「咄嗟にあんな行動を取るなんて、普通のトレーナーじゃ出来ねえ芸当だぜ」

「1つ聞いていいかい？」

アサトは神妙な顔付きでゼットに質問する。

「最初の攻撃を何で回避したんだい?『火の粉』などで打ち消せばいいものを……」

「何だそんな事が……お前、『バブル光線』に水を仕込んでただろ？」

「やっぱり気づいていたんだね……」

そう、あのバブル光線全てには水が仕込まれていた。

バブル光線があそこまで近づいている時に、火の粉でも使ったりしたら、その瞬間に水の応酬を喰らうだろう。

普通の泡ならば、水の重さなど耐えられずに落下して消えるが、バブル光線は違う。

膜が柔軟で地面に落ちても割れなく、空気中に形を形成して割れるまでの時間が普通よりも長い。

だからこそ、ただの泡にも威力があるのだ。

「いつ気づいたのかは知らないけど、これで君も中々の実力者だと言う事が分かったよ。でも……」

「!？」

すると、ガーディの後方の水中から、タマンタが飛び出していた。既にタマンタは口に水のエネルギーを溜めていた。バブル光線だ。

「少し、お喋りが過ぎたようだね」

「せけえぞ、お前!!」

「これも1つの戦法さ。『バブル光線』!」

「くっ……『火炎車』を背中に集中しろ!!」

ガーディは咄嗟に火炎車によって、体内から溢れ出る炎を背中に見集中する。

ガーディはタマンタのバブル光線を背中から全て受け切り、立ち上がる。

「何とか指示が間に合ったな……」

「成る程。『火炎車』を盾にして水の威力を少しでも下げたのか。少しは出来るみたいだね」

アサトはゼットを見て薄く笑みを浮かべながらそう言った。ガーディは何とか攻撃に耐えたが、少し辛そうだ。

「次はこっちから行かせてもらっぜ！『炎の牙』！！」

「避けるんだ！」

ガーディは背後に立っているタマンタに炎の牙を放つ。しかし、タマンタはその攻撃をするりと抜け、ガーディの腹部に近づく。

「腹ががら空きだよ？『頭突き』！」

タマンタは腹部に頭突きを咬まして、上空へ吹き飛ばす。しかし、攻撃はこれだけでは終わらない。

「『バブル光線』！！」

タマンタは、上を向いてバブル光線を放つ。

バブル光線はゆっくり、ガーディに近づいていく。

「『火の粉』！！」

しかし、ゼットはこれに火の粉で対抗する。

2つの攻撃は幾つも当たって水蒸気を引き起こした。

そこから吹き出た水蒸気はバトルフィールドまでやって来る。

「しまった！」

アサトはタマンタが見えなくなり、どこにいるのかを探す。そして、見つけた。

タマンタは水中近くの足場に立っていた。

アサトは安心するが、ここで異変に気づいた。

敵である、ガーディがこのバトルフィールドから消えていたのだ。

「どこだ！？一体どこに……！！」

アサトは周りを見渡すと気づいた。このフィールドに4つ、地面に岩がある事を。

そして、その岩の中の1つの影に明らかに不自然な影がある事を。

アサトはニヤリと笑みを浮かべ、タマンタに指示をする。

「ガーディはそこだ！『頭突き』！！」

タマンタはその影に突っ込んでいく。それが罠だと言う事も知らずに。

「掛かったな！『炎の牙』から『火炎車』！！」

しかし、ガーディは予想を裏切り、その横の岩の影から姿を現した。アサトはタマンタに指示を出す、その前にガーディの攻撃が直撃し、後ろに吹き飛ぶ。

「馬鹿な！じゃああれは……！？」

そうして、先程タマンタに指示した場所には、ゼットのリュックがあった。

「リュック……？」

「そうだ。俺は水蒸気でフィールドが包まれている間にガーディに岩に隠れるように指示し、その間に俺はガーディの大きさとほぼ同じような物……つまり、リュックを見えやすいように態とらしく置いたって訳さ」

そして、その作戦に引掛かったアサトはタマンタをその場所に攻撃するように指示させるその時に別の岩からガーディが最大の攻撃をしたと言う事だ。

そんな作戦を一瞬にして実行するゼットに対して、アサトは冷や汗を流す。

「それって少しせこいんじゃない？」

「こう言う戦法もあるって事だ！」

「……本当におもしろいよ、君は。このバトル、長引きそうだ」

アサトがそう言うと、タマンタは立ち上がった。

それはまるで、今までの戦いが遊びに過ぎなかったとも言つかの

ように、タマンタは平然と立っていた。
ゼットはさらに気を引き締める。

「さあ、行くよ！タマンタ、『超音波』！！」

「不味い！避ける！！」

超音波……それは当たった相手が必ず混乱する技である。
ガーディはゼットの指示で間一髪避ける。

「危ねえ……あんな技喰らったら、問答無用で戦闘不能になりそうだな……」

「どうしたんだい？もう怖気づいたのかい？」

「へっ、まさか！今ので俄然やる気が出てきたぜ！！」

……と言ったものの、内心焦っていた。
バブル光線や頭突きなどは何とかなるとしても、超音波はどうしようも無かった。
攻撃の速度も速く、超音波を無効化しようにも、エスパータイプでも無い限り、その方法は見出せない。

「なら、行くよ！『バブル光線』！！」

タマンタはバブル光線を放ってきた。
ガーディはバブル光線を避けて、接近戦へ持ち込もうとする。
だが、ゼットは回避の指示を出した。
いつものゼットらしく無い、指示にガーディは違和感を覚えるが、すぐに主人の言う事を聞く。

「（やっぱり、あの『超音波』はかなり不味い！迂闊に近づいたら、あれの餌食になる！！）」

「フフフ……やっぱり、『超音波』に当たるのが恐いんだね。まあ、確かに混乱状態になれば、『バブル光線』の応酬を確実に喰らうだろうから、それも仕方無いか」

「くっ……」

アサトの言っている事は全て、凶星だった。

一度、混乱になってしまえば、次の攻撃が当たる確率は、かなり跳ね上がる。

出来れば、ゼットは超音波が一度も当たる事無く、この勝負を終わらせたかった。

「『バブル光線』！！」

アサトはまた、タマンタにバブル光線を指示する。
ガーディはそれを右へ、左へ、軽々と避けていく。

「（こんな所でいつまでも立ち止まってる訳にはいかねえ！覚悟を決めよう！！）ガーディ、タマンタの背後に近づけ！！」

ゼットは決心し、それを待っていたかのように、ガーディは速いテンポでタマンタの後ろを取る。

タマンタが振り向く前に、必ず攻撃出来る距離だ。

「行けええっ！『炎の牙』！！」

「『超音波』！」

しかし、ガーディが炎の牙で攻撃しようとした瞬間、予想も出来ない事が起こったのだ。

何と、タマンタの背中から超音波が発生されたのだ。

普通は口で放つ筈の攻撃なのだが、予想もしていなかった所から超音波が発生された為、ガーディは直撃した。

「ウォーン……」

「そんな馬鹿な！」

「『超音波』は普通、口から発生する物と思いがちだけど、それは大きな間違いさ。『超音波』は体内のどこからでも発生させられる音波。つまり、背中からでも出せると言う訳なんだ」

ゼットは驚愕したように、ガーディを見た。

ガーディは混乱状態になり、敵のいない、あらぬ方向へと進んでいる。

今の状態を見て、ゼットはさらに焦る。

「（どうする……？今の状況じゃ、とても作戦なんて実行なんて出来ねえ！いや、それ以前に作戦が思い付かねえし……あ、待てよ！確かアイテムに……）」

「どんどん行くよ！『バブル光線』！！」

混乱状態のガーディに向かって、容赦無く直線状のバブル光線を放つ。

ガーディはまだ混乱していて、とても動けそうに無い。

「これで終わりだよ!!」

「受け取れええっ!!」

ゼットはある物をガーディに投げた。

ガーディは、そのある物を食べると、目付きが変わり、バブル光線を避けた。

その行動に、アサトは目を疑う。

「何!?一瞬で混乱が解けた!？」

「へっ……トキワの森の木の実が役に立ったな!」

そう、ガーディが食べたのは混乱状態から直す木の実……キーの実だった。

トキワの森の最奥部に行った際に手に入れた物だ。

「中々やるじゃないか。『頭突き』!!」

「避けて、『火炎車』!!」

タマンタはガーディに突っ込んで、攻撃しようとする。

ガーディは難なく避け、次の攻撃に移ろうとするが、前足が地面に引っ掛かり、態勢が崩れる。

「大丈夫か!ガーディ!!」

「しめた!!」

アサトはタマンタに空かさず、攻撃の指示を出そうとする。

「（不味い！このままだと、また『超音波』の餌食に……！！）」

「『頭突き』！！」

「え！？よ、避ける！！」

ゼットは一瞬驚くが、何とか回避が出来た。

「（何であそこで『頭突き』をしたんだ？『バブル光線』が出来ないのは使い過ぎだからいいとして……何で『超音波』を使わなかったんだ？あそこで使っていれば、確実に倒せたのに……。使い忘れたか？いや、無いな。なら、俺を舐めているのか？いやいや、この状況下でそんな事が出来る訳が無い。だとしたら、『超音波』が発動出来ない、何らかの理由があるって事か？）」

「何を考え込んでいるのかは知らないけど、これで終わりだよ！！」

「（もし、俺の予想通りなら……！！）」

ゼットの顔付きは焦りから、勝利への確信へと変わった。

「『超音波』！！」

「来た！避けて、背後に回れ！！」

ガーディは超音波を何とか避けて、タマンタの背後に回り込む。しかし、それでは先程同様に超音波によって混乱状態になってしま

だが、ゼットの目には迷いは一切無かった。

「くっ……『超音波』!!」

アサトは少し躊躇しながらも、タマンタに指示を出す。

しかし、出てきたのは先程よりも遅く、波形が出来ていない超音波だった。

だからと言って、混乱にならない訳ではない。

超音波は、少しずつガーディに近づいて来る。

「吠える!!」

「ワ、ワン？」

「いいから、吠えるんだ!!」

「ワ、ワオオオオオオン!!」

ガーディは意図の読めない、ゼットの指示に困惑しながらも、超音波に向かって吠えた。

すると、超音波は掻き消され、無くなってしまう。

「何!？」

「やっぱりか。今まで、連続で『超音波』を使えなかったのは、連続で使った時の波の形が不完全だからだ。どこからでも発生させ、必ず混乱させるって代償に、形が整うまで連続で出せない欠点があった。それで今の『超音波』の形は不完全だったんだ」

そして、ゼットが思い付いた対抗策……それは、別の音で超音波を

掻き消す事だった。

波形の整っていない、不完全な超音波は大きな音によって簡単に掻き消された。

実際の所、ゼットは大きな音を出せば超音波に対抗出来る音が作れるんじゃない？、と言う程度しか思っていなかったが。

「そして！今のタマンタには『バブル光線』を使える力は残って無い！なら、今のそいつには『頭突き』しか使えない！！」

「！！」

「なら、もう俺の敵じゃねえって事だ！『炎の牙』から『火炎車』！！」

そして、ガーディ最大の技がタマンタに炸裂した。
相性では悪くても、その力強さに押し負け、ダウンした。

「タマンタ、戦闘不能！ガーディの勝ち！」

「よっしゃあつ！まずは1勝！！」

「やるね……。でも次はどうかな？」

2人はお互いのポケモンをモンスターボールに戻す。

「ガーディ、ゆっくり休めよ……」

「へえ、続けさせないのかい？」

「ああ。1戦やらかした後だって言うのに、無理に2回戦やらせる

訳にもいかないだろう？」

「フフツ……それもそうだね」

そうして、ゼットとアサトは次のモンスターボールに手を掛ける。

「行けえ、ピカチュウ！！」

「行くよ、ヒトデマン！！」

アサトが出してきたのは、ヒトデマンだった。

ヒトデの形をしたポケモンで、目が無い代わりに、赤いコアがあるのが特徴だ。

相性では、ピカチュウの方が有利と言ったところだろう。

「先手必勝！ピカチュウ、『10万ボルト』！！」

「避けるんだ！！」

ピカチュウは速攻で電撃を仕掛けた。

当たれば効果抜群の攻撃だが、ヒトデマンはそれを楽に避けた。

「次はこっちの番だ！『水鉄砲』！！」

ヒトデマンは水鉄砲でピカチュウに攻撃しようとする。

これも、ピカチュウは楽に避けて、互角……と思われた。

水鉄砲を避けた瞬間に、水鉄砲の中に何かが通っていったのをゼットは見た。

「下がれ！！」

危険を感じたのか、ゼットはピカチュウを後ろに下からせる。すると、水鉄砲の中から星のような物体が幾つか飛んできた。それはピカチュウを通り過ぎ、またこちらに向かって飛んでくる。

「『スピードスター』か!!」

「『スピードスター』は、何度でも相手を狙う、必中技さ。絶対に逃れられないよ!」

そう、その星の正体はスピードスターだったのだ。

スピードスターはどこまでもピカチュウを追い、ピカチュウはそれから逃げる。

「くっ……これじゃあ、埒が明かねえ! ならば、迎え撃つだけだ!」
「10万ボルト」!!」

そう言うと、ピカチュウは後ろを振り向き、電撃をスピードスターに放つ。

スピードスターは電撃で消えて無くなった。

「中々やるじゃないか。なら、『バブル光線』!!」

ヒトデマンから無数の泡がピカチュウに放たれる。

だが、バブル光線の速度は遅く、これなら最小限の力で避けられると思って、軽く避けようとしていた。

しかし、それが仇となったのだ。

「『水鉄砲』!!」

「いいい!？」

何と、今度はさらにヒトデマンから水鉄砲が放たれる。

水鉄砲はバブル光線も乗せて、ピカチュウへと攻撃しようとする。

「よ、避ける!！」

これには焦り、ゼットはピカチュウを回避させる。

何とかバブル光線と水鉄砲から避けられて、ホッとしたのも束の間だった。

バブル光線の泡の中から今度はスピードスターが出て来た。

「しまった!！」

ピカチュウはスピードスターを幾つも喰らって、吹っ飛ばされる。スピードスター1つ1つは大した事は無いのだが、全段喰らえばそれは脅威となる。

「ピカチュウ!！」

「近づいて、『水鉄砲』!！」

ヒトデマンは至近距離からの水鉄砲で攻撃しようとする。

「『電光石火』で避ける!！」

しかし、それを待っていたかのようにピカチュウは素早く起き上がり、『電光石火』で避ける。

そして、ゼットに言われずともピカチュウはヒトデマンの背後に詰め寄り、電気を溜める。

「『10万ボルト』!!」

ピカチュウは一気にヒトデマンに電撃を放つ。

ヒトデマンは避けられず、そのままピカチュウの攻撃を喰らう。効果は抜群で、かなり効いたようだ。

「速いつ!!」

「起き上がらせねえぜ!『10万ボルト』!!」

「『バブル光線』!!」

2人の素早い指示で2つの攻撃は、ほぼ同時に行われた。

しかし、電撃でバブル光線を破裂させると中から……。

「水か!避ける!!」

ピカチュウはバックステップでそこから出て来た仕掛け攻撃に掛からずに済んだ。

しかし、これだけでは終わらない事を、ゼットは先程の経験で知っている。

予想通り、それは水の中から幾つも現れた。

「やっぱり『スピードスター』か!『電光石火』で避ける!!」

ピカチュウは電光石火で高速で移動し、スピードスターから逃げる。だからと言って、これは何の解決にもなっていない事はゼットも分かっていた。

スピードスターは必中技。逃げていても、当たるまで地獄の底まで

付いて来る。

「ゼット君。逃げていても何も変わらないよ。お得意の戦術で対抗したらどうだい？」

「くっ……！」

ゼットは考えていた。必中技に対抗出来る手段を。

必中技は攻撃すれば対処が出来るが、それでは大きな隙が出来てしまい、そこをバブル光線から水鉄砲の応酬でダウンする。

一度、スピードスターの際のダメージを負っているので、そうなるだろう。

「何か無いのか……！？あれに対抗出来る手段が……！！」

「フフフ……」

そうやってゼットは対抗策を模索するが、アサトが不敵に笑った事で気づく。

バトルフィールドを見回すと、ヒトデマンが消えているのに気づいた。

ピカチュウに意識を持っていかれ過ぎたせいで、全く気づかなかった。

「どこに行ったんだ……！？」

すると、ピカチュウはヘトヘトになって、岩の影で休んでいる内に、スピードスターが当たりそうになる。

「しまった！避ける……！」

休んだおかげでスタミナが少し戻り、簡単に避ける。
しかし、ピカチュウは背中に妙な違和感を感じる。
何かが重く圧し掛かっているような感じである。
そして、後ろを見ると、すぐにその理由が分かった。

「ヒトデマンだ！振り払え！！」

「もう遅いよ！『水鉄砲』！！」

しかし、ピカチュウが振り払う前に、至近距離からの水鉄砲を喰らう。

ピカチュウは力無く、倒れる。

「ピカチュウ！！」

「ヒトデマンは『保護色』で『スピードスター』の中に紛れていたのさ。普通は地面によってタイプが変わる物なんだけど、こう言う使い方もあるんだよ」

そう、元々の体型がスピードスターに似ていたので、保護色によって絶対にバレずにあの中に紛れる事が出来たのだ。

ピカチュウが倒れたのを確認し、審判は冷淡に旗を上げる。

「ピカチュウ戦闘不能！ヒトデマンの……あれ？」

「何！？」

アサトは驚愕する。

何と、スピードスターを全段喰らい、電光石火で走り続けてスタミ

ナを限界まで追い詰められ、至近距離からの水鉄砲を喰らったと言うのに、ピカチュウは悠然と立ち上がった。そして、ピカチュウは戦闘態勢を取る。

「確かに、戦術は俺達のバトルの胸を張れる部分だ。だが、俺達のバトルの真骨頂は、その打たれ強さと心の強さだ!!」

「……成る程。なら、見せてもらおうじゃないか!その強さを!!」
先程、ピカチュウを追いかけて来たスピードスターがまたピカチュウを追って来る。

「『電光石火』で避ける!!」

ゼットは先程と同じ指示を出して、スピードスターから逃げる。

「先程と同じ指示を出したって事は、もう万策尽きたのかい?」

「いや、ピカチュウが粘ってくれたおかげで、対抗策は浮かんだ!」

「何!?!」

ピカチュウは壁の近くまで来ていた。

そして、ゼットは笑みを浮かべて、ピカチュウに指示を出す。

「壁を踏み台にして、『スピードスター』に飛び乗れ!!」

指示が聞こえると、ギリギリ壁の近くまで来ると、ピカチュウはジャンプする。

ピカチュウは重心を壁に置き換え、壁を地面代わりにしながら、丁

度良くこちらにきたスピードスターに飛び乗る。

作戦は見事に成功し、ピカチュウはスピードスターに飛び乗れた。

ピカチュウが右へ重心を傾ければ右へ移動し、左へ重心を傾ければ左へ移動するとても使える物だった。

スタミナ切れのピカチュウに取っては最高のマシンだろう。

「そんな事が……!!」

「ピカチュウを追いかけてるんなら、ピカチュウのが行く方向を変えれば、『スピードスター』もその方向へ進む。それを逆に利用させて貰ったのさ!」

ピカチュウは空中から、ヒトデマンの位置を確認する。

そして、位置を確認すると、その方向へ重心を向け、ヒトデマンに近づく。

「『10万ボルト』!!」

ピカチュウは空中からヒトデマンに10万ボルトを放つ。

ヒトデマンは何かその攻撃を避ける。

ピカチュウは悠々とその上空を通り過ぎて行った。

その上空を飛行物体に乗りながら飛ぶ姿は宛ら、「歩く戦闘機」だ。

「このままではやられてしまう……ん? あれは……?」

アサトはピカチュウを追いつける、もう1つの誰も乗っていないスピードスターに気が付く。

「よし!これなら楽勝だな!!」

「そうはいかないよ!!」

すると、後ろにもう1つ、別のスピードスターが迫っていた。
そこにはヒトデマンが乗っていた。

つまり、これは2匹とも空中にいて、そこで戦う「空中戦」となる。

「おもしれえ！空中戦か！受けて立つぜ!!」

「行くよ!『水鉄砲』!!」

「重心を右に!」

後ろから迫る水鉄砲をスピードスターの重心を右に傾けて、攻撃を避ける。

そして、ピカチュウは後ろを振り向く。

「『10万ボルト』!!」

「左に避けて!!」

ピカチュウの10万ボルトをヒトデマンも左に重心を傾けて、これまた避ける。

ただし、ヒトデマンのスピードスターは追いかけている側なので、ピカチュウの乗っているスピードスターのように思い通りには動かないので、あまり使えない。

「『水鉄砲』!!」

「『10万ボルト』!!」

「回転して突撃するんだ!!」

「何の!『バブル光線』!!」

次々に出す、技と技の応酬。

普通の技で相手を狙ったり、スピードをさらに上げて突撃したり、回転を掛けた突撃で攻撃したり……とそんな攻撃が続いた。その空中戦は、10分以上に及んだ。

「くっ……そろそろ決着を着けようぜ」

「そうだね……」

「真っ向勝負で!!」

2人は同時に言った。考えている事は、どうやら同じのようだ。そして、ピカチュウはターンして、ヒトデマン真っ向から向かっていく。

ヒトデマンも速度を上げて、ピカチュウと相對する。

「行けええええ!!!!」

2匹は本気で互いにぶつかり合った。

スピードスターは消えて、2匹は上空から落ちていった。

そして、2人はポケモン達を受け止める。

2匹の様子を見た審判は、言い放つ。

「ピカチュウ、ヒトデマン共に戦闘不能!」

2匹は同時に戦闘不能になったのだ。

2人はここまで頑張ったポケモン達をモンスターボールに戻す。

「よくここまでやってきたね。最後は僕の切り札のポケモンだ。タマシヤやヒトデマンのようにはいかないよ」

「へっ！必ず倒して、ジムバッジを手に入れてやるさ！」

「じゃあ……行くよ！」

ゼットVSアサト……この2人の戦いは今、最終局面に入った。果たしてどちらが勝つのか……次回に続く。

第16話 「ハナダジム最後のバトル！VSスターミー！！」

ここ、ハナダシティジムでは激闘が繰り広げられていた。

最初のガーディVSタマンタの勝負、超音波への対抗策をゼットが見つけた故、ガーディの勝ちだった。

次のピカチュウVSヒトデマンの勝負、これはスピードスターでの激しい空中戦による戦闘がなされた為に、双方とも力尽きて、同時にダウンした。

そして、今……………2人は最後のポケモンを出した。

ゼットには、まだガーディが残っているが、もう戦えそうには無いので瀕死に同じだった。

「頼むぞ、ゼニガメ!!」

「最後だ、スターミー!!」

ゼットはゼニガメを、アサトはスターミーを繰り出した。

スターミーは、先程戦ったヒトデマンの進化系で、赤みが掛かった宝石のようなコアが特徴のポケモンだ。

「『水鉄砲』!」

アサトがそう言うと、スターミーはこれまでとは比べ物にならない程速い水鉄砲を放って来た。

「（速い!!）避ける!!」

ゼニガメは間一髪避けたが、あの水鉄砲が連続で当たったら、幾ら

同じタイプとはいえ、一溜りも無いだろう。

「ほう、あれを避けるなんてね……」

「（ありや、かなり不味いな……）」

ゼットは冷や汗を掻きながら、水鉄砲が進んで行った方向を見る。当たった壁には少し凹んで、輝が入っている跡があった。最早、水鉄砲と言う次元を超えている破壊力だった。

「どんどん行くよ！『水鉄砲』！！」

スターミーは、さらに速度の速い水鉄砲を乱射して来た。何とか、ゼニガメはその攻撃を避け続ける。

「これを全て避けるなんて……君のポケモン達は一体どんな反射神経をしてるんだい？」

「へへっ！伊達にジムバッジを1つ持っている訳じゃねえさ！ここに来るまで今まで何もして無かった訳じゃねえんだぜ？」

ゼット達はオツキミ山に行くまで、その途中に出て来たトレーナー達と何度も戦って来た。

そして、何とかそのラッシュを切り抜けて行く内に強くなっていたのだ。

ポケモン達の反射神経が良くなったのも、ポケモンの攻撃を嫌と言う程見て来たからだ。

「それもそうだね。じゃあ、これも見切れるかな？」

すると、紫色の薄い膜のような物がゼニガメを包み、急に浮いた。そして、ゼニガメは後ろの岩に叩きつけられた。

「ゼニガメ！？今は……！」

「『サイコキネシス』さ。強い念力で、ゼニガメを叩きつけたんだよ」

サイコキネシス……簡単に言えば、念力の強化版である。しかし、念力以上に応用力が広く、今まで念力で動かせなかった物もサイコキネシスで動かせるのだ。

「そんな厄介なシロモノがあつたとはな……」

「まだまだ終わらせないよ。『水鉄砲』……！」

「くっ、避ける……！」

ゼニガメは何とか水鉄砲から避ける。

「『殻に籠る』だ……！」

ゼニガメは殻に籠り、防御力を上げる。

しかし、アサトはこの隙を見逃さず、指示を出した。

「『サイコキネシス』で固定して、連続で『水鉄砲』……！」

スターミーはサイコキネシスでゼニガメを固定する。そして、その固定している隙に水鉄砲を連続で叩き込む。

「これで終わりだよ!!」

「まだだぜ! 『殻に籠る』!!」

ゼニガメはさらに防御力を上げ、そして……。

「『高速スピン』!!」

ゼニガメは固定された状態で、何とか高速スピンを実行する。すると、打ち込んでいた水鉄砲を素早い回転でどんどん弾く。ダメージを喰らっても、その威力は最小限に抑えられた。

「成る程。威力を最小限まで弱めたのか……」

「その通りだ。さあ、そろそろ本気を出してくれねえか?」

「……何で僕が本気を出していない事が分かったんだい?」

「さつきから、ただのトレーナーでも出来そうな『水鉄砲』や『サイコキネシス』を加えて、繋げただけの簡単なコンボ。ジムリーダーともあるう者が、さっきの戦いから見ても、そんなコンボしか使えない訳が無い。切り札なら尚更だ。つまり、お前はまだ本気を全く出してないって事だ」

「大正解。僕はまだ本気も出していない。今までののは小手調べさ」

笑いながらそう言うが、水鉄砲の威力は本気だったのだろう。今のアサトの表情には少し、焦りが見えていた。

「だから、そろそろ本気を出そうかな」

「来る……!!」

「『水鉄砲』!!」

すると、素早い水鉄砲が1つ発射される。

ゼニガメは難なく避けるが、その場所にはスターミーがいなかった。

「後ろだよ」

「何!？」

何と、スターミーはゼニガメの背後にいた。

水鉄砲を避けている間に、一瞬でここに移動したのだ。

「速すぎる!」

「『高速スピン』!!」

「何!?!ぎゃ、逆回転で『高速スピン』だ!!」

ゼットはゼニガメと同じ技を出した事に驚愕しながらも指示を出す。逆回転によって、何度もぶつかるが、威力はほぼ互角で同時に後ろに下がる。

「防御力を上げた、ゼニガメの『高速スピン』と互角……!？」

「スターミーの『高速スピン』と互角の威力か……やるじゃないか」

ゼットは高速スピンの桁違いな威力に驚愕する。

しかし、これであの一瞬でこちらにやって来る速さの理由が分かった。

「『高速スピン』で地面を速く移動したのか……」

「斜めで回転してね。そうすれば、このぐらいのスピードは出るよ」

このぐらいとは言うが、今は完全に高速移動並の速さだった。だからと言って、地上戦がゼニガメよりも得意な訳ではない。

「『高速スピン』!!」

とても速いスピードで、ゼニガメの背後を取った……と思った。しかし、そこには既にゼニガメがいなかったのだ。

「一体どこに消えたんだ……?」

「後ろだ」

「なっ……!?!」

ゼニガメはスターミーの後ろにいた。

そして、ゼニガメは既にゼットの指示が分かっているようで、口に水のエネルギーを溜める。

「『水の波動』!」

水の波動は、至近距離からスターミーに当たり、吹っ飛ぶ。だが、これだけではゼニガメの攻撃は終わらない。

「『高速スピン』!!」

さらに、スターミーに追討ちを掛けるように、高速スピンを咬ました。

スターミーは避け切れずに、直撃した。

「馬鹿な！威力は互角の筈なのに、さらに後ろを取るなんて……」

「簡単な事だ。『殻に籠る』で防御力を上げりゃ、スターミーよりも強くなれるからな。だから後ろを取れたんだ」

「そう言う事か……。いつも通りで行こうか。スターミー!!」

アサトがそう言うのと、スターミーは水中に飛び込んだ。ゼニガメもその後を追い、水中に飛び込んでいった。

「何を……?」

「水中戦さ」

すると急に、横の壁に大きなモニターが映し出された。

モニターには、水中全体の様子などが映されている。

そこには、お互い睨み合って目から離さない、ゼニガメとスターミーも映っていた。

「うわっ！びっくりした……」

「これには、水中の様子が水中カメラによって映ってるんだ。ここの状況を見て、指示をするんだ」

「便利だな」

そして、水中カメラはゼニガメ達にどんどん近づいていく。
2匹は既に戦闘態勢に入って、トレーナーの指示を待っている。
それを見て、ゼットとアサトは同時に言った。

「『高速スピン』！！」

2人の指示はほぼ同時で、同時に高速スピンのぶつかり合った。
ゼニガメは水中でターンし、スターミーを狙う。

スターミーは堅さの差もあって、攻撃を喰らい、壁にぶつかろうとする。

しかし、スターミーはヒトデなので、壁にはくっ付き、衝撃を和らげる。

壁を足場にし、こちらもゼニガメを狙う。

2つの攻撃は水中でありながら、摩擦を立てて互いに通り過ぎる。

「『水の波動』！！」

「『サイコキネシス』！！」

ゼニガメは水の波動をスターミーに放つ。

水中だから水の威力は少し弱まっても、衝撃は直に来るので、対応する。

強い念の力で、衝撃を押さえ込み、掻き消した。

「『水鉄砲』から、『高速スピン』！！」

今度は水鉄砲を先に放ち、スターミーの動きを止めている間に、そこから高速スピンが入って来る。

スターミーは高速スピンで後方へ移動し、何とか攻撃を避け切る。

「『水鉄砲』……！」

今度はスターミーが水鉄砲をゼニガメに向かって放つ。

先程のゼニガメの水鉄砲とは比べ物にならない速さで、ゼニガメに襲い掛かる。

ゼットは水の波動を指示し、ゼニガメはそれでガードする。

ホッとしたのも束の間、次の瞬間、驚愕する。

「なっ！？ゼニガメ……！」

何故なら、ゼニガメは何も無い筈の場所で、ダメージを喰らったからだ。

すぐに何かあると気づいたゼットは、アサトに目を向ける。

「『水鉄砲』を通して、『サイコキネシス』を仕込んでいたんだよ」

「何だって！？」

「そして、『水の波動』を固定させ、その衝撃をゼニガメに喰らわせたんだよ」

自分の出した技に、自分でやられる……。

そんな屈辱感を感じるが、ゼニガメはその屈辱感で態勢を元に戻し、スターミーを睨み付ける。

「ゼニガメ……」

「その折れない心……それは認めるよ。でも、このままの状態で勝

てるのかな？」

今のゼニガメで、上回っている事は、高速スピニングがスターミーよりも強い事のみ。

それ以外では、水鉄砲ではスターミーの方が強く、応用性の高いサイコキネシスがある。

現時点では、スターミーの方が強い事が証明されている。とても、今の状態では勝てはしないだろう。

「今の状態じゃ、勝てない。だが、その難点を切り開く突破口を見つけて、必ず倒す！！」

「その意気さ。それじゃあ、見つけてみなよ！連続で『水鉄砲』！！」

スターミーは連続で水鉄砲を放つ。

水タイプなので、地上よりも速く動けるからか、ゼニガメはそれを軽々と避けていく。

ゼニガメとスターミーの距離が中間まで来ると、水鉄砲の数も多くなる。

そして、その中で薄く紫色に光る水鉄砲を見つける。

「そこだ！『水の波動』！！」

ゼニガメは薄く紫色に光る水鉄砲に、水の波動をぶつける。すると、水鉄砲は消えて、無くなる。

「やっぱり、『サイコキネシス』も仕込んであったか！！」

「フフフ……これを見破るとは、やるじゃないか」

そう、紫色の水鉄砲はサイコネシスによって動いていた物だったのだ。

そうした物にも気を付けて、どんどんスターミーに近づいていく。

「『高速スピン』!!」

ゼニガメはここぞとばかりに高速スピンの攻撃しようとする。

「『スピードスター』!!」

「『スピードスター』だと!?!」

スピードスターはスターミーの周りを旋回する。

そして、前から1つずつゼニガメを狙って攻撃する。

ゼニガメは1つ、2つ、3つと攻撃されて、高速スピンの回転が止まっていく。

「ゼニガメ!!」

ゼニガメは攻撃を全て受けたが、殻の中にいたので大したダメージには至らなかった。

しかし、スピードスターは何故か1つも消えず、複数のスピードスターはさらにスターミーの周りで回転し、そのまま上っていき、リング状で回転しながら凄まじいスピードでゼニガメに迫る。

「避ける!!」

何とかゼニガメはスピードスターから避ける。

リング状で固まっていた、スピードスターは全て別方向へ散らばる。

散らばったスピードスターは前、後ろ、上、下、右、左、斜めなどあらゆる方向から飛んできた。ゼットは避ける指示を出すのに苦勞し、やはり幾つかは当たってしまったが、何とか避けた。

「何とか避けられたぜ……」

「良い反射神経を持っているね」

「（何でだ？『スピードスター』は一度でも当たると消える技だ。それなのに、全く消える気配が無い。何より変なのは、普通の『スピードスター』なら絶対に出来ない、統制の取れた動きだ。あんな事、普通は出来る訳が無い。じゃあ、あれは一体……？）」

そうやって考えている内に、次の攻撃がやって来た。先程のスピードスターがゼニガメの頭上に集まっていく。それはどんどん集まり、やがて鉄球程度の大きさになった。

「やばい！避ける！！」

危険を察知したのか、ゼットはゼニガメに叫ぶ。しかし、凝縮されたスピードスターの塊はもう、すぐ近くまで来て、とても避けられそうには無い。

「『水の波動』！！」

いつもよりも、一回り大きな水の波動をスピードスターの塊に当てる。

しかし、それでも少し削れた程度で、止まる気配は無かった。水鉄砲を連続で当ててみるが、これも駄目であった。

最早、打つ手無しかと思われた……だが、ここでゼットは閃く。

「なら、地面に向かって『水鉄砲』!!」

ゼニガメは地面に向かって水鉄砲を発射する。

すると、水鉄砲によって体がどんどん浮き、凄まじい勢いで塊に向かっていく。

そして、ここでゼットが出す指示は1つ。

「『殻に籠る』から、『高速スピン』!!」

さらに、防御力を上げて塊に高速スピンの突っ込み。

水鉄砲で勢いを付け、さらに防御力を上げた状態で突っ込めば、さらに威力は増大する。

そして、高速スピンは塊の中心から突っ込み、そして塊を貫いた。

「やった……!?!」

ゼットは喜んだ……否、喜ばうとした。それはゼニガメも同様であった。

そこにいたのは、スターミーだったのだ。

スターミーはゼニガメが来る事を最初から知っていたかのように、コアに念を溜める。

「『サイコキネシス』!!」

スターミーはいつものような「操作」ではなく、サイコキネシスを「放出」した。

その念の直線状なビームは、見事にゼニガメに当たり、そのビームによって吹き飛び、後方の岩に叩きつけられた。

「ゼニガメーッ!!」

「油断は禁物だよ」

ゼニガメは倒れたまま動かない。

ゼニガメ自身も、まだ戦おうと動こうとするが、身体が言う事を聞かない。

「（動け、動け俺の身体！何であんな程度の技でここまで動かねえんだよ！？）」

ゼニガメは自分自身に訴える。

しかし、身体は「動くな」と言うだけで、それ以外は何も答えてはくれない。

「（いつも、たくさんの技を喰らって来たのに、こんな技にやられたんじゃ、ピカチュウ達に会わす顔がねえ!!）」

その意地とプライド……それだけが身体を必死に動かそうとする動力源だった。

水の上からは必死にゼットがゼニガメを叫んでいた。

「（野郎と俺に何か決定的な違いがあるって……！？）」

そして、ゼニガメは気づき、自虐的な笑みを浮かべる。

種族やレベル以外で自分と、スターミーの何が違うか……。

「（進化してるかどうか……。たったそれだけの違いだったのかよ……）」

スターミーは進化して、ゼニガメは進化していない……それが決定的な違いだった。

種族もレベルも能力値等も全く同じなポケモンでも、進化の有無では進化した方が勝つ。

それが、現実だったのだ。

「（力……か。ゼットがどんなにすげえトレーナーでも、そのポケモンが能無しなら、全て空回りだよな……）」

そうして、何とか力を込め、その目で水の上にいるゼットを見る。彼は必死に叫んでいた。それは勿論、ゼニガメにである。

「（俺に文句を言ってるのか……？それともジムを諦めたのか、だから戻れと言ってるのか……？へへ……もうどっちでもいいさ……）」

「諦めんじゃねええっ！！」

「（！？）」

ゼットの言っていた事はゼニガメの予想した、どれでも無かった。

ゼットは、立ち上がれ……そう言っているのだ。

「お前はまだやれるのに、何で諦める！？俺はお前に仲間になってくれって言って、お前はそれを受け入れたらう！？本当に俺の仲間になりたかったのなら……地獄の底から這い上がる根性ぐらい見せやがれええっ！！！」

ゼットに言われ、ゼニガメは気づいた。

自分はさっきから何をやっているのだろうと……………。

「（そうだ……こんな所で諦めてどうすんだよ？ピカチュウ達だって諦めずに、ここまで繋いでくれたんじゃないかねえか！その流れを俺が断ち切ってどうすんだ！！）」

ゼニガメは力いっぱい手を伸ばす。

「（もっと力を……もっと強い力を……！！）」

そして、ゼニガメはその拳を握り、体全体がそれに共鳴するように光る。

「ゼニイイイ！！！」

「何だ、これは！？」

ゼニガメの体は完全に光に包まれ、どんどん形が変わっていく。光が消えると、そこにいたのは全く別のポケモンだった。

「こ、これは……進化！？」

「カメールだ！！」

そう、ゼニガメから進化したポケモン……それはカメールだった。カメールは起き上がり、上にいるスターミーを睨む。

「カメール……よし！行くぜ！！」

「カメー！！」

「進化した所で、この状況が変わった訳じゃない。君はまだ、『スピードスター』の仕掛けに気づいていないだろう?」

何度、攻撃しても消えない上に、統制を取れた動きを持つ、スピードスターの事だ。

「ああ。あれなら、大体見てて分かったぜ」

「何!？」

「あれの正体は『サイコネシス』による操作だろ? 紫っぽい所は全然見えなかったけど、スターミーがゼニガメに『サイコネシス』をした時、『スピードスター』が全て一気に消えたからな。それが決定的な証拠さ」

サイコネシスによる軌道操作……これが、スピードスターの不可解な現象の原因だったのだ。

サイコネシスで操られた物は、使用者の力によってその範囲内で、耐久性や操作対象の多さを自由に変えられる。

「それが分かった所で何も変わらないさ! 『スピードスター』! !」

先程のように、スピードスターをサイコネシスで操り、攻撃させる。

しかし、先程のように統制の取れた動きは殆ど無く、ただのスピードスターと同じような物だ。

カメールはスイスイと避けていき、すぐにスターミーに近づく。

「も、戻れ!!」

「『水鉄砲』!!」

カメールは水鉄砲で、追って来るスピードスターを全て打ち落とす。ゼニガメの時は殆ど効かなかったが、進化によってそれが変わったのだ。

「つ、強い!!」

「終わりだ!!『アクアテール』!!!」

ゼットは新たな技……アクアテールをカメールに指示する。

カメールは水を尻尾に纏った、アクアテールを上には振り上げ、スターミーに当てる。

スターミーは直撃して吹き飛び、空中に舞う。

「最後だああっ!!『高速スピン』!!!」

そして、追討ちを掛けるように、止めの高速スピンを喰らわせた。空中からさらに吹っ飛び、スターミーは地面に落下し、倒れてしまった。

そして、カメールも空中から地面に降り立つ。

「スターミー、戦闘不能!ゼニガメ……カメールの勝ち!よって勝者、マサラタウンのゼット!!」

「か、勝ったぞおおっ!!」

「カメカメツ!!」

そして今ここに、ゼットの勝利宣言が伝えられた……………。

第17話 「自転車引換券をゲット！謎のダムを破壊せよ！！」

ここは、ハナダジムの入り口付近である。

ゼットはアサトと戦って、ついに勝利したのである。

「頑張ったね。それでもあの、諦めるなって言うのはよくないよ。ポケモンにも限界があるからね」

「いや、確かにちょっと無理言い過ぎたな。ごめんな、カメール」

モンスターボールの中にいるカメールに、ゼットは謝る。

カメールは身振り手振りして、そんな事は無いと言い返す。

「それにしても、良いバトルだったよ。まさか、途中で進化するなんてね」

「俺もびっくりしたぜ。もう進化してもいいレベルだったってのに、全く進化の兆しが見えなかったから、もう進化しないんじゃないかって思ってたんだけどよ……」

「ハハハハ……さて、ゼット君。これを渡そう」

アサトはポケットから、光るバッジを取り出した。それは、ポケモンリーグ公認のジムバッジである。

「それは、ブルーバッジさ。ハナダジムの取り扱っているバッジだよ」

「くうう……よっしゃああ！2個目のバッジをGETしたぜ！」

グレーバッジ、ブルーバッジと並び、ゼットは2つのバッジを手に入れた。

ゼットが喜ぶのも、無理は無い。

「そんで？次のジムの場所は？」

「そうだね。次は、ここからすぐ近くにある、ヤマブキシティだから……格闘タイプだね」

実際のヤマブキシジムのタイプはエスパータイプだが、ここでは格闘タイプだ。

今のメンバーには、格闘タイプに有利なポケモンはいないが、それはあちらも同じである。

ほぼ、相性では互角と言った所だろう。

「だったら、すぐに次のジムへ向かって出発だあっ！！」

「あ、ちょっと待って！」

そこで、アサトが何か思い出したようにゼットを引き止める。ゼットは何か、と思ってアサトに振り返る。

「何だ？」

「ゼット君、自転車持ってる？」

「……………あ」

そう、この先はサイクリングロード。

つまり、そこを通るには自転車が必要になって来る訳である。

「持ってたえ……」

「じゃあ、買つて来たら……」

「今に俺には金が欲しいーっ!!」

ゼットは一気に欲望をぶちまける。

戦う前に、観光している時に自転車売り場に行ったのだが、どれもゼットが買えそうな値段では無かった。

物を買う前に、何事にもまず、金が必要だ。

「お金が無いんだね？」

「ああ……」

「だったら、『引換券』を手に入ればいいんだよ」

『引換券』……それは、それを出すだけで無料で自転車をくれる、シロモノである。

「それって……確か、人から貰うんだろ？そんな物を簡単に譲ってくれる訳……」

「譲ってくれるよ」

「そうそう、譲ってくれる……って、ええええええ!!?」

「ただし、条件を満たせばの話だけだね」

ゼットはアサトが言う、その条件に神妙な顔付きになる。

そんな物をただでくれるのだ……一体どんな条件なのだろうか？と疑問になる。

「この街の貧困の理由である、あのダムを壊して欲しいんだ」

「ダムって、あれか？」

アサトが指を差して促すと、どうどうと聳え立つ黒いダムが見えた。見るからに、分厚そうな壁で、並大抵の攻撃では壊せそうに無い。

「あれを全て破壊するってのか！？」

「穴を開けてくれるだけでもいいさ。今も、穴すら開いて無い状態だからね」

「そんなに分厚いのか……」

ゼットは燃えていた。自分の中に眠る何かが燃えているのだ。

「で、引き受けてくれるのかい？」

「ああ！この街の貧困の原因のダムをぶっ壊して、『引換券』を手に入れてやるぜ！！」

「それじゃあ、案内しよう」

アサトはそのダムへ向かって、ゼットはそれに付いて行く。

付いて行く度に、いろいろな景色が見えて来る。

森に、細い川に、荒れた大地に、そこに住まう人々達……。

そんな景色を見ている内に、その目的地に到着した。

その場所は、アサトと最初に出会った、ゴールデンボールブリッジだった。

そして、その右側を見てみる。

そこには、遠くから見た時よりも比べ物にならない程の大きさのダムがあった。

「で、でけえ……」

「これを毎日、僕達はここで作業してるんだ」

「作業って、これを壊す作業か？」

アサトは、ゴールデンボールブリッジの下にある、今は乾涸びた大きな川の跡に降りる。

ゼットもそこから降りて、改めてこのダムの大きさを思い知った。

「さて、行くよ」

「ああ」

さらに進んで行くと、作業服を着ている男女がいた。

彼等は、ドリルを使って壁を壊そうとしたり、ポケモンの技で何とか壁を破壊しようと、何度も攻撃している。

そして、彼等はアサトがやって来ると、全員すぐに頭を下げる。

「リーダー、ついに3m突破しました！」

「そうか！じゃあ、もう少しだな！！」

「ところで、リーダー。そちらは……？」

「ああ、彼は新しい助っ人だよ。こっちの皆は僕のジムの仲間さ」

「ゼットって言うんだ。よろしく！」

「こちらこそ！」

ジムの者達は、ゼットに快く返事する。

普通なら、子供なんかをこのような場所に入れる訳にはいかないとアサトに口論する筈だ。

しかし、彼等は寧ろ快く引き受けた……つまり、今は猫の手でも借りたい程に困っている状況だと言う事だ。

「さて、これからどうするんだ？」

壊す……と言っても、初めてなので何をしていいのか分からない。
ゼットはアサトに、そう聞いた。

「まず、一通り見て説明しよう」

「最初は何？」

「このダムの壁の厚さだよ」

ゼットはそう言われ、ふとダムを見上げる。

見ただけで分かる事と言えば、かなり分厚い事だ。

しかも、使われている物は、かなり硬質の物質だと言う。

「この厚さは5 m。今は3 m進んだから、後2 mだね」

「結構分厚いな……」

「これに2週間も掛けてるんだ。それでやつと3 mだよ」

「そんなに掛けて3 m！？どんだけ堅いんだよ！？」

確かに、ドリルやポケモンの技を使っても尚、破壊出来ないと言うのだ。

余程、堅い物でこのダムは造られているのだろう。

「これがとても、一晩で造れたダムとは思えないんだ」

「一晩！？嘘だろ！？幾ら何でもそれは不可能だろ！！」

「僕も最初は驚いたけど、昨日まではこんな物は無かったんだ。信じるしか無かったよ。それに、このジムは『破壊光線』すら使えないからね。あれを壊そうにも、中々壊せないんだよ」

「だったら、他のジムリーダーに頼めばいいじゃねえか」

「一通り全員に頼みに行ったけど、自分の街の事は自分で管理しろって言われて追い返されちゃったんだ……」

「そ、そうか……でも、テツマみたいな奴がそんな冷徹な事を言うのか？」

他のジムリーダーはどうであれ、テツマのような気さくな男がそん

な厳しい事を言うだろうか。
そこがどうにも引つ掛かり、アサトに尋ねる。

「テツマさんは行く度に出張中で、他の優しいジムリーダーの所にもいったけど、そう言う人に限っては、その人がいる建物が広すぎて迷った拳句に帰ってしまったたり、研究で忙しくて今は出られないとか言われて追い返されたり、「男なら体でぶつかって来い!!」とか言われて気合注入のビンタ喰らったり、「イエーイ! ロック最高!」とか言って全然話を聞いてくれなかったり……もう、散々だよ」

「ハハハ……ああ、そう……」

ゼットは、あまりにも不幸続きのアサトが哀れに思えて来た。
ここまでもすれ違いになると、時間を計ってるんじゃないか? と思えて来る。

「他にも頼んでみたけど、そこでは高笑いされて、「あなたのいる街の事はあなた自身で解決なさい! 私の管轄する街に助けを求めるようでは、ジムリーダー失格ですわね! オホホホ!!」とか言われて追い返されたんだ……」

「酷いな、そりゃ……あれ? 1つ足んないんだけど?」

アサトからは、いろいろなジムリーダーの話が出て来たが、7人しか出て来ていない。
ジムリーダーがもう1人足りないのだ。

「あ、いや、その……無かったような、いなかったような、かな?」

最後の方は少し慌て過ぎて、訳の分からない事を口走っていた。

「はあ？まあ、いいや。それで、そいつにも追い返されたんだろ？」

「え？そ、そ、そうさ！な、何か追い返されちゃったみたい。み、皆酷いだろ？ハ、ハハハハ！そ、それよりも次行こう！」

「あ、ああ……」

何かをはぐらかすように、強制的に話を切って、また別の場所へ連れて行く。

そこは、ドリルを掘っている場所だった。

そこでは、作業服の男がドリルで壁に穴を開けようとするが、傷1つ付かない。

「す、すげえ……」

「あの堅さが、作業を遅らせている一番の原因でもあるんだ」

「成る程な……」

あそこまで分厚そうな壁だ。それも仕方あるまい。

ドリルで壊せないともなると、あの壁の堅さは岩よりも堅いと言う事だ。

「あれでも良くて15cmくらいしか進まないんだ。たまにドリルの方が壊れる事だってある」

「ドリルが！？」

「まあ、たまにだけだね。次はこれさ」

すると、先程ドリルで穴を入れていた場所の前にポケモンが立つ。ポケモンとは水タイプのクラブの事だ。そして、そのトレーナーらしき男がクラブに指示する。

「クラブ、『マッドショット』だ!!」

クラブは破壊力の籠った泥の塊を壁に当てる。そして、今度はヘイガニとそのトレーナーらしき、少女が現れる。

「ヘイガニ、『メタルクロー』よ!!」

ヘイガニは力一杯、メタルクローを壁に叩きつける。しかし、これでも壁には輝すら入らなかった。さらにどんとトレーナーがやって来ては、攻撃していく。

「『水鉄砲』だ!!」

「『念力』!!」

「『バブル光線』よ!!」

「『潮水』です!!」

次々と攻撃していくが、壁は少し凹んだ程度で、そう変わっていない。

だが、これだけでもかなり喜んでいた。一体、いつもはどれ程少ないのだろうか……。

「こうして、ポケモンの攻撃で壊そうとするんだ。それでもあの壁の強度は尋常じゃない程に堅くて、全然壊れないんだよ」

「ポケモンの攻撃にここまで耐えられる壁なんてあったんだ……」

「今の科学は結構進んでるからね。そう言う物質も見つかったんだと思うよ」

「こうやっていろんな攻撃してるのに、中々壊れない物なんだな……」

改めて、この壁の異常なまでの堅さと厚さを思い知った。人手が足りなくて、トレーナーを集めるのも無理は無い。

このような壁を、たったの十数人で乗り切ろうと言う事から無理なのだ。

「ちょっと触っていいか？」

「どうぞ」

ゼットはダムの壁を触ってみた。

ここまで堅い物は、今まで見た事がまるで無い。

15Fのビルの屋上から落としても、傷1つ付かなそうだ。

敢えて言うのなら、正に「鋼鉄」だ。

水タイプ系のジムである、ここでは破壊出来ないのも仕方無いと言えよう。

炎タイプのように、これを「壊す」のでは無く、「溶かす」事が一番楽な方法だろう。

しかし、やはり水タイプのジムだ。

誰も、専門外の炎タイプなんて持っている筈が無い。

「（俺のガーディで解かすのが一番なんだろうけど……。まだ『火炎放射』は覚えて無いし、『火の粉』レベルじゃ、とても完全に溶かせそうに無い……）」

「どうかしたかい？」

「一応聞くけど……炎タイプのポケモンって持つてる？技でもいいから」

「持ってたら、こんなに苦勞はしないよ……」

予想通り、炎タイプは持っていなかった。ゼットは、その場で考え込む。

あの壁の耐久性は優れているが、厚さは残り2mしか無い。

その程度なら、破壊光線のような爆発を起こせる技を使えば、何とか穴は開くだろう。

しかし、今のゼットのメンバーにそんな強力な技を使える者はいない。

タイプと言っても、炎、水、電気位しか無い……。

「いや、待てよ？炎と水と電気……？」

そして、ゼットは何かを閃いた。

「なあ、皆を全員下がらせてくれねえか？」

「え？どう言う事だい？」

アサトは、ゼットの言っている事の意図が分からず、困惑する。
そして、ゼットは不敵な笑みを浮かべ、アサトに言う。

「あの壁に、穴を開ける方法があるかもしれないって言うてんだよ」

「何だって!？」

「取り合えず、全員をここから避難させるんだ」

「わ、分かった」

アサトは事情を全員に話し、何とか避難させた。
ゼットは壁の真中に立って、ポケモンを全員出す。

「予定通り、頼むぜ」

「ピカ！」

「ワン！」

「カメ！」

「さつきみたいに、交替交替でやっても、少し凹むぐらいが関の山だよ？」

「ああ。だから、3匹同時に攻撃する！」

「同時に!？」

そうして、ゼットはダムの壁に向き直ると、3匹に指示を下す。

「『10万ボルト』！『火の粉』！『水鉄砲』！！」

ピカチュウ達は、同時に技を出す。

炎、水、電気の力が努力の結晶である、3mに向かって行く。そして、お互いは混ざり合って、壁に当たる。

「炎に水に電気！これ、どうなると思うよ！？」

「成る程……。そう言う事か」

3つの力がそこに当たって暫くした後、爆発が起こった。

爆発は壁の残り2mの場所のすぐ近くで起こった。

つまり、壁はついに穴を開けたと言う事になる。

その証拠に、開いた穴からは水が出ていた。

そして、そこから湧き出る水の太さはだんだん太くなっていった。

ゼットはすぐにピカチュウ達を戻し、アサト達のいる方向へ戻った。

「やった……！やったぞおお！！」

「おおお！ついにあの壁を壊したぞ！！」

「今夜はファイバーだ！！」

ジムの者達の中には、感動で涙が出た者や、抱き合って喜んでいる者もいた。

ついに、ついにこの憎きダムを破壊する事が出来たのだ。

「良かったな！」

「ああ！有難う！君のおかげだよ！！」

「いや、あれを壊せたのはジムの連中のおかげさ」

ゼットはあそこで騒いでいる、ジムの者達を視線にやる。

「あいつ等が、ここまで頑張ってくれなきゃ、俺もこれを破壊出来なかったんだからよ」

「そうだね。皆のおかげだ！あつ、そうだ」

アサトはポケットから何か取り出し、それをゼットに渡す。

「これが『引換券』だよ。受け取ってくれ」

「おおお！俺にもついに自転車が入るのか！！よし！早速、自転車屋に直行だ！！」

そして、この街にはついに、脱水の街から脱出し、水の街として再復活した。

ゼットも自転車を引き換え、長い橋の先を見る。

「よし、ヤマブキシティを目指して、出発だぁー！！」

ゼットはゴールデンボールブリッジの先を目指し、進んでいく。
ヤマブキシティの方向は全くの逆方向なのだが……………。

こうして、ゼット達は次の街、ヤマブキシティを目指して行く……………。

第18話 「連続トレーナー戦！花の道を潜り抜け！」

ここはハナダシティの北に位置する場所である。
ここには、1つの長い橋があった。その名もゴールデンボールブリ
ッジ。

アサトがこの橋に偶然、『金の玉』が落ちていたのを見て、勝手に
名付けたと言う。

本人は、この橋にこんな貴重な物が落ちていた事を偶然では無く必
然と捉えたので、自然とこの名前になった訳だ。
それにしても、あまりにも不快な名前である。

そんな場所に、ゼットは爽快な気分で自転車に乗って進んでいた。

「いやゝ、自転車だといろいろと楽だなゝ」

ゼットは、向かい風を楽しみながら自転車に乗っている。

こんなに長い橋でも、自転車ならば楽に進めるからだ。

「歩いていた時を思い出すと、大変だったなあ……」

ゼットはこれまでの旅の事を思い出す。

いろいろな場所をいつも歩きで回ってたが、今回は違う。

自転車と言う、ポケモンとは違う新たな仲間を手に入れたのだ。

最早、歩きに関して苦労する事は無くなる。

「到着ゝ！流石に早く着いたな」

振り返ると長い橋だが、自転車なら一瞬だ。

歩きと自転車ではここまで違うのだな、と今更ながら思うゼットだ

った。

「よし、次も自転車でガンガン進んでやるぜ!!」

……と、ゼットは意気込み、次の道を見る。

そして、その道を見た瞬間、今までのテンションが地に落ちた。何故ならば、その道は狭い道だったからだ。

しかも、道の幅は人1人がやっと通れるかなり狭い方の道だ。とてもじゃないが、自転車が通れるようには思えない。

「……………自転車、入れとこ」

ゼットは自転車を折り曲げ、圧縮してバッグに入れる。

ここで、1つ学習して分かった事がある。

それは……自転車は狭い道が通り難いと言う欠点がある事だ。

やはり、自分には歩きの方が似合ってるんじゃないか?と感じたゼットだった。

「さてと、行くか」

ゼットは、その狭い道の中に入っていた。

そこに入ると、道の周りの壁には草や薔、花などが咲いて、美しい場所であった。

分かれ道に前と左があるが、前は行き止まりになっていたので、左に進む事にした。

「どうなっているんだろうな……」

ゼットは左へ進んで行ったが、そこに虫取り網を持った少年がいた。

「君、ポケモントレーナーだね？」

「だったら、どうするよ？」

ゼットは次の言葉が分かっているようにボールに手を掛け、少し後ろに下がって距離を取る。

「勿論、勝負だ！」

「行け、カメール！！」

「行くんだ、ケムツソ！！」

虫取り少年が出したポケモンは、芋虫のようなポケモン……ケムツソだった。

「ケムツソ、『糸を吐く』だ！！」

ケムツソは口から直線的に糸を吐いてきた。糸はカメールを狙って、拘束しようとする。

「壁を使って近づけ！！」

カメールは、右に跳ねてそれを避け、左右の壁を使いながら、ケムツソに近づく。

この壁は花や植物は付いているが、壁なので足場には打って付けだ。右へ、左へと壁から壁へ移っていくカメールは、右の壁から地面へ降り立ち、ケムツソの目の前に辿り着いた。

「『水鉄砲』！！」

「避けて、『毒針』!!」

「バックステップで避けてから、『高速スピン』!!」

ケムツソは水鉄砲を左に避けて、毒針を叩き込もうとする。

しかし、カメールはそれを軽いバックステップで避けて、至近距離からの高速スピンをお見舞いする。

ケムツソは直撃し、虫取り少年の方へ吹き飛ぶ。

「ああ!ケムツソ!!」

「勝負ありだな」

「いや、まだまだ!僕にはまだ、5匹残ってる!」

「げ、5匹!？」

「行け、ケムツソ!!」

虫取り少年が出したのは、またもやケムツソだった。

しかしこの時、カメールはさっきの高速スピンを実行したままだったのだ。

つまり、モンスターボールを出した近くで出現させたとなると……。

「ケムツソ!？」

ケムツソは出た瞬間から、カメールの高速スピんでやられ、戦闘不能になった。

ゼットに至っては、既に呆然としていた。

「なあ、もしかしてお前のポケモン……さっきの奴以外は、全部育てて無いんじゃないの？」

「な、何でそれを……！！」

「今のは何も加えていない、『高速スピン』でやられた。しかも、その余った回転で。さっきのはもうちよっと粘ったけどな。それに、お前の服とケムツソ達の汚れ具合から見て、分かったんだ。さつき捕まえて来たばかりだろ、ってな」

「くっ……」

どうやら、凶星だったようだ。

自分よりも弱いと言う事が分かったゼットは、あからさまに溜息を吐く。

「どうする？このまま続けるか？まあ、それは『高速スピン』の餌食になるだけだけどな」

「それは……！！」

「運良くカメールを倒せたとしても、まだ俺には手持ちが2匹いる。ケムツソ達を怪我させるより、降参した方がいいと思うけど」

「うう……くっそお！皆、後は頼んだよ！！」

虫取り少年は、そう残して退散していった。

しかし、ゼットには明らかに妙だと思う、不審な事があった。

「皆……つて事は、ここには俺とあいつ以外に誰かいるのか？」

この迷路の中には、ゼットを待ち受ける者達がいると言う事だ。それは少なくとも、3人以上はいるだろう。

「おもしれえ！何があるのか知らねえけど、それに乗ってやるぜ！」

ゼットは、次の道は右しか無かったので、右に進んでいった。そこには何と、左右に1つずつあり上に1つある、3つの分かれ道があったのだ。

「多いな……」

だが、ゼットには足をどうしても進めたい場所があった。その場所と言うのは、一番奥の真正面の場所である。それは、ゼットの性格故か、何故かここを進みたくなくなってしまうのだ。

「やっぱり、真正面だ……!!」

ゼットは、自分の欲望に負けて、正面に進む。

しかし、突破しようとした時に、何らかの見えない壁によって阻まれた。

壁が見えずにそのまま当たってしまって、そのまま後ろに倒れ込む。

「壁があつたのかよ……」

何とか立ち上がり、埃を払ってから左右を見る。初めての分かれ道で、どこに行くか迷ったが、すぐに決めた。

「右に行くか」

ゼットは右の道へ進んでいった。

そこは、かなり広いスペースで、バトルが出来る程の物だった。

真中には、1人の女性がゼットを待っていたかのように佇んでいた。両手には触ってもいないのに、ボールが浮いている。

恐らく、エスパータイプ使いのサイキッカーだろう。

「おお！あれが、超能力か！！」

「君ね？私達に勝負を挑んで来た、無謀な子供って言うのは」

「……っつか、勝負を挑まれたのは俺なんだけど」

最初に、虫取り少年に挑まれたから戦っただけなのだ。

ゼットは、巻き込まれていると言っていていいだろう。

「勝負よ！！」

「望む所だぜ！！」

「行きなさい、ユンゲラー！！」

「出て来い、ピカチュウ！！」

相手は、ケーシイの進化系のユンゲラーだ。

少々、厄介な技を持っている事で有名である。

「『サイケ光線』！！」

「避ける!!」

ユンゲラーはサイケ光線でピカチュウを攻撃する。

ピカチュウは、その速さで何とか避けた。

サイケ光線は、サイコネシスの「放出」の強化版だ。

威力は、サイコネシスよりも低い上に、「放出」よりも遅いが、当たる確率が高い。

何故ならば、自在にその大きさを変える事が出来るからだ。

大きくしても、そのままの速度で攻撃出来るのだ。威力もだが。

「あれはやべえな……」

「『サイケ光線』!!」

サイケ光線は、大きい物と、小さい物の連続でピカチュウに襲い掛かる。

ピカチュウは、それを見極め、左右に避けていく。

「『10万ボルト』!!」

少し近づいた所で、ピカチュウは電撃を放った。

ユンゲラーは、サイケ光線をピカチュウに攻撃していたので、電撃を避ける暇は無かった。

そして、ユンゲラーに電撃が直撃した。

「しまった!!」

「そのまま、『電光石火』!!」

ピカチュウは、ユンゲラーが電撃で痺れている内に、一気に接近した。

痺れている間は、サイケ光線が出ていないので、正に今が好機。

「今だ！『10万ボルト……！！』」

「『念力』を自分に当てて、後ろに吹き飛ばして……！」

サイキッカーは、漸く痺れが治ったユンゲラーが、近くにいるピカチュウからは今の力では逃れられないと知った。
ならば、今出来る念力で自分自身を移動させたいと言う事だ。

「何て荒業だ……」

「『テレポート』が使えないからね。こうするしか無かったのよ」

「（真正面から、ピカチュウに当てれば良かったのに、何故だ？）」

「『サイケ光線』……！」

「『10万ボルト』……！」

2つの攻撃は同時に発動され、相殺に終わった。

しかし、そこにはピカチュウの姿が消えていた。そして、変わりにあったのは……。

「『影分身』！？」

「そう言う事だ！」

影分身は、ユンゲラーの周りを囲む。

どれがどれだか、分からなくなっている内に攻撃すると言う戦法だ。

「（俺の予想通りなら、あのユンゲラー……）」

ゼットは、そろそろ攻撃しようと思っていたが、次の瞬間ゼットは驚愕する。

何故ならば、攻撃する前に本体を見破って攻撃されたからだ。

「まさか、『ミラクルアイ』！？」

「その通り。『ミラクルアイ』は回避率を無視して攻撃する技。『影分身』は意味が無いのよ」

「（『ミラクルアイ』も覚えてるって事は、あれも覚えているかもな……）」

ミラクルアイによって、影分身は使えなくなってしまった。しかし、ゼットは勝利を確信していた。

その理由は、ユンゲラーの弱点を見つけたからだ。

ゼットは、ピカチュウに指示を出す。

「『10万ボルト』……」

「待ってたわよ！『金』……」

「……『影分身』！！」

「……縛り！！」って、ええ！？」

サイキッカーは困惑した。何故ならば、最後に影分身を使つて来たからだ。

金縛りは、最後に使つた技を一定時間、封印してしまう技である。最後に使つたのが、影分身……つまり、10万ボルトでは無く、影分身を封印してしまったのである。

「ピカチュウが隙を見せれば、あんたは必ずこの技を掛けて来る。『ミラクルアイ』を覚えていれば、『金縛り』も覚えていると思つたからな。ならば、真つ先に厄介な『10万ボルト』を封印する筈。俺はそれを敢えてして、その後に素早く使えない技を出す」

「でも、そんな指示に追いつける訳が……！」

「そこは、敢えて言わねえ。最大出力で『10万ボルト』……！」

「最大なら最大で！『サイケ光線』……！」

そして、サイキッカーはユンゲラーに最大のサイケ光線を指示した。……ゼットの策略に嵌っていた事も知らずに。

ゼットは10万ボルトを指示したのだが、ピカチュウがしているのは、電光石火だ。

しかも、ユンゲラーに向かって来ていた。

「嘘でしょ！？反動の大きい技から、一瞬で別の技に変えられる筈は無いのに……！」

「それを可能にする技があるのさ……！」

「そんな技……！まさか、『フェイント』……！？」

「その通りだ！本来は守りを崩す時に使う技だが、こう言う使い方もあるって事さー！」

フaintト……今まで出て来ていなかった、第4の技である。
ピカチュウは、どんどんユンゲラーに接近していく。

電気を両頬に溜めて、いつでも攻撃する準備が出来ている。

「わ、私のユンゲラーには『念力』があるのよ！？無駄だわー！」

「だったら、何で使わねえ！それは、そのユンゲラーが『念力』を遠距離でしか出来ないからだ！唯一、近距離で出来る事と言えば、自分に念力を掛ける事ー！」

「！ー！」

「そして、さっきのでけえ『サイケ光線』をしたユンゲラーは次のエスパー技を使うのに、暫くの反動が出るーなら、今は何も出来ない状態って事だー！『10万ボルト』ー！」

そして、今まで溜めていた電気をユンゲラーに放出する。

これこそが、最大出力の10万ボルトだ。

ユンゲラーは、先程のダメージもあってか、倒れてしまった。

「ま、負けた……」

「よっしゃー！勝ったぜー！」

ゼットと、サイキッカーはお互いにポケモンをモンスターボールに戻す。

「まさか、あんな方法でやられるなんてね……」

「これで終わりか？」

「最後にもう1人、残ってるわよ」

「そうか！よし、次も倒すぞ！！」

ゼットはサイキッカーのいる所から出て、先程の場所に戻った。
残っている場所は、一番奥の場所と左の場所だ。

一番奥の場所は、見えない壁によって、阻まれていた。
なので、ゼットは左の場所へ入っていった。

「さつきと変わんねえな」

左の方も、先程と変わらない大きさの場所だった。

変わったと言えば、周りの壁の花が殆ど咲いている事だ。

そこには、この場所に似合わない、格闘家の男が正座していた。
ゼットが来ると、男は目を開けてモンスターボールを掴む。

「お前がここまでやって来たと言う強者だな？」

「ああ、そうだ！」

「ならば、いざバトル！！」

「頼むぞ、ガーディ！！」

「出でよ、ゴーリキー！！」

ゴリキーとは、ワンリキーの進化系の事である。
進化している、と言う事はかなり強い証拠だ。

「『空手チョップ』!!」

「かわして、『炎の牙』!!」

ガーディは左に跳ねて避け、空かさず炎の牙で攻撃する。

ゴリキーは、振り払おうとするが、ガーディは中々離れない。

「ならば、『リベンジ』!!」

「何!？」

リベンジとは、相手に攻撃されると、威力が2倍に増す技である。
案の定、ガーディはそれを直接喰らって、ゴリキーから引き剥がされた。

しかし、ゴリキーの攻撃はまだ終わらない。

「『空手チョップ』!!」

ガーディが空中で舞っている所で、チョップが腹部に直撃する。
腹部に当たったので、ガーディは地面に叩きつけられる。
何とも言えない衝撃がガーディを襲った。

「ガーディ!!」

「少し早かったが、これで終わりだ!『地球投……!!』」

「『火の粉』!!」

ゴリキーが攻撃しようすると、ガーディから火の粉が飛んで来る。

両手で、火の粉を防いでしまった為、前が見えなかった。それが、仇となった事も知らずに。

「『火炎車』！！」

前方から、火炎車の衝撃が襲って来る。

それに耐えられず、ゴリキーは後ろに吹っ飛んでしまった。

「ゴリキー！！」

「『炎の牙』！！」

さらに炎の牙で、追撃を掛けようとする。

だが、次の瞬間ガーディは、ゴリキーに両手で掴まれる。

「『当て身投げ』！！」

当て身投げとは、後攻になってしまいが、必ず当たる技である。

ゴリキーは炎の牙を喰らうが、ガーディを投げ飛ばす。

「態勢を立て直して、『火炎車』！！」

ガーディは何とか態勢を立て直し、火炎車でゴリキーに向かっていく。

ただし、今回は火炎車だけでは無い。

「『炎の牙』！！」

火炎車を出しながらの炎の牙で、攻撃する。
これならば当て身投げを指示しても、耐えられないだろう。
それにもし、耐えられたとしても……。

「『当て身投げ』!!」

「来たか!!」

ゴリキーに掴まれるが、火炎車の状態で炎の牙を出しているのだ。
ダメージを喰らい続けるまま、投げ飛ばす事は難しいだろう。
しかし、ゴリキーはそれを遣って退けようとしたのだ。

「頑張るんだ!ゴリキー!!」

「いや、終わりだ!『起死回生』!!」

ガーディはさらなる一撃を叩き込んだ。
その状態のまま、大きな一撃が来てしまったら投げられずに終わる
だろう。

そして、ゴリキーはその場で倒れ、目を回してダウンした。

「よっしゃあ!勝ち抜いたぜ!!」

「ま、負けた……」

2人は、ガーディとゴリキーを戻した。

「それで、これは終わりなのか?」

「そうだ。真中の道を行け。今なら行けるだろう」

さっきは、行けなかった道だが、今は分らない。

どちらにせよ、あそこを通らなければ、先へ進めないのだから。

ゼットは、左の道から出て、先程の道へ出る。

奥の道に触ってみるが、先程の見えない壁が消えていた。

「進むか」

ゼットは奥の道へ進むと、拍手の音が聞こえて来た。

そこには、お坊ちゃまのような青年がいた。

「おめでとう！よくここまで辿り着いたね！！」

「へ……？」

「ここは、トレーナーの試験場見たいな場所で、トレーナーの腕試しに打って付けなんだ」

「へえ。それで、もう終わったって所なのか？」

「うん。君は3人を倒し、この迷路を潜って来たんだ」

「いや、迷路じゃねえだろ」

ゼットがお坊ちゃまに突っ込みを入れるが、まるで聞いてない。そして、ゼットは賞品らしき物を貰った。

「モンスターボール10個！？」

「これで、ポケモンを捕まえてくれたまえ。未来のトレーナーよ」

「急に偉そうになったな。まあ、取り合えず貰っとくよ」

ゼットは、モンスターボールを貰い、花の道を抜ける。

「よし、ヤマブキシティ目指して出発だぁーっ!!」

何故か、海ばかりが見える事に疑問を抱きつつ、進んで行く。

ヤマブキシティが全くの逆方向にある事にいつなったら気が付くのか……続く。

第19話 「新たな仲間！ポケモン研究所の騒動！！」

見渡せば、太陽の反射で輝く海。

そんな海に近づいてみると、波音がよく聞こえてくる。

最初は静かだが、岩に打ち付けられた時の音は力強く、どこか壮大さを感じさせる。

今になっても、海に向かって「バカヤロー！」と叫ぶ者も中にはいるかもしれないだ。

実際に、山に向かって「ヤッホー！」と叫ぶ者もいるんだから、それと同じ要領だろ。

つつか、「ヤッホー！」と「バカヤロー！」って殆ど同じじゃね？違うのは言葉と場所だけだろうが。それ以外は大体同じだろ。

あ、でも「バカヤロー！」って叫ぶのは男だけか。

………と言うような事を、ゼットは繰り返し呪文のように考えていた。

ここは、25番道路と言って、殆ど海だけしか無い、隠れた釣りの名スポットである。

何故、今までのような事を考えていたのか……その理由は、数分前に遡る。

「よし、ここが……ヤマブキ……シティ……？」

ゼットは花の道を抜けた後、25番道路に出た。

そこはゼットが思っていた、ヤマブキシティでは無かったのだ。

まず、地図も確認せずに別方向へ行ってしまった事が問題なのだが。

「あ、あれ？何か違うような……。ヤマブキシティって、港町だった？た、確か大都会だったような……」

これが大都会だったら、マサラタウンは超都会である。
ゼットは困惑しながら、辺りを見回す。

もしかしたら、ヤマブキへ続く道かも知れない、と試してみたら、
道を示す看板がどこにも無い。

「え、ちよつと待てよ……」

急いでゼットは、タウンマップをバッグから出す。

それを暫く凝視していると、意外と冷静にタウンマップをしまった。
そして、空を見上げこう叫んだ。

「道、間違えたああああ！！！！」

今更になつて、気が付いたゼットはオドオドする。

そうして考えてみると、ハツと気が付く。

「待てよ？ エックスが昨日ハナダジムを出たんだろ？ だとすると……」

……

ゼットの場合

オツキミ山 ↓ ハナダジム ↓ 迷子になる ↓ 全て回った（時間差） ↓
もう遅えよ ↓ 灰になった

エックスの場合

ハナダジム ↓ 全て回った（時間差） ↓ ポケモンリーグ出場前 ↓
開幕（中） ↓ 白熱だった

と言う、妙な式がゼットの頭を瞬時に遮った。

「俺、出場停止の危機iiiiiiii！！！！？」

このままだと、恐らく出場停止が決定するだろう。
ゼットは、天に向かってそう叫んだ。

「こつ言つ時こそ……」

そう言うと、ゼットは先にある海を見る。
つまり、ゼットの最終手段の現実逃避である。
こつして、今に至る訳だ。

「ああ……海は綺麗だ」

「どうしたんですか？」

急に後ろから話し掛けられ、ゼットはびっくりする。

「だ、誰？」

「あ、すみません。僕の名前はシンです」

「俺はゼットだ」

眼鏡を掛けた少年……シンはゼットに挨拶する。
ゼットも軽く自己紹介して、シンを見る。

「それで、一体ここで何をしてたんですか？」

「いや……ちよつとここで現実逃避を……」

「……………家に入りますか？」

「すまねえ……」

ゼットはシンに連れられて、小屋の中に入っていた。

中は、機材が多々置いてあり、大きな装置が真中に聳え立っている。ゼットは驚きながら、シンの家を見渡す。

これはまるで、何かの研究所のようだ。

「ここは、ポケモンを研究しているポケモン研究所です」

案の定、ここは研究所であった。

その奥には、創りかけであろう、2つの機械があった。

2つの機械は今でこそ離れているが、完璧に繋ごうとしている事が容易に分かる。

何故ならば、右の装置の左の部分と、左の装置の右の部分とが繋がっているコードがあるからだ。

1つか2つ程度しか繋がっていないが、近い未来には完璧に繋がるだろう。

しかし、この装置が一体何なのかが分からない。

「これって一体何なんだ？」

「未完成ですけど、これは持ち切れなくなったポケモンを、送り届ける装置ですよ。モンスターボールを置くだけでね。10年後には完成して、さらに10年後にはコードすら使わずにワイプで送り届ける事が出来るんですよ、普通ならね！そして、それを僕はこの時代で生み出そうと言うのです！どうですか！？」

「へ、へえ……すげえな……」

シンはゼットに自慢気に話し、それをゼットは顔を引き攣らせながら答える。

ゼットは、かなり発展した技術を持っている、ポケーションを見る。シンの言うそれが20年後の技術なら、これは30年後の技術ではないだろうか。

3D技術だけならシンの言う方が凄くても、これはシンの言うワイプ技術が搭載しているのだ。

このポケーションに持ち切れなくなったポケモンを、ボールに入れたまま翳せば、一瞬でそこに移動するのだ。

出したい時は、自由に出せると言う便利な機能を持ち、正に多種多様である。

しかし、これは世界で2つしか無いので、公に出ると言う意味では新たな第1歩だろう。

夢を持つのは輝かしい事だが、既に大きく発展した技術があると知れば、悪い意味で愕然として、立ち直れなくなってしまう可能性がある。

そう思うと、はしゃいでいるシンが可哀想になって来た。

「それにしても、一体何かあったのですか？」

「実はな……」

ゼットはシンに今までの経緯を話した。

ヤマブキシテイとは逆方向へ行ってしまった事、自分がリーグの出場が出来なくなる事などだ。

「そう言う事でしたか。大丈夫ですよ。リーグには十分間に合いますから」

「え？そうなのか？」

「あれ？知りませんでしたっけ？リーグは結構遅くて、2ヶ月後ぐらいにやるんですよ。ハナダジムに勝ったんでしょ？だったら、今のペースで行けば全然間に合います」

「そんなに後だったのか……。俺、てっきり1ヶ月後かと思って焦っちゃったよ」

1つのポケモンジムへ行って倒すまでは、1週間以上は掛かると言う。

ハナダシティは、ヤマブキシティに近いからそうは掛からない。

「それじゃあ、そう急ぐ旅でも無いし、ゆっくり行くか！」

「あ、ちょっと待って下さい！」

シンは何かを思い付き、ゼットを引き止める。

「何だ？」

「いや、実は向こうの装置が暴走を起こしちゃって……。1日に一度、複数のポケモンが出て来ちゃって、困ってるんですよ。かといって、破壊出来る程脆く無いし……」

「……それをどうしろと？」

「つまり、今日来るポケモン達を倒して欲しいんです」

自分の事をトレーナーと知ってか、シンはそう頼む。

「いや、何で？ポケモン研究所なら、ポケモンの1匹や2匹はいるだろ」

「皆、全滅しました」

「あ、そう……じゃあ、それを壊すなり、ショートさせるなりすれば……」

「あれには、耐水性が出来ていて、さっきも言った通り、頑丈なんです。元々、あれはさっきのあの装置の初代です。そのまま、廃棄しようとしたんですが、転んだ時に変な所を壊しちゃったみたいで、その時からその装置の中から、複数のポケモンが同時に出て来るようになったんですよ。ハハツ、全く困った物です」

「それ、お前の責任だろうがあああ！！」

話を聞いてても、一切の同情が沸かなかった。

その前に、それを軽い失敗談のように話すシンには、必死さがまるで無い。

「そこまで楽に話せるんなら、俺の助けなんていらねえだろ」

あまりにも必死さが伝わって来なかったので、ゼットは自分から諦める。

「待って下さい！お礼に、僕の持っているポケモンの1匹を上げますから！それに、今回があれの電源が切れる日なんですよ！頼みますから帰らないでください！！」

「今更かよ！？まあ、分かった」

やっと必死で頼んで来たので、ゼットはその依頼を引き受けた。
しかし、彼のくれるポケモンとは一体何なのか……ゼットはその辺りも気になっていた。

「ありがとうございます！今はまだ、その時間じゃ無いので、外でぶらついてても構いません」

「分かった……」

ゼットは小屋の外に出る。

小屋から出ると、気持ちの良い風が包み込む。

そうして、崖の近くへ行くと、男が立っていた。

白髪が特徴の男は、年齢から見て20歳前後と言った所だ。

白髪の男は、海を見ているようにも見え、その先の何かを見ているようにも見えた。

「少年」

「へ？」

いきなり、名前を呼ばれて素っ頓狂な声を上げるゼット。

白髪の男は振り返って、それに構わず話し続ける。

「お前は、この世界が好きか？」

「そ、そうだけど……」

「そうか……」

それだけ聞くと、もう一度海に向き直る。

白髪の方から自然と発せられる、圧倒的威圧感がゼットの心を重くする。

そして、彼の目に潜む「深淵」……この世の物とは思えない、恐怖がその目に宿っていた。

「人は何故、この質素な道を歩くのか……」

「それは、誰でも平和が一番だからだろ？」

「本当にそれで、本物の平和が手に入れられるのか？」

「え……」

その問いに、ゼットは言葉を詰まらせる。

今は、戦争も殆ど無いが、完璧に無い訳ではない。

カントーも、他の地方もいろいろな社会問題を抱えているのだ。決してそれが生き物の望む、完璧な「平和」とは言い切れない。

「それは……」

「ゼットさん!!」

すると、小屋からシンが出て来た。

シンは息を切らせながら、こちらに走って来る。

「た、大変なんです！ 予定より早く、ポケモン達が現れてしまいました！ 急いでください!!」

「わ、分かった！」

ゼットもシンの後に付いていく。

崖の方へ振り返ると、白髪の男はどこかへ消えていた。まるで、最初からいなかったかのように……。

小屋の中に入ると、いろいろなポケモン達が出ていた。

ゴローンにイシツブテ、サイホーンと、岩山に住んでいそうなポケモンがいた。

その数の合計は、全20体。とても簡単に1人で倒せる数では無い。

「随分多いな……」

「今日が一番多いですよ……」

「何か、他にポケモン持ってねえか？」

「いますけど……」

そうして出て来たのは、大きな欠伸を掻いて、眠そうにしているピンクのポケモンだった。

今の状況を理解していないのだろうか、ゼットの足を枕にして寝ようとしている。

「……おい、こいつは何なんだ？」

「ヤドンです。とても面倒臭がり屋です」

「駄目だろ！何が出来るんだよ！他には何かいねえのか！？」

「今はヤドンしか……」

「おいおい、ここポケモン研究所じゃなくて、ヤドン研究所に変えた方がいいんじゃないのか？」

ピンクのポケモン……ヤドンは相変わらずである。

サイホーンは、痺れを切らしてヤドンに飛び掛った。

「やっべー！避けるー！！」

手持ちじゃないが、ゼットはヤドンに避けるよう指示する。

あまりにも、避けるのが遅かったので、ゼットはヤドンを持って避ける。

「ふう……大丈夫か？」

「ヤドゥ」

「暢気な奴だな……」

しかし、時間は待ってくれず、今度はゴローンがゼットとヤドンに襲い掛かって来た。

空かさず、ゼットはモンスターボールを出し、そこから水鉄砲が発射される。

水鉄砲は、ゴローンの体の中心に直撃して、ダウンした。

そこから出て来たのは、言わずと知れずの、カメールである。

「『高速スピン』から『水鉄砲』！！」

素早い指示で、カメールは高速に回転し、そこから水鉄砲を放つ。水鉄砲はポケモン達全体に当たり、岩タイプのポケモンの何匹かがやられた。

すぐさま、ポケモン達の敵意はゼット達に向けられる。

「す、凄い……」

「さあ、ショータイムの始まりだぜ！！」

ゴローン達は、一直線にゼット達へ向かって行く。

「『火の粉』と『水鉄砲』！！」

火の粉と水鉄砲は、互いに打ち消し合い、水蒸気を生む。

水蒸気によって、辺りが見えなくなったゴローン達は困惑する。

「いいか？予定通り頼むぞ」

ゼットはピカチュウ達に何かを頼む。

そして、水蒸気が消えていき、ゼットが姿を現す。

しかし、ポケモン達の姿がどこにも無かった。

「ピカチュウ、『10万ボルト』！！」

すると、どこから出て来たのか、ピカチュウは10万ボルトを發した。

そのままでは効果は皆無だが、目暗ましには使える。

ポケモン達は、目が中々開けられないでいた。

予めゼットは、機械の影に隠れていたもので、目を開けられる。

「ガーディ、『火炎車』！カメール、『高速スピン』！！」

今度は、火炎車と高速スピンだった。

火炎車は左の、高速スピンは右のポケモン達の態勢を足場から崩す。目が眩んだままのポケモン達には、どこにいるのか皆目見当も付かず、反撃が出来ない。

ガーディとカメールの攻撃は、次々に当たる。

何度か、ポケモン達を吹っ飛ばすと、ゼットは全体を見て笑みを浮かべる。

そう、ポケモン達が倒れながらも、一直線に並んでいる事が分かる。ゼットはこれを狙っていたのだ。

ピカチュウ達はポケモン達の一番手前に着く。

「（やっぱり、えげつねえ攻撃だが……ここまで来たら、引き返せるか！）行けええええ！！」

ピカチュウは後ろの壁を踏み台にして、電光石火でカメールを叩きつける。

すると、カメールはその衝撃でポケモン達の方へ凄まじい勢いで飛んで行く。

「『アクアテール』！！」

カメールは横に1回転して、もう1回転しながら、先頭にいるポケモンに叩き込む。

そのポケモンが吹っ飛ばされると、後ろのポケモン達もドミノ倒しの如く、吹っ飛ばされていった。

最後の方まで行き、ついにポケモン達を倒した。

「よっしゃああ！！」

「ピイカ！！」

「ワン!!」

「カッメー!!」

ゼット達は、大いに喜んだ。

20体近くいた、あの軍勢を全て倒してしまったのだ。
それも仕方は無いだろう。

「ハ、ハハハ……流石、ジムバッジを2つ持ってるだけの事はある
……」

「……つつつても、2体以上を使って倒すなんて久しぶりなんだけ
どな」

「そうなんですか……」

しかし、その油断が禁物だったのだ。

ゼットの後ろで、何故かピカチュウが吹っ飛ばされた。

「ピカチュウ!？」

ピカチュウは、その威力にやられてしまったようで、気絶している。
他の2体も、同様に吹っ飛ばされる。

その原因は、まだ体力が残っていた、サイホーンであった。

3体はやられた訳では無いが、気絶してしまった。今では恐らく
やられる。

「今のは、『乱れ付き』って所か……!くそおっ!もうポケモンが
……」

いない、と言おうとした時、ゼットは下にいるヤドンを気が付いた。ヤドンは、ゼットを見つめていた。

その特徴である、墮落した目付きだけは微塵も変わっていないかったが。

しかし、ゼットはヤドンの言いたい事がすぐに分かった。

「……分かった！最後の仕上げに掛かるぞ！！」

「え！？ヤドンでどうにかなる相手なんですか！？」

「種族値云々じゃ、あっちの方が上だろうな。だけど、他はどうだと思う？」

「そうか！サイホーンは防御力が高いけど、特殊防御力は低い！おまけに相性でも、ヤドンの方が有利って事ですね！」

「そう言うことだ！」

ゼットは、シンの説明にきっぱりと答える。

だが、時間は待つてはくれず、サイホーンはこちらに向かって来た。

「ヤドン、『水鉄砲』！！」

ゼットはそう指示するが、いつまで経ってもヤドンは攻撃しない。サイホーンは、もうすぐそこまでやって来ていた。

「お、おい！？聞こえてんのか！？『水鉄砲』だつて！！」

そして、サイホーンは乱れ付きでヤドんに襲い掛かろうとした。その瞬間、ヤドンは口から水鉄砲を吐き、サイホーンを押し返す。

威力は凄まじく、あのサイホーンを向こうの壁へ吹っ飛ばす程であった。

「（……っつか遅っ！？）」

あまりの反応の遅さに、ゼットは呆然とする。

だがしかし、あの威力は普通のヤドンでは比べ物にならない威力だった。

「素早さが最悪な変わりに、威力は凄いか……！ どんだけ極端な奴なんだよ」

「ゼットさん！ まだ終わってませんよ！！」

「ああ、知ってるぜ」

そう言っただけで、ゼットは冷静に向こうの壁にいる敵を見る。

恐らくは、先程倒したポケモン達の長なのだろう。

サイホーンは、かなりのしぶとさで這い上がった。

「……まっ、そうじゃなきゃ、面白くねえしな。『念力』！」

ヤドンに指示が届くまで時間が掛かる。

そう考え、サイホーンはこの間を使って一気に突破しようとした。

だが、意外にも素早く技を出した為、サイホーンは驚く。

しかし、何よりも驚いたのが、発した技が念力では無く、水鉄砲と言ふ事だ。

ギリギリで水鉄砲を避け、サイホーンはバックステップで距離を置く。

「俺はもつと前から、『水鉄砲』を指示してあつたんだ。そして、『念力』がその次の指示さ」

それは、ヤドンがいつまで経っても攻撃しない事に疑問を持って、呼び掛けていた時である。

その時に、ゼットが水鉄砲と言ったから、それが今届いたのだ。

「（まあ、全くの偶然だけだな……）」

「ヤド」

ヤドンは、バトル中にも関わらず、欠伸を掻いていた。

「相変わらず、暢気ですね……和みますけど」

サイホーンは、岩を投げてきた。

しかし、ヤドンはタイミング良く、それを全て止めて落とす。流石に、多くの物体を念動力で動かす事は出来ないらしい。

「来るか……？」

ヤドンが攻撃を防ぐと、次の攻撃をしようとサイホーンが迫って来る。

シンはやられる、と思ったが、サイホーンは急に目が空ろになり、倒れた。

どうやら、寝ているようだ。

「え？サイホーン、一体どうしちゃったんですか？」

「ヤドンが眠そうだったの見たよな？」

「ええ。何だかあく……そうか！『欠伸』か！！」

欠伸とは、相手を眠気に誘う技で、一瞬で寝る訳では無く、だんだん眠っていく技である。

サイホーンはそれによって、寝てしまったのだ。

「これで終わりだな。止めを刺す必要も無いだろ」

「そうですね。今日はありがとうございました！それにしても……」

辺りを見回すと、バトルした後で一杯だった。
ゼットはそれを見て、顔を引き攣らせる。

「じゃあ、俺はこれで……」

「駄目です！ちゃんと、片付けてから行ってください！！」

「やっぱりか！？」

こうして、ゼットは部屋の片付けを嫌々手伝う事になった。
ゼットが倒した、ポケモン達も故郷の岩山へ帰していった。
そうして、長い時間が過ぎて、夕方になった。

「今晚はやっぱり、泊まっていった方がいいのでは……？」

「いや、俺も早くあいつに追い付きたいからよ」

「そうですね……なら、ヤドンを連れて行ってください」

「……ええええ！？いいのか！？本当に！？」

「元々、そう言う約束でしたから……」

断る訳にもいかず、ゼットはそれを受け取った。

「くうく……やったぜ！ヤドンGET！！」

「それじゃあ、気を付けて」

「ああ！またいつか会おうぜ！！」

こうしてゼットは、新たな仲間を加えて25番道路を抜ける。
そして、一行が目指す場所は、ヤマブキシティである。続く。

第20話 「怪奇！夜のサイクリングロードの番人！！」

ここはハナダシティの南にある、サイクリングロード。

昼は、自転車でハナダとヤマブキを行き交う者達がとても多い。

しかし、夜の場合は昼とは一気に変わって、閑散としていて、ポケモン達の呻き声も良く聞こえる。

ゼットはサイクリングロードまでやって来て、ついに夜になってしまった。

「やっと着いたぜ〜！もう夜になっちまったけど、ここを抜ければヤマブキだ！！」

ゼットはそう張り切るが、誰もそれには答えない。

今はサイクリングロードには誰もいない……それも仕方無いだろう。裏通路にいる、バルビートやイルミーゼから発せられる、淡い光がポケモン達にとって、唯一の光だ。

イルミーゼ達の甘い香りに惹かれて付いていく、バルビートの大群が一気に空へと舞う。

上空に舞うイルミーゼとバルビート達は、星空のサインを描いて幻想的な景色を作り上げる。

「綺麗だな……おっと！こうしちゃ、いられない！！」

ゼットは、自転車に乗ってゲートへ急ぐ。

ポケモンリーグ開催まで2ヶ月もあるが、そのんびりとしてはいられない。

ただでさえ、エックスに遅れを取っているのだ。

負けず嫌いであるゼットにとっては、これは由々しき問題なのである。

ゲートに近づいてみると、通行人を確認する窓口には誰もいなかった。

流石に夜は誰も来ないので、さっさと帰ってしまったのだろう。

しかし、そうなると当然の疑問が浮かんで来る。

「（裏通路って、確か自転車を買えなかった人がヤマブキへ渡る、唯一の場所だよな？それ以外にも、ハナダシティの東側にあるイワヤマトンネルを通って、南側に渡る方法があるけど……）」

ゼットは、タウンマップを見ながらそう思う。

裏通路は、自転車の持っていない者も通れる、舗装整備のされていない場所である。

ただし、舗装整備がされていない為、ポケモンの繁殖も激しく、今や強い者しか通れない道となっている。

殆どの者が逃げ帰って、イワヤマトンネルを通っている。

しかし、こちらの中々に手強いポケモンが多く住み着き、結局金を稼いで安い自転車を買う、と言う事になるのが常だ。

「（だったら、夜の内にここを通れば、誰にも見られずに、ポケモンとも戦わずに済むのに……何でだ？）」

確かに、そう思うのが普通である。

態々、裏通路やイワヤマトンネルのようなポケモンの巣窟に赴かずとも、この道を通れば楽ではないだろうか。

夜にこの道を通る事はハナダシティでも認められているので、違法では無い。

それを知っているのにも関わらず、何故ここを通らないのか。

「この街のジョーイさんも、通っても大丈夫って言ってたし……尚更、訳分かんねえな」

1人そんな事を呟き、ゼットはゲートを通った。
流石サイクリングロードと言うだけの事はあるか、かなり道幅が大きい。

「おい……どうなってんだよ……？」

ゼットはそのありえない光景に愕然としていた。

その理由は、あれだけ進んでいたのに、すぐ後ろに最初のゲートがあったのだ。

つまり、自分は先程から全く進んでいないと言う事になる。

しかし、それよりも驚くべきは、ゲートが完膚無きまでに叩き潰されていった事だ。

これを見たゼットは、ゲートを叩き潰した者の意図が分かった。

それは、ゼットをここから1歩出させず、閉じ込める事だ。

「へへっ……俺を閉じ込めたって訳か。変なループは出るし、出口は塞がれるし……俺の人生もここまでか」

「ピッカ……」

いつの間にか出ていたピカチュウがゼットに話し掛ける。

心配そうな目をゼットに向ける。

それは、モンスターボールの中にいるポケモン達も同様だ。

ゼットはピカチュウに笑みを浮かべる。

「大丈夫さ。今までだって、こんな危険な目に遭って来ても、何とか解決して来たじゃねえか！俺を信用しろよ！」

「……ピカッチュウ……」

「よし！それなら、この原因を作った野郎を取っちめて、ヤマブキシティへ行こうぜ……！」

そう言ってみたものの、これと言った手掛かりは無い。

あると言っても、その者が壊したゲートである。
通ろうと思えば何とか通れるが、それでもループによって向こうへ
行ってしまう。

「『サイコキネシス』か？ いや、ループは出来ないか……」

サイコキネシスは応用性が秀でているが、こんな事は出来ない。
エスパータイプにしても、このような技は聞いた事が無い。
何かの結界のような感覚もするが、少なくともループの出来る結界
は存在しない。

もしか、幻術云々の問題と思っただ、ここまではっきりとした感覚
は無い。

「それに、誰かに見られているような、奇妙な感覚……」

ゼットは、さっきから何物かの視線を微かに感じていた。
自分を睨むような、射るような鋭く冷たい視線を。
そうして、神経を尖らせてると、いろいろな物が目に付く。

「ちょっと試してみるか……」

サイクリングロードの両サイドから見える、裏通路を見る。
ゼットは腰から空のモンスターボールを取り、右に投げる。
すると、左から軽くて堅い何かがぶつかって来た。

「痛っ！……こいつは俺が投げたボール？」

そう、これは先程ゼットが投げた空のボールである。
ゼットは、横にも術が掛けられていて、本格的に閉じ込められてし
まった事を再認識した。

だが、こんな時こそ冷静にいななければならない。

「このループがいつまでも掛かってるって事は、少なくとも術者はこの範囲内にいる訳だ。となると、そいつはどっかに隠れてるって事になるけど……」

確かにそうでなければ、この大規模ループは成立しない。

そのような攻撃をする場合、多少のリスクは出て来るだろう。

術者に攻撃を仕掛ければ、この術は解けるだろう。

しかし、その肝心の術者が見つからないのだ。

「もしかしてこの技……エスパータイプじゃない？」

「ピカ？」

「じゃあ、炎？その炎がねえし……水？何か出来るのか？草か？いやいや……」

ゼットはその後も考えを巡らせていった。

電気は、何が出来る訳でも無いので、無理だろう。

氷も冷気が無いし、ゴーストも出来そうだが、やはり不可能だ。

格闘は問題外、毒や虫もそんな現象は起こせない。

飛行と地面に至っても殆ど攻撃しか出来ないし、岩や鋼も意味が無い。

ドラゴンも無く、悪は出来そうだが、残念ながらそれを可能にする技は無い。

そうすると、残ったタイプは……。

「……ノーマル？いや、でも何も出来そうに……待てよ？この攻撃が『黒い眼差し』なら……」

黒い眼差し……それは、相手を逃げられなくする拘束術である。
この技には、主に2通りの拘束方法がある。

逃げる対象を直視して動きを止めるか、遠ざかった場所から見て何らかの方法で閉じ込めるか。

このループ現象は、恐らく後者で間違いは無いだろう。

全神経をそこに尖らせる必要も無い為、ループと言う簡単な方法を選んだのだろう。

しかし、その場合は相手を自由にさせてしまい、完全な拘束には至らないのだ。

利点は、普通よりも労力を浪費しなくて済む事と、態々近くへ行かなくても済む事だ。

と言っても、やはり範囲内にいなければ発動出来ないが。

「そう考えれば、全ての辻褄が合うな。……ああ！いろいろな頭使い過ぎて、訳分かんなくなって来た！」

考える派のようである派では無いゼットにとって、これは地獄だった。

ここまで推理出来た事自体が、珍しい事なのだ。

「取りあえず、整理すると……」

今までの事を、絵に描いて整理する。

まず、ゼット達がこの辺りを歩いている事を確認した術者はここへ来ようとしている事が分かった。

何かの理由で、術者は彼等を閉じ込めようと考えた。

次に、ゼット達は何も知らずにサイクリングロードへ入る。

その時はまだ、術者は黒い眼差しを発動していなかった。

自由になれるとは言っても、完全な自由では無いのだ。

術の維持の為に、中心からは離れる訳にもいかない状態なのに、そこからゲートへ攻撃するのは至難の業だ。

仮に出来たとしても、それによってゼットがすぐに気づいてしまう。なので、本人が直接ゲートへ行く必要があったのだ。

上記の理由もあり、術者はゲートを壊して唯一の出入り口を無くさせた。

最後に、彼等が中盤に差し掛かった頃、ついにその技を発動させた。
……………と言う所が今の現状である。

「つまり、術者は範囲内の中心にいるって事になる訳だ」

無限ループ範囲内の中心、そこが術者のいる場所である。

ループが起こったとされる場所へ行って、転移先の中心らしき場所に辿り着く。

そこへは来たものの、これと言って何も無い。

あるとすれば分かれ道の最初と、折れた枝と、上空に舞う蛍の光だ。真っ先に怪しいのは、この分かれ道の分岐点だ。

丁度良く、ここに分岐点があるのはおかしいと思ったのだろう。

しかし、こんな所にどうやって隠れられるのか。

そこが、一番の問題点でもあったのだ。

「どうすれば誰にも気づかれずに隠れられるんだ？」

ゼットは、分岐点を見つめる。

分岐点の辺りを見ても、これと言って、気になる点も無い。

「ん……………全く訳分かんねえ」

どうしても、そこで引っ掛かってしまう。

中心にいると言う事は分かったが、どの辺りが中心なのかが分から

ない。

すると、ここで疑問が浮かび上がって来る。

「（そういや、『黒い眼差し』って、神経を目に集中させて相手を逃がさない技だよな。広範囲でやると、拘束出来なくなるけど）」

普通の場合ならば、直接睨み付けて逃げようとした者の動きを止める。

しかし、広範囲などの場合になると、いろいろな場所を目に通さなければならぬので、それ程の拘束力は無い。

「（だったら、術者は俺達をよく見れる場所にいる筈だ）」

よく見れる場所と言っても、ここに高台は存在しない。

主に辺りを見回せられる場所は、一口で言えば「高い所」だ。黒い眼差しの中心で、上空に浮かんでいる物と言えば……。

「そうか！バルビートやイルミーゼ達だ！！」

今も尚、光のサインを描いている蛸ポケモン達の事である。

一番、見つかり難くて、一番状況を把握出来る場所と言ったら、そこしか無いだろう。

術者は、蛸ポケモン達に扮しているつもりだ。

だが、術者の作ったその光が少し大きいと言う違和感があるのだ。

「見つけたぜ！でも、ポケモン達がいるから、無闇に攻撃出来ないし……」

術者は光に紛れているので、蛸ポケモン達もいる。

何の罪も無いポケモン達に攻撃するのは、ゼットの道義が許さなか

った。

なので、迂闊に攻撃する事が出来なかったのだ。
そうこう考えていると、ゼットは良い案を思い付く。

「出て来い、カメール！」

モンスターボールから出て来たのはカメールだった。
そして、その指示をピカチュウ達に伝える。

「……いいか？頼んだぞ！」

「カメー！！」

「ピカチュウも、いいな？」

「ピツカピイ！！」

ゼットの問いに、2匹は喜んで頷いた。

そして、ピカチュウ達の行動は開始される。

ゼットがピカチュウ達に伝えた作戦はこうだった。

まず、カメールが蛭ポケモン達に呼び掛ける。

「おい！ちよつと降りてきてくれねえか！！」

「どうかしたのかい？」

降りてきたのは、蛭ポケモンの1匹である、バルビートだった。

「あの変な光から離れてくれねえか？」

「あれだね？僕等も、丁度その話で持ち切りだったんだ。だからここを離れるよ」

「すまねえな……」

カメールは、バルビートと話を終えると、イルミーゼを先頭に、大群で移動した。

術者は不味いと思ったのか、蛭ポケモン達に近づこうとする。だが、ピカチュウがそれをさせない。

「『10万ボルト』！！」

丁度、蛭ポケモン達から引き離された術者は、電撃の恰好の的になった。

光に当たって、そこから別の紫の何かが落ちて来る。

紫の何かは、サイクリングロードに素早く着地し、一気にピカチュウに迫る。

ピカチュウは右に地面を蹴って、攻撃を避ける。

こちらで電光石火で紫の何かに素早く詰め寄り、手に電気を溜める。それに気づいた紫の何かは、目に黒いエネルギーを溜める。

危険を察知したゼットは、後退するように指示を出す。

バックステップで距離を取って避け、紫の何かはエネルギーを放出する。

あれは恐らく、ナイトヘッドだろう。

先程、ピカチュウがいた地面は、激しく抉られていた。もう一度、紫の何かはエネルギーを充填し、放出する。

しかし、ピカチュウは手に溜めていた、全快のパワーの電撃でそれを相殺した。

「強えな、あのポケモン……いや、ゲンガーか」

紫の何か……ゲンガーは気味の悪い笑みを作る。
このゲンガーこそが、術者本人だろう。

何の意図があるのか……それは、ゲンガーの「眼」を見ればすぐに分かった。

その眼は、ゼットとピカチュウを見定めるように2人を捉えている。
何故、夜のサイクリングロードに誰も来ないのか……それは、ゲンガーが原因だった。

ゲンガーはここを通る者を試す、「夜の番人」だ。
ゼットは知らないが、裏通路のボスである、レアコイルと同等の力を持つ。

「来る……っ！」

次の攻撃が、休む暇も無くやって来た。
ゲンガーは謎の光を2つ自分の周りに漂わせる。

「『怪しい光』か！気を付けろ、ピカチュウ！！」

怪しい光とは、当たった敵を混乱状態にさせる技である。
そんな物を漂わせながら戦うとなると、相手の攻撃にも制限が掛かる。

幾ら自分の攻撃とは言っても、結局当たったら同じ効果を受けるのだ。

それを不用意には扱えないのだ。
ピカチュウは手に少量の電気を溜めて、接近戦でも対応出来るようにする。

そうして、ピカチュウとゲンガーの肉弾戦は、数分続いた。

「そこだ！『フェイント』！！」

長い格闘していると、ゲンガーにも隙が見えて来た。

その隙を逃さず、ピカチュウは右手でパンチをしようとする。当然、ゲンガーは2つの怪しい光を盾にする。

しかし、パンチは寸止めされて、代わりにキックが当たる。

予想外な事に、ゲンガーは直撃されたが、所詮は電気鼠。

微弱な電気とキックの同時攻撃など、軽く右手で弾かれてしまった。けだった。

ゲンガーは向きをピカチュウに定めて、怪しい光を1つに合わせる。すると、急に怪しい光が強く発光し、ピカチュウは目を眩ます。

「しまった！ピカチュウ！！」

ゲンガーは両手に、何かのエネルギー弾を発生させる。

そして、掌に届くまでの大きさになり、それをピカチュウにぶつける。

エネルギー弾は腹部に直撃し、ピカチュウを吹っ飛ばす。

「『シャドーボール』を覚えてるって事は、俺達よりも強いって事か！？」

シャドーボールは、ゲンガーがレベル33で覚える技だ。

となると、ピカチュウ達よりも強い事になる。

それにしても、若干弱いような気もするが。

「『10万ボルト』！！」

「ケシシシ！！」

この攻撃に対し、ゲンガーはシャドーボールで攻撃する。

2つの攻撃は、押したり引いたりだったが、相殺された。だが、これだけでは終わる筈も無い。

ピカチュウとゲンガーは、爆風に紛れて一気に突っ込む。爆風の中に影が見えたので、ゲンガーはそこにナイトヘッドで攻撃する。

当たったと思ったが、そこには誰もいなかった。

ゲンガーは背後に気配を感じて、同じ技で攻撃する。

しかし、ナイトヘッドはピカチュウを貫き、ピカチュウはゆらゆら揺れて、消えてしまう。

影分身だと言う事に気づいて、すぐ正面を見る。

そこには、全身に電気を纏い、今にも電撃を浴びせられそうなピカチュウがいた。

「『10万ボルト』!!」

ゲンガーはすりと避けて、シャドーボールの態勢に入る。

電撃はまたもや、シャドーボールと相殺して、互いに距離を取る。

「ピカチュウの電撃と直角か……おもしれえ!『電光石火』!!」

ピカチュウは高速でゲンガーに迫る。

ゲンガーはナイトヘッドで攻撃するが、全く当たらない。

そして、ゲンガーの近くまで来て、電撃で攻撃する。

勿論、同じようにシャドーボールで相殺する。

だが、この攻撃は終わらない。

さらにそこから、左から尻尾で薙ぎ払おうとする。

ゲンガーはその右手で攻撃を弾こうとするが、寸止めされる。

「!?!」

「『電光石火』 ああ!!」

電光石火が、ゲンガーの腹部に直撃する。

しかし、ノーマルにゴーストタイプは効果が無いので、ダメージは出ない。

それを知ってか、ピカチュウはゲンガーと密着させる。

ゼットは薄く笑みを浮かべ、指示を出す。

「『10万ボルト』 おおっ!!」

密着した状態では逃げられず、電撃地獄を味わってゲンガーはやられた。

取りあえず、ゲンガーを布を被せて、ゲート近くに横たわらせる。すっかり、夜になってしまった事に気づき、ゼットは焦る。

「やっべえ! 急がないと!!」

自転車に乗って、一気にサイクリングロードを駆けていく。そしてゼットは、いつも通りの台詞を吐いた。

「よし、出発だああ!!」

ゼットは、3つ目のジムバッジを手に入れられるのか。
旅はまだまだ続く……………。

第21話 「 〽 番外編 〽 イワヤマトンネルにて 」

ここは、ハナダシティの東にある、イワヤマトンネル。時間は、ゼットがオツキミ山を登っている最中に戻る。ジムバッジを2つ持っている少年……エックスは辺りを探索していた。

「……終わったか」

そう言うと、ポケーションを使って多くのボールを転送する。エックスは、この辺りに生息するポケモンを粗方、GETしていたのだ。その理由は、ポケモン図鑑の完成と言う、壮大な夢の手伝いをする為だ。

「一応、報告しておくか……」

「ああ、もう！嫌になっちゃうわー！」

すると、エックスは後ろで騒ぐ少女が目に入った。金髪のポニーテールをした、エックスと同年代の少女だ。

「ここからポケモンセンターは近くないし……」

「くだらん理由だな」

「誰、あんた！？」

強気な口調で、エックスに少女は返す。

「イワヤマトンネルに入ったが、進むに連れてポケモン達が強くな
っていき、ついに自分の手持ちが全滅して、追って来るポケモン達
から逃げ帰って、漸くここから出られたはいが、ポケモンセンタ
ーに行く道には草むらがあつて、戻ろうにも戻れない状況になつた
と言つた所か」

すらすらとエックスは、少女の今現在の状況を言う。

それは然も、見て来たかのようにだつた。

全てが、当てはまっていたので、少女は驚愕の顔色を見せる。

「棘頭！あんた、ストーカーね！？私を後から付回していたのね！
？」

「（こいつ……！）……そのモンスターボールを見れば分かるだろ
う」

エックスは、「棘頭」と言うのに少し腹が立つたが、何とか押さえ
込む。

少女は指に促され、モンスターボールを見ると、赤い上部から薄く
見える、弱ったポケモン達の姿があつた。

それを見て、すぐに分かつたのだらう。

「お前の手持ちのカラカラとフワンテ。普通なら、レベル28で進
化する筈だが、進化していないと言う事は、それ未満のレベルと言
う事だ。負けるのも仕方無い」

「あんた、それだけで分かつたんだ……棘頭の割には頭が良いのね」

「棘頭は余計だ」

「事情を知っているなら、話は早いわね。ここを抜けるのを手伝って頂戴」

少女は、エックスの手を引いてイワヤマトンネルへ向かって行く。エックスはしまった、と思って頭を抱える。

拒否権の無い頼みに呆れながらも、洞窟の中へ入っていった。

「ここよ」

「（仕方の無い奴だ……）……イワヤマトンネルと言っただけあって、岩が多いな」

中は、ゴツゴツとした岩が洞窟内に溢れる程、落ちていた。勿論、人の通る道にはちゃんと、岩が退かされてはいるが、それでも落ちている。

「私、ワイって言うの。よろしく」

「エックスだ。この辺りは弱い岩ポケモンしかいないのだろう？」

「ええ。でも、私を追い掛けて来たんだから、このフロアでまだ探している筈。となると、中級クラスのポケモンが何体かいるって事。上級クラスのポケモン達はその帰りを待っている……と、こんな所かしら？」

少女……ワイは、適確な説明をし、エックスに問う。
エックスも、既にその事を理解しているようだ。

「正解だ。手持ちが全滅したから、敵も侮っているのだろう。3、4体程度か……」

「しかも、全員手分けしてね。完全に侮ってるわね、あいつ等……！？」

「殺気……！」

2人は、殺気を感じて警戒する。

その主を探すと見えるのは、その存在を示すかの如く光る、対になった鮮血の眼光。

眼は彼等を捉えて、齒軋りながら、荒い鼻息をして今にも飛び掛りそうな勢いだ。

自然とエックスはワイを下がらせ、その主に再び睨む。

両者の間には、静かな緊張感が流れ、それは限界に達する。

先に動いたのは、白い猿のようなポケモン……マンキーだった。

エックスは素早くボールを取り、シードラを繰り出した。

「『潮水』！」

すると、マンキーの足場から水が噴出した。

マンキーはそのまま天井に上っていき、天井の壁にぶつかる。

そして気絶し、落ちて来て倒れる。

エックスはボールを投げ、マンキーを捕まえた。

「まずは1匹か……」

「へえ、強いね」

「この程度のレベルなら、幾らでも倒せるだろう。だが、下にいる

上級クラスはもつと強い筈だ。それと……」

エックスはマンキーが倒れていた場所に行く。

下に落ちている物を見た後、それを取ってワイに投げる。

ワイは軽くキャッチし、持っている物を見ると、驚愕する。

「ちょっと、これって『元気の塊』じゃない!？」

「生憎、1つしか見つからなかったのな。これ以上は勘弁だ」

「十分!カラカラに使っておくわ!」

ワイはカラカラをモンスターボールから出した。

地面に横たわっているカラカラに『元気の塊』を食べさせる。

すると、普通に目が開いて、何事も無かったかのように平然と起きた。

このアイテムの凄さを、改めて感じていた。

「それにしても、あっちって随分と太陽が当たってるのね」

入り口前だからだろうか、その場所だけが太陽が照らす。

まるで、この洞窟との差異を表しているかのようだ。

「……そろそろ行くぞ。こちらも急ぎの理由があるからな」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ!」

エックスは洞窟の奥へ行き、ワイはそれに付いていく。

傍から見れば、まるで兄妹だろう。

「地下へと繋ぐ道に着いたみたいね」

「……この下に上級クラスのポケモンが待ち受けているだろう。気を引き締める」

「……分かつてる」

地下に繋がる、蔓を伝って下りていく。

暫くしていると、漸く地面が見えて来たので、飛び降りる。

イワヤマトンネルの地下は、1階よりも遥かに暗く、細い道が続いている。

ポケモンの巣がどこにあるのかはまだ分からないが、歩いて行けばすぐに分かるだろう。

いつ、どこから襲って来るのか分からないので、慎重に行動しなければならぬ。

「どっちに行くの？」

「左でいいだろう」

2人は、左に進んで行ったが、またもや分かれ道があった。この地形など知る訳も無く、適当に進んでいく。

「次は？」

「真っ直ぐだ」

「その次は？」

「右だ」

「さらにその次は？」

「左だ」

多くの分かれ道が次々と押し寄せて来たが、着々と進む。
そうした後、辿り着いた場所が……。

「……行き止まりね」

「ああ」

「ああって、本当に大丈夫な訳！？これで13回目じゃない！！」

「……何もせずに、こんな所を回る程、俺は馬鹿じゃない」

エックスは、何かの紙をワイに見せる。

それは、今まで進んで来たルートの地図だった。

エックスはただ、闇雲に進んだ訳では無かったのだ。

この地図を埋める為に、適当な道へ行っただ。

「随分、こまめね……」

「……悪かったな」

「そのこまめが役に立ったんだから、いいんじゃないの？」

「！……どうやらここでも役に立ったみたいだ」

その言葉に疑問を覚えたが、それはすぐに解決した。

左の岩壁の向こう側に、声が聞こえるからだ。
ワイは岩壁に寄り添い、耳でその会話を聞く。
話しているのは、当然ポケモンで、2匹以上いる事は確かだ。
怒声を浴びせ合いながら話している所を見ると、言い争いのようだ。
人間にはポケモンの言葉は分からないが、感情だけは分かる。
話し終わると、もう1匹は地響きを鳴らして、部屋から去っていく。
岩壁の影から確認すると、それは岩石の鎧を纏ったポケモン……ゴ
ローニヤだった。

「何でゴローニヤがこんな所に……!？」

「イシツブテの中の1匹が2段進化したのだろっ。それよりも、ゴ
ローニヤと話していたポケモンは……」

警戒しながら、岩壁の向こう側を覗くと、大きな岩蛇がいた。
そう、岩蛇ポケモンのイワークである。

「奴がこのイワヤマトンネルのボスか」

「何でそんな事、分かるのよ？」

「見て分らないか？」

エックスに促され、ワイはイワークの周り物を見る。
辺りに大量に並べられた木の実や果実。
イワークの座っている、不自然に磨かれて光る石段。
そして、その左右に佇むゴローンとゴリキー。
もう、これだけの証拠があれば、決定的だろう。
イワヤマトンネルのボスが、あのイワークであると言う事を。

「そう言う事ね。これからどうするの?」

「決まっている。奴等を倒し、ここを抜ける」

「だから、どうやって?」

「……こうするんだ」

エックスは、モンスターボールを取り出す。

そこから出て来たのは、大きな花を背負ったポケモン……フシギバナだった。

かなり珍しいポケモンで、ワイは間近で見るのは初めてらしく、興味津々である。

「これがあの、初心者用ポケモンの最終進化系……!!」

「フシギダネの時に、オツキミ山にいた所を捕獲したのだが……流石は初心者用ポケモンと言ったところか、成長が早いな」

「それで、このフシギバナでどうするのよ?」

「……黙って見ている」

すると、フシギバナは花の辺りから、幾つもの葉っぱカッターを出した。

それを全て、イワークのいる部屋に向かって放つ。

いきなりの奇襲に、ゴローンとゴリキーは驚くが、すぐに戦闘態勢を取る。

ゴローンは『ロックブラスト』で打ち落とす。

ゴリキーは空手チョップで葉っぱを切っていく。

全て打ち落として、2匹は安堵するが、それが彼等の油断だった。葉っぱカッターから、何かの粉が落ちて来る。

その粉に触れると、2匹は忽ち睡魔にやられ、倒れてしまう。そう、それは眠り粉である。

葉っぱカッターが全て打ち落とされた時の為の、2段構造だったのだ。

エックスは岩壁から離れて、イワークの前に立ち塞がる。

「そいつ等は、少なくともこの戦いが終わるまで眠り続ける。いかなる事があるうとも」

「ワアアク……!!」

「後は、お前を倒してここを出るだけだ」

「観念しなさい!!」

しかし、その言葉に怒ったのか、イワークは暴れ出す。

体当たりで、2人を攻撃しようとする。

その時、2人の前に何か小さなポケモンが現れる。

そのポケモンは、無謀にもイワークに持っている物で切り掛かる。

イワークは軽く横に避けて、もう1度2人を睨む。

しかし、ポケモンはイワークが通り過ぎたのを見て、身体を反転させる。

空中であるにも関わらず、身体を反転させたポケモンは、イワークを眼で捉える。

そして、刹那……。

ポケモンはいつの間にか2人の目の前に来ていた。

イワークは、雄叫びを上げて地面に倒れる。

「……『燕返し』、か」

「ね、葱？」

ポケモンが持っている物は葱だった。

葱で、あれ程の威力を出せると言うのだろうか。

それは、鴨のような姿をしている、小柄なポケモンだった。

「カモネギだな。先程の技は、『剣の舞』を何度も使って、極限まで高めた技だろう」

「それで、岩タイプにもあの威力……」

「おもしろい……カモネギ、この戦いに参加するのなら、俺の指示を聞け」

葱のポケモン……カモネギは少し考えて頷く。

モンスターボールに入れられ、GETするともう一度投げる。

そして、エックスのポケモンとなったカモネギは、イワークに向き直る。

「私も！行きなさい、カラカラ！！」

出て来たのは、『元気の塊』で復活したカラカラだった。

つまりこれは、2対1のバトルと言う事になる。

少し卑怯な感じもするが、相手が強いのに、小柄なポケモンがたった1匹で立ち向かおうなど不可能に近い。

なので、これだけでも釣り合わない程だ。

「行くぞ」

「いいわよ！」

イワークは岩落として攻撃して来る。

カモネギとカラカラはそれを全て、楽に避ける。

「『高速移動』！」

「『ホネ棍棒』！」

カモネギは高速移動で後ろに回り、カラカラは骨で叩く。

イワークは攻撃して来る、カラカラを岩落としてあしらい、後ろのカモネギに炎のような物を吐き出して攻撃する。

危険を感じて、咄嗟に回避の指示をし、カモネギは何とか避けた。

「『竜の息吹』を持っているとはな……」

竜の息吹は、相手をたまに麻痺状態にさせる技である。

標的を、カモネギに集中したイワークは、体当たりで攻撃しようとする。

カモネギは全くの逆方向に葱を振った。

そして、身体を反転させて距離が詰め寄った所を一気に攻撃する。

素早い攻撃に、イワークは避けられず、逆に攻撃された。

だが、これだけでは終わらず、そこにカラカラがやって来る。

骨を投げて、落ちて来たイワークの頭に直撃する。

さらに戻って来た骨が身体に当たり、カラカラの手に戻る。

「『ホネブーメラン』よ。結構痛いでしょ？」

「これで、十分なダメージは喰らった筈だ」

イワークは起き上がり、咆哮を上げる。

すると、地面の砂が沸き上がって、部屋全体に砂の嵐が巻き起こる。砂の威力で全員ダメージを負ってしまう。

「くっ……『砂嵐』か！」

「それなら……！」

この勝負は見えたと思ったが、急に砂嵐が止んだ。

そして、真っ暗な洞窟の天井の穴から、燦々と太陽が降り注ぐ。カラカラが骨で、天井を壊していたのだ。

「この場所だけ、他とは違って少し明るかったのに気づいたのよ。火を使っている訳でも無いのに」

「成る程。入り口前の光が洞窟の中に入って来なかったのは、太陽が出口の方向にあると言う事。つまり、出口の方には洞窟の中にも光が入って来る訳だ。ここに光が入っている訳は、地上が出口付近にあると言う事。そして、天井の壁が薄く脆い事だ。戦いに集中してて気づかなかったが、恐らく壊したのは力モネギとイワークが戦っている時だろう」

「そこで、『日本晴れ』をして砂嵐を掻き消したって事よ」

最早、砂嵐をしてもまた日本晴れで天気を変えられるだけだろう。体当たりで岩落とし、竜の息吹、砂嵐……技は全て出てしまった。隠し球は、もう残ってはいないだろう。

「そっちの攻撃が分かればこっちの物だ。『燕返し』！」

「『ホネ棍棒』！」

後方からの攻撃と、前方からの攻撃を同時に喰らい、イワークは倒れてしまう。

2人は、勝ったと思ったが、その結果はすぐに裏切られる。

イワークはあれだけの攻撃を喰らいながらも、立ち上がっていたのだ。

確かに防御力は高いが、体力は多くない筈である。

「どう言う事……？」

「……分らん」

イワークは竜の息吹で、2匹を攻撃する。

カモネギとカラカラは直撃して、各トレーナーの方に吹き飛ばす。

その謎を解明する為に、エックスはイワークの動きや身体を見る。

「『高速移動』！」

カモネギはもつと速く動いて、イワークを翻弄する。

イワークはカモネギを捉えるのに精一杯で、攻撃出来ない。

カモネギが、エックス達とは逆の位置に立つと、イワークの背中が見えた。

謎の正体が分かり、カモネギに指示を出す。

「上から6番目の岩に『叩き落とす』！！」

その勢いを利用して、カモネギはイワークの懐に入った。そして、6番目の岩に叩き落とすをして、攻撃する。

攻撃力は殆ど無いが、相手の持つアイテムを落とす事が出来る技だ。すると、イワークから何かが落ちて来た。

「『貝殻の鈴』!？」

「それが、謎の正体だ。今ならいける!『燕返し』!！」

「なら、私も!『ホネ棍棒』!！」

燕返しとホネ棍棒が、イワークを襲おうとする。

しかし、今の力ではイワークを倒す事は出来ない。

攻撃をした後に出来る、その隙に『貝殻の鈴』を奪われてしまう。自分達や他のポケモンに取りに行かせようとしても、今からでは手遅れだ。

そんな不安に共鳴したのか、カラカラが光り出す。

「え!？」

「進化だ!！」

カラカラは進化して、ガラガラに変わった。

進化したと言う事は、レベルが上がって強くなったと言う事。つまり、今なら倒す事が可能と言う訳だ。

「今だあああ!！」

ワイの叫びと共に、カモネギとガラガラは攻撃した。強い威力に圧倒されて、イワークはダウンする。

「……終わったか」

その後、エックス達はフシギバナの蔓で上り、洞窟を出た。洞窟から出た2人に降り注ぐのは太陽だった。

「やっぱり、外が一番ね〜！」

「さて、俺はシオンシティへ行くでしょう」

「あ、私も行かなきゃ！」

こうして、エックスとワイはシオンシティへ向かって行く。それぞれの旅もまだまだ続く………………。。

第22話 「ヤマブキシティ! 2人のルーキーのバトル!」

ここは、ヤマブキシティ。

大きなビルやデパート、ホテルなどが幾つも立ち並び、カントー屈指の大都市である。

人はこの街に憧れ、この街を求めやって来る。

街の中心にあるのは、シルフカンパニーと言う会社だ。

最高峰のIT企業とも言われ、今も尚、様々な機械を作っている。夜になると、最初の活気溢れるイメージとは逆転して、アダルティな雰囲気になる。

その理由は、バーテンダーが多いからだろう。

しかし、誰しもがヤマブキの夜を楽しんでいる訳では無い。

夜になっても、忙しく仕事をする人達がいるのだ。そのおかげで、「もう子供は寝る時間」のような行きづらい雰囲気は出ていなかった。

今の時間は、既に10:00を回っていた。

「ここがヤマブキシティかー！」

ゼットは感心したように街の建物を見る。

あまり、大きな建物などを見た事が無い、彼にとっては興味の塊だろう。

傍から見れば、田舎丸出しの行動だが。

「でっけえビルとか、たくさん建ってるな」

ゼット達が旅して、今まで見た中で一番大きな建物がある場所だろう。

彼は特に、シルフカンパニーに、目を奪われてしまった。
トキワTVを遥かに越える大きさの物だったからだ。
流石、最高峰の会社と言っただけの事はある。

「あ、それよりも皆を回復させないと！」

ここに来るまで、ポケモンセンターには全く寄って無かった。
なので、ポケモン達は連戦続きだったと言う訳だ。

拳句の果てには、ゲンガーのようなポケモンが出て来た為、今は戦えるポケモンがいない。

いつもは暢気なヤドンも、今回は流石に連戦の疲れを隠せないようだった。

走って探していると、何とかポケモンセンターは見つけたが……。

「で、でけえ……」

そう、今まで見て来たポケモンセンターよりも桁違いに大きいのだ。
ゼットの知る、ポケモンセンターの大きさは、どこにでもありそんな宿舎程度の大きさだったのだ。

しかしこれは、どこぞの超高級ホテル並……とまではいかないが、大きい。

確実に、今までのポケモンセンターの3倍以上はある。

「おっと！急がねえとー！」

急いでセンターの中に入り、受け付けへ行こうとするが、誰かにぶつかる。

その拍子に、相手のモンスターボールなどが落ちてしまう。
相手を見ると、それは金髪の少女だった。

「いつつ……」

「ちょっと、あんたどこ見てんのよ！危ないじゃない！！」

「ああ、すまねえ。それ、すぐに拾うから」

しかし、少女は素早く落ちたモンスターボールを拾って、バッグに入れる。

その行動に、ゼットは頭を捻らせるが、次の言葉でその理由がすぐ分かった。

「それはいいから。あんた、明日私とバトルしなさい！」

「バトルか……受けて立とうじゃねえか！！」

「決まりね。明日の6：00、表のバトルフィールドに集合ね！逃げたら承知しないわよ！！」

「へっ！誰が逃げるかよ！！」

少女はそれだけ言うと、去っていった。

バトルは、ゼットにとっては得意分野の中の得意分野である。

楽しみなのを抑えて、ポケモン達を休ませた後、近くのソファに座る。

「くう……明日が楽しみだぜ！！」

「ああ……君も被害者なんだね」

「え？被害者？」

ゼットは後ろから声が聞こえたので、振り向く。
そこには、キノココを両腕の中に包み込んでいる男性がいた。
後ろのソファに座っていたので、背中しか見えない。

いかにもネガティブな雰囲気を作り出している男性は語り始める。

「あの子は、今日の朝ここにやって来て、態とぶつかってはバトルしてるんだ。しかも連戦連勝中だから、かなり強くて僕のキノココもあの子にやられちゃったんだ……」

「キノ……」

「それで俺が被害者って訳か」

「一応言っておくけど、かなり強いしやめた方がいいと思うよ」

「この俺が、そんな程度でびびると思ってんのか？ 逆にワクワクして来たぜ！ 強い奴なら尚更だ！」

そう胸を張って、男性に言った。

その後、ゼットは自分の部屋へと戻って行く。

明日の試合が、さらに楽しみになって来たようだ。

すぐに風呂に入ってご飯を食べた後、明日のバトルに備えて十分に休みを取る為、早く寝た。

寝坊だから、と言う理由も含まれているが。

そして、翌日……。

「ふああ……眠い」

相変わらずの臃けな目で、時刻を見る。

遅い時間に起きるゼットにとって、早く起きると言う事は、バトルよりも辛い事なのだ。

その時計の針は、5:30を指していた。

約束の時間まで、後1時間残っているが、散歩の為に起きた。

それと、ポケモン達を預けたままだったので、それを兼ねてだ。

机に置いたままの、服と赤帽子を取って、数分後に着替える。

「さてと、行くか」

自分の部屋を出て、廊下に出る。

辺りは静まり返っており、雲を通した薄い光が廊下内を照らす。

薄い青色に染まる廊下は、1日の始まりと安らぎを与えてくれるようだ。

右に見える階段を下りて、ロビーに出る。

ロビーも廊下と同じように、薄い青色に染まっていた。

何となく辺りを見回すと、最初来た時に多くのトレーナー達がいて分からなかったが、とても広い。

密度が少ないだけで、ここまで印象が変わる物なのだ。

こんな早朝からでも、毎日働くジョーイさんに改めて関心した。

こちらに気づいたジョーイさんはこちらに微笑み、ゼットは軽く会釈した。

「どうかしたの？」

「ピカチュウ達は回復してますか？」

「大丈夫よ。もうすぐ……あ、来たみたいよ」

ジョーイさんに促されると、そこにはすっかり元気になったピカチュウ達がいた。

走ってゼットに近寄り、飛び込んだ。

その拍子に倒れてしまい、合計約50kgに押し潰される。

「お、重い……」

何とかモンスターボールを使って戻し、立ち直った。
ジョーイさんは、そんなゼットに苦笑いを浮かべる。

「ま、取りあえずはこのバトルに勝ったら、ヤマブキジムへ挑戦して……」

「無理よ。だって、ここのジムリーダーはどこかへ行ってしまったもの」

「え？何で？」

いきなり、震え上がっていたテンションがどこかへ消えてしまった。
アサトと言いここのジムリーダーと言い、自分のジムをホイホイと投げ出していい物なのだろうか、とゼットは心底思った。

「自分を鍛える為らしいわよ。ここに帰って来るまで、3日は掛かるだろうし、シオンタウンへ行ったら？」

「シオンタウン？」

「そこにも、ゴーストタイプのジムがあるらしいし、シオンタウンからクチバシティを通ってまたここに戻って来る方がいいわ。クチバにもジムがあるみたいだし」

「ジムリーダーが戻って来るまで、ジムバッジを2つ持っておくっ

て言うのも悪くないな。よし、シオントウンへ行こう!」

こうしてゼットは、新たな目的地であるシオントウンを目指す事に決めた。

ジムリーダーが戻って来るまで、何もしないよりかはマシだろう。

「それよりもあなた、ポケモンバトルがあるんでしょ? 6:00までもうすぐだから、早く行きなさい」

「あれ? 何で俺が今日バトルをする事を……」

「あんな目立つ場所で、決闘の申し込みなんてしてたら、誰だって覚えちゃうわよ」

「ハハハ……」

確かにあんな目立つ場所で、大声で決闘を持ち掛けた少女に対して、もつと大声で返事したのだ。

誰でも、覚えたくなくとも覚えてしまうのも無理は無い。

「さて、皆も戻って来た事だし、バトルフィールドへ行くか」

集合時間よりも少し早い、バトルフィールドに出た。

その場所に出た事により、ゼットは分かった事がある。

「人の記憶力って、半端ねえな……」

フィールドの外には、観客で埋め尽くされていた。

その数は、昨日ロビーにいたトレーナーよりも多かった。

真中の中心には、腕を組んで待っている少女がいた。

それを確認し、フィールド内に入っていく。

「来たぜ」

「！……どうやら逃げなかったみたいね。ちょっと早いけど、始めましょうか」

使用ポケモンは1体のシングルバトル。

正に、決闘に相応しいバトル形式である。

「俺はゼット！マサラタウンからやって来た！」

「ゼットね。私の名前はワイよ。精々、楽しませて頂戴よ」

2人はモンスターボールを取って、投げる。

そこから出て来たのは、ヤドンとガラガラだった。

「……嘗めてる訳？そんなポケモンに何が出来ると言つのよ？」

「ポケモンは外見だけで決めるもんじゃねえ。よし、行くぞ！」
「欠伸！！！」

欠伸は、相手をだんだん眠らせる技だ。

ガラガラは、欠伸に警戒するが、いつまで経っても来ない。
代わりに来たのは、速い水鉄砲だった。

警戒を強めていた為、何とか避けられたが。

「なっ……！『欠伸』じゃない！？」

「こいつは一定の時間が経つまで、技の指示が届かないんだ。『念

力』！！」

先程の攻撃に苛立ちを隠せなかったのか、真っ向から向かって行く。骨を持っている辺りから見て、ホネ棍棒だろう。

「さっきの『欠伸』の指示……あいつの言う事が本当なら、不味いわ！避けて！！」

一定の時間が経つまで、指示された攻撃を出す事が出来ない。となると、次の攻撃は念力の前の攻撃……つまり、欠伸と言う事になる。

ワイの声が届いたのか、ガラガラは間一髪左に跳ねて避ける。もう少し遅ければ、欠伸の餌食になっていただろう。

「随分、動きが速えな……」

「あんたのペースに掻き乱されたけど、もうこの勝負は決まったわ」

「いや、俺じゃねえだろ。ヤドンだろ」

「確かに、それは相手のペースを崩して、自分のペースへ引きずり込んで倒せるけど、一度それを知った相手には効果は激減。速攻で倒せば問題無いわ。しかも、それには致命的な弱点がある。それは……先に相手に次の攻撃を知られてしまう事よ！」

そう、このヤドンには致命的な弱点があったのだ。相手に次の攻撃を知られてしまうと、トレーナーにとって一番不味い弱点が。

トレーナーは、ポケモンに言葉で指示を出さなければならない。相手のトレーナーやポケモンにも、それは知られてしまうが、意外

に避け難い。

何故ならば、「避ける」の指示を出す前に攻撃が当たってしまうからだ。

……普通のポケモントレーナーなら。

それ以上のクラスは、回避の指示に0.5秒も掛からない。

敵の攻撃が速くなければの話だが。

どんなに攻撃力が勝っていても、鈍足では確実に回避が出来る方にある部がある。

だから、回避の技術はポケモンバトルの行く末を左右する存在なのだ。

しかし、技を出すのに5秒も続いてしまったら、どんなに指示が遅い素人でも、100%当たる。

つまり事実上、最弱と言える存在に成り下がってしまうのだ。

「その弱点がある限り、私の勝ちが決定的よ」

「……1つ、言い忘れた事があったな」

ゼットは勝ち誇ったワイに呟く。

「俺のヤドンが技を中々発動しないのは……」

そう言うのと同時に、いつもより速くヤドンに紫のオーラが集まる。

「力を溜めているからだ」

「避けて!!」

その言葉と共に、一気に駆け出そうとしたが、動きが止まる。ガラガラは壁に凄い勢いで叩きつけられた。

「今のは完全に避けた筈なのに……！」

「言っただろ？力を溜めているからだって。やろうと思えば、すぐに技は出せるけど、これは相手の油断を誘う為の罠だ」

「それであの速さ……！？」

ワイはガラガラの方を見て、そう呟く。

あの堅い壁に、少し輝が入っている程だ。

今までのよりも低い、凄まじい威力だと言う事が分かる。

「いいわ、そろそろ攻撃したい所だし。『日本晴れ』から『ホネブーメラン』！！」

「『念力』！溜めてから『水鉄砲』！！」

ガラガラは日本晴れで、目を眩ましたその一瞬に骨を投げる。骨は回転しながら飛んで来て、ヤドンの目の前まで接近する。ヤドンは何とか念力で骨を吹っ飛ばす。

しかし、ガラガラがそれをキャッチし、こちらに向かって来る。

「やっぱり、来やがったな！」

「それを読んで、『水鉄砲』を指示したんでしょ？『ホネ棍棒』！！」

ヤドンはホネ棍棒で攻撃されて少し吹っ飛ぶ。だが、ここで異変に気づいた。

「毒！？」

「そう。さっきの『ホネ棍棒』に『どくどく』を付けたのよ」

そう言つて、骨に付いている紫の液体を見せる。

恐らく、骨をキャッチしてここに来るまでに塗つたのだろう。

どくどくは、毒よりも危ない猛毒で、動けるのは残り1分と言つた所だ。

ゼット達や観客達の緊張感が一気に高まる。

「タイムリミットは1分か……すぐに決着を着けてやる！」

「出来るかしら！？『ホネブーメラン』！！」

骨を投げて、攻撃しようとする。

ヤドンには珍しく、走つてそれを念力で流す。

しかし、ホネブーメランには追加効果があつた。

それは、相手を2回攻撃する事だ。

つまりまだ、この攻撃は終わつてはいないのだ。

それにも関わらず、勝利を確信したいいつもの表情で指示する。

「『金縛り』！！」

「なっ……！！？」

金縛り……それは、最後に使つた技を封印する技である。

ガラガラが最後に使つた技は、ホネブーメランだ。

つまり、今正にホネブーメランが封印されてしまったのだ。

そうになると、現在ヤドンに放つていたホネブーメランも封印される訳である。

「しまった……！！」

空中で舞っていた骨は、回転が止まって来て地面に落ちる。
ホネブーメランが封印されてしまった今、選択が消えてしまった。
ホネ棍棒は、骨が無いと成り立たない上に、この距離からでは届く前にヤドンにやられる。

日本晴れも既にその天気なので、全くの無駄だ。

どくどくも、もう相手が毒状態なので、何の意味も成さない。
つまり……打つ手は完全に失ってしまったと言う訳だ。

「放てえええ……！！」

至近距離からの水鉄砲を喰らってガラガラは吹き飛んだ。
そして、壁に再度打ち付けられ、ダウンした。
その光景に、観客も静まり返った。

「やったぞおーっ！！」

ゼットの声に吊られて、観客達も一斉に歓声を上げる。
今まで連戦連勝だったワイを倒したのだ。
歓声が凄まじいのも仕方無いだろう。

「……負けちゃったわね。あんたの勝ちよ」

「お前も十分強かったぜ」

「流石にジムバッジを2つ持ってるだけの事はあるわね」

「え！？何で俺がジムバッジを2つも持ってるなんて……」

ジムバッジ、と言う言葉を聞き、ゼットは聞き返す。

「あんたも、最近各地のジムリーダーを次々と倒してるって言う、ルーキーの内の1人なんでしょ？」

「は？まあ、バッジはニビジムとハナダジムのの手に入れているけどな。っつか、あんた「も」って事はお前もかよ？」

「そうなるわね。私知るので、後の2人は先読みが早く、冷静に状況を把握する少年……こいつは一度会ってるけど。もう1人は、道具や心理、場などを巧みに利用する少女だって」

「あ、そうなんだ……？」

ゼットはどこかでその2人に会った事があるような気がした。

それよりも、自分と同じようなトレーナーが、4人もいた事に驚きを隠せなかった。

しかし、一番気になったのはそこでは無く……。

「なあ、なあ！その2人がそんな風に言われてるなら、俺もあるよな！？」

目を輝かせながら、ゼットはワイに聞いた。
自分が一体、どのように言われているのか、それは誰しも気になるだろう。

「あるわ。確か、応用力に長けて……」

「そうそう！」

「意外性の高い作戦を生み出す……」

「そうそう!!」

「赤帽子の悪魔」

「そうそ……って、ちょっと待て! 何だ最後の赤帽子の悪魔ってのは!？」

「あゝ、ごめん。本当は少年って言おうとしたんだけどね……」

負けた為の嫌味だろう。

その後は、ワイと分かれてゼットはシオンへのゲートへ立っていた。ヤマブキシテイにジムは無かったが、次の目的地は見つけた。

「よし! シオンタウンへレッツゴーだ!!」

こうして、彼等は新たな目的地……シオンタウンを目指す。ゼット達の旅はまだまだ続く……。

第23話 「虹畑に平和を！ヨルノズクの理由！！」

ここは8番道路。

ヤマブキシティとシオンタウンを繋ぐ道である。

中間辺りには、ポケモン達が多く生息する、花畑のような所がある。様々な種類の花が咲いて色取り取りな事から、「虹畑」と呼ばれる。そんな場所を、ゼットは通っていた。

ヤマブキシティのジムリーダーが運悪く出張中だったので、帰って来るまでの間、シオンタウンとクチバシティにある、ジムを回る事にしたのだ。

そして現在、その内の1つであるシオンタウンを目指していた。

「シオンタウンまでもう少しだな……気を引き締めねえとな！」

「ピッカア！」

いつの間にか出ていたピカチュウが頷く。

何故、いつものようにポケモン達を全員出さないのか。

その理由は、テツマに手持ちを普通に出す事は、相手に手の内を知られるようなものなので、最低でも連れ歩いていいのは1匹だけだと言っ事を教えられたからだ。

それから、あまりポケモンはそろそろと連れ歩かないようにしていた。

大体連れ歩くのは、ピカチュウだけなので、出すのはピカチュウだけである。

しかし、ピカチュウも出る時と出ない時があり、気分でそれを変え、る気紛れ屋だった。

「ん？うわぁ……これが絶景って奴か？」

「ピカ……」

目の前に広がるのは、赤、黄、青、緑と様々な色の花が咲いていた。恐らくここが、虹畑であろう。

これを見ただけで、虹畑の虜になってしまつと言う旅人も多々いる。

「すげえな。きっと世界には、もっと凄い絶景があるんだろうな……」

「そうだね」

すると、後ろから青年が歩み寄つて来た。

青年は虹畑を見ながら、ゼットの隣に立つ。

「でも、ここの絶景だけでも凄いと思うよ」

「あんたは？」

「僕は、この虹畑を管理しているカズタだよ。と言っても、水をやるぐらいで大した事はしてないけどね」

「へえ」

ゼットは毎日そんな事をするカズタに感心する。

ゼットの場合、花の世話などは3日で終わってしまうので、それも仕方無いだろう。

しかも、ここまでの大きさの花畑を1人で世話をするのだ。毎日がとても大変なのだろう。

そうして見てみると、ある事に気づく。

「そう言えば、ポケモン達がいねえな。ここって、ポケモンが多いんだろ？」

そう、ポケモンがないのだ。

8番道路の中で、一番多く生息している場所の筈なのに、何故か1匹もいなかった。

花に埋もれて隠れているには、気配が微塵も感じない。

それを聞いた瞬間、カズタの表情が曇った。

「……ちよっと、家に来てくれるかい？そこで話すから」

「……分かった」

雰囲気ですぐに話せるような話じゃない事を察し、ゼットは真剣な表情で頷く。

家に入ると見えるのは、綺麗に整頓された本棚と、椅子と机。

カズタは向こうの椅子へ座り、ゼットは近くの椅子に腰掛ける。

その重い口を開いて、語り始めた。

「虹畑からポケモンがいなくなったのは、昨夜の事だったんだ」

「昨夜？」

「その時、僕はいつも通り花に水をやってたんだけど、ポケモンが1匹もないのに気づいたんだ。寝ちゃったのかなと思ったんだけど、泣き声1つしないんだ」

「いなくなったのはそこからか……」

「それで、気になって虹畑に行ったんだけど……そこでその理由が分かったんだ」

「それは？」

「ヨルノズクさ」

「ヨルノズク？そいつがどうかしたのか？」

ヨルノズクとは、ノーマルタイプと飛行タイプを併せ持ったの梟ポケモンの事だ。
進化前はホーホーと言うポケモンで、同じ梟ポケモンである。

「ヨルノズクが虹畑で暴れて、そこにいたポケモン達が逃げ出しちゃったんだよ」

「んな馬鹿な……」

個人に関係無く、普段は大人しい筈のヨルノズクはそのような事はないだろう。

その話を、ゼットは信じられなかった。

「実際に、僕も襲われたんだよ。ほら」

カズタは腕の傷を見せた。

そこまで深くは無いが、爪で引っ搔かれたような跡があった。これを見てしまったからには、信じるしかないだろう。

「でも、ヨルノズクは皆の親とも言っていていい存在で、とても優しい

ポケモンなんだ。実際に傷付けられたけど、ヨルノズクがそんな事をするなんて、今でも僕は信じられないよ……」

「じゃあ、その行動には何かの意図があった、って事だな？」

「うん。あんな事をしたのは、何か理由がある筈なんだ」

2人は唸りながら考え込む。

それに、ヨルノズクは少しの光でも見逃さない目を持っているのだ。爪で引つ掻いたのなら、もっと深く傷跡が残る筈である。そこも考慮して、どう考えてもおかしいと言う結論が出た。

「よし！だったら、俺がそのヨルノズクの所に行って来てやる！！」

「え？き、危険だよ！」

「もう危険には慣れてるさ。それに、あんたがヨルノズクを信じてるなら、心配する必要はないだろう？」

「……分かった。頼んだよ」

カズタは「気を付けて」では無く、「頼んだよ」と言った。その言葉に笑みを浮かべてゼットは虹畑へと進む。多くの花を掻き分けて、進んでいく。

「ヨルノズクの行動の理由……それを突き止めねえと！」

「ピカ！」

ピカチュウも警戒して、頬に電気を溜める。

カズタの話からして、こちらの話など聞いてくれないだろう。話し合いで決着が付かなければ、いつもの実力行使になってしまう。それを最初から理解しているようだった。

「もうすぐか……」

「チュウ……」

緊張しながら、次の花を掻き分ける。

その先には花が咲いていなく、空洞が空いていた。

そして、その中心にはまるでゼットを待っていたかのように佇んでいる。

例のポケモン……ヨルノズクは、こちらを目で捉えて睨む。

準備は出来ているから、掛かって来いとも言っているようだった。

「情報はバレバレってか？」

ピカチュウはヨルノズクに対して構える。

こちらの意図が分かっている状態で戦闘態勢を取っているのなら、話し合いなど不可能だろう。

「来る……！！」

最初に沈黙を破ったのはヨルノズクだった。

無防備でこちらに突っ込んで来ている所から見ても、突進だろう。

ピカチュウは右に跳ねて避け、電気を溜める。

「『10万ボルト』……！！」

飛行タイプに有効な電撃を放つ。

しかし、放った電撃は何故かこちらに戻って来た。
電光石火で何とか避けたが、今の攻撃が何なのかは経験上、知っている。

「『念力』か……厄介な技を使いやがって！」

そう、念力による電撃の「操作」だったのだ。
次の攻撃に備えて、ピカチュウは距離を取った。
すると、ヨルノズクは両翼を組んで、凄まじい速さで翼を開ける。
そうすると、ヨルノズクの周りから風の刃が複数、飛んで来る。
風の刃はピカチュウを狙うが、電撃で何とかやり過ごす。

「今度は『エアスラッシュ』かよ!？」

しかし、まだ風の刃の残りが襲って来る。
ピカチュウは電光石火で逃げるが、あちらも速い。
どちらか一方でも、速度を落としたらそこで負けである。
ピカチュウが勝てば、一気に風の刃の調整を行っているヨルノズクに詰め寄って攻撃出来る。
ヨルノズクが勝てば、ピカチュウは風の刃の餌食だ。

「しまっ……!」

もう遅かった。

ピカチュウは、地面の石に躓いて態勢を崩してしまった。
その瞬間を狙い、風の刃は迫って、ピカチュウに攻撃する。
風の攻撃に襲われながらも、電光石火で逃げようとする。
だが、この風の刃は電光石火とほぼ同じスピードだ。
簡単にここから逃げられる訳が無い。
急に止まって、後ろに逃げるのも不可能だ。

風の刃は、対象の速さに自身の限界スピードまで付いて来る。

それ以上は追いつけないが、それ以下ならどこまでも付いて来るのだ。

つまり、もつと高速で移動しない限りにはここから抜け出せないと言っ事だ。

「（どうする！？あれから抜け出す方法があんのかよ！？電撃も、あの中じゃ出せないし、他の技も全く使えねえ！もつと早く出来る技さえあれば……いや、ある！もう、これに賭けるしかねえ！！）」

ゼットは何かを決心し、ピカチュウに指示を出す。

「『高速移動』！！」

すると、ピカチュウは刃の中から消えていた。

ヨルノズクは辺りを探すが、全く視界に映らない。

ゼットも辺りを探していると、見えた。

目で追いつけない程のスピードでヨルノズクの周りを移動しているピカチュウを。

「今だ！『10万ボルト』！！」

指示を聞いたヨルノズクは周りを見るが、全く見えない。

しかし、先程から風を切るような音が聞こえるのは確かだ。

そして、音は切れて襲って来た……背後から。

手に電気を溜めて、それをヨルノズクに押し付ける。

2秒程度だが、十分聞いた筈である。

それに、本来の目的はこのヨルノズクを倒す事では無い。

同じポケモンである、ピカチュウは倒れたヨルノズクに問う。

「お前。何故、ここの者達に攻撃した？」

「そんな事を知って、どうするってんだ？」

「その要因を排除する」

「！……お前、俺の行動の理由が分かってるってのか？」

「ああ……大体見当は付く。恐らく、縄張り争いの問題だろう」

全てを見据えているそのピカチュウの目に折れたのか、警戒を解除する。

ピカチュウも警戒を解除して、その理由を改めて聞いた。

「改めて聞くが……どう言う事だ？」

「お前の言った通り、縄張りの争いさ。虹畑の皆といつも通り遊んでた俺だが、皆が帰った後、俺も帰ろうとしたんだが、後ろから何かに攻撃されたんだ。そいつは、俺に向かってこう言ってきた。『ここの縄張りは、たった今俺の物になったから、出て行け』ってな」

「……それで、そいつは断ればここのポケモン達を傷付けるって言うて来たのか」

「そうさ。皆が傷付く所なんて見たく無かったし、その要求を呑んだんだ。でも、皆があんな奴の言いなりになって欲しくも無かった。だから、態と俺が悪人になってここを荒らす事によって、もう近づかなくなるようにしたって訳だ。そして、今日明渡す予定さ……」

「成る程……ならば、その者を倒せばいいのだな？」

「なっ！？無茶言っな！あいつはこの辺りじゃ有名な「暴君」だぞ！！勝てる訳ねえ！！」

「お前が俺達を待っていたのは、事情を知つての事だろう？ならば、その「暴君」とやらを倒す事が俺達の目的と言う事も分かる筈だ」

然も、簡単に倒せるかのように、ピカチュウは自信に満ちた言い方をする。

暫くピカチュウを待っていたゼットは、何かが近づいているのに気づく。

「ドンファンだ！」

「ピカッチュウ……（奴が「暴君」か……）」

こちらを睨み付けて来る「暴君」こと、ドンファンは戦闘態勢に入る。

この光景を見たゼットは、このドンファンがヨルノズクの行動の原因だと言う事が分かった。

その証拠に、ヨルノズクも戦闘態勢に入っているからだ。

「事情は知らねえが、どうやらこいつが原因みたいだな！」

「……ピッカピ（……俺を信じる）」

「ホー……（分かった……）」

そうして、ピカチュウとヨルノズクは共闘する。

最初の約束を破ったヨルノズクに怒ったドンファンは、転がって来た。

物凄い速さでやって来て、花を下敷きにする。

「あの野郎……カズタが一生懸命育てた花を……！！」

「ピキッカ！！（許せん！！）」

頭に来たピカチュウは、一気に詰め寄る。

得意の電撃で攻撃するが、ドンファンは無傷だった。

「しまった！あいつ、地面タイプだ！！」

地面タイプに電気タイプは効果が無い。

ドンファンはピカチュウに攻撃しようとする。

しかし、横から風の刃が襲って来て、ドンファンを吹っ飛ばす。

その攻撃の主は、ヨルノズクだった。

「サンキューな！」

ヨルノズクに礼をすると、もう一度ドンファンに向き直る。

電気タイプの攻撃は地面タイプには全く効かない。

となると、ピカチュウはサポートに回り、主な攻撃役はヨルノズクとなる。

そうすると、1つの問題が出て来る。

「電気タイプで何が出来るんだ……？」

サポートと言っても、攻撃だけしかない訳では無い。

メインのヨルノズクを攻撃させる為に、いろいろと作戦を立てるの

だ。

しかし、ピカチュウとドンファンの相性は最悪で、やれる事が限られて来る。

その上、攻撃力もかなり低いのだ。

この戦いでピカチュウがやれる事は殆ど無いだろう。

「（くっ……何か、何か出来る事はねえのか！ピカチュウだけに出来る事が……？）」

そこで、ゼットは何かの作戦を閃いた。

ピカチュウだけしか出来ない事、それは即ち……。

「『影分身』！！」

ピカチュウは影を何体も作り、ドンファンを攪乱する。

どこにいるのか分からないドンファンは、適当にアタックする。

転がりながら、次々とピカチュウの影分身を撃破していく。

そして、最後の1体である本物を吹っ飛ばす。

「『高速移動』から『電光石火』！！」

ドンファンは、最後の1体を吹っ飛ばしたかのように思えたが、それは違った。

最初からドンファンの周りにいた影分身達は全て影分身で、本物はいなかったのだ。

そうになると、乱れ付きで吹っ飛ばしたドンファンには、隙が生まれる。

そこを狙って、高速移動で速くなったピカチュウは電光石火で突進する。

電光石火単体では、ダメージは薄いが、それが高速になればどうな

るだろうか？

さらに速くなつた電光石火は威力を増して、巨軀のドンファンにダメージを与える。

だからと言って、ドンファンがそう簡単にやられはしない。

「来るか！？」

怒つたドンファンは、マグニチュードで攻撃する。

マグニチュードは地面タイプの技である。

電気タイプのピカチュウが喰らつたら、即アウトだ。

しかし、ピカチュウはどこにもいなかった。

「『高速移動』から『電光石火』！！」

先程と同じ攻撃で、ドンファンを花の無い空洞に吹っ飛ばす。

それは、虹畑を守る為である。

あそこで戦つたら、虹畑が滅茶苦茶になってしまうからだ。

流石は「暴君」と呼ばれるだけの事はあるか、平気で起き上がった。それに比べて、ピカチュウはあの巨軀に2回も突っ込んだのだ。攻撃を喰らつたドンファンよりも、ダメージの差が激しかった。

「まだ、終わらねえよ！」

すると今度は、上空からヨルノズクがやって来た。

それに気づいたドンファンは、その場から逃げようとする。

だが、ヨルノズクは翼から上手く風の刃を出現させて、逃がさない。さらに回転力を加えて、ヨルノズクは突進する。

ドンファンはそれに直撃してしまい、倒れる。

「や、やった……！！」

しかし、ヨルノズクもダメージが大きかったのか、倒れる。
すぐに近寄り、手当てをしようとするが、目の前の光景に愕然とする。

何と、ドンファンはまだ体力が残っていたのだ。

「なっ……！？あれだけの攻撃を受けて、まだ倒れねえのか！？」

ピカチュウはすぐさま、戦闘態勢を取る。

しかし、下手に動いてしまえば、マグニチュードの餌食だ。

かと言って、あのまま放って置けば、体力が回復してしまう。

他のポケモンを出そうにも、上記のように下手に動けばマグニチュードの餌食になる。

それに、折角のポケモン達が一気に全滅してしまう。

そうなれば、また先程の方法以外の作戦で倒さなければいけない。
最早打つ手無し、そう思われたが、何かがドンファンに攻撃する。

ピカチュウでもヨルノズクでも無ければ、他の手持ちでも無い。

攻撃の主を見ると、ユンゲラーだった。

その他にも、ブルーにガーディ、プリンと言ったポケモン達が群れを成して出て来た。

「ヨルノズクさん、そう言う事は何で先に言ってくれなかったんですか？」

「俺様の友^{ダチ}に怪我させた野郎はそいつだな？覚悟しやがれ！！」

「僕達も精一杯頑張ります！」

「お、お前達……」

ポケモン達の視線は一気にドンファンに向く。

「ぐぐうつ……お前等、ただじゃおかないぞ！その鳥や鼠もだ！！」

「鼠、だと？」

ドンファンが言った、その鼠と言う単語にピカチュウは反応する。ピカチュウにはこれまでと無い程の怒りが込み上がっていた。

「そう呼んで良いのは……俺の認めた敵と仲間だけだああ！！」
ライバル

ゼットの指示も無しに、ピカチュウは高速移動の電光石火を放つ。ドンファンの腹部に、その突進が炸裂する。

狙いはピカチュウに向き、攻撃しようとするが、後ろから殺気を感じる。

震えながら後ろを見ると、ポケモン達がドンファン以上に睨んでいた。

「し、失礼しましたああ！！」

殺気に怯えてしまったのか、ドンファンは逃げた。

そうして、ここから見えなくなる場所まで去っていく。

「よっしゃあ！やったぜ！！」

「間に合った……」

すると、後ろから息切れしたカズタが出て来た。

「ドンファンは倒したのかい？」

「ああ。つつか、見てたのか？」

「いや、さっきドンファンが出て行ったのを見てね……」

「そうか……あ、もうこんな時間か！そろそろ行かねえと、野郎に先を越されちまう……！」

ゼットはピカチュウを連れて、進もうとする。

「あ、ちょっと待って！君の名前は……！」

「俺はゼット！いずれポケモンマスターになる者だ……！」

それだけを言うと、ゼットはピカチュウを肩に乗せて、走っていく。今回は、また番外編へ。ゼット達の旅はまだまだ続く。

第24話 「く番外編く タマムシでの過去」

ここはタmamシシティ。

カントー地方でヤマブキシティの次に都会な街である。

そんな場所に、1人の少女がいた。

「ここがタmamシシティね。デパートへ行つて、買う物も買わないと」

少女の名はダブリュー。

オツキミ山で、一度ゼットと共闘して密売グループを倒した少女である。

ダブリューはハナダシティを通つて、ここまでやつて来た。

勿論、デパートで買い溜めをしておく為である。

「さて、行こうかしらね……？」

目的のデパートに行こうとしたが、足を止める。

そこには、金髪の少女がタmamシシティのゲート近くに立っていた。その程度の事で、一々気に留める必要も無いが、何故か気になる。

あの、哀愁を帯びた眼。

10歳の少女とは思えない程に、酷く大人びていた。

余程の経験をしたのだらうと、ダブリュー自身がそれを良く知っている。

何があつたのか……こう言う事はあまり詮索したくは無かったが、その好奇心からか声を掛けた。

「こんな所で何してるの？」

「あつ、え？何？」

今、我に返ったのか、少女は質問を聞いていなかった。

「ボーツとしてだから、何かと思ってね」

「え？そうだったっけ？」

どうやら、先程の事を覚えていないらしい。

これ以上詮索しても、初対面の人間が何故ここまで聞くのか変に思われるので、敢えて聞かなかった。

しかし、少女に何があったのかについても気になる。

考える内に、ダブリューは良い案を思い付く。

関係が無いのであれば、新たに作ればいいのだ。

「ちょっと食べに行かない？」

「へ？私達、初対面だし……って言うか誰？」

「私はダブリュー。あなたは？」

「私の名前はワイだけど……。何か奇妙な名前ね」

「あなた程、適当な名前じゃないわよ。旅は道連れって言うし、行きましょ」

その言葉に、少し怒りを覚えたが、何とか押さえ込む。

ダブリューはワイの手を引いて、飲食店に進む。

何故、自分はこんな見ず知らずの少女に興味を持ったのか。

恐らく、原因はあの眼だろう。

「（あの眼……この子には、一体何があったの？）」

それが一体何なのか考えてみる。

あの眼に宿る雰囲気……あれをダブリューはよく知っている。
悲しみと哀しみが一気に重く押し掛かるような感覚。

振り払おうとしても、拭えない感情。

それがどんなに、辛い事なのか……。

「（もしかしたら、この子も私と同じような運命を……）」

そうだとしたら、乗り越えさせなければならない。

見た所、自分よりも後から出て来たようで、身長もやや低い。

先輩は後輩の面倒を見る存在だ。

ならば、自分も一緒にその悩みを晴らさせてあげたい。

それに、この少女にどんな出来事があったのかが気になる。

流石に自分と同じ事は無いだろうが、と苦笑しながら思う。

「私のは、その運命を変える為だしね……」

「どうかした？」

「何でも無いわ。行きましょう」

その後は、飲食店に行つてパフェを食べた。

いろいろな会話をしていく内に、ワイの情報が取れて来た。

現在のジムバッジの数が2個である事。

イワヤマトンネル経由で、ここに来たと言う事。

先程、新たなポケモンをGETした事。

ヤマブキで新発売のアクセサリが売っている事。

最後のはどうでもいいが、ポケモンの話が殆どだったので、女らしくは無いと思っていたが、やはり女なのだな、と再確認する。

それに、ダブリューもそう言う話題に興味があるので、すぐに食いつく。

最後に話した情報……これが一番重要だろう。

ワイの出身地が、このタمامシである事だ。

現在は、マサラタウンへと引越しているが。

最初はこのタمامシシティに、何らかの衝撃的な過去があるのかもしれないと思っていた。

それが、予想から確信に変わった。

恐らく、タمامシからマサラまで引越する理由がその過去の筈だ。流石に直接聞き出すのは不味いので、もう少し辺りを回る事にした。ここに来た、本来の目的も兼ねて。

「さて、デパートに行くわよ」

「え？デパートにですか？」

ワイはダブリューに敬語で話した。

先輩後輩と言う立場を自覚して来たのだろう。

「ここに来た理由は、次の街に進む前に、買い溜めする為なのよ」

「あゝ、姉御のレベルだと次の街はセキチクシティですね？」

「そうよ。……後、その姉御って言うのやめてくれないかしら？」

「姉御は姉御ですよ。私なりの、「先輩」なんですから」

「まあ、いいわ。セキチクシティ……通称、ギルドの街。3棟梁が治める「ギルド」の本部ね。それがどうかしたの？」

「実は、そこへ行く為のセキチクゲートの入り口付近で、何かトラブルがあつたみたいで、今は通行禁止になってるんですよ。だからここからは通れないし、回りくどいようですけど、シオンタウンの南の道を使うしかないんです」

それを聞いて、ダブリューは頭を抱える。

彼女自身も、その事は聞いていた。

セキチクゲートで、入り口にあるセンサーが壊れてしまったので、暫くはその道は通れないと言うのだ。

修理まで、後5日と聞いていたが、10日の間違いだったようである。

なので、ここからかなり遠いシオンタウンの南の道へ行かなければならないのだ。

後5日待てば良い事なのだが、それでは自分やポケモン達がだらけてしまう。

そんな事ではこの先、勝ち抜けていけるかどうか分からない。

仕方無いと思い、今日はこの街に泊まっていく事にした。

勿論、明日からの計画を考える為だ。

「予定が狂っちゃったけど、もういいわ。今日は羽を伸ばしていこうかしら」

「じゃあ、行きましょう！」

「そうね」

笑みを浮かべ、デパートの中に入っていく。

ここでは、いろいろな物が取り揃えられている。

戦闘用と回復用と普通の道具、メール、モンスターボール、技マシンに至るまでどんな物もある、デパートである。

タマムシデパートは、ヤマブキのデパートよりも遥かに大きく、安い。

流石は大手のデパートと言った所か、人の数も多い。

「ひゃあ……相変わらず人が多いわね。昔とちつとも変わってないわ」

「まずは道具よ。ついて来なさい」

「あ、待ってくださいよ！」

ダブリューがここで買う物は多い。

回復用の道具や技マシンなど、戦闘時に使う物ばかりだ。

今後、強いトレーナーが来た時や連戦などの対策の為である。

もう底が尽き掛けている、この状態では不味いだろう。

しかも、トレーナーが現れる時間や場所など知る訳も無い。

それらの理由もあって、道具を買おうと言っただ。

「一体、何を買うんですか？」

「傷薬系と状態異常回復系は必須で、後はその他諸々ね」

「その他諸々って、何に使うんですか？」

実際、ポケモンバトル時に必要なアイテムは回復系の道具や木の実に、戦闘用の道具などだ。

他の物は、そんなに使う機会は無さである。

一体それを、何に使うのかは、誰でも気になる所だ。

「アイテム全般は大体使えるのよ。例えば『甘い蜜』。あれは相手に投げつければ目眩ましにもなるし、その香りで虫ポケモン達の注意を逸らす事だって出来る。特に食べるのが大好きなポケモンには、トレーナーの指示ですら聞かない事だってあるのよ」

「へえ」

戦闘に置いて、道具にはあらゆる活用法があるのだ。

ダブリューはそれについての技術が、普通のトレーナーよりも秀でている。

かなりせこい技術だが。

「もしかして……姉御も、ルーキートレーナーの内の1人？」

「ああ、確かそんなような事を言われたわね。あなたもでしょ？」

「ええ、一応。これで全員に会った訳ですけど……私って、そう言う運命なのかな？」

偶然にも、ワイはルーキートレーナー全員に会った。

これを偶然では無く、必然と捉えるのも無理は無い。

「とにかく、行きましょう」

「は、はい！」

道具売り場へ行くと、それはあった。

その中心地は、いつも安売りセールがある場所。

普通は、野菜売り場などで見かける光景だ。しかも、いるのはおばさんのみの筈。

だが、今回のそれはいつもとは少し違った。確かにいるのは、女性だけである。

しかし、これは若い世代の者だけで、おばさんは存在しない。さらに、今回の野菜売り場では無く、道具売り場だ。

「ワイ、ここが女の修羅場よ。前にお母さんと一緒に来た時よりも、遥かに大きいわ」

「え〜と……普通は野菜売り場で発生するんじゃないんですって？」

「必ずしも野菜売り場とは限らないし、年齢層も関係無い。そういう物なのよ」

「そ、そうなんですか……」

「行くわよ。勝利を手にするのは私達よ！」

「はい！」

こうして、ダブリューとワイは修羅場へと進む。

その後は道具を何とか手に入れて、技マシンを買いに行った。

こちらの方は、安全に買ったのでゆっくり商品を見ていける。

それからアクセサリーやメールなど、いろいろな物を見ていった。だが、時間は非情にも待つてくれない。

2人は買い物袋を両手に持って、夕焼けに照らされながら、デパートから出る。

「たくさん買えたわね」

「私もいろんな物を買えて良かったですよ」

満足な様子で会話する。

しかし、まだ肝心な事を聞いていなかった。
本人から聞くのは駄目なので、この方法を取る事にした。

「ねえ、あなたの家に寄らせて貰えない？」

「え？家ですか？まあ、最近帰って無かったし、構いませんけど」

「それじゃあ、案内してくれる？」

即答すると、ワイは自分の家に案内する。

極普通の民家で、インターホンを押す。

中から返事がして来て、扉が開く。

出て来たのは、20代の女性だった。

「あら、ワイちゃんじゃない！久しぶりね」

「久しぶり、おばさん。こっちは私の先輩の……」

「ダブリューです」

ダブリューは簡単に自己紹介をする。

「私はこの娘の親戚です。この娘がお世話になっているわ」

「いえいえ、とんでもない」

「どうぞ中へ上がって頂戴」

おばさんは中へと案内して、リビングへ入る。

リビングの中は暖房が効いていて、寒々とした身体を暖める。
ダブリューは近くに置いてあったソファに座る。

ワイはトイレに行つて、部屋から出て行く。

「ところで、さっき親戚と言いましたよね？ご両親は？」

ここぞとばかりに聞いた。

その質問が来るのを知つてか、あまり驚いた表情はしなかった。

「実は2年前に、亡くなられたのよ。交通事故で」

「（それが原因ね）」

あの憂鬱な表情の原因は、恐らくそれであろう。

それならば、マサラに引越した理由にも説明が付く。
事情をもう少し聞く為に、質問を続ける。

「一体、何があつたんですか？」

「それが起こつたのは、ワイとご両親の3人で散歩してる時だったの。持つた風船が飛んでいって、それを追い掛けている途中で横断歩道に飛び出しちゃったワイに気づいたご両親が連れ戻そうとしたところに自動車が入つて来て、ご両親はワイを身を挺して守つた末に……」

「……分かりました。もう、大丈夫です」

だんだん声が薄れていくのを感じ、話を切った。
これ以上話しても、無理を言うだけだからだ。

「それからは、マサラに引越したようですけど、これとは関係あるんですか？」

「ええ。それから1週間ぐらい、ここで私が世話をする事になったんだけど、あれだけ元気だった娘が無感情になって、別の街に行く時だけ元気になってたのよ」

「つまり、故郷が嫌いになってしまったと言う事ですね？」

「そうみたいだったわ。だから、本人の希望もあってマサラタウンにいる別の親戚に預けたのよ。そこでは昔みたいに元気に過ごしてるみたいだったから、こっちも安心したわ」

それならば、両親が亡くなった時の記憶も薄れるからだろう。
少し残酷ではあるが、楽しい記憶で塗り潰せばタマムシシティにも笑顔で入って来れる日は近い。

「……ある時まではね」

「ある時？」

「それから1年後、ワイの世話をしていた親戚のおばさんが病気で亡くなったの」

「え……？」

「ワイは自分を責めたわ。ご両親やおばさんが亡くなったのは自分のせいだってね」

それは誰でも、自分を責めたくなくなってしまっただろう。

立て続けに自分の身の周りの人が死んでいくのだから。

流石のダブリューも、これには驚いた。

「それから、重く沈んでいったけど、そこから手を差し伸べたのが、ポケモン。元々、おばさんが持っていたポケモンなんだけど、ワイとも仲が良かったのよ」

「確かに、自分のポケモンは絶対に裏切らない存在ですからね……」

そう言つて、自分のポケモン達を見る。

普通は相手ポケモンと戦う為に応戦する、悪く言えばトレーナーの武器のような存在だ

だが、時には友人のように相談に乗ってくれるパートナーでもある。どんな時でも、ポケモンは人間に様々な事を教えてくれる、不思議な生き物である。

「それで、夢だったトレーナーを目指す事にしてみたいの。逝ってしまったご両親とおばさんに最強になった所を見せる為にね」

「そうなんですか……でも、まだ負い目を感じているようでした。タマムシシティに入る時に」

あの眼は、とても吹っ切れたようには思えなかった。

やはり、まだ両親の事を引き摺っているのだろう。

そう簡単に吹っ切れる事でも無いが。

「やっぱり……ご両親との別れは、急だったからね。自分が無力だったのを引き摺ってたようだし……」

「それで、ワイは強くなろうとしてるんですか……」

「ええ。多分あれは、強いと言う事を証明して、自分の無力さを認めてないだけ。あれじゃあ、いつまで経っても強くないと思うわ」

「でしょうね……」

ワイは無理に吹っ切ろうとして、自分の力の無さを忘れようとしていた。

それが出来ないから、自分が強くなって、何でも出来る無敵になるうとしたのだ。

つまり、今のワイの状態は焦っている。

負ければ負ける程、自分の無力さが露になって来るからだ。

「何とかして、改善出来ればいいんだけどね……」

「それは、私が弱いつて言う事？」

「ワイ!？」

そこには、ワイが立っていた。

恐らく、今までの事は全て聞いていたのだろう。

手が震えていて、それは怒りを表している。

「確かに……私はあの時、何も出来なかった。でも、今はポケモンを持って強くなった!負けたら、今よりももっと強くなるように修

行した！！これで、私は強くなったの！」

「あんたは弱いわ」

冷徹にダブリューはワイに言い放つ。

「弱い……！？私が！？」

「そうよ。確かに、あんたはトレーナーとしての技術も、ポケモンのレベルも強いかもしれない。でも、肝心な所が強くなってないじゃないの？」

「肝心な……所……？」

そう聞いてきたワイに、ダブリューは手を胸に置く。

「心よ。そこがなっていないと、もっと強くなるなんて無理ね。いつか限界が来るわ。心の強さは「制御」。自分の力のコントロールよ。あんたは自分の無力を認めないが為に、出来る筈の力のコントロールが出来ないのよ。酷ければ、トレーナーとしての技術も使えなくなるかもね」

「じゃあ、私はどうすれば……！！」

「自分の無力さを受け入れる事。吹っ切る必要は無いわ。その欠点を補う為に、次から努力すればいいのよ」

ワイを優しく引き寄せて、そう言う。

その姿にワイは一瞬、母親とダブリューがダブったように見えた。

「……姉御、おばさん。私は、1つ夢が出来ました」

「言ってみなさい」

「皆を……皆を守るトレーナーになりたい!!」

その答えにダブリューは微笑む。

「分かったわ。お姉さん、ありがとございました」

「あら、もう行くの?」

「いえ、センターで休んでいきます。ワイ、付いて来なさい!」

「……はい!」

今まで見た事の無い、笑顔を見せる。

その笑顔に、おばさんは目尻に涙を浮かべる。

ずっと待っていた、彼女の本物の笑顔。

それが2年の時を経て、漸く解き放たれたのだ。

「あ、ちょっと待って!」

部屋から出ると、何かを持って来た。

「ダブリューちゃん。これをあげるわ」

「ポケモンのタマゴ……貰っても、いいんですか?」

「あなたのおかげなんだから、当然でしょう?」

折角貰った、好意を拒否する訳にもいかず、ダブリューはそれを貰う。

何のタマゴかは知らないが、出て来るのが楽しみになって来る。

「気を付けてね〜!」

「それじゃあ、行くわよ!!」

「待ってください、姉御〜!!」

こうして、2人の出会いは終わった。

ダブリューとワイの旅は、まだまだ続く………………。。

ゼット達は現在、8番道路を自転車で進んでいた。もうすぐ、シオンタウンに到着するからである。

そこにはシオンジムと言う、ゴーストタイプのジムがある。

本来は、ヤマブキジムが3番目のジムになる筈だった。

だが、そのジムリーダーが消えてしまった為、こちらに来る羽目になったのだ。

と言ってもジムリーダーが帰って来るまで、2つのジムを回れると言うメリットもあるので、文句は言わなかったが。

「もうすぐ到着だ!」

自転車の走る速度を速くする。

ここから見えるシオンタウンは霧に包まれていた。

一番最初に見えたのは、その一角に聳え立つポケモンタワーである。悠々と佇むその姿は、正に圧巻であるが、何故か妙な寒気を感じさせる。

次に見えたのは、シオンタウンの民家だ。

普通の街と比べると閑散としていて、とても静かである。

やはりここも背筋を凍らせるような寒気を感じる。

この辺りに漂っている、霧のせいだろうか。

そう考えるとそれ以前に、この街全体から寒気を感じるようになって来た。

「おお、あれがポケモンタワーか!でっけな〜!」

まず、陽光の化身とも言えるゼットには何も感じないだろうが。

ポケモンタワーは、高さ凡そ15mの巨大な塔だ。

この塔は、死んでしまったポケモンを埋葬する場所として使われている。

そう言う意味では、寒気の原因も大凡、見当は付くだろう。

「ん？あれ誰だ？」

すると、霧ではつきりしないが、前方に人が見えた。

別段、不思議でも無いが、この閑散とした空気の中に人がいると、返って目立ってしまうのだ。

その前に、目立つ服を着ているからだろうか。

黒の雨合羽らしき物を身体全体に羽織っており、顔は全く見えない。この街の事を聞こうと、声を掛ける。

「すみませーん！ここのジムってどこですかー！？」

ゼットは大きな声で叫ぶが、雨合羽の人物は微動だにしない。

聞こえなかったのかと思い、もう一度声を掛ける。

「聞こえてま……！？」

もう一度叫ぼうとしたが、殺気を感じた。

ここから見えないと言う事は、上空か後方だ。

上空で風を切るような音は少しも聞こえない。

だとすると、殺気の主は後方にいる可能性が高い。

それを一瞬で考え、腰に付いたモンスターボールを、1つ地面に落とす。

出て来たのはガーディで、炎の牙で応戦する。

殺気の主は何かの攻撃でそれを相殺し、後ろに下がる。

「誰だ！？」

後ろを見ると、そこにいたのはガス状ポケモンのゴーストだった。

物理攻撃を相殺したと言う事は、あちらの攻撃も物理攻撃だ。

双方とも無傷な所から見て、相手の技は自分を近づけずに相手に物理攻撃する技だ。

となると、一番考えられるのは『シャドーパンチ』と言う事になる。不敵に笑いながらこちらを見るその様は、然も見下しているようだった。

「ゴーストか……『火の粉』!!」

ガーディは空かさず火の粉を連射する。

ゴーストは、そこから1歩も動かずにそれを全て避ける。あれを「避けた」と言えるのかどうかも分からないが。相手のタイプを考慮して、ゼットはその理由が分かった。

「自分の体に穴を開けた……ってのか!？」

相手は、ガス状ポケモンだ。

ガスと言う事は、その我が身を自在に変化させられる訳だ。炎タイプの技で引火させられればいいが、残念ながらあれは普通のガスとは違う。

幽霊ポケモンと言う事もあって、独自のガスを作ったのだろう。超自然現象だが、そう例えるのが妥当であろう。

「ガスで穴を開けて避けるんなら、一気に飲み込むまでだ!出る、『火炎放射』 ああ!!」

今まで放っていた火の粉は、一瞬で業火と化す。全く使えなかった技だが、レベルが上がっていく内に、やっと覚えたのだ。

とてつもない威力に、ゴーストは避けようとする。

だが、穴が開いている所でそのまま避けようとすれば、火の粉でダメージを受けて、次の火炎放射にもダメージを受けてしまうだろう。自身の霊気を操って脱出しようとするが、その前に火炎放射に飲み込まれた。

ゴーストは黒焦げになって、倒される。

「よし！勝ったぜ！！」

しかし次の瞬間、驚愕した。

何故ならば、野生だと思っていたゴーストがモンスターボールに戻っていったのだから。

しかも、ゴーストを戻した主は、雨合羽の人物だった。

雨合羽の人物は掠れた声で笑いながらゼットを見る。

こちらからでは顔が見えないので、どんな表情をしているのか分からないが、笑っているのは確かだ。

「あ、あんた……何でこんな事を！？」

「ククククク……」

人間とは思えないような声の低さで笑う。

その笑い声に、流石のゼットもゾクツとした。

それは、何も答えずただ笑う雨合羽の人物に、恐れを感じていなかった。

「な、何なんだ……」

すると、雨合羽の人物の目の前にポケモンが出て来た。

サイクリングロードにもいた、ゲンガーだ。

ゲンガーは出て来た瞬間からシャドーボールを溜めていた。

それに驚いたが、そんな事も言っではいけない。
素早く、回避の指示をガーディに出す。

「避ける！！」

何とか、右に回避する。

先程ガーディがいた場所は、地面が抉れており、相当の威力だと言う事が分かる。

あれを喰らえば、大ダメージは免れないだろう。

今後、それを注意しながら指示を出さなければならないが、無防備にもガーディは突っ込んでいく。

ゲンガーは両手にエネルギー弾を溜めて、それを放つ。
しかし、それは先程よりも遅く小さかった。

「取ったぜ！！」

ガーディはすぐそこまで近づいた。

あの威力の攻撃は、そう連続には出せないだろう。

出せたとしても、最初よりも確実に威力は弱くなっている。
そこを、ゼットは狙ったのだ。

体全体から、炎を噴出して回転し出した所で、指示を出す。

「『火炎車』だ！！」

至近距離からの火炎車がゲンガーを襲う。

この距離からでは、絶対に逃れられない。

案の定、火炎車はゲンガーに当たり、吹っ飛ばかと思っただが、ガーディはゲンガーの体をすり抜けてしまう。

「何で効かないんだ……！？」

何度やっても無駄だった。

攻撃はゲンガーの体をすり抜けて、当たらない。

そろそろ時間が経ったのに気づいて、ハツとなる。

ゲンガーは両手に凄まじい威力を凝縮したエネルギー弾を作る。

それに対抗しようと、ガーディも口に炎を溜める。

「『火炎放射』!!」

2つの攻撃は同時に行われ、シャドーボールと火炎放射はぶつかり合う。

一瞬、火炎放射がシャドーボールを押したが、すぐに押し負けた。まだ覚えたばかりの技なので、完全に使いこなしていないからだ。それはガーディに直撃して、一発でダウンした。

「たったの一発で……!?!」

不味くとも、大ダメージで終わると思っていたが、それは甘えだった。

世の中にはゼットよりも、遥かに強い敵がわんさかいると言う事だ。

「クククク……フハハハハハ!!!!」

けたたましい叫び声を上げて、雨合羽の人物はどこかへ消えた。

ゼットは力の差を思い知り、愕然とする。

ゼットが覚えている、あの雨合羽の人物の特徴は、その黒の雨合羽と、ゴーストタイプのポケモンと………普通はある筈の物である、足が両方とも地面に着いていなかった事と、身体が少し透けていた事だ。

それからは、近くのポケモンセンターにガーディを運んだ。

傷はそこまで深くなかったが、1日は安静にしておいた方がいいらしい。

今までの力が抜けたように、座り込んだ。

その前には、ピカチュウ達が心配そうな表情でこちらを見ている。

「……俺、1回も負けた事が無いから、ちょっと調子に乗ってたみたいだ。ごめん、皆」

「ピカッチュウ！」

「カメカメ！」

「ヤド〜」

ピカチュウ達は、そんなゼットを慰める。

一部、そうでない者もいるが。

負けた、と言ってもガーディだけが負けただけで、まだ他のポケモン達が残っていた。

あのガーディがたったの一発でやられたのが、相当悔しかったようだ。

手持ち達に慰められ、元気が出たゼットはいつもの元気な表情を取り戻す。

「ありがとう……よし！ガーディが回復するまで、ジム戦は無しだ！！」

「ところで……一体、誰に倒されたの？」

シオントウンのジョーイさんがゼットに話し掛ける。
声に気づいたので、すぐに返答をする。

「ああ、何か黒い雨合羽を着た、ゴーストタイプ使いの滅茶苦茶強い奴だ」

「成る程。ロードさんにやられたのね。あの人、ここに来るトレーナーをすぐに試したがるから……」

「ロードさん？知ってるの？」

「ここのジムリーダーよ」

「……ロードさん？知ってるの？」

「だから、この町のジムリーダーよ」

今、とんでもない答えが返って来たような気がした。聞き間違いだろうと思って、もう一度尋ねる。

しかし、もう一度聞いてもさっきと同じ返答だった。

「はあ！？あの怪人雨合羽が！？」

「そうよ。シオンジムのジムリーダー。幽霊だけど」

「幽霊？ハハハ！そんな物、この世界にいる訳が無いだろ？」

ゼットは、それを笑い飛ばす。

そんな物は、この科学の時代（と言っても、黒電話が最近発売されただけだが）には存在しないのだ。

ゴーストタイプのポケモンならば、幾らでもいるが。

最近までは信じられなかった、超能力者（物を触れずに動かす程度）

も出て来たこの時代。

だが、流石に幽霊までは出て来ないだろう。

「でも透けてたし、足も無かったでしょ？」

「……………ハハッ、まさかぁ！」

「今の間は何？」

先程までは信じられなかったが、真剣に考える事にした。

逆に考えれば、超能力者もいるのなら、幽霊もいるのかもしれない。だが、そんな存在をジムリーダーにしてしまうポケモン協会が恐ろしい。

「まあ、幽霊だろうと何だろうと関係ねえ！ジムリーダーなら倒すだけだ！今はガーディが回復するまで待たなきゃいけないけどな」

「シオンジムは、ポケモンタワーよ。ロードさんと戦うなら、その最上階に行く事ね」

ポケモンタワーがシオンジムとは、かなり大きい事が分かる。

バトルフィールドも、恐らくジムリーダーに有利な地形だろう。

相手ポケモンも、あれだけでかなり手強かったので、もつと強くなる事を覚悟しなければならない。

その前に、それは死者への冒瀆だと思うのだが、幽霊自身がジムリーダーならば仕方無いだろう。

ポケモンセンターから出ると、少し霧が晴れていた。

それでも、辺りには立ち込めているので、そう変わってはいないが。ゼットは気晴らしの為に、いつものあれをやる。

「第3回観光&探検シリーズ！ in シオントウン！！」

流石に、何もする訳にもいかないので、この企画をする事になったのだ。

これで時間は潰せると思うが、1日も持たないだろう。

シオン独特の、このしんみりとした空気に飲まれない為と言つのもある。

「じゃ、じゃあどこへ行こうかな……」

辺りを見回すが、殆ど何も無かった。

これと言って、紹介する事も無いので、ゼットも困ってしまう。ポケモンタワーが一番なのだが、ここはメインなので最後である。なので、最低でも後1つぐらいはスポットが無いと駄目なのだ。

「（な、何にもねえ……）」

「ピツカ……」

ピカチュウは「まだ？」とでも言いたげに、ズボンを掴む。

人の苦勞も知らないで……と沸き起こる怒りを抑えながら、冷静に探す。

実際は、行き当たりばったりばかりで、無計画のゼットが悪いのだが。

「何か無いのか……？」

やはりあるのは、民家とポケモンタワーのみ。

それ以外で目立つ物など、全く無い。

仕方無いとばかりに、諦めて帰ろうとした。

すると、後ろから何かの声が聞こえて来る。

「そ、そうだ！あそこへ行こう！！」

入った場所は、どこかのお寺だ。

扉を開けると合掌して、目を瞑っている和尚がいた。

何をしているのか聞こうとすると、和尚は目を開ける。

「な、何ですか！？」

「お主、若いのにこんな所までやって来るとは、偉いもんじゃのう。一体、何をしておるんじゃ？」

「ポ、ポケモントレーナーだけど？」

「ほお、その若さでトレーナーとは。しかし、その道中で霊に取り付かれ、それを払いにここまでやって来たのか……」

「へ？いや、別にそんな……」

「その心意気に免じて、ただで悪霊を取り除いてあげようぞ！」

そうして、正座している事20分が経過した。

ここは霊媒師の店で、たったの1万円で悪霊を取り除く儀式をしてくれるのだ。

ただ30分経つまでは、ずっと正座していなければならない。

偶然とはいえ、ゼットにとっては最悪な所を選んでしまったと言えよう。

「（何て所だよ、畜生！30分間、動けねえなんて地獄と同じじゃ

ねえか！でも、これももうすぐ終わりだ！早く開放されたい！！」

ゼットは心中、そう願った。

ピカチュウも早く開放されたいんだろうな、と思って横目で見る。しかし、ピカチュウは微動だにしなく、正座を保っていた。

正にその姿は、修行を積んだ和尚そのものだ。

背中に、仏像の幻が見えたのは気のせいじゃ無いだろう。

「（す、すげえ……）」

ここまで正座していて、微動だにもしないのは凄い事だ。

ゼットでも、10分前に耐え切れなくなって、ソワソワしてしまうのが常だった。

今でこそ、ピカチュウの凄さが実感出来る。

そんな事を思っていると、30分は過ぎてしまった。

「……これで、お主達に取り付いていた悪霊は退散した」

「（……え？悪霊、いたの？）」

「若造、これから日々、精進する事じゃ。それと、これをお主にやろう」

「CDプレイヤー？」

「旅をしていれば、どこかで役に立つじやろう」

見てみると、それはCDを再生するCDプレイヤーだった。

技マシンなどを再生する時によく使われる物だ。

霊媒師ともあろう者が、何でこんな物を持っているかは大いに疑問

を持ったが、ありがたく貰っておく事にした。

あまり人が来なく、しかも子供が来たのが、余程珍しかったらしい。

「おお、そうじゃ。ピカチュウや」

「ピカ？」

「お前さんには、僧侶の素質があるやもしれんな。どれ、僧の道へと歩ま……」

「俺達はポケモンマスターになるので失礼しましたーっ!!」

そう言つて、ダッシュで逃げ行つた。

次のスポット……元より、最後のスポットだが、ポケモンタワーにやつて来た。

死んだポケモンを埋葬する場所として使われているが、最上階はジムになっている。

埋葬場と言つ肩書きがあるせいか、ゴーストタイプのポケモンしか出ない。

一説では、ポケモンは死んだらゴーストタイプに生まれ変わると言うが、真相は不明だ。

その長さとは裏腹に、タワーの内部は3階建てである。

1Fと2Fは墓地になっているが、3Fはバトルフィールドだ。

そのあまりの高さに、首が痛くなってしまう程だ。

「近くで見ると、やっぱりすごい高さだな……」

それは、15mもある高さの塔だからだろう。

そして最初に来た時に感じた寒気が、より一層強くなっているのを感じていた。

ゴーストタイプのせいだけでは無い気がするのだ。
だが、まだここに入る事は無い。

ガーディが完全に回復するまで、ジム戦はしないからだ。
少し見た後、ポケモンセンターに帰る事にした。

「いや、それにしても大きな塔だったな……」

「ピツカア！」

たった2つしか見ていないが、ピカチュウはご満悦である。
余程、いろいろな建造物を見れたのが楽しかったのだろう。
ゼット自身も、これはこれで良かったと思っていた。
すっかり夕方になってしまったので、ポケモンセンターに入ろうとする。

「うおおおおお！……」

「何だ？」

後方から叫び声がするのを聞いて、後ろを振り返ると、男性が迫っていた。

それよりも驚いたのは、男性ではなくその後ろにいるゴースト達だ。
その数、実に10体はいるだろう。

こちらに向かって来たので、反射的に逃げてしまった。

「な、何なんだよこれえ！？」

全ては次回へ続く……………。

第26話 「悪霊退散！ゴーストタイプの攻略法！！」

ここ、シオンタウンではゴーストタイプのポケモンが多く生息する。その理由は、墓地や霊媒など幽霊関係の物が多くあるせいでもある。例えばこんな所にも、生息していたりする。

「助けてくれえええ!!!」

「何で俺までえええ!!!?」

2人を追うのは、ガス状ポケモンのゴーストだ。

追って来ている数は、全部合わせて10体。

偶然、こちらにやって来た青年に巻き込まれてしまったのだ。成り行き、と言うのが妥当だろうが。

「くっ……ピカチュウ!!」

このままでは埒が明かないので、ゼットはモンスターボールからピカチュウを出す。

得意の電撃でゴースト達に攻撃するが、前のゲンガーのようにすり抜けられた。

さらに、全員でナイトヘッドを繰り出し、ピカチュウを攻撃する。高速移動で、何とか全体での攻撃を避けたが。

「おいおい、またかよ!一体どうなってやがんだ!?」

「駄目だぜ!そんなちゃんな攻撃じゃあ、相手の思っ壺さ!」

「ちゃちだと！？人を巻き込んで、それはねえだろうが！！」

「勝手に入り込んで来ただけだろ！？とにかく、俺の見本を見せてやるよ！！」

そうすると、青年もモンスターボールを投げる。

そこから出て来たポケモンは、黒い猫のようなポケモンだった。いかにもそれは、スピードが自慢のようなポケモンだろう。

「マニニューラ、『乱れ引つ掻き』だ！！」

「はあ！？効く訳ねえだろうが、そんな技！！」

黒い猫……マニニューラはゴーストに向かって攻撃する。

しかし、乱れ引つ掻きは何故か効いていた。

普通、ノーマルタイプの技は、ゴーストタイプには効果が無い筈である。

それなのに、マニニューラの攻撃は効いていたのだ。マニニューラの乱れ引つ掻きを受けて、ダウンする。絶対にありえない光景を目にして、啞然とした。

「どう言う事だ……！？」

「話は後だ。隠れるぞ！」

2人は、近くの岩場に身を潜めた。

岩があるのは、ここがイワヤマトンネルの近くだからである。

ゴースト達は、辺りを警戒するがこちらには全く気づいていないようだ。

取りあえず一安心すると、一番聞きたかった事を聞く。

「おい、何なんだよ。あのゴースト達は！？攻撃が全く当たらなかったぞ！！」

「当たり前だろ？野郎どもは、霊気と同化してるんだから」

「霊気？」

ゼットは、その霊気と言う単語には聞き覚えが無かった。恐らく、それがあの現象の正体を暴くヒントと言う事だろう。

「あゝ、それを説明するには、まずこれを話さなきゃ駄目だな」

「話？」

彼の話した内容をまとめると、こうだった。

現在、シオントウンには多くのゴーストポケモンが住み着いている。同じタイプなので、互いに相性が最悪だった。

なので、どんな意地悪な性格でも、相手の領域には絶対に手を付けなかったのだ。

少しでもちよっかいを出せば、効果抜群なゴースト技の餌食になるからである。

だが、そんなつまらない日常を拒む、1匹のゴースがいた。

自分には攻撃を喰らわずに、相手を倒す方法……それを思い付いたのも、そのゴースだったのだ。

その方法は、空気中に漂う「霊気」に、自分を同化させると言う技術……これを「霊化」と呼ぶ。

幽霊に一番近い存在である、ゴーストタイプにしか使用出来ないのだが。

これによって、どんな攻撃も受け流す事が可能になったのだ。

それと同時にデメリットもあって、霊化している際には相手に攻撃する事が出来ないのである。

攻撃する時には、霊化を解かなければならないのだ。

因みに、霊気は普通の街などには無い。

霊気があるのは、自縛霊が住み着いている地域や、墓地などの場所だ。

これ以外には全く無いが、その街に成仏出来なかった霊や巨大な墓地などがあれば話は別になる。

霊化を普通に使える理由は、このシオントウンが霊気の発生元で充滿しているからだ。

それを使った、一部のポケモン達が使えないポケモン達に向かって攻撃するようになった。

ここの住民達も、迷惑しているので、止めなければならないのだ。

しかし、あの霊化に対抗出来る手段は何1つとして無かった。

そこで思い付いた事、それは自分の体に霊気を纏って、霊化状態のポケモンに攻撃する技術だ。

威力に差は無いが、ノーマルタイプの技でも、ゴーストタイプに攻撃出来ると言うメリットがある。

だが、何故か霊化状態で無い、普通の状態では何の攻撃も効かないのだ。

霊気を纏っている部分は、一時的に幽霊のような身体になっているからと言う説もあるようである。

こうして、霊化を使って暴れているポケモン達を取り締まるのが、この青年やその仕事に付いている者達の役目らしい。

「ふうん。そう言う事か。ん？じゃあ、さっきのゴースト達は……」

「ああ。そのポケモン達の事だ。そいつを捕まえる為に、僧侶である俺が追っていたんだけどなあ……逆に追われるようになったまっつたんだよな。これが」

「へえ、って僧侶!？」

僧侶と言つ言葉を聞いたゼットは驚く。

「そうだぜ。こう見えても、列記とした僧侶なんだ。坊主になつてないのは、髪を切る時に俺が逃げ出したから」

「お前、それでよくやめさせられなかったな……」

「僧侶としての仕事はちゃんとやってるからな!」

胸を張り、無駄に威張る青年。

そんな青年に、少しゼットは呆れてしまう。

「おっと、自己紹介がまだだったな。俺の名はカクヤ」

「俺はゼットだ。よろしくな」

自己紹介をし合つた2人は、互いに握手をする。

僧侶たる者がこんな性格ならば、カクヤは絶対に一番低い地位の僧侶である。

でなければ、ここの組織は終わっているだろう。

「よく考えたらそれ、霊媒師の仕事じゃねえの?」

「僧侶も霊媒師も同じようなもんだろ?」

「いや、違つと思つ」

僧侶か霊媒師か、と言う口論を繰り広げる。

そうして、カクヤは自分の手首に付いている時計を見る。

「あ！そろそろ捕まえないと、和尚に見つかっちまう！じゃあ、またな！」

「待った！お前を手伝ってやる代わりに1つ頼みがある」

「て、手伝ってくれるのか！？」

「条件付だけどな。俺に、霊気の繕い方を教えてくれ！勿論、やるのはピカチュウ達だけだ」

条件を聞いたカクヤは、お前がやるのか？と驚いて聞いてしまった。確かにこの先、霊気を体に繕う技術を手に入れなければ、ロードには勝てないだろう。

あちらにも、霊化を行使出来るゲンガーがいるのだから。

カクヤは、唸るような声を上げると、仕方無いと言い、了承した。

「サンキュー！ちゃんと教えてくれよ？」

「まあ、きつちり教えてやるから、しっかり聞いとけ！」

カクヤの言う、霊気の繕い方の手順はこうだ。

まず、相手に攻撃を当てる体の一部に、いつも通り力を込める。

ここまでは普通の攻撃と同じだが、違うのはここからだ。

その後、力を込めた体の一部に、さらに外から取り入れるように力を込める。

すると、自然と霊気はその体の一部に集まって、自動的に繕われる。上記の事から、物理系の技しか出来ないので、変化系や特殊系の技

には使えない。

意外と簡単に出来る事だが、それはこのシオンタウンが霊気の発生元だからである。

ポケモンタワーのような埋葬場がある以上、当然の事と言えよう。

これは先程にも言ったが、タイプを無視して攻撃出来る技術だ。

そして、霊化しているポケモンのみしか有効でない。

霊化していないゴーストポケモンにこれをして、すぐにすり抜けるだけである。

ゼットのポケモン達は、それを何とか短時間で習得した。

「よし、カクヤ！そのゴーストタイプを倒しに行こうぜ！」

「おう！！」

そう言うと、2人は外に飛び出す。

ゴースト達はこちらの動きに気づいて、全員を呼び掛ける。

2人で一緒に行動するのは不味いと思ったので、別行動を取る事にした。

カクヤは左へ、ゼットは右へ移動し、ゴースト達の動きを一時的に止める。

案が出たようで、暫くすると5体づつでゼットを追う方と、カクヤを追う方に分かれた。

「やっぱり、そう来たか……ピカチュウ！」

一定の距離まで走った事を確認すると、ゴースト達に振り返る。

片手にはモンスターボールを持ち、それを投げた。

出て来たのは先程まで、霊化の技術に太刀打ち出来なかったピカチュウだった。

ピカチュウを見たゴースト達はせせら笑う。

手加減して、ゆっくりと倒すつもりらしい事が容易に理解出来た。
しかし、当人はゴースト以上の笑みを浮かべて、高速で迫る。

「『電光石火』!!」

電光石火でゴースト達に突進する。

ゴースト達は、相手が靈気を繕えないポケモンだと知っていたので、警戒をしていなかった。

それが仇となり、ゴーストの内の1匹が吹っ飛ぶ。

直撃だったので、ダウンしてしまう。

その光景に驚愕するが、そうも言ってられない。

相手が靈気を繕えると分かった以上、こちら本気で対峙しなければ確実にやられる。

ゴースト4体は、ナイトヘッドで応戦する。

全ての攻撃は1つとなり、巨大なナイトヘッドと化した。

「げっ! 『高速移動』で避ける!!」

ピカチュウは咄嗟に高速移動で避ける。

あのナイトヘッドを喰らったら、一溜りも無いだろう。

大きさも巨大で、威力も半端じゃない攻撃ではあるが、あれには致命的な弱点が幾つかある。

まず1つは、全員の攻撃を合わせている事。

聞くだけなら、問題は無さそうだが、全員の攻撃を合わせていると言う事は、ぶつかり合っている事を意味する。

互いの攻撃が相殺し合って、最初の大きさも削れ、だんだん小さくなり、速度も削がれていく。

素早さに特化したピカチュウが避けるのは容易かった。

そして最後は……………。

「『ナイトヘッド』の維持に集中し過ぎて、こつちに攻撃出来る余裕を無くしたのが運の尽きだ！『電光石火』！！」

刹那、ピカチュウはその場から消える。

否、ゴースト達にのみ消えたように見えたのだ。

空中に複数の打撃音が響いた後、ピカチュウはゴースト達から過ぎ去っていた。

それを確認した瞬間、ゴースト達の腹部に鈍い痛みが走る。

痛みに耐え切れず、全員地面に落ちて気絶した。

あのナイトヘッドを使った辺りから、格下の相手と言う事は間違いないだろう。

「俺が何で『高速移動』を指示したか分かるか？あの遅さなら、『高速移動』なんて態々使わなくても、簡単に避けられた。でも、教えてそれを使った理由は、『電光石火』を相殺させない為だ。1秒でも速く攻撃しなきゃ、間に合わなかったしな」

気絶したゴースト達に、ゼットはそう呟く。

最早、気絶している時点で、そんな事は耳に入っていないが。

一端、モンスターボールに入れて、それを全部ポーションに送る。

「さて、カクヤの野郎の所へ行かねえとな！」

「ピッカー！」

ゼットはカクヤの行った方向へと走る。

あの程度ならば、簡単に倒しているだろうと思っていた。

だが、すぐにその期待は裏切られた。

走ってから数分経った今、目の前に見えるのは、疲れているマニユーラと1体のゴーストが戦っている光景だった。

カクヤのマニニューラのレベルならば、ゴースト達など簡単に倒せる筈だ。

しかし、今カクヤ達が対峙している、それは違った。

レベルが高い所から見て、恐らくあのゴースト達の親玉だろう。

「カクヤ！大丈夫か！？」

「俺はポケモントレーナーじゃないんでね。中々、梃子摺ってんだよ」

「じゃあ、参加させて貰うぜ！」

そう言い、カクヤ達の前に出る。

ピカチュウは1戦終えたばかりなので、出られない。

誰にするか決めようとしていた時、カメールが自分から名乗り出たので、今出ているのはカメールだ。

カメールはガーディの次に好戦的な性格なので、最近戦っていない事に不満を感じていたのだろう。

いつも以上に張り切っているカメールにちょっと驚きながらも、敵を睨む。

相手はゴーストの親玉……つまり、あの中で一番強い存在だ。

一番強い、と言う事は最も戦闘経験が豊富な事になる。

それはつまり、霊気を使うのに誰よりも長けていると言う事だ。

「（あいつが霊気の扱いに慣れてるんなら、霊気を繕う技術に対しても慣れているって事だ）」

カメールは甲羅に籠って防御力を高め、高速回転を始める。

その状態のまま霊気を繕い、ゴーストに突っ込む。

しかし、何故か高速スピンはゴーストをすり抜ける。

突っ込んだカメールは、目を回しながら地面に落ちる。

目を凝らしていたゼットには、それが何なのかすぐに分かった。

「野郎……霊化の時と普通の時を分けて使ってやがる!!」

「あのレベルともなると、もっと上の階級の僧侶が対処しなきゃならねんだよ!」

霊化の時には、普通の攻撃ならば全て効かない。

だが、霊気を纏った攻撃にはタイプ問わず喰らってしまう。

一方で普通の状態の時は、霊気を纏った攻撃は効かない。

あれは霊化の時にだけ、通用する技術であり、普通のゴーストタイプにはタイプを無視する事は出来ない。

無論、他のタイプも全てである。

あのゴーストは、それを自由自在に操って、その場に応じた状態に変化しているのだ。

混乱状態になったのは、背後に怪しい光を隠してあったからである。本来は後ろを取られた際に使っつもりだったが、思わぬ所で役に立ったようだ。

警戒を強め、慎重に攻撃しなければ、確実にこっちがやられる。

「『水鉄砲』!!」

口から小さな水流を吐き出す。

攻撃が来たのが分かり、普通の体から霊化状態にチェンジする。

水鉄砲はゴーストをすり抜け、後ろの岩に当たる。

普通の体に変えてそろそろ反撃、とばかりか目に黒いエネルギーを溜める。

ナイトヘッドと分かったゼットは、即座に回避の指示を出す。

放たれたエネルギーを間一髪避けて、こちらも反撃する。

「『アクアテール』!!」

尻尾に水を纏わせ、回転する。

1回転したカメールは、一気にゴーストに叩き込む。
普通ならば、攻撃した後は大きな隙が出来る筈だ。
しかし、体の変化は別である。

どんな場合問わず、瞬間的に変化する事が可能だ。
通常の体に戻し、いつも通りすり抜けようとした。
だが、それを最初から予想していたのか、ゼットは笑みを溢す。

「『シャドークロー』!!」

すると、今度は別の場所から指示が出る。

通常の体に戻してカメールの攻撃を避けたが、別の場所から攻撃が来る。

どんな場合でも体を変化する事は出来るが、個人の反応速度は別である。

攻撃に反応し切れず、直撃して吹っ飛んだ。

ゴーストタイプにゴーストタイプは効果抜群である。

「ナイス、カクヤ!!」

「俺の事も忘れんじゃねえぞ、親玉さんよお!!」

シャドークローはノーマルではない。

なので、霊気を纏った上で通用する攻撃をする訳である。

それはどっちの状態でもダメージを与えと言っ事になる。
それだけは、どうしても避けようが無いのだ。

ゴーストはマニニューラとカクヤを睨み付ける。

真剣勝負に水をさされたのが、気にそぐわないようだ。

「これは真剣勝負じゃねえ。先にゴーストを9体引き連れて、俺達に襲い掛かって来たのはお前等なんだからな。なら、これも正当化される筈だぜ？」

心を読んだかのように、カクヤはゴーストに言う。
今だけならば、これは真剣勝負だろう。

だが、ゼット達よりも多い数で襲い掛かって来たので、これは真剣勝負として認められない。

なので、こちらも複数で掛かっていったのだ。

それを知って、ゴーストは不敵に笑い、両手に球状のエネルギーを溜める。

ピカチュウとマニニューラを叩き潰すつもりである。

「『シャドーボール』が来るぞ！避けるんだ！！」

「マニニューラも避ける！！」

2匹は同スピードでシャドーボールを避けた。

本来ならばマニニューラの方が速いのだが、高速移動でもっと速くなっているのだ。

次々と襲い掛かるシャドーボールを軽々と避けていく。

ついに痺れを切らして、ナイトヘッドで全体に攻撃する。

それに気づき、咄嗟に後ろに下がるよう指示をした。

黒い光線が地面を抉り、2匹を追っていく。

自慢のスピードでそれから逃げるが、いつ体力切れになるのか分からない。

「くっ……このままじゃ、やべえぞ！！」

「俺に任せな！『嫌な音』！！」

すると、マニユーラは奇妙な音を発する。

技の名前の通り、嫌な音が辺りに響いた。

嫌な音が聞こえた途端、咄嗟にゴーストは耳を塞いだ。

その隙を狙って、マニユーラはその速さで近づく。

音が収まり、ゴーストは『催眠術』で眠らせようとする。

しかし、マニユーラは掛かって来いとも言つかのように誘う。

それに怒り、催眠術ではなくシャドーボールを放つ。

「『挑発』か！」

「一気に行くぜ！『シャドークロー』！！」

シャドークローで攻撃しようとする。

霊化しても無駄なので、避けようとするが、横から閃光が入った。

すぐに気づき、霊化で対応した。

ピカチュウの放った10万ボルトである。

しかし、それも作戦の内であった。

電撃の方に集中していたので、近づきつつあるマニユーラの存在を一瞬、忘れていた。

作戦とは、何かの攻撃で相手の注意を逸らし、主力のマニユーラに時間を稼がせると言うものだ。

気づいた時にはもう遅く、シャドークローは顔面にヒットした。

効果抜群の技を2回も喰らったので、ゴーストは近くの岩に叩きつけられ、力尽きる。

「よっしゃあ！これで全部だな！！」

「おう！助かったぜ、ゼットー！」

その後、ゴースト達は蔵と言う名の牢屋に入れられた。と言っても、反省するまでここにいる、軽い罰であるが。ゼットとカクヤは蔵の前にいた。

「いや、これで和尚に怒られなくて済んだぜ！」

「あれ？何で和尚に怒られるんだよ？」

「実はさ、俺ここを見張ってたんだけど、天気も良かったし、何か眠くなってきたやつて、気づいたら寝てたんだよ。起きた時にはゴースト達が消えてて、びっくりしちまってさ、大急ぎで探してんだよ。和尚にバレたらやべえからな。本当に助かったぜー！」

「あ、ああ……」

「ん？どうした？」

ゼットの様子がおかしかったので、何だろうと首を傾げる。変な方向を見ていたので、そっちを見ると、一気に冷や汗が出た。そこには、鬼の形相をした和尚が立っていたのだ。

「え、えつと……もしかして、今の聞いてました？」

「馬鹿者がああー！！お前もゴースト達と一緒に、蔵の中で反省してこんかああーつー！！！」

「すんまっせんでしたああー！！」

「…………ご愁傷様」

この後カクヤは、みっちり1時間説教され、蔵に入れられた。
次回はポケモンタワーでの戦いだ。
ゼットはシオントウンジムリーダーのロードに勝てるのか……続く。

第27話 「ポケモンタワー1F 霧の中の戦い」

シオントウンに着いてから1日が経った。

ポケモンセンターで一夜を過ごしたゼットは、すぐにガーディの所へ行った。

すっかり元気になっており、もう戦える程だ。

それと、今後戦っていくガーディにも、霊気の繕い方を教えた。これが出来なければ、ロードに打ち勝つ事は不可能である。

「よし、ポケモンタワーへ出発だ!!」

元気良く、ゼットはポケモンセンターを出る。

それから数分が経ち、目的地へ到着した。

ポケモン達の埋葬場であり、シオンジムであるポケモンタワーだ。

肌で感じはしないが、そこから大量の霊気が噴出して、それに押される感覚を覚える。

見るだけでも恐怖を感じる、この塔。

心が弱い者ならば、今ここで立っていられるのがやっとである。

流石にゼットもそれは感じたが、従来から好奇心旺盛な彼にとって、それは入る事を煽るだけにしか過ぎない。

「すいませーん!ジム戦に来ましたーっ!!」

入り口の扉を閉めて、大声で叫ぶ。

ここはポケモンタワーの1階で、霧が充満している場所である。

実際には、霧だけで充満している訳では無いのだが。

辺りは静寂に包まれており、同時に何か寒いものを感じる。

理由はきつと、周りに置いてある……………。

「お、お墓あ!？」

そう、幾つものお墓である。

小さな物から大きな物まであり、どれからも寒気しか感じない。あまりそう言った物を、こんな所に置いておくのは明らかに不味いと思うが。

度胸の無いトレーナーが来たら、ジム戦どころでは無いだろう。これらを考慮して、相手の考えを予測した結果はこうだった。

「度胸の無い奴に、俺と戦う資格は無い……って事か。へっ、言ってくれるじゃねえか！」

ゼットは上等だ、とばかりの態度だった。

つまりこれは、ジムリーダーと戦う為のテストと言ったところである。

これをクリア出来ない者は、ジムリーダーと戦う事が出来ないのだ。

「受けて立ってやる!さあ、どこからでも掛かって来い!」

手を腰に回して、ボールを取る。

ジムリーダーのポケモンも近くに潜んでいる、これはそう思っている行動だ。

辺りを警戒しながら、相手が動くのを待った。

いつまでも動かなければ、痺れを切らして地面を擦る音が出る筈である。

これだけ広いフィールドだ。

ここに潜んでいるポケモンは、最低でも2匹以上いる。

単独で行動させるようなら、それは流石に嘗め切っているだろう。そんな思考を巡らせていると、齒軋りをする音を左方向からキャッ

チした。

「（来た！）」

「……！！」

味方の方が音に気づいたか、真正面から一瞬声が漏れた。

それを聞き逃さず、ゼットはモンスターボールを素早く投げる。

出したのは、素早さではゼットの手持ちの中で、1、2を争うピカチュウとガーディである。

自慢のスピードで一気に接近し、攻撃した。

こちらに向かつて来ているのに気づき、墓石の影から姿を現す。吊られて前、後ろ、右からも現れる。

「ゴースが4体が……」

そう、ここにいるのは全員ゴースだった。

4体のゴースは相手が動くのを待っている。

このまま動かなければ、また隙が生まれるだろうが、二回目はそう上手くいかないだろう。

相手も馬鹿ではない。

同じ罠に2回も引っ掛かるような事はしない筈である。

なので、やはりこつちが動くしか無いのだ。

「『電光石火』……」

最初に動いたのはピカチュウだ。

近くの左にいるゴースに向かって攻撃する。

既に高速移動で足を速くしているので、威力は高く避け切れなかった。

電光石火を喰らって吹っ飛んだゴースは消える。
他のゴース達も、その場から消えてしまった。
どこに消えたのかを探すが、一向に見当たらない。

「どこだ……!？」

すると、そんな思考を遮るかのように、何も無い所からナイトヘッドが飛んで来た。
警戒をしていなかったたので、反応が遅れてピカチュウに当たる。

「ピカチュウ!？」

ガーディがそれに気づいて、すぐ背中に乗せる。
一安心した所で、先程の攻撃について考える。

注目すべきは、何故何も無い所から攻撃がやって来たかだ。
ナイトヘッドがやって来た事を考えて、まず攻撃したゴースはそこにいたと言う事になる。

だが、そこには誰もいなかった。
となると、何か自分の身を隠す技を使ったと言う事になる。
自分達の目の前から消えた事も踏まえて。
ゼットはポケモンの技を多く知っているが、何を覚えているかまでは全く知らない。

「いや、待てよ……これは技じゃないのか？」

技、と言う概念を引き抜いて考える事にした。
技で無ければ、特性と言う事になるが、ゴースの特性は『浮遊』で、
地面タイプが効かなくなる物である。

では一体これは何なのか、と考えている内に1つまだ分かっていない事がある。

それはゴースが何ポケモンか、だ。

鼠ポケモン然り、子犬ポケモン然りとポケモンにはそう言う肩書きらしきものがある。

ならばゴースは一体、何ポケモンなのか……。

「そうか！ガス状ポケモンだ！」

ガス、と言う事は気体である。

ここに漂っている物が、何なのかを確かめる。

そう、これは霧である。

1階のフロアはこの霧で充満しているのだ。

つまり、ここにある気体と言えば、霧になる。

ガス状ポケモンと言う事を上手く使って、霧に同化させているのだ。

「そうすると、この中にいるって事になるんだが……」

周りを見ても、ゴースは見えない。

が、隠れているようにも思えなかった。

そうすると、あのゴース達は本格的に霧と同化したらしい。

気体の体を持つポケモンだからこそ成せる技術である。

「全然見えないな……」

「ウォン……」

「うん。霧と同化しているって事は、それは霧の範囲内にいるって訳だ。そこから俺達を狙っている……！？」

すると、また攻撃が2つ程、音も無くやって来た。

ピカチュウは得意の電撃で相殺し、もう1つは火炎放射で対処する。

今まで攻撃して来なかったのは、相手を油断させる為だ。
そのせいか、ゼットの反応も少し遅れた。
これは、いつどこからやって来るのか分からない攻撃だ。
もう、さっきのような油断は禁物である。

「あ、危ねえ……次から気を付けねえと」

「ピッカ！」

「ん？どうしたんだ？」

ピカチュウが、自分達の周りの霧を指差す。

先程の戦闘でその辺りの霧が飛んで行つたのだ。

霧を見て、ゼットはふと思った。

霧と同化しているのならば、それは既に「ガス」では無く、「霧」
に変化すると言う事だ。

ならば、霧と同じように今のコースには、その範囲内しか動けない
訳である。

「ハハハハ……」

「ピカ？」

「何でこんな簡単な事に気づかなかったんだ？」

笑みを溢しながら、そう呟く。

ゼットは先程までの曇った表情から、勝利を確信した顔付きに変わる。

いつもの表情に戻った事が分かったピカチュウ達は指示を待つ。

ニヤリと笑って、その指示を下す。

「ピカチュウ、『高速移動』で周りを回るんだ!!」

周り回ると言うのは、この部屋の隅から隅まで移動すると言う事だ。指示通り、この周りを高速で駆け回る。

これを見たガーディは、ゼットの意図が理解出来た。作戦が分かったガーディは何も言わず、真中に移動する。

「霧を真中に集める!」

高速で走り続けていると、霧も激しく動く。

漂っていた霧は、風の勢いで真中に集まった。

周りを回転していると、外へは漏れなくなる計算だ。

部屋を中心に集まった霧は、まだ回転する。

霧と同化していると言う事は、漂う事しか出来ないと言う訳だ。

自由には動けず、近くに來てやっと攻撃出来ると行った所だろう。

先程まで攻撃しなかったのは、この理由も入っていたのである。

ただ成す術も無く、ゴース達は霧と共に部屋の中心に集められた。

「ガーディ、『火炎放射』!!」

真中にいたガーディは上に向けて炎を放つ。

それは火柱となり、全ての霧を赤く燃やした。

その中には勿論、ゴース達も含まれており、炎を喰らってしまう。

炎の威力に吹き飛ばされ、それは現れた。

「出たなゴース!『電光石火』!!」

ゴース達は全員、同じ方向に出た。

好機とばかりに電光石火で全員に攻撃する。

固まって動いていたせいで、的が広くなってしまったのだ。

「やっと倒したぜ……」

何とかゴース達に勝ったゼットは溜息を吐く。

神経を集中し過ぎたせいで、疲労が一気に来たようだ。

ピカチユウ達も戦闘態勢を解き、床に寝込んだ。

「少し休憩するぞ……」

「ピカチユウ」

「ウォーン」

2匹はそれに賛成し、近くの壁に倒れる。

このような戦闘が何度も続けば、いつか倒れるのは当然の事。

その度にこうやって休憩を取るのだ。

そこを狙われたら、元も子も無いが。

「はぁ、疲れたぜ……!!」

肩を揉んで楽にしていると、殺気に気づく。

勿論、ここにいるのはゼット達とゴース達である。

となると、殺気の主は4匹となる。

「まさか、まだ戦えるってのか!？」

急な戦闘に驚くが、そうも言っていられない。

休憩の意味は殆ど無かったが、ピカチユウ達はやる気満々である。

殺気の主……ゴース4匹は、全員集まる。

ゴース達は互いを密接にくっ付け、混ざり合った。ガス状の彼等にとって、気体の混ざり合いなど基本だ。そして、ゴースは4匹から1匹に変化した。

「なっ……！？」

ゼットは思わず絶句する。

何故なら、ゴースは巨大化したからだ。

4匹が一体化して、1匹のゴースになったのだ。

大きさは普通の場合と比にならない。

3m……否、5mはあるだろう。

見た事も聞いた事も無い、このゴースの大きさにゼット達は戦慄する。

「何だよこれ……」

驚きのあまりに、ゼットは立ち尽くしていた。

ゴースは咆哮を上げて、襲い掛かる。

その咆哮で正気に戻って、即座に指示を出す。

2匹は何とか相手の突撃から回避した。

「『10万ボルト』！『火炎放射』！！」

果敢にも、2匹は巨軀に突っ込んだ。

相手が直接、身体を使って攻撃した所から、それは相手が霊化していない事を物語っている。

つまり、今の状態ならば普通に特殊系の技が効くと言う事だ。

霊化状態になるまでには、1秒も掛からない。

しかし、使用者の反応速度は別なので、反応する前に攻撃出来ればいいのだ。

「もう避け切れねえぜ！」

2つの攻撃がゴースに当たるまで数cm。

最早、避ける事は不可能かに思われたが、次の瞬間、驚愕した。

確かに炎と電気の攻撃が入ったが、「入った」だけだ。

攻撃を「受けて」はいなかったのである。

何と、ゴースの身体に穴が開いていたのだ。

2つの攻撃はゴースをすり抜け、後ろの壁に当たる。

後少しでお墓に当たりそうだったのを見て、すぐに軌道をずらしたのだ。

「（そうだった。あのゴースは4体が合体して出来上がった存在。

攻撃なんて、それが命中する部分に穴を開けれさえすれば、簡単に避けられるって事かよ……くそっ！）」

僅かに湧き上がる怒りを抑え、冷静に身体を分析する。

自身に穴を開けるなどの高等技術は、一部のゴーストタイプが成しえる技である。

一見、簡単そうに見える技術ではあるが、相当な修練が必要なのだ。しかし、これは4体のポケモンが一体化した存在だ。

攻撃を避けるなど、自身に穴を開けずとも容易く出来る事である。

「つて、何いい!？」

今、ゴースが使おうとしているのはシャドーボール。

だが、ただのシャドーボールでは無く、4体のエネルギーが一気に集束して作られた物である。

単純に考えると、それは普通のシャドーボールの4倍の威力を誇る。それと同時に、大きさも尋常ではないのだ。

エネルギーが集まり、空気が震える。

「『高速移動』!!」

流石にこれは対応出来ない、そう知ってピカチュウを逃がす。

ガーディはまたもや火炎放射を放ち、それに応戦する。

ジリジリと火炎放射の方が押されていく。

威力ならば、絶対的にシャドーボールの方が大きいからだ。

集束したエネルギーならば、前のゴースト戦でナイトヘッドを集束した事がある。

あれは、互いの攻撃が相殺し合って成立しなかったのだ。

しかし、シャドーボールは目では無く、一定の範囲内で自分の思い描く場所に集束する。

なので、全員が同じ場所に集束するように思えば、それは成立する。威力はとてつもなく絶大で、ハイドロポンプ或いはそれ以上の威力を発揮するのだ。

「そのまま耐えてくれよ!ピカチュウ、『10万ボルト』!!」

そう、これは作戦。

ガーディが相手の攻撃を抑え、その間にピカチュウが攻撃する。

実にシンプルで分かり易く、最善の作戦だ。

さらに、これにはもう1つメリットがある。

相手が霊化しているかしていないかが分かる事だ。

攻撃がぶつかり合っていると言う事は、それは普通の状態にある事を指し示す。

逆に、攻撃がすり抜けた場合は霊化状態にある事が分かる。

どんな事をするのか事前に察知出来るので、対応も早くなる。

「頼むぞ!」

「ピツカア!!」

ピカチュウは高速移動でゴースに接近する。

電撃を放って、それが当たればゼット達の勝利になる訳だ。

しかし、彼等は忘れていた。

シャドーボールは一度放ったら、使用者から離れてしまつと言う事を。

気づいた時にはもう遅く、既にゴースが目にはナイトヘッドを溜めていた。

ガーディは火炎放射でシャドーボールと応戦中で動けない。

今一番、危険な状態にあるのはピカチュウである。

つまりこれは……負けを認めざるを得ないと言う事だ。

無理矢理にでも、バトルを続行して勝つたとしても、それは「勝利」とは言わない。

ピカチュウ達にはもう、これ以上戦わせるのは無理だとゼットは判断する。

「もう、やめ……!」

「ワオオオン!!」

ゼットの声を遮るかの如く、ガーディが吠える。

主人の指示を聞かず、勝手に攻撃を始めた。

火炎放射を止めて、物理戦……火炎車に切り替える。

炎の牙を出しながら、全力でシャドーボールに突っ込む。

そして、あらぬ事が起こった。

何と、あの火炎放射を持つてしても止められなかったシャドーボールを破壊したのだ。

破壊と言うより、あれは霧散したと言う方が正しいだろう。

何故かは知らないが、ピカチュウはガーディの必死の攻撃に応えるようにして、叫んだ。

先程と同じように、誰に向かってでも無く、こちらにも勝手に電撃を放つ。

シャドーボールを打ち破った事に驚いていたゴースは一瞬隙を見せ、そこに間髪して入れたのだ。

彼等が伝えたい事……それは諦めるなと言う事だった。

それがゼットにも伝わり、拳を震わせる。

「お前等……最後だ！『10万ボルト』おお！！」

部屋に響いたその叫び声はピカチュウにも届く。

待つてましたとばかりに笑みを浮かべ、もう一度電撃を浴びせる。

普通の状態だったゴースは霊化状態に切り替え、攻撃を避けた。

だが、攻撃はこれだけでは終わらない。

すぐさま、横から風を切るように炎を纏わせ突撃して来る犬が一匹。

驚愕したのも束の間、その前に火炎車によって吹き飛ばされる。

倒れたゴースは4体に戻り、どこかへ消えていった。

「や、やったぜ。でも、お前等自分の体を心配しろよな。勝利よりも、お前等が力尽きるのが一番嫌なんだからよ」

「ピ、ピカ」

「ワ、ワン」

説教されて、2匹はすぐに反省した。

それも当然だろう。

トレーナーが負けを認めようとしていた所を、手持ちが止めるなど前代未聞である。

少しは自分の事も考えるように説教するのもトレーナーとしての役目だ。

反省したのを知って、ゼットは笑顔になり、許した。

「よし、分かればいいんだ。どうやら、本会場はここじゃ無いみたいだし、そこを目指して直……?」

先の階段へ進もうとした時に、ふと気が付く。

あったのは、何かのCDが収録されている薄い箱だった。トレーナーなら誰しも知っている物だ。

「技マシン? 何でこんな所に……」

ふと疑問に思っ、首を傾げる。

技マシンなんて物が、何故このような埋葬場にあるのか。少し考えたが、思考を中断して、階段を見つめ直す。

「まあ、これは貰っておくか。よし、野郎の所まで一直線だあ!」

技マシンに疑問を持ちながらも、次の部屋へと上がる階段に向かって、走っていった。

こうして彼等はポケモンタワー……シオンジムの最上階を目指す。ゼット達の旅は、まだまだ続く……………。

第28話 「ポケモンタワー2F 幻惑の間」

ゼット達は1Fのコース達を倒して、次の階へ進んでいた。

このポケモンタワーの階数は3Fまでだ。

つまり、3Fが最上階でロードが待っている部屋と言う事になる。

本人はポケモンタワーの構造を知らないが、最上階にいると言う事適当な勘で目指しているのだ。

実際、その勘が的中しているので何とも言えないのだが。

「最上階はもうすぐか……次の部屋にも新しい敵が待ってんだろっかな！」

ワクワクしながら階段を駆けていく。

1Fで戦ったポケモン達は、現在モンスターボールで休憩中だ。

ジムリーダー戦までに温存しておくつもりなのだろう。

今、戦っていないのはカメールとヤドンなので、水タイプコンビが次の部屋の敵と戦闘する事になる。

コース達も十分な強さだったので、次はもっと強い事が予想される。そうすると、先程以上の作戦と強さが必要になって来るだろう。

「さあ！次はどんな奴だ！！」

階段を駆け上がり、辿り着いたその場所は先程と同じ大きさの部屋だった。

最初と違うのは霧が無い事だけである。

さらに中には誰もいなく、その気配すら無い。

警戒を解いていいのだろうかと思ったその矢先、背後から肩を触られた。

瞬間、背筋が震えてそこから飛び退く。

恐れながらも後ろを振り向くと、そこには知り合いが立っていた。黒服のスポーツ狩りの髪をした少年……カイトである。

「よっ！ゼットじゃねえか。トキワシティ以来だな」

「カイト！？何でこんな所に！？」

「おいおい。俺だってジムバッジを集めてんだぜ？今回はこのバッジを手に入れる為に来たんだよ」

「お前もか。俺もその為に来たんだけど……このジム、最上階まで上がらなきゃジムリーダーと戦えねえんだ。お前も、最初のゴース達を何とか倒して来たんだろ？」

「ああ。結構きつかったけどな」

あの尋常では無い、大きさのゴースを倒したともなると、あれからかなり成長している事が窺える。

まず、ここまで来れたのだから、それなりに成長しているのはすぐに分かるが。

ゼットは、あれから今に至るまでの旅路を話す。

ライバルである、エックスと戦った事。

テツマに勝って、グレーバッジを手に入れた事。

アサトに勝って、ブルーバッジを手に入れた事。

その過程で、ゼニガメがカメールに進化した事。

ヤマブキシティのジムリーダーが出張中の為、それまでジムを回っていく事。

……など、様々な事があったのを伝えた。

幸運な事に、ここには誰もいないのでゆっくり話せる。

「俺って、巻き込まれ易い体質なのかな……今言ったの以外にも、いろんな事があつたんだよ」

「へえ……大変なんだな。お前」

「ああ。ところで、カイトは何かあつたのか？」

「え！？そ、そうだな……い、いろいろあり過ぎて言えねえや！
ハハハハハ！」

「何だそりゃ！」

と、2人は年相応に笑いあつた。

こうして見ていけば、幾つもの戦闘を潜り抜けて来た、強いトレーナー達とは思えない。

だが、この世界ではこれが普通で当たり前とも言えるのだ。

10歳になったばかりの少女が、ワクワクとドキドキの詰まつた外の世界へと赴く……それが「普通」。

彼等は世界の広さと面白さを知っていく。

そんな、旅と言う名の学習を提供するのが、この世界である。

ある者はトレーナーに、またある者はブリーダーにと、自分の選べる選択肢を自分で見つけられる。

人に頼らず、自分で自立する……それこそ、親達の子に対するスロ―ガン。

中には、10歳になつても尚、勉学に勤しむ者やその後、就職する者もそれ以上にいるだろう。

それも一種の自立と言えよう。

しかし、いつまで経つても自立せず、引き籠もってしまつたりする者も大勢いる。

だからこそ、スローガンなのである。

旅に出る事によって、世界がつまらない物ばかりでは無いと言う事を、「自分で」知れるのだ。

この2人は、もうそれを知りつつある。

まだまだ世界は広い事に変わりはないが。

「そう言えば、誰もいないな。ここ」

「確かに、さつきから何の気配もしねえんだよな。この部屋は」

この部屋のみが、何もいないのは確かに不自然である。

霧も1つとして存在せず、3Fへと向かう階段も普通に見える。

部屋を覆う空間が、その虚しさを感じさせる。

休憩地点と言ってしまうえば、そこで終わりなのだが、そんな言葉で片付けていいのだろうかとも思える。

棺桶と彼等以外、何1つ存在しないこの部屋からは様々な想像が溢れて来る。

何も無いからこそ、想像が頭に入ってきて来るのだが。

暫く、部屋を見つめて何があるのかを、ゼットは探す。

「何も無いみたいだぜ？」

「そう、だな」

カイトの一言に寄り、ゼットは次の階段を目指す。

やはり休憩地点だろうと、自分に言い聞かせて、階段が上がった。

先程と同じような造りの螺旋階段で、難なく上に行く。

2Fの部屋の謎は既に忘れ、今はロードを倒す作戦を考えていた。

最初の階段の時とやはり同じだったのか、3Fへ到着する時間も大体同じだ。

「よし！到着、だ……！？」

そして前を見ると、ゼットは言葉を失う。

今、ゼットの目の前にはある筈の無い光景が広がっていた。

広い青空、多くの草に染まった丘、そして……大きな町。

家は少ないが、緑豊かで自然が多く存在していた。

道路で子供達が笑いながら遊んでおり、親であろうその大人達は、子供達を優しく見守っている。

「何で……？」

2Fから3Fに上がった瞬間、この景色があつたのだ。

丘も町も空も、全て外の世界にある筈の光景であつた。

これが張りぼてにしては、横幅が先程の部屋よりも何倍も広い。

遠近法でもここまでリアルには描けないだろう。

走ってみても、途中で壁にぶつからなかったので、これは描いた物では無い事が証明される。

では、ここは一体何なのか……それを一番知っているのはゼット自身だった。

当然だろう。自分が住む町を忘れる訳が無いのだから。
つまり、この町は……。

「何で、マサラタウンがこんな所に……！？」

マサラタウン……ゼットの出身地だ。

故郷もここで、生まれた時からこの町で育った。

おかしいのは何故こんな場所にマサラタウンがあるのか、だ。

マサラはトキワの南にある、自然豊かな南国の町である。

シオンのずっと西にある遠い町なのに、ここにある筈が無いのだ。

ましてや、高いだけの建物の中にあるなど。
暫し呆然として、ゼットは久しぶりの故郷を見ていた。

「これは、夢なのか……？」

この町が、何故こんな場所にあるのか……それが知りたかった。
自分が住んでいる町の事を聞くのは、町民として当然である。

だが、やはり自分の住んでいた町が2つあり、それがここに存在していたなど、信じられる訳も無い。

これが何かの罠だと言う事を前提とし、頭を捻り考える。
考えていく内に、2Fの何も無い部屋の事を思い出す。

あの時は気配すら感じなかったが、1Fにもポケモン達が待ち受けていた事から、自然と2Fにもポケモンが待っている事になる。
この事から考えて、間違いは無いだろう。

「これがあの部屋にいたポケモンの技だとしたら……！」

そう、ゼットは最初から嵌っていたのだ。

2Fの部屋に入った時から、その部屋の「術者」に。

これこそ、次の部屋の番人が仕掛けた罠だった。

最初、カイトにあったのも全て幻覚だったのだ。

この場にそのカイトがいないのだから。

ゼットのポケモン達が入ったモンスターボールも消えていたが。

とすると、3Fに上がっていったのも幻覚で、そこから自分の術の中に引き込んだのだ。

部屋へ入った時に幻術に掛かり、この時は一気に幻覚を見せさせる事は出来ず、対象自身が門を叩く事により、初めて幻術が完成する。
つまり、幻術に掛かった相手が強い幻覚を見せさせる次の門を叩く事で、精神世界へ引き摺り込ませたと言う事だ。

3Fがその門の入り口だったのだらう。

記憶力だけは良い、ゼットは修行の日々の一環を思い出す。

「親父から習った時はこう言ってた気がするけど……解き方、教えて貰えなかったな」

あの時、教えて貰えればよかったと、今になって後悔する。

精神世界から現実世界へ戻るには、何をすべきか……。

全脳細胞をフル回転させ、それを捻り出そうとする。

が、こう言う時だけ考えるのはあまり得意で無い、ゼットには無理な話であった。

「取りあえず、マサラタウンに行ってみるか」

情報を集める事に決め、偽者の故郷がある方向を見る。

故郷の土を踏む感触に沸き立つ心を抑えながらも、ここから脱出する為にそこへ向かって1歩を踏み出す。

幻術とはいえ、マサラの至る所が何もかも同じだった。

大きく聳え立つ木、どこまでも続く大地、近所に住む人々……これら全て。

「ニドキングだぞ、ガオー！」

「よし！僕達でやっつけるんだ！！」

「「おおー！！」」

ふと見ると、町の子供達が楽しく遊んでいた。

ここも本物のマサラタウンと何1つ変わりはしなかった。

幻覚が、自分の記憶から抜き出しているのなら、それも当たり前だろう。

「なつかしいなあ……って、危ねえ！これは幻覚だ。これは幻覚だ。絶対に本物じゃない」

自身にそう言い聞かせ、幻覚に惑わされるのを防ぐ。

見れば見る程、この光景が幻覚のように思えなくなり、ここが本当の故郷かのように見えて来ていた。

そんな自分に気づき、頭を横に振って自身の感覚を責める。

こんな事が続いているれば、ここを本物のマサラとして知覚し、永久に出られなくなるだろう。

ロードはいきなり自分の事を襲って来た上に、手持ちのポケモンで度胸まで試させるような者だ。

ジムリーダーだからとはいえ、自分を必ず出すと一概には言えない。なので、ここから出られなくなる事も覚悟しておき、脳が錯覚を起こす前に幻術を打ち破る方法を考えなければならないのだ。

「待てよ、この幻術は俺の知っている事だけじゃなく、他の事も……？」

冷静になって考えてみる。

これは幻覚だが、より高度な幻覚の方が対象にも錯覚させ易いのではないか。

仮にも、相手を待ち構えていたのだとしたら、その猶予を使って相手に勝つ方法を考える筈である。

こうして考えると、この幻覚は「リアル現実に一番近い幻覚」と言う事になる。

とすると、1つの案が浮かんだ。

「……いや、出来る。大丈夫だ」

自分の答えを信じ、歩く速さを進める。

答えが出たのなら、それを確かめる為に行動する。

これを行うとすると、目的地は1つしか浮かばなかった。

「あつた、俺の家……」

目の前に聳えるは、もう見慣れた我が家。偽者だが。

見慣れた我が家にして、久しぶりの我が家だ。

今から、自分が入ると両親はどんな反応をするだろうか、とゼットは考える。

予想通りに、ここへ帰って来た事にびっくりするのか、もう帰って来ていたので普通の反応か。

この幻術で術者が一体、どんな構成にしたのか分からないので、まだびっくりするとは断定出来ないのだ。

ドキドキしながらも、我が家のインターホンを押す。

緊張感を粉々に壊すかの如く、軽い感じのインターホンの音が家内に響く。

中の住人が気づいたのか、はいと言う女性の声と共に、玄関の扉が開けられる。

出て来たのはエプロンを付けた、20代半ばの若さと言った感じだった。

勿論、ゼットはこの女性の事をよく知っている。

何故ならば、この女性こそが……………。

「母さん、ただいま!」

「ゼット!あなた、もう帰って来たの?ポケモンリーグはまだ始まって無いのに」

そう、ゼットの母親だ。

ゼットを良く気遣ってくれ、毎日汚れて帰って来る彼を温かい料理で迎えてくれる、優しい存在である。

「いや、間違えて戻って来ちゃって。それで、偶々ここに寄ったんだよ」

「あら、そうだったの？じゃあ、今日は家で休みなさい。旅も良いけど、あんまり母さんを心配させないで頂戴ね」

「分あつてるよ。久しぶりに、母さんの手料理も食いたいしな！」

今、言ったのは強ち間違つてはいない。

偶々、この幻術に飲み込まれてしまったのだ。

家族に顔を見せると言う事も理由の1つだが、ここに来た「答え」を確かめる本当の理由がある。

その為には、ある人物と会わなければならない。

「ねえ、親父いる？」

「パパ？パパならいないわよ。何でも、大事な会議があるとか。多分、夕方に帰って来ると言うから、それまで待つて頂戴ね」

「……マジで？」

ゼットの父親……ゼットに3年間、修行を付けた存在だ。

普段は1日中寝ていて、だらけ切った男である。

だが、昔はトレーナーとしての腕前は一流であり、カントー最強のトレーナーとして、知られていた。

現在は名前を変え、ゼットの母親と結婚し、マサラに住んでいる。マスコミ辺りから逃げると言う、意味合いを込められているのでも

あるが。

トレーナーとしての腕も衰えておらず、3年を掛けて彼の知る技術を、ゼットに全て叩き込んだ。

ゼットがその言葉に呆然とする訳は、上記を見ればすぐに分かるだろう。

普段、だらけている男が、真面目に会議に出席すると言う事態に普通に返せる訳が無い。

幾ら幻術とは言え、これには驚愕せざるを得なかった。

「いつも寝てばっかの親父が、会議いいい!？」

「パパがやってる仕事は、稀にしか来ないし、別に無職だった訳じゃ無いのよ?」

「し、知らなかった……」

「失礼ね、ゼット」

自分の父親が、ちゃんと仕事をやってる事を今まで知らなかった息子。

何とも言えないが10年間、その事実を知っていなかった事については、ゼットにとって屈辱だった。

あまり、気に病む事でも無いのだが。

「ねえねえ、ポケモン達を見せて頂戴。ゼットがどれだけ捕まえたか、見てみたいのよ」

「あゝ、今は持っていないんだ」

「あら、そつなの?」

幻術に嵌ってしまった時に、ポケモン達が消えていたのだ。
見せようにも見せられなかった。

母親は唸り声を上げると、閃いたとばかりに目を輝かせる。

「それじゃあ、パパが帰って来る間に、今までの事を聞かせてくれないかしら？」

「ああ！えっと、マサラタウンで最初のポケモンを捕まえた時からな……」

一度、カイトに話していたので、今までの事をまとめるのに、そう時間は掛からなかった。

そうやって話している事、数時間。

時間はどんどん過ぎていき、やがて空が茜色に染まっていった。
もうそろそろ、父親が帰って来る時間である。

「そろそろ、パパも帰って来るわね」

「ただいま」

「お帰り、親父！」

「おっ！ゼット！旅は終わるの、ちょっと早過ぎじゃねえか？」

「まだ旅は続けてるぜ。ここに寄って来たただだよ」

「つてえ事は、グレン島からもう帰って来たって事になる……」

「いや、バッジは2つだけだ。かなり大変だったけど」

2人はそうして話し合った。

先程、母親に話した通りの事を話し、驚かせた。確かに、自分の子供がここまで厄介事に巻き込まれていれば、驚かすにもいられないだろう。

ある時では笑いながら聞いたり、真剣な表情で聞いたり、と父親は表情豊かに今までの出来事を聞いていた。

最強のトレーナーと言えど、やはり驚く事には驚くのだ。

「凄いな……最近ほ、屈強なトレーナー達が多いとは聞いていたが、初心者でそこまで……」

「世の中には、強いトレーナーがたくさんいるって親父言ってたじゃん」

「確かにそう言ったけどな、最初からここまで強いなんて、俺も度肝を抜かれたぜ。よし、こうなったら……」

「まさか、また修行だなんて馬鹿な事は言わないよな？」

「……………んな訳ねえだろ！ハハハハハ！！」

そう言つて、父親は持っていたモンスターボールをさり気なく、腰に戻す。

この時、表面では苦笑いをしていたが、後頭部では汗が滝のように出ていた。

ゼットの父親が行う修行は、半端な物じゃなく、ゼットも何百回と逃げ出そうとした事があった。

しかし、逃げる度にゼットは父親に捕まって、地獄の特訓のハードルが上がっていくのだ。

そのおかげで初心者にも関わらず、かなり強くなった訳だが。

「あ、そう言えばゼット。話があるんじゃないの？」

「……もう、知ってるんだろ？」

「……ああ。話してみろ」

「じゃあ聞くけど、親父。幻術に掛かった時、それを破る方法を教えてくれ」

ここに来たもう1つの理由、それは幻術の破り方を教えて貰う事だ。もし、この幻術が「現実^{リアル}に一番近い幻覚」ならば、それが出来る。ならば、幻術の対処法を知っている彼に聞けば、すぐに分かるのだ。

「……それを聞いてどうする？」

「ここから脱出する。確かに、ここは平和だけど、俺には俺を待っている仲間達がいる。ピカチュウ、ガーディ、カメール、ヤドン……皆が俺の帰りを待ってるってのに、それに応えずにどうするってんだ！親父も言ってたろ。自分のポケモンからの期待には、ちゃんと応えろって！」

「そうか。じゃあ、もしもここがお前の記憶から抜き出した物だったら、どうする？」

いつもの優しい表情では無く、最強のトレーナーと呼ばれるに相応しい、鋭い眼光で睨み付け、問う。

ゼットはその眼光に怖気づく事無く、はっきりと答えた。

「だったら、他の方法を幾らでも探してやる。あいつ等が待つてるんだ！」

「……はあ。こりゃ、参ったぜ。分かった。じゃあ、教えてやるよ」

「なら……！」

「だが、1つだけ約束して欲しい」

「約束？」

約束と言う言葉に反応し、首を傾げる。

何の事かさっぱり分からないゼットに父親は、こう言った。

「自分のポケモンを信じて、必ず頂点として戻って来いよ」

「……当ったり前だ！」

返って来た言葉を聞き、父親は嬉しそうに笑った。横で聞いていた母親も嬉しそうな笑顔をしていた。彼等に吊られ、ゼットも自然と笑みが零れる。

「幻術の対処法はとても簡単だ。それは………」

父親は、ゼットにその対処法を伝える。

そこから意識が途絶え、目の前が真っ白になった。

精神世界で最後に見た物は、笑顔になりながら、涙を流していた両親の姿だった。

「んっ……ここは？」

目を擦り、周りを見るとお墓が多く置いてある部屋だと言う事が分かる。

前に見た景色と同じだが、1つ違う点があった。

それは前方に、こちらが目を開けたのに驚いていて、固まっている紫色のポケモンがいた事だ。

ロープのような物を羽織った所が特徴である。

「あれは、ムウマージ？そうか！幻術を掛けた奴はこいつだったのか！！」

こちらが叫んだのと同時に、ムウマージの体がビクリと震える。

まるで、恐がっているかのように潤んだ目で見た後、どこかへ逃げてしまった。

余程、臆病な性格の持ち主だったのだろう。

だから幻術と言う、回りくどいやり方で貶めたのだ。

「あ、あれ？逃げちまった。まあ、いいや。余計な戦いもしなくて済むし」

拍子抜けだったのか、腑抜けた第一声を出す。

あちらが、戦闘放棄をしてしまった時点で、こちらがそれを追い掛けるような野暮な事はしないだろう。

それに、幻術の対処法を教える切っ掛けを作ってくれたので、寧ろ感謝している程だ。

父親が言った通り、幻術の対処法は実に簡単な事だった。

「現実に向き直れ、か。もう、やってたじゃねえか」

心の中で両親に感謝し、伝えられなくても言葉を心の中で伝えた。

ありがとう……簡単な感謝の言葉だった。

そして、3Fへと続く階段へ向き直る。

最初に会った時に、ガーディが負けてしまった事から、強烈なプレッシャーを感じた。

ロードの印象は最初に会った時から変わらない。

「強い」。たったそれだけだ。

あの強さは異常でも、ゼットは勝たねばならない、そう思っていた。霊化に対する対策もカクヤに習い、もう準備は万端である。

「今度は、野郎に勝つ未来に向き直ってやるぜ！」

3Fに向かって走っていく。

次回、ロードとゼットのジム戦が始まる。

第29話 「ポケモンタワー3F VS 幽霊ジムリーダー」〔前編〕

ここはポケモン達を埋葬する場所、ポケモンタワー。

フロアは3つに分かれており、1Fと2Fにお墓が置かれている。

しかし、最上階の3Fは何も置いておらず、1Fと2Fに比べて広さがやけに大きい。

その理由は最上階がシオンジムとして機能しているからである。

つまり、3Fはバトルフィールドとなっており、そこでジム戦をするのだ。

お墓が置かれていない理由は、ジム戦の邪魔になるからと片付けていいだろう。

1Fと2Fも、挑戦者を試す為のフロアとして利用されている。

ただし、そこにはお墓が置いてあるので、下手すれば当たって死者への冒涇になる。

この辺りは、ジムリーダー自身も幽霊なので、死んだポケモン達に許可を取っていると言う、何とも論理的では無い解釈だが、そういう事にしておこう。

そして、ここに挑戦してきたゼットは、何とかフロアの番人達を退け、最上階までやって来た。

残すはジムリーダーのロードのみである。

「（野郎の持つてるポケモンの数は未知数だ。同時に、その力量も未知数と来た。ったく、どう対処して良いのかさっぱり分からねえじゃねえかよ！ー）」

毎回、戦う前はどう対処して良いのか分からないのに、戦闘中に思い付き、勝ってしまうのだが、本人は無自覚のようだ。
だが、今回はガーディを一撃で沈めた相手だ。

何か作戦の1つでも練らなければ、高確率でやられるだろう。

……と、例え注意しても、本人は全く学習せずに、こう言う筈である。

「まあ、いいや。そんな時に考えればいい事だし！」

ゼットは練習よりも本番に強いタイプであり、作戦も本番に考えるので、戦闘前に作戦を考えるなど不可能だ。

実際、この方法で何度も勝って来たので、そのぶっ飛んだ方法に合わせれる手持ち達のバトルセンスには感服せざるを得ない。いつもいつも、ギリギリではあるが。

「さてと、前の借りを返させて貰うぜ」

1、2Fよりも長く続いた螺旋階段は終わりを告げ、漸く3Fへ辿り着く。

広く静寂に包まれたバトルフィールドは、墓地に相応しい恐怖感を醸し出していた。

しかし、肝心のジムリーダーはどこにもいなかった。

相手席の方にも居ず、ゼットは困惑してしまう。

取りあえず、自分の席へ立って、相手を待とうとする。

すると、相手席から霧のような物が湧き出て、それは1つの形を形成する。

全身を黒い雨合羽で包み、顔が隠れて見えない人物。

この人物に、ゼットは心当たりがある。

さっきまで戦いたくて仕方が無かった相手だ。

そう、シオンタウンのジムリーダーこと、ロードである。

「でやがったな、怪人雨合羽あー!!」

「フッフ。誰カト思エバ、昨日ノがきデハナイカ。少シハ学習シタノカ？」

気味の悪い声を出し、ロードはゼットに問い掛ける。背筋も凍るような奇怪な声に、微動だにも反応せず、ロードを睨み付ける。

それどころか、反応した所はそこでは無く……。

「てめえ！人をガキ扱いしてんじゃねえぞ！」

「オーオー、威勢ハ良イナ。本当ニ才前ガ、私ノゴーストぽけもん達ヲ倒シテ来タノカガ疑問ダナ」

その挑発的な言葉に、ゼットはさらに青筋を立てた。

「ちゃんと倒して来たぞ、俺は！いい加減、回りくどいやり方はやめて、俺と真剣勝負しやがれてんだ！！」

「ホホウ。……ナラバ良イダロウ。私ノぽけもん達ヲ倒シタソノ実力……見セテミロ！」

瞬間、どこから現れたのかは知らないが、物凄いスピードでゲンガ―が迫って来る。

いきなり襲って来た所から見て、恐らく不意打ちだろう。

すぐに対応し、ピカチュウが電光石火で応戦する。

ロードは一瞬驚いたが、即座に指示を出し、態勢を崩させない為、腕を十字に交差させて攻撃を受け止めた。

地面を足に付けて、吹き飛ぶ速度を殺し、何とか壁に叩きつけられずに済む。

「くっ！」

「成ル程。靈氣ヲ繕エルヨウニナツタノカ。ククク……最近ハツマラン戦闘バカリデ飽キ飽キシテイタガ、久々ニオモシロイ使イ手ダ！『シャドーボール』！！」

「『10万ボルト』で受け止める！！」

両者の攻撃はぶつかり合う。

だが、シャドーボールの威力は前回、既に体験済みだった。地面すらを抉るようなあの威力。

電撃如きでは貫けるどころか、相殺すら難しい程だ。

案の定、シャドーボールは電撃を押していき、ピカチュウの近くで爆ぜる。

攻撃はまだ終わらず、空中に舞ったピカチュウに近づき、2つの紫に染まった拳を喰らわせる。

1発目は態勢を崩す為に、軽いダメージを負わせ、2発目に直撃させた。

態勢を崩させられたので、ピカチュウの対応が間に合わず、顔面にヒットする。

地面に叩きつけられ、その連続攻撃に圧倒された。何とか立ち、態勢を元に戻してゲンガーを見捉える。

「（とんでもねえ威力だ……開始直後からピカチュウをここまで追い詰めるなんて！）」

ピカチュウの体力はまだまだ残っている。

恐ろしいのは、その体力が攻撃によって減る量である。たった2発とは言え、最大値の3分の1は削っていた。

簡易に考えれば、後2回（正確には4回）その攻撃を喰らえばダウ

ンすると言っ事だ。

「（だが、あれの欠点は連続してフルで出せない事だ。今、攻撃して来ないのもそれが原因だろうな）」

それについては、シオンタウンのロード戦で証明されている。

無理矢理相手に攻撃せざるを得ない状況を作った結果、ゲンガーが最初に放って来たのとは力の大きさが違い、2発目は速度も無く、大きさも小さなシャドーボールだった。

恐らく、さっきのシャドーパンチもそうだと見て、間違い無い。

「余所見ヲシテイル暇ガアルノカ？」

「なっ！？いつの間に背後に！？」

「『シャドーボール』」

ゲンガーは、中位の大きさのエネルギー弾を両手に形成する。

先程のような、強力なエネルギー弾ではないが、威力はその半分程と言った所だ。

エネルギー弾は放出されるが、自慢のスピードで何とか攻撃を避け、相手に向き直り、一気に駆け出す。

大きい攻撃をすればする程、相手にもそれなりの反動が出る。

それが最高威力の攻撃では無いが、あれがあの時点での、シャドーボールの限界だとしたら、反動は免れない。

「『10万ボルト』！！」

本来は遠距離から放つ技なのだが、やはり近距離の方が威力は高い。ゲンガーの腹部に直撃し、壁の方向へ吹き飛んだ。

「ククク……実ニオモシロイ。マサカ、私ヲココマデ追イ詰メルトハ……」

「けっ、バトルはまだ始まつたばかりだぜ！」

シャドーボールとシャドーパンチ。

この2つをただただ、相手に撃つて来るだけならば、そのパターンを読んで、それを利用し、倒すだけで済む筈なのだ。

だが、ロードはこの2つの技をテンポをずらして指示する上に、その使い方も見事である。

この巧みな使い方のせいで、中々パターンが読めない……寧ろパターンがあるのかどうかも怪しくなつて来る。

そんな事を考えるゼットを嘲笑うかの如く、ロードはただ不敵に笑みを浮かべていた。

その笑みの中にそんな思考をぶち壊すような何かがあるかと、思わせるように。

「ダガ、油断ハ禁物ダ」

「っ!?!」

出て来たのはシャドーパンチの1発目。

確かに速いが、大きさが小さい辺り、あまり警戒する必要も無い。

戦闘中、特に気を付ける必要が無い物は、すっぱり切り捨てる。

切り捨てなければ、次の攻撃に対応仕切れない、或いはポケモンの方が警戒し過ぎて、精神的に疲れてしまうからだ。

軽い電撃で相殺させ、相手の攻撃への対策を考えようとするが、今の攻撃にふと疑問を持つ。

「（今の攻撃は何だったんだ？ 攻撃するには威力が低過ぎるし、それで態勢を崩して2発目の攻撃をするにしても、小さ過ぎて意味が……いや、まさかこれは！」

先程の攻撃に対して推測を行うと、1つの作戦に気づく。

実に簡単だが、焦りが出ていればいる程、嵌り易い作戦だ。

作戦の全貌が分かり、急いで指示を出そうとしたが、指示を出す前にピカチュウは気づいていた。

いや、気づかなければおかしいのだ。

何故ならば、自分の右方向にピカチュウの10倍はある大きさの紫色の拳が出現していたからである。

あの小さなシャドーパンチはエネルギーが吸い取られた物で、本命はこちらだった。

つまり、2つに込めるエネルギーを不平等にし、最初のパンチ<今のパンチと言う具合に調整したのだ。

空気は紫の拳を恐れ逃げ、削れた地面は足場から離脱し、塵となつて消える。

必死に逃げようと、全速力で走るピカチュウだが、それに引き寄せられるせいで、いつものスピードが全く出ない。

「最初の『シャドーパンチ』は罠か！」

「ソノ通り。今更氣ツイタ所デ、モウ遅イガナ」

「（くっ！ あれを一瞬でも止められさえすれば……！！）」

確かに、このままではすぐにあれの餌食になるだろう。

今までの威力とは桁違いで、直撃すれば即ダウンは免れない。

「（もう、打つ手は無いのか……！？）」

「終ワリダ」

ジリジリと迫って来る拳。

ゼットは既に、諦めの色を浮かべている。

勝負は決した、そう思った直後、ふとピカチュウは動きを止め、あろう事か拳に向き直った。

正にそれに立ちほだかるかの如く、悠然と立っていたのだ。

戦闘不能を覚悟で、立ち向かうその背中には、今のゼットより、慎重云々関係無く、何倍も大きかった。

それが出来る理由は1つ……主人を信じているからである。

自殺行為とも誇張出来る、その行動をした訳は、それしか無かった。いつものように、作戦を思い付いてくれると、ピカチュウは信じているのだ。

「ピカチュウ……」

ゼットは思い付く。

仲間を救う……いや、戦闘不能にさせない作戦を。

偶然なのか、仲間が危機的状況に陥っているからかは分からない。

だが、考えている余裕は無かった。

良い作戦を思い付いたら、即実行。

それが普段のゼット達の戦闘スタイルだ。

「ピカチュウ——」

指示を満遍なく伝え、待つてましたと言う表情で作戦を実行に移す。拳は直撃して、爆発する。

「……イヤ、マダカ！」

「『10万ボルト』オオオオ!!」

爆発した場所とは全く違う方向から、ピカチュウが迫る。

ロードはそれにすぐに気づいたのだ。

普通、爆発すれば必ず吹き飛ぶ筈のそれが見つからない、その音すら見つからない事からすれば、すぐ分かる事だ。

どうやって、あの爆発から逃れたのかは不明だが、今はそれより前方の敵である。

両頬に高圧の電気を溜め、高速移動で増したであろうスピードを使い、ゲンガーの目の前に着く。

「『シャドーボール』!」

だが、こちらも気づいた後に何もなかった訳じゃ無い。

密かに溜めていたエネルギー弾を出し、10万ボルトと同威力の攻撃をする。

2つの攻撃は互いにぶつかり相殺し、その時起こった爆発で2匹は別々の方向へ吹き飛ぶ。

暫し両者は睨み合い、今すぐにも襲い掛かりそうな勢いだったが、ゼットの一言により、それは崩れた。

「ピカチュウ、戻れ」

「ピカ?」

「切り札は最後まで温存しておくもんだ。もう、出てるけど」

「ピッカ!」

ピカチュウはその言葉を聞き、元気良く返事をする。
モンスターボールの中に戻っていき、それを腰に戻して、次のボールを手を取った。

「臆シタノカ？」

「まさか。お前に勝つメンバーを換えたただけだ。カメール！」

次のポケモンはカメールであった。

ポケモンタワーでは出ていなかったせいか、やる気に満ち溢れている。

ヤドンに比べれば、何倍もましではあるが。

笑みを浮かべて、ポケモンタワーで最初の指示を下す。

「カメールは、俺の手持ちの中で一番、靈気の扱い方が上手いんだ」

「ソレガドウシタ？力ガ弱ケレバ、何モ出来マイ」

「直に分かるさ。『水鉄砲』！」

まずは何であっても、小手調べ。

一度、ピカチュウが戦ったとは言え、カメールの技が効かない可能性が無い訳じゃない。

放たれた小さな水流は、靈化ですり抜けられてしまう。

しかし、ロードはここで疑問に思う。

普通のポケモンならば、相手に簡単に受け止められれば、もっと強い勢いで放出して来る物だ。

だが、カメールの放った水鉄砲は威力はあるが、それ以降にもっと強く放出する気配も無い。

それ以前に、全く力が込められていないように感じていた。

ポケモンでは無いが、ジムリーダーともなれば、技を見ただけで分かるのだ。

「マサカ……!!」

ゼットの作戦の意図に気づくのに、そう時間は掛からなかった。

予想通り、カメールは高速スピンでやって来ていた。

つまり、水鉄砲は相手を留まらせる為の罠で、適当に出した水鉄砲を途中で切らし、技を素早く切り替えて、高速スピンで一気に攻撃、と言った魂胆であったのだ。

すぐに作戦に気づいたロードは素早い指示で相殺する。

今使った技は、シャドーパンチの1発目である。

なので、残っている2発目で高速スピンから態勢が崩された、カメールに攻撃しようとした。

が、カメールは未だに回転し、そのまま水鉄砲を放っていた。

威力は拡散するが、広範囲に攻撃する事が出来る。

ゲンガーにも案の定当たるが、シャドーパンチで威力を軽減したので、少しのダメージで済んだ。

最初の1発目にエネルギーを多く使い過ぎたせいで、2発目の威力は激減していた。

元々、威力が削られていたので、その上軽減すれば、殆どダメージは無いのだが。

カメールは水鉄砲を止め、回転したまま地面をUターンし、元の状態に戻る。

「（強い……あの攻撃を防ぐなんて……!）」

「私ハ、ドウヤツテアノ、『シャドーパンチ』ヲ退ケタノカヲ知りタイガ……」

「自分で考えてみな！『アクアテール』！！」

水と靈氣を繕った尻尾で、薙ぎ払おうとする。

だが、靈氣を繕った攻撃は、普通の状態のポケモンには効かない。そんな攻撃にゲンガーは笑っているようで、何故か睨む。

ゼットはそれに疑問を抱いたが、とにかく効かない事は予想していたようであり、カメールは殻に籠った。

先程と同じように、またもや回転し始める……尻尾を出したまま。

カメールを出した当初にゼットが言った言葉は、カメールは手持ちの中で一番、靈氣の扱い方が上手い、である。

つまりそれは、靈氣の状態と普通の状態を瞬間的に切り替えられる事を意味する。

となると、今からやる事がロードにも、すぐ分かった。

「靈氣、普通、靈氣、普通、靈氣いい！！」

カメールはアクアテールの状態のまま、回転を始める。

高速スピンでは無いが、十分な回転力はあった。

今やっているのは、靈氣の状態から普通の状態への瞬間的变化だ。

1周すれば、靈氣に。もう1周すれば普通に。

そこはゼットがテンポ良く指示を出していた。

その指示に付いていける、適応力には本当に感服せざるを得ない。

避けられないので、ゲンガーも靈化に普通にと、何とか切り替えている。

だが、やはりそれは無理のようで、10周目ぐらいでアクアテールを喰らってしまう。

「小癪ナ真似ヲ……！！」

「まだまだ終わらせねえよ！『水鉄砲』！！」

回転を止め、いつもの状態に戻り、水鉄砲を一直線に発射した。アクアテールで少々、態勢が崩されている所を狙っての事だ。

今まで攻撃して来なかったゲンガーだが、どうやら我慢の限界が来たようで、水鉄砲を何とか避け、シャドーボールを連続で放って来た。

指示も無しの攻撃に、カメールはびっくりし、全て当たってしまうと、言っても連続なので、1つ1つの威力が弱い。大したダメージにはならなかった。

「コイツハ好戦的な性格デナ。アル程度、指示ヲ出シテイナイト、私ノ指示モ聞カズニ攻撃シテシマウノダ。今回ハソノオカゲデ助力ツタノダガナ」

「くっ……大丈夫か？カメール？」

「カメエ……！」

「『シャドーパンチ』！」

「なっ！？不味い！『アクアテール』！！」

すると、ゲンガーは均等に威力が分かれたであろう、シャドーパンチを同時に放って来た。

いや正確には、「放って来た」のでは無く、「襲い掛かって来た」である。

ゲンガーは2つの拳を自身の両手に纏わせていた。予想もしていなかった使い方に、思わず声を上げてしまうが、指示を出して迎え撃つ。

アクアテールを使って、2つの拳を相手にする。

明らかにカメールの方が不利であったので、1つのパンチをそれで防いだ、横から入って来たもう1つのパンチに吹っ飛ばされた。壁にぶつかり、さらなるダメージを負ってしまうが、今までダメージを殆ど負っていなかったのも、何とか立ち上がる。

だが、それを良しとしないのか、今度はシャドーパンチを「放つ」。1つは高速スピンを使ってギリギリの所で避け、壁に激突させたが、もう1つがカメールを追う。

絶対命中の技なので、まず避けられない。

だから、相殺させるか、激突させるかのどちらかで逃れるしかないのだ。

「『シャドーボール』！」

「何い!？」

指示が聞こえ、ピカチュウは前方を見ると、ゲンガーがエネルギーを溜めて立っている。

エネルギー量がある程度まで達すると、一直線に高速で放った。

後ろにはシャドーパンチで、前にはシャドーボール。

正に、挟み撃ちと言った、状況になっていたのである。

左右に避ければシャドーボールとシャドーパンチが相殺し合って、難を逃れられるのだが、後ろのシャドーパンチがかなり近い所にいる上に、前のシャドーボールも高速で迫っている。進む方向を考えて、その方向へ逃げようとしても、一瞬そこで立ち止まってしまうので、逃げる前にやられるだろう。

恐らく、今から逃げてても、もう遅いであろう。

何をどうすればいいか？考えている内に、ふとアクアテールを思い出す。

この状況で何故、アクアテールなのか？考えてみればすぐに分かった。

アクアテールのもう1つの使い方、それは……………。

「『アクアテール』を地面に叩きつけるんだ!!」

指示通り、カメールは水を纏った尻尾を地面に叩きつける。

これは特に止まる必要も無いので、間違った解答では無い。

何が起こるかと思うと、地面に着いた尻尾が全方向に大量の水流を生んだ。

水流と言うより、小さな津波に近い。

小さな津波は、前後の攻撃を飲み込んだ。

つまり、相手の攻撃を2つとも防いだと言う訳である。

「何ダト!？」

「『アクアテール』のもう1つの使い方……それは周囲に津波を起こす事だったんだ!」

地面に水のエネルギーをぶつけ、そこから大量の水を生み出す。

普通は水中で水面に向かって起きた衝撃が、水面にも伝わり、そこから周囲に津波が起こる。

だがこれは、水中からでは無く、空中から水面を叩きつけ、高さだけに特化した津波なのだ。

これは正に水の防壁、と言えよう。

「クッ!マサカ、ソナ隠シ球ヲモツテイタトハナ!『シャドーパンチ』!!」

ゲンガーは迫り来るカメールに対して、2つの拳で対抗する。

だが、これもアクアテールの防壁で防ぐ。

今まで、厄介であったシャドーパンチも、これの前では何の意味も

成さなかったようだ。

2発目の攻撃も水の防壁で防いで、その距離は1mにまで縮んだ。

「『アクアテール』!!」

またまた、アクアテールを使い、ゲンガールの顔面に尻尾をヒットさせた。

相手を迎撃するのに必死で、状態変化するのを忘れていたのが、原因であった。

吹っ飛んだ所で、止めの一撃を喰らわせようとする。

「止めだ!『アクアテール』!!」

しかし、何故か水は繕えなかった。

幾らやっても、アクアテールを発動する事は出来ず、疑問は増すばかりだ。

「何やってんだ!『アクアテール』って言って……まさか、技が使えないのか?いや、まだアクアテールには残数があつた筈……」

「ククク……ドウヤラ、『怨み』ノ効果が効イタヨウダ」

「う、『怨み』だと!？」

技の正体を知り、目を見開いた。

怨みとは、相手が最後に使った技のPPを4減らす技である。

つまり、アクアテールがここまで早く、使えなくなった訳は、怨みのせいと言つ訳だ。

「最初二、才前ガ『アクアテール』ヲ出シタ際二、使ッテオイテ正

解ダツタナ」

「くっ……」

「『不意打ち』」

すると、いきなりカメールへ突撃した。

予期もしないなかった技に、ゼットは再度、目を見開く。

予期出来なかったのは、今までその技が出ていなかったからだろう。単に、使い所が無かったと言うのもあるが。

「ソノ厄介ナ技ガ使エナケレバ、コッチノ物ダ！『シャドーボール』
！！」

「！まさか、フル！？」

ゼットが言った通り、今度のはフルチャージのシャドーボールだった。

その威力は、地面を抉り取る程だ。

速度も、今までのとは段違いである。

「あれを喰らったら、滅茶苦茶不味いぞ！！」

「放テ！」

桁違いの大きさと速度で襲い掛かる黒いエネルギー弾。逃げる場所も、受け止められる力も殆ど無い。

「どうすれば、どうすればいいんだ……っ！！」

絶望していた時、2Fでの父の言葉を思い出す。
幻術ではあったが、あれは紛れもなく、本物の父の姿だった。
彼がゼットと約束した事、それは……………。

「自分のポケモンを信じて、必ず頂点を取る！！」

目を見開き、絶望していた時の自分にビンタする。
そして、カメールを見つめて、自分の言いたい事を心の中で伝えた。
伝わったか否か、全く分からないが、カメールは作戦を聞くいつもの態勢だ。

「行くぜ、『水鉄砲』！！」

最初の攻撃は水鉄砲。

本気の威力で放出し、シャドーボールに対抗する。

しかし、水鉄砲程度では、あのシャドーボールに打ち勝つ事は出来ない。

これは威力を削る為の、単なる下準備である。
そして、本命の攻撃である次の指示を下した。

「『殻に籠る』から、『高速スピン』！！」

今度は防御力を上げ、高速スピンで真つ向から挑む。

それでも、あの攻撃に勝てる威力では無い。

だが、ゼットにはある1つの賭けがあった。

1Fで、ガーディが巨大ゴースのシャドーボールを貫いた、あの奇跡……………。

あれがもしも、ゼットの考えていた事と全く同じならば、活路が見出せるかもしれないのだ。

「行けえええええ！！！」

!?

1Fでの奇跡が、最上階にも舞い降りる。

エネルギー弾は霧散し、その中から回転したカメールがやって来た。ロードは確実にこれで倒せると確信していたのだろう、指示を忘れていたのである。

今頃気づいても、もう時既に遅しであつた。

現在のカメラとゲンガの距離は10cm。

回避の指示をしても遅い距離だった。

案の定、硬化した高速スピンは腹部に直撃させ、靈化状態のゲンガ―を壁に吹っ飛ばす。

技の連射や、受けたダメージもあり、ゲンガーは倒れる。

「カメールは!？」

勝利よりも、ゼットはカメールを心配する。

カメールは、甲羅に入ってたまま出て来なかった。

あのシャドーボールを貰ったのだから、当然と言えば当然だ。つまり、これは引き分けと言う事になる。

「良く頑張ったぞ、カメール。ゆっくり休めよ」

「アノ、げんがーガ倒サレルトハナ。正直ナ所、驚イタナ」

「全然、そうには見えないがな。さて、次のバトルを始めようぜ！」

「私ノ最後ノぽけもん……見セテヤロウ!!」

2人は互いのポケモンを戻し、次のボールに手を掛ける。
今回はシオンジム戦の後編。物語は続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8788q/>

ポケットモンスターα

2011年10月8日18時10分発行